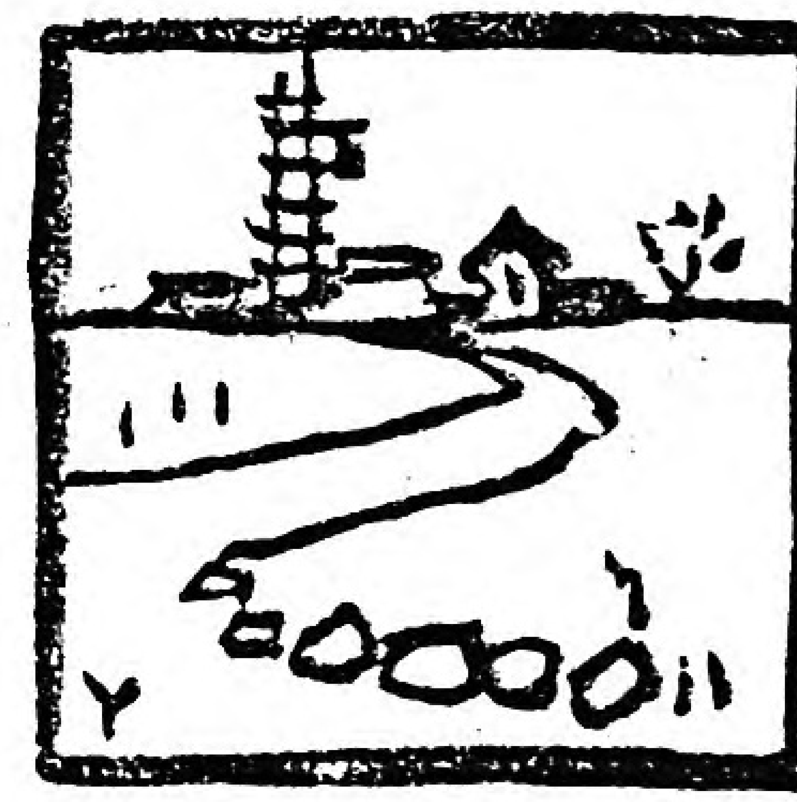
明治四十四年七月十日印刷納本（毎月廿五日印刷納本）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇

新文章

第七年第九號
第二增刊





女子文壇増刊

新文章



目次



女子文壇増刊

▲小説▲

課題

新文章目次

友情



田中まん子筆

諸孃及び奥樣の良參考書

本書の内容

婦人ノート

【裁縫】◎普通の着物も縫へないやうでは嫁にも行かれぬ（松韮紫花）◎裁縫と機轉（吹雪野）◎何より好きな裁縫（田舍女）【音樂】◉生田流と山田流の區別（櫻井銈子）【育兒】◉仲子の育て方（笹の露）◎子供本位の敎育家の家庭（美智子）◎子供を白痴にした若き母の罪（島の女）【學校】◎新に寄宿舍に入らんとする友人に注意する書（毒だみ）◎往復三里の學校通ひ（文香子）【衞生】◎處女の衞生と旅行の衞生（むらさき）◎看病の心得（N女）◎化粧法問はず語り（鈴音）【園藝】◉櫻草の栽培（牧野理學士）◎無邪氣で珍しい家庭公園（新田文子）◎養鷄（むらさき）【運動】◉何時でも出來る室外運動（中川女子高等師範學校長）【圖畫】◉郊外寫生の話（岡野學習院女學部敎授）【詩歌】◉萬葉集の佳作（澤村文學士）◎詩を作る呼吸（金田代志子）【作文】◉文章の今昔（河井酔茗）◎何うすれば文章が上手になるか（燕子）【出產】◎二つの生命（磨志緒）◎始めてお產をする方へ（若き母）◎三度のお產にて得し私の經驗（みどり）【職業】◉女子就職の領分（海軍少將中村靜嘉）◎仕事の苦痛（白山伏）【化粧】◉顏の美しくなる食物（北原十三男）【料理】◎お芋の料理と御飯焚き（さつき）◎臺所の一週間（笹舟）【家政】◎家庭心得其をり〳〵（萬野葉女）◎日に一錢づゝの貯金（北利子）◎商家の店と奥（はる子）◎吾家の室内に揭げて置く各種の表（紅梅女）◎家庭の秀才となりたい（春野胡蝶）◎時間の屑を利用せよ（みきよ子）◎母のをしへ（佐分華影）◎母の留守（はさくら）◎肉體の痛み心の傷み（山梔）◎家庭の心おぼへ（野の花）◎感心な奥樣（內海千鳥子）

▲對話女髮結所の朝（うす雲）外數篇 ▲和歌數百首 ▲ノート（東京、英語、文學、滑稽）

全二百餘頁美裝

定價金貳拾錢

送料壹錢五厘

發行所 東京市京橋大鋸町 女子文壇社 （振替東京壹七貳九） 賣捌 全國雜誌書店

少女



一日發刊 七月號 三巻七號要目

紙數百餘頁

定價一冊 金拾錢 送料壹錢

半年 送料とも 六十三錢

一年 送料とも 一圓廿錢

口繪挿繪美

天下一品好評

實質御覽愛讀を乞ふ

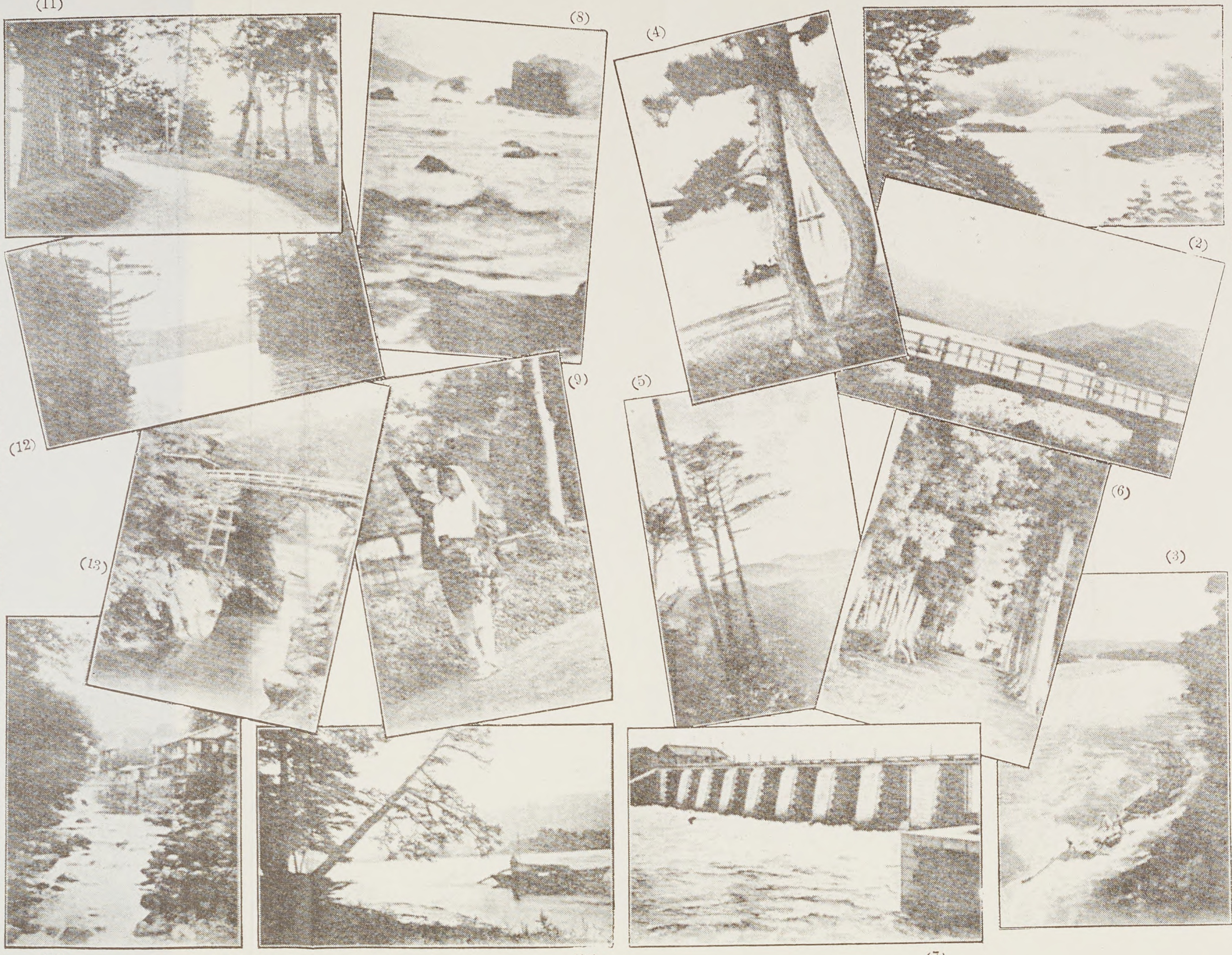
（出版元に一號より取揃あります）

發行所 東京市京橋區大鋸町 振替口座壹七貳九番

女子文壇社

△取次販賣所は全國到る處雜誌書店

小山水



（1）稲村ヶ崎より富士を望む　（2）日本アルプス連山　（3）大和吉野川の急流　（4）播州舞子の濱　（5）信州蝙蝠ヶ岳　（6）上州太田の金山　（7）大阪毛馬閘門

（8）羽後荘内吹浦　（9）京都白川の花賣女　（10）丹後天之橋立　（11）近江粟津の晴嵐　（12）陸中十和田湖　（13）加賀山中温泉きりぎりす橋　（14）伊豆修善寺桂川

地方の婦人

●女子文壇紀念第百號の發刊を祝する爲め本月中の御注文に限り破格の廉賣す

廉賣 價金**拾錢** 送本料壹錢五厘

▲菊判二百餘頁 美麗口繪挿繪多し

本書の内容

地方婦人の自重を望む 下田文學士
女が中心になつて働く 横井農博士
●行ける處まで行き得ない 田山花袋
●女性の自然の觀かた 小島烏水
●天然の美と婦人の美 大下藤次郎
●私の故郷 尾上文學士
海豹島の婦人生活 岩野泡鳴
●杉坂峠 榺村文學士
●下京の女 兒玉花外
●雲雀鳴く野 夜雨
煽風器
▲富士登山は宜い經驗 目賀田逸子
▲鳥の鳴く廣尾の奥 仲小路八重子
▲田舍では讀書より仕事 遠山稻子
▲周防の德山 武田貞
▲氣が利かぬ代りに人情に厚い 中村若子
▲幼い時は山へ成長すれば海へ 岸すみ子
▲信飛境上の深山旅行 辻村靖子
▲暑い方に向ふ 中野仙子
▲嫁して後忍耐強い京都婦人 松岡いと子
(小說)漁父の母 小栗籌子
賣り桑 水野仙子
●海岸 河井醉茗
●琵琶湖 しのぶ
●雨 川路柳虹
●伊豆の海岸より 中村文學士
●淡路の生活 一色醒川
●驛鈴
色彩的區分したる
大阪の婦人 みどり女
●神戸 羅漢柏
東京近縣の女の特色 遊蝶花
●都會より地方へ 長曾我部菊子
●鏡の旅日記 靜江
●農村の處女が最も活動する田植時(伊豆、伯耆、近江)
富山と岡山の女 下枝子
●本州の南北兩端より(薩摩、北見、)
●五年以前 山田邦子
●諸國通信(肥前松浦、××町、和泉の南、伊豫松山、常陸下館、駿州小山の各地より)
山岳と海岸 ▲熱海 ▲房州の渚 ▲越後の海 ▲秩父 ▲高尾
地方の現在 石油の噴出 蒲原草蔽 其他
都會に憧憬れつゝある若き女の叫び
▲私の淋しい心を察して下さい 北斗星
▲行きたい〳〵と思ふ一念 桃の花
▲摺鉢の底のやうな土地より 上田けん子
▲嚴格に過ぎたる家庭 白露子
▲船中より身を投んとしたる其後の私 汀女
●創作(和歌、小品文)

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社出版

●賣捌各地書店● (振替口座第壹七貳九番)

今の婦人

紙數二百餘頁
美麗口繪挿入
定價貳拾錢
送料壹錢五厘

本書の內容

●美しい血　佐藤ます子
●與へられたる生命　山田邦子
●木柵　長曾我部菊子
●大川端　鈴木春子

▲美しき色彩　執筆婦人九名
●見るも夢、覺むるも夢夢の女
●面がはり　若杉濱子
●母に縋りて　前島ゆり子

▲若奧樣の生活　白木絲子、枝の小島、きみ子
◎賣約濟　うすゆき
◎死なれぬ女　山崎千代子
●現代婦人の進步　河井醉茗
●良人の選擇に迷へる女に與ふ　雨をとこ

▲婦人登山記　翠子　玉かつら
●私の心を縛つて欲しい迷へる女
●白き月の沈む頃彼女は眠れり　初鹿野道子
●獨寢の枕に響く鐘の音　月夜花
●正氣か狂氣か　秋扇
●教會を脫したい　芳子
●女學校の窓から覗いた世間　白雨女
●涙を呑んで運命に從ふ　神保千代野
●單調なる生活に倦む　野に降る雨
●覆面を脫ぐ　築土の草
●私の運命を左右した試驗の力　秋香
●危うく戀の波に浚はれんとす　夕がほ
●引いて歌ふや獅子の曲　さつき
●夢の記　萬の葉
●三人女　芳葉子
●遊學を志の貫かうとする初一念　星子

◎夜の自然を愛す　吉田紫花
◎覺めたる日記　安木春子
●懷姙日記　越路女
●苦勞人の面影　船田鶴子
●私の離緣された一事始終　小夜時雨
●早婚の爲に生じたる吾家の悲　新田文子
劇
●嫂の冷たき心を悲む　島守女
●姑の我を折らすも少しの呼吸　月見草
●子供を持つても忘られぬ文學　はまゆふ
●細君評判記　さくら貝
●袖香爐　橫瀨夜雨
●朝しづく　三加島葭子
●七世の後も　原田琴子
●栗の實　美耶子
●小品文、詩、和歌、俳句

東京　京橋區大鋸町　女子文壇社出版
（振替口座第壹七貳九番）　●賣捌各地書店●

懸賞募集



女子文壇
十月 第三 增刊

娘時代

『娘時代』は人生の花です、語るべきこと、歌ふべきことは、憚りなく自由自在に語り又歌ふのが愉快です、本誌は其娘時代の方々の爲に例の通り二百頁の空白紙を供します、何んな活字で埋めやうと皆さん方のお心がけ次第です、幸ひに傑作をお考へなさい。

投稿の種類

第一種 〔娘時代の感想、娘でゝろの告白、文章は思ふまゝに書いて宜し（總振假名つき、廿四字詰百行以上二百行迄）〕

第二種 ○短篇小說（廿四字詰百五十行以内振がなつき）○八月の日記（同上）

第三種 ○わが故鄕（河井醉茗選）○わが手文庫（横瀨夜雨選）○わが親友（溝口白羊選）（二十四字詰七十行以內）

第四種 ○詩（長短隨意）○和歌（一人七首）○俳句（一人七句）

第五種 ○表紙（石版三色刷）○口繪（石版六色限り）寸法は本紙に就いて注意なさい ○スケッチ（方三寸以內鉛筆注意）

▲原稿締切 八月三十一日本社到着

募集所 東京市京橋區大鋸町 女子文壇社

懸賞

第一種 △一等金拾五圓△二等金拾圓△三等金五圓△四等金貳圓△五等金壹圓（掲載したるものは全部報酬す）

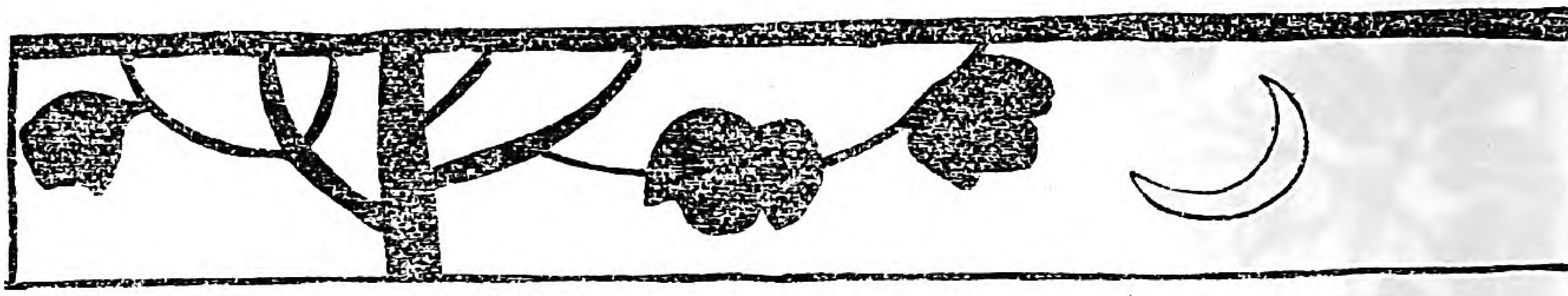
第二種 △小說一等金七圓△二等金四圓△三等金貳圓△日記一等金五圓△二等金參圓△三等金壹圓（日記は優秀なる作ある時は各等數編を採用すべし）

第三種 △各題毎に△一等金五圓△二等金貳圓△三等金壹圓

第四種 各種毎に△一等金貳圓△二等金壹圓△三等金五拾錢

第五種 表紙口繪は正金五圓以下貳圓以上、スケッチは一等金壹圓以下數名之に準ず

右第二種及び第三種の一等は正金にて贈呈し、其他は凡て價格相當の物品にて發表翌月後に贈呈すべし



新文章

女子文壇増刊

新文章の巻頭に

若き女達よ。
夏の太陽は地上のものを燒かんとすれど、御身等の顔は、すゞしろの花の如く白し、誰か御身等の輝ける明眸と、柔かき皮膚とを呪ふものあらんや。
御身等は白き兎の如く自由に飛ばんことを想へど、御身等を愛するものは、草に隠れたる陥穽を危ぶみて、容易に御身等を放たざるなり。
御身等が捧げんと云ふ清き心は、誰か之を享けざらむ。
御身等が涙を湛へたる處女の甕は、世に尤も尊きものなり、之を護ること母が嬰兒を護るが如　なれ。涙滾々として盡きざるとも泣いて其甕を破ること勿れ、若き尊き女達よ。

河井醉茗

一呼吸

若杉濱子

あゝ一秒時なりとも息をつきたい。私の息をつく暇といふものは與へられる事が出來ないんだらうか。眠りについてから、偶々夢を見ない事がある、僅かにそれがある許りで、私の生存が續いて行く、此の覺束ない生存が。

死にたい、死にたい、死にたい、死にたう御座んすと、人に縋つた心は愚かの限りであつた。

『苦しみを衒ふ女よ、死にたいといふものに死んだ例はあるまいよ。』と人は唇を反して笑つたものを。

死にたい、何故死ねないんでせう、と叫んだ時、『そりや何處か面白味が殘つてるんでせう。』と若い畫家も冷笑した。

其無雜作な冷語が、いつも〳〵意味深く、新らしく響いて來る。

私は斯うして息も絶ゆる許り、苦しみ悲しみ、どうかして此の心を理解して貰はふと、努めて欺かざる聲を、苦しい中から發しやうとしてゐる。あゝそれも〳〵若い心の衒ひではなからうか、斯う思ふ時の悲しみの力なさ。

ともすれば、誇張したがり衒ひたがるのが、若い人の心である、それは醜い事で、自分自身の爲にも、價値の無い苦しみ方である。

丁度若い女が身の周圍を誇つて、他人に厭な感情を抱かせるやうなものだ、私は唯さういふ傾向が自分にあるのを怖れてゐる。

いつか、何かに『感情の贅澤』といふ事があつた。あれは私共によく當て嵌る

言葉だと思つたが、此の孤獨に堪へ忍べないのも、甘やかして來た感情がいふ贅澤である。

人に理解して貰はふとする程、無駄な努力はない。我等は唯獨り自らを責め、自らを賴む、それより他に何があらう。

華やかなる萬人の群に交つても、私等の心は孤獨ではないか、表面に出さずして、能く孤獨を守り得た人が、實際の上にも、時間の上にも、終局の勝利を得るのではなからうか。

相互に補け合うて生きるのが、人類の最大眞意義である……。かゝる事を口にしつゝ、犇々と孤獨を固守るのが、人間の生涯である。

かゝる時、あゝかゝる時、走り寄つて跪くべき偉大なる力があつたらば、いゝや、せめてしつかりと抱擁して呉れる腕があつたらば、あゝ頭上から何か巨塊でも墜落して、私を壓し潰して欲しい。

偏へに、藝術、藝術、と唯しがみ着かうとする藝術は、手を取らうともして呉れるのではないし、あゝこの突き放された力なき心よ、今日をどうして、明日をどうして送ろうか、糧を失つた其日暮しの人々よりも更に不安な、果敢ない毎日がつゞいてゆく。

苦んで、泣いて怖れて、迷つて、死の扉に到達しながら、後戻りして、すご〳〵と歸りくる女々しさを知りつゝも、性懲りなく思ひ詰め〳〵ては、いつもの一筋道を往きつ歸りつゝ行き詰まる處は、自殺の斷崖あるのみ。追ひつめられた私は、辷らんとする足を踏みしめ〳〵、怖れに胸を慄かせつゝ、過去を顧み、暗黒の底を差し覗き、躊躇ふ自らを叱咤してゐると、燃ゆる瞳の底からは、熱い涙が絞り出される。

我とわが胸を抱いての悶絶の末は、却つて水を打つたやうな、靜けさと諦らめとが、ジクジクと浸り込んで來る。

自殺の扉からはね返されて、とぼ〳〵と同じ道を歸りゆく、我心の哀れなる後影よ。

汝を見たのは今が初めてゞはない。

雨に濡れても力ある夏草を踏んで、私は虎の門の原

歩いた。四周の生氣に漲れる事よ、斯く疲れ、斯く沈んで、とぼ〱と歩くものは自分許りである。

圖書館の石段を上ると、五十前後の後頭部まで禿げ下つた人が、白い夏服を着て、受附の金網の中から、私の顏を見て、ニコ〱と笑つた。其笑は別段薄氣味の惡い笑ひ方ではなかつたけれど、頭の禿工合と云ひ、肩のすぼまつた夏服と云ひ、鎭西八郎の中に出てくる役病神を聯想されずにはゐられなかつた。

カード繰る時の充實したる心持、誰にも心置きのない、無邪氣な智識慾の目を晒す、唯其心持ちを得たい許りに私は圖書館に通ふのかも知れない。怒りに心慄へる時も、惱に心痛む時も驅けつけるのは圖書館の目錄箱である。

空氣はシーンと靜まりかへつて、時々公園の青葉の匂ひが、窓掛けから、高い天井へと仄かにたゞよふ。此處に來ると、どんな時でも私の心は落ちついて、書物の上に〱とのみ集注されて了ふ。

今も宗教を求める心は變らないと見えて、ともすれば、机に頭を摺りつけて、微かに祈りを捧げたくなる。

天に在します我らの父樣、
あなたのみ心に背きましてから、久しい月日を重ねました、さまよへる弱き者は、今再あなたの御胸に縋らなければ生きるすべを失ひました。
御慈愛に富み給ふ我らが父樣、唯願ひ奉る處は、どうか此の身の上に反抗の遑なく迷ふべき餘裕もない程、強く激しい運命を司り給へ。繰言をとがめ給ふなかれ、アーメン。

私の祈りはいつも〱利己中心である、宗教に手賴らんとする人の心は、却々斯んなものではないのかも知れない。けれど『一宗一人』の言葉に根據を置いて動けない。

靜止する者は進まず、續けぬ者は退き、叛逆者は迷ふ、道を外して濶歩く者は、道の中にありて匍匐ふ者に如かず。(アウガスチン)

幾度となく口の中に繰り返して私は目を閉ぢた。能く我等を說破してゐる言葉だと思ふ。けれど昔の幾千

の偉人聖人が遺した金言すら、現の我等にはあてはまらなくなつてゐる。もし第二の生といふものあらば、昔の偉人聖人は現の世の中に再現して、我等と同じ徑路を歩んだなら、『昔、俺の云つた事は、あれはお前達の爲に云つたのではないよ。』と屹度裏書するに違ひない。時を定めず、場所を定めず、人を定めない『眞』を追つて、手頼りなく私達は生きてゐる。



私は自分の熱をもてあまして、いら〳〵として許りゐる。そして其情熱が、ほんの一時的のもので、友達に向ひ、路傍の人に向ひ、幾多の空漠たるものにも向つて、絶えず燃えてゐる。それが極めて刹那的で、それからそれへと、移つてゆく。あゝ此の心が苦しい、一時でも落ちつきたい。

『あなたが落ちつきたいといふのは、ほんの一時息をつきたいといふのでせう。』と仙子さんは云つた。

『いゝえ永久に息がつきたいんです。』と力を入れて私は云つた。

『どうか此の熱が消失して、枯木のやうな冷静にかへりたいのです。』

『あなた、ほんとに枯木のやうになりたい。』と疑ふやうに仙子さんはいふ。

私は丁度熱病患者のやうなものだ、其熱に強い反省が絶えず〱加はるから尚更に苦しい。どうなつてもいゝから、此の熱病から救ひ出されたい、時の力が氣永に私を救つてくれて、いつかは枯木のやうにして呉れるのだらうけれども。

いら〱としては自分で自分をもてあまして、椽の古椅子に身を投げるのが毎日の夕方である。

桑の實や、ぐみの實が、裏長屋の垣根に熟してゐるのを見ても、裁判所の赤煉瓦の背後から、湧き起る入道雲を見ても、東京を遁れ去りたいと思はぬ事はないのだが……。

郷里では桑の實を『どゞめ』と云つてゐた。黄が赤に赤が黒く熟してくると、毒血の塊りのやうな色になる。私は唯『どゞめ』の聯想を愛して、せめて古い六月の記臆を味ひ出さうとして見た。

裏の家ではまだ燈もつけない暗い中で、何か老爺と老婆とが背をかゞめて弄つてゐる。見れば玩具の帆掛舟が、數知れず箱の中に入れられてある。このお爺さんは銀座の露店で見かけた事のある人だ。玩具を作るのは晝の仕事で、是から晩餐でもすまし、元氣よく銀座の街へ商ひに出かけて行く事であらう。とかういふのを見ると、

あ、人間は矢ッ張り仕事をするのが正當だ？とかう思はずにはゐられなくなる。

爲すべき事も爲さず、唯々自分を辯護しやうとのみ理論を構へてゐる、自らが淺猿しく感ぜられた。

御飯で御座います。と女中が呼びに來たけれども、食べる氣にはなれなかつた。遊んでゐると、快樂が快

樂でなくなるとは、この事だと、直ぐに又肩身狹く思へる。新橋の橋際のクラブの廣告が赤くなり青くなり廻轉し初て、またゝくやうにとりぐの色を夕闇に染め出してゐる私は其のまゝ身動ぎをする力も失つたやうに、いつまでも古椅子から離れなかつた。彼の暗黒の底に呻吟いてゐるやうな人々は、どんなにか此の夏の夜の街の灯が戀しいであらう。

人は秋の寂寥に心痛め、冬の木枯に閉籠められ、春に又疲れたる心を惱まし、此の初夏の夜に蘇生らず、どうして人の心が腐らずに、若さを保



つ事が出來やうか。

『あなたは思ひの外利己的な女ぢやなかつたんですね、だがどうにか徹底しなくちや仕方がないね。』と銀座の夜の燈火を見納めに、深い吐息をした人があつた。

自分を辯護したがる中は慥なものだが、私は此儘どうなつてゆくのかしら、どうして私は心の底から底まで開け放さねば、氣がすまないのか、世間を見ても解るだらう、如何に秘密といふものが力あるかといふ事が。『秘密』を尊重せよ、無價値なる秘密を尊重する、私には解らぬ。唯運命の偉大なる力を怖るゝのみ。



七色の虹

野薔薇



一

七彩の虹の消え去つた十九の胸の淋しみ。まだ醉ひつくさなかつた青春い紅の絃を斷つて新らしい覺悟を盛るべく、あまりに我心は弱く幼い。ハラ〳〵して現實の響を聞くのを怖れてゐる狂死の狀を示した病的な夕陽の影を失ふと、泣き疲れた明るく淋しい夕の空は、刻々重い瞳を閉ぢて行く。物皆は來らむとする夜の安息に、息づかうとしてゐるのに、我心は目醒め、又目ざめ、走り行つて歔欷いた。あゝ過古の追憶！、湖畔の國の旅宿の古びて朽ちかゝつた欄干によつた蒼い夕暮は、半睡の瞳の樣に朧だつた。廣漠たる野の中に、ポツリと取殘された樣な山間の町には、燈火が淡く連つて居た。仄白く光つた一線の流が、夜霧にかくれ行くあたり、都に走るレールに沿つたシグナルの火が、青く赤く物なつかしげにまたたいて居た。詩の抱擁に甘き涙を流した夕は、只過古に葬り去られてしまつた。

はてしない思に耽りながらも、否應なしに積み上げられた、縫物の針を運んでゐる今日も

二

又、自分はどうするんだらう、過古は私の執着をつき退けて、すべて去てしまつたけれど、只一つ紀念の寶玉を殘した。それは才なき身に相應ぬものであるけれど、私はすつる事は出來ないから、まづしい犧牲をさゝげ樣と決心したのだけれど、女らしいと人の云ふ女の道は、母も師も多くの友も導いてくれる。模範も示してくれようけれど、私の憧憬は丁度限ない天空を望む樣に、夕ざれば西空に輝き出る星を仰ぐ樣

に、明らかに望み得て居ながら、而も行く道を知らない。希望の血潮は細い小指の端にまでなり響いて居るが、かうして本意ない明暮をつゞけてる内には、埋葬の手が刻々に近づいてくるではないか。我心よ、我心よ、汝は何もなし得ずにとらはれてしまふではないか。

三

呼吸の切迫を感じる石造の婦人室に、パッと青白い電燈の光線が走つた。倦怠の蒼白い額を支へた二十五六の婦人は充血した眼で、ぢつと何かの書を見すゑて居る。机上の書を見るともなくドアを出て行つた人の後影、水色のネルと紅友禪の帶の色を、ボッとまぼろしの樣に思つて居た自分は、フト立つて窓を押すと、明るく冷たい夕の空氣のうるほひが、心地よく胸になだれ落ちる。濕つた土に紫陽花の白い花片が、ホロ〳〵とこぼれて居る。窓下の町を代る〳〵人は行く、華やかに笑ひながら初夏の輕々しい裝して若い人は去つた、皆自分とは沒交涉なんだ。自分がかうして窓によつてるのを、たれ一人知る者はないと思ふと淋しくなつてきた。

四

繭を出た許りの蛾の樣に、自由に羽を翅せる野、新鮮な草の香、夢の花、それらにあこがれながら幼い心は何物にか躊躇して、ぢつとして生れた場所を去り得ない。大膽に自由に飛び去る丈の勇氣と自負心をもたぬ。少女はとらへられたまゝ溫和しく運命をまつてるのかしら。…運命、運命、自分は運命と云ふ言を疑つて居る、先天的に自分を左右する運命と云ふ物をもつて生れた位なら、私は敢て悶えまい。否々自分が努力すれば、その報酬は自分の上に落つるのであらう、つまり自分の運命は自分で作り得るのだ。

五

雜駁な都も、月登る頃は蹙むだ樣に、しつとりと靜まつて居る。地の底からバイオリンの三の絃にそつと觸つた樣な蟲の音が震へてくる。母と私は柱に凭れて沈默つて並んで居た。母は憂愁の面を私の胸のあたりにむけて居た。同じ色の血潮を盛た形骸、母と私とは斷つ事の出來ない細い絲でつながれてあつて、私の秘事も皆知つてゐるのではない

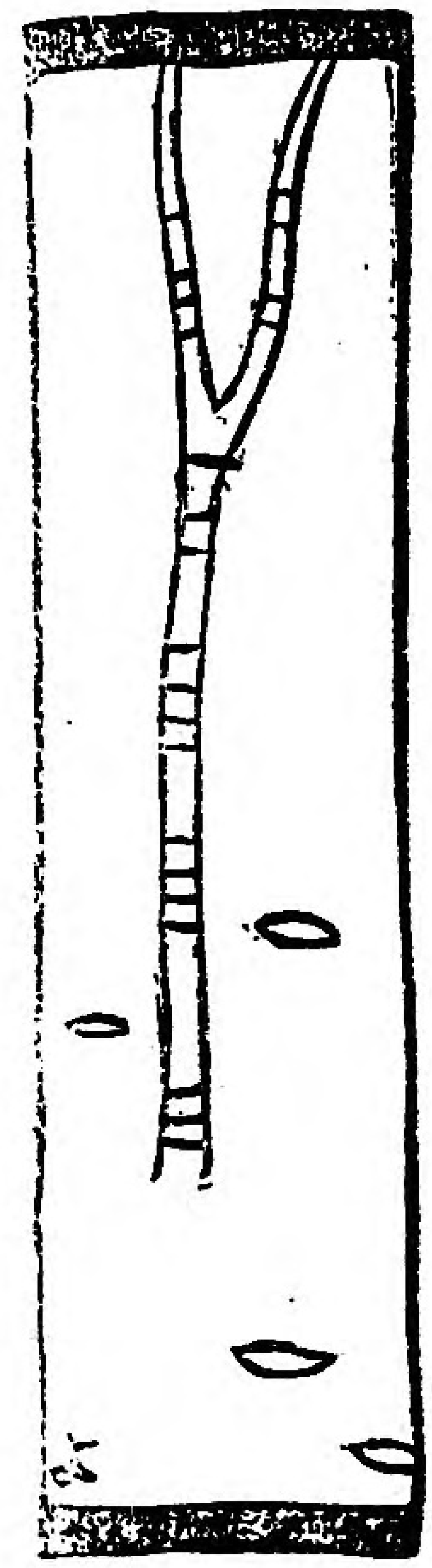
かしら。月はフト築地の影から丸い面を現はした。母と私の居る所にも、青白い光が滑つた、私は靜かに見入りながら、母の言を味つて居る……母の言は冷淡だつたけれど、私はかゝる思想を抱ひて居る少女の中の幸福者であつた。我母は子に與ふべき思想や、財寶をもたなかつた爲に、何事をも許して呉れた。母樣〳〵あなたは夕々の雲の行方や、徒に天の高い淋しみを思つて、涙ぐむいぶかしの子をもつたのを諦めて下さい。母樣はやはり美しい衣をまとつて、サツサと嫁ぎ行く人の家の子を御羨みになるのでせう、おゆるし下さい。自分の勝手な道に走つて、足に傷いて倒れ樣とする子の身の上は、決して御案じ下さいますな。月は何事をも知つてると云ふ顏付で、私を見ながらだん〳〵高くなつていつた。

六

「汝は汝の物なり」只この言を餞けられて、あやつる事の拙い者が船出し行くのを、埠頭に立つた多くの人が皆冷淡に冷笑つて居る。無形の首途だ、それでも、子をもつた女猫の樣に、我心は强かつた。果しらぬ青野の中を、白象の群を率ゐて進み行く樣な希望に充ちた我胸は、靜心ない初夏の朝の空氣をふるはして、ニコライの大鐘が清爽に響いてくる青い、かたさうな葡萄の粒に、一つ〳〵露が光つて居た、その粒の内には、來らむ盛夏の滴る許りな、紫色と、甘さとを形成する塊が存在して居るのだ。—充實—醉ふ許が若いのではないと云ふ言葉を思つた。

七

私はふと誰やらが言つた言を思ひ出た『自然は正直に毎年々同じ事を繰り返すに、進步だ向上だ、と云ふ人間のライフは、虚僞の塊だ。目的もなく、努力もなく、只ぶらりとしてなければ駄目だ。昔からいかなる偉人の偉大なる行爲も、大自然に一枚の布片をもあてなかつた』——と云ふ私は自分が空虚な事を叫びつゞけてる樣な氣がした。併し〳〵さうではない、その言はかの高い碧天に翺翔し得る天與のある物をもつて生れた人の上にあてはまるのだ、淺才の足どり重く、蝸牛の歩をはこび行かんとするものは、あくまで努めねばならぬ。



解けし謎

白ふぢ

夕暮になつた。

我をめぐれる若葉のあまい淋しさ……わがやは肌のぬくもりにて、小鳥のうたにも、羽蟲の息にも、目にみえぬ森嚴なるものゝ力はふるへて……

あか〳〵と沈みゆく太陽のやうなつゝじの紅よ。

噫わがはたとせ……。

なにもない、なにものもない掌のうち――。

ぢりぢりと林の色黝みゆけば、要垣一つへだてた湯殿の窓を、もう〳〵と流れ出づる紫の烟、濃くわが額おほふ、鏡に向ひ涙する子にはつらき湯のにほひ、ちらちらと蜜柑の花が白くふるへた。

はたち、はたち、何といふ悲しい聲であらう。ふさふさと櫛にながるゝ黒髪は丈にあまれど、醜きが故に、百姓の子なるが故に、ひとたびもお下げやマガレツトにした事はなかつた。わが弱き腦は、いろ〳〵の煩悶につかれて、今、非常に病んでゐるので――哀愁の色ふかきうれひの林に思は暗き方をのみたどる……されど、あゝ、されど、ねての夢さめてのゆめに我子の上を思ひわづらふ父母の心を思へば、決して荒んではならないと思ひます。

朝はゆる葉のしづく、花のしづくと、世の渦巻の遠鳴と……。

昨日、そは痴人の舌の上に、いかにあつきあるものを載せしよ、むざんにも爛れしこゝろ、傷きし胸、あかたるに堪へぬ。

まこと小さな、それは極くにぶいはたらきすら覺束ないものではあるけれど、私は、一つの錆びた磁石の鍼をもつべく強いられてゐたのをかなしむ。あまりにはやく謎は解けて了つたから……『愚者よ、そは汝が名なり。』何といふ情ない宣告であらう。

ひらひらと明るく暗らく、林のむねに蒼ざめし昔語はひるがへる。靜止しゐたる心の鍼は、ゆら〳〵と動きて、晝の光の衰ろへたゞよふ空間の一角にうかべる

四てふ數字をさす。
涙にゝじむ、かなしき文字よ。
なにゆゑなれば――。

冷酷なる冬の威壓に怯ぢてゐた地球のあらゆる物、うれしげに感謝の眼をみひらく四月頃、必然の規約でもあるかのやうに、我胸内に生るゝ動搖の油が、外界との交渉により、パッと燃立つとき、炎のなかに悲絶な叫喚のほとばしるからである。

實に呪ふべきあらしの月よ、みかへれば、みかへりみれば、熱涙滂沱として止むるすべもないのである。ある運命の僥倖者の名に憧憬れて、一向專念に勵みし初め十四年は、眞に幸な頁であつた。

幻の海は紅の夕陽にかゞやきて、ひた、ひたと、足もとによせてゐたが、其れもほんの束の間、翌年四月、家事上の都合にて女學校をさげられるとすぐ、叔父の一人は好意から、我子と繋がらうとして、未來の嫁なるべき私の許へ、しげ／＼訪なはれた。くづれし夢の階段をながめて、どんなに悶へ、悲しみましたか。けれども、不可抗なる力強き義理の手もて、われらが運命の墓は、刻々に築かれつゝゆく。古い因襲の窓はひらかれ、めに見えぬ絲で、無理やりに引かれてゆくあはれな姿、ほゝづき提灯にぎやかなる店頭に、襷掛け初初しき初丸髷の新妻姿を想ひみて、一種の屈辱と羞恥とに頬を染めたのもあの頃であつた。

不如意なる境遇となれば成るほど、智識慾の熱火は益々燃えて、切に乞ふて講義錄や雜誌によりて、僅かに渴を愈してゐた。女子文壇を取り始めたのもあの頃である。裁縫の師の許への往きかひにも、舊師に顏見らるゝを厭ふて、いつも、學校の前を避けて通つた。

こゝら特有の濁れる小川に影うつせし大楠樹の匂ひはなつかしけれど、それにすら醉ふをゆるされず、まはり路し、夕靄けぶる堤下みちを家に歸れば、『姉さん』と袖にまつはる弟妹等の世話や、勝手元の手傳に忙はしく、机の前に座るは、皆が寢沈まつてからである。から／＼と闇を飛ぶ木の葉のひゞきに我夢は甦へり、獨りをよろこぶ束の間を、ほしいまゝなる空想に耽つた霰の夜、冷たき土の内に育くまれしあるものゝ芽よ。悶え、もだえ、私はやうやく十八になつた。

林もて繞らせし我家は、瑞々しい若芽の匂ひにたゞよひ、花見の客の訪なひしげき四月のはじめ、それは普通平常の穩かな日ではあつたが、私の胸には、めに見えぬ大嵐が起つた。あゝあの時の叔父樣のお言葉、

何もとり柄はないけれど、體格がいゝから。

危きかな、中障子の紙一枚、自らを知ること淺く、狂にも等しき向上心に燃えつゝありし私は、きつと唇をかんで、しのび泣きに泣いたのである。對座の人は遠縁の小母様一人、母上は勝手元に立たれしあとにて、娘が運命の綜の斷るゝひゞきを聞かなかつた。

冷笑―血族結婚―。

雨に花じるむ日、兩家の間には深いく一條の溝がほられてしまつた。

雨はれし胸の大野に新らしき希望の草は萠えたけれど、今は、それすら、枯れてしまつた。せめては生きんとせし藝術の國にも生くるをゆるされぬ性なるを、今は、悟つたのである。



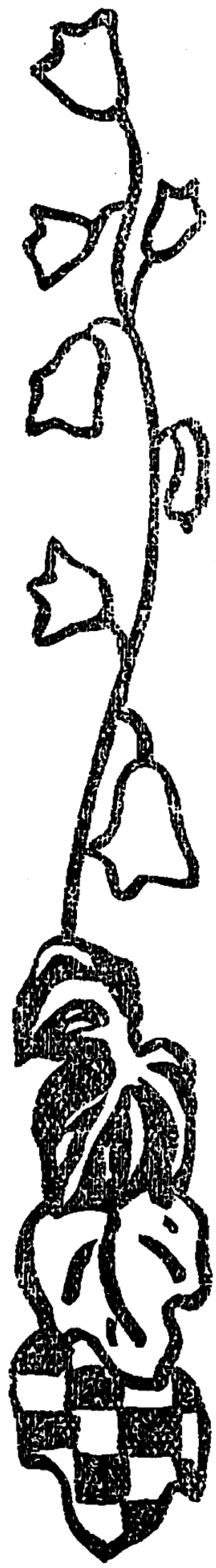
われ、われ、われとなる悲しみにも、蒼暗く林はもだしてゐる。花の灯かゞやく都より、吾いざなふ、夕轟よ、囚はれの子が疲れし眼には、涙さへうかまぬものを。

暮れゆく空は昏くなるであらう、大都會の火光は暗くなる空にも反映するであらう、私の行く淋しい道にも反映するであらう。

もう凡てを解決しやうとは思はぬ、ほぐれた綜の端緒を、引けば引くほど、わが心の痛み、緊縮する胸、はては絶望を探り出さねばならぬ、私はもう何にも手を着けられない。夜が來る、今夜は殊に暗い夜が來る。

寢息

藻の花



ジユリ　ロミオ！

ロミオ　戀人か？

ジユリ　明日何時頃に使をあげうぞ？

ロミオ　九時に。

ジユリ　あい、ちがへはせぬ。あゝ、それまでが二十年ぢや。まア忘れた、何でお前を呼び返いたやら。

ロミオ　思ひ出しやるまで、斯うして此處に立つて居よう。

ジユリ　さうしておて欲しいによつて、妾や尙ゝ忘れう。一しよにおたさばかり忘れいで。

ロミオ　そして予はいつまでも斯うして此處に立つてゐよう、卿にも忘れさせ、自身にも此處の外を皆忘れて。

ジユリ　もう夜が明くる。往いで欲しいとは思ひながら、小鳥の脚に氣儘少女が、囚人の鎖のやうに絲を附けて、ちよと手放いててては引戻し、又飛ばいては引戻すと同じやうにお前をば往なしたうもあり、惜しうもある。

ロミオ　卿の小鳥になりたいなあ！

ジユリ　お前を小鳥にしたいなあ？したが餘り可愛がつてつい殺してはならぬによつて、もうこれでおさらばぢや！さよなら！あゝ別れといふものは悲しい懷しいものぢや。夜が明くるまで、斯うしてさよならを言うて居たい。

ジユリエツト入る

ロミオ　あゝはれ、卿の目には安眠が、卿の胸には安心の宿るやう！あゝ、其安眠とも安心ともなつて、君の美しい胸や目に宿りたいなあ！……これから上人の庵へ往て今宵の仕合せを話いた上、何かと助力を求めうわい。

ロミオ入る

…………………………

輕るく頁をさゝへて居た指を放すと、はたりと、幻

のロミオとジユリエットは消えて、白いシエクスピアの半身が、金鑾の中に現はれた。

耳をすますと、時計の音ばかりが、部屋のうちに充ちて、瓦斯の白い光りで、徒らに流れて居る。クロースの表紙を、爪先でとん／＼彈きながら、襖の外に耳をやると、幽かな／＼寢息が、よく聞けばそれが二つ、かたみに引きあつて、かたみに出しあつて居る。あ、とう／＼寢入つてしまつた！

『今坊を寢かしつけてますの、一寸御免なさいよ』と玄關の鈴の音が止んだ時に、ぼんやりした聲が聞えた。それから私は、勝手知つたことゝて、茶の間に來て、三十分ばかり待つた。返しに來た本を、讀むともなしに披いて讀むで、そしてまたロミオとジユリエットに遇つた。

氣樂な人！お客をほうつといてとう／＼寢入つてしまつた。暢氣な人！しかしそれよりも私は淋しい。主人は留守、女中は今朝宿へやつたといふんだのに、廣い家に私がたつた一人。それが、世の中に自分ひとり取り殘された、といふやうな交渉のない淋しさと違つて、洩れてる寢息が、かすかに、漸々と、淋しさを注ぎ込んで來る、とでもいふやうに、淋しさはだん／＼と濃くなつて來る。

私は襖に手をかけた。閾にすべる唐紙の隙を狙つて瓦斯の光りが流れ込むと、寢息は一しほはつきりとなる。

『お涼さん！』

寢息には何の變りもなかつた。手枕の腕の白さに載せた横顏に、頽れかけた鬢の毛が、頰と共に、息するたびに、動くといふ程でもなく動いて居る。露はにした乳房にかけた小さな手が、それで母親の全部を握りしめてゞも居るかのやうに、安心しきつた安らかさに、猶乳首は口にふくんだまゝ胸深く頭を押しあてゝ居る、二つの肉體に溶け合ふ息は、そこに何の恐怖も、不平も潛り入るを許さないものゝやうに見えた。

『お涼さん！』

不思議や私の聲は潰えた。枕許に立膝になつたまゝ、後を振り向くと、すつと音もなく入つて來る自分が、黒い姿の自分が、再びそこに見えるかとばかり、闇の間と光の間を劃つた襖の明きに、青白い瓦斯の光りが覗いて居る。部屋を空にしたその暫しが間に、惡魔のやうなものが、潛み込んで居はしまいか――と、お伽噺のやうなことがふと頭にひらめいた。

さみだれ日記

三宅やす子

▲濡色の趣味▼

しと〳〵と降りつゞくあめ。

いつも塀の向の樹立は緑や、深緑や、やゝ黄ばんだところ、さては濃いみどりの少し白く霞んで見ゆるなど、新緑の爽やかな、輕い、美しさを見せて居る。それが昨日今日雨の朝夕は、一體に少し暗いぢみな色になつて照りつけられた連日の氣分をしつとりと落付かせる樣にも思はれる。ぢつと眺めて居ると塀もこだちもすつかり濡れて細い、眼にもみえぬ樣なあめの脚、ぬれた蝶一羽何思ふてかヒラ〳〵とまよひ來るのもあはれである。樹立をへだてゝは池もあり亭もあり、其處は此あたりに知られた廣い美しい庭園である。誰のすさびか此庭のかなたから三味の音が聞える、うつとりとしばしは耳をうばはれた。

▲六月の心持▼

四月は花にうかれる月、五月を青葉ふく風すが〳〵しく活動の氣にみつる月とすれば、六月はたれこめて書と親しみ度い頃である。追かけられる樣に袷をぬいでセルの袂輕うよそほつたと思ふひまもなく、かすりも暑くなつて、つひに潮染などとり出す樣になる。白縮などを見てもさほど眼に寒さうにもをかしくも思はれぬのが空が曇つてふとながあめの候になると、暫し

は息もつかれるといふかたち、まだあつい〳〵眞夏には程がある樣な氣がするので外出もならぬ朝夕は靜かに針もはこび、書もとり出す、病の床にある人などはいとゞ物を思ふであらう。老いたるはまたそれ〴〵に感じもあらうが、それはしらぬ。靜かな梅雨の窓は若き身にもまたおもひでの深き時ともいはれる。

▲三味線の思ひ出▼

三味線は、今六段のなかばとおもはれる。昨日の朝であつた。此頃時々洩れる三味の音を義太夫の絲の音だと云つた、人があつた。私は一兩年前生田の三味線を少し手ほどきしてもらつた頃、覺束なく撥を持つて復習へると伯母がねむたい義太夫の三味線をきく樣だとよく云つたのを思ひ出した。そしてひとりで可笑しかつたが、私はお向のも琴唄の地の三味ではなからうかと云つた、固よりしつかりときゝわけたのでも何でもなく、時々風が持てくるきれ〴〵の音が臺廣のこまの音の樣に思はれたからである。六段とすれば、私のことばが或は當つて居るかも知れぬ。ふと木間を洩れてくる三味線の音、それが古い頃を思ひ出させたのである。

樹立の多い坂路を下つたり上つたりして一週何度、通ひなれた琴の師の宅は牛込の加賀町であつた。其頃からだん〳〵に原が開けて新建の家の數がふえて來た其新築の家の横を通りすぎて往來の兩側から蓋ひかぶさるほどの大木の下をぬけると、其處である。門を入るとからたちの生垣がある、其處をぐるりと廻つて裏の離座敷の稽古所に行つたのであつたが、其生垣まで來ると琴の音は沈んで居るからよくは聞えないけれど三味線の時は師匠の撥の音がはつきりと聞かれる。今日は少しは早かつたかなどゝ思つて玄關に入るともう下駄がいくつも並んで居る。ズラリとならんだお弟子たちは大方自分より年上の連中だけに、なほきまりが惡かつた。丁度其時其場所を思ひ出し、稽古通ひに日を暮した其頃のいろ〳〵を思ひ出した。

其時分のお弟子もみなそれ〴〵に變つた。中の一人

はまだ番町に稽古所があつた頃から一所で年も同じ年はじめての大さらひの時一所に六段をひいたのが忘れもせぬ九つの秋で、牛込にも怠らず通つて妙手の聞えは生れついたうつくしさと共にかくれもなかつたが、去る四十年の博覽會に其寫眞が出て如何とやら、一時都下の新聞はうそまことと取まぜてかき立てた。我國での物もちといへば直に名ざゝるゝさる富豪に嫁いで今は浪華に幸多いときく。

あはれ都を遠くはなれて今君が妻琴の音やいかに。

▲女の一歩▼

口には愚痴もいひ泣言もいふ。もう一度もとの氣樂な時代にかへり度いとか、家もつ苦勞をぬけ度いとか、大げさな事をいひながら、女は結婚すれば多く其境遇に滿足して内心は缺くるところもない樣に思つて居る他所ではあゝだとかかうだとか羨んだり何かするけれど、それは人と談話の折などほんの體裁に云ふ位ので、實は我家庭ほどよいところはないと思ひ込んで居る。けれども男は默つて居りながら心中、絶えず何かしら不平や不滿を抱いて居る樣に思はれる。結婚生活が獨身の頃より無味であるといふなら、それは獨身時代の樣に放縱な事がならぬからかとも思はれる。けれども妻を度し難いもの、荷厄介なものといふ樣に手古ずられては――だまつては居られぬ。抑女が至らぬ爲に滿足を與へる事が出來ないのか、それとも男子の希望の高きに過ぎるのか。女が稚い樣な心持になつて家の事、生活の事、物珍しさうに友に報告する時に男は平淡な消息の何處かに一片意氣の昂らぬ言葉を洩らして居る。少くとも『獨身時代もまたいゝ點もあるね』といふ男同志の言葉は『あゝも一度娘時代からくり返し度い』といふおのろけ九分――と私は云ひます――の文句とは似ても似つかぬ感慨を含む事を思ふとどうしても女の方で今一歩ふみ出して努力しなければならぬ、あらゆる方面にうつかりしては居られないのである。

＊　＊　＊　＊　＊

▲男の我儘、女の我儘▼

しかしまた何故女が滿足して居るのに、男がさも不平な樣な事を云ふのでせうといふ話が出たら、一人が『それは其筈、女は結婚を甘い物とは思つて居ない、昔から「お嫁入」といふ言葉には一種のつきそつた意味がある樣に、結婚は苦もありそれに伴ふ樂もある、といふ風な考でゆくのに、男子は却つて結婚を割合甘いものに考へて妻の暖い優しい待遇といふ樣なものを非常に豫期して居るから此處に失望も湧くわけである』と云つた。一人が『一體男が我儘なのですよ』といへば『否根なし草の樣なうつり氣なものだから』といふ人もある。利己主義だとか、同情がないとかいろ〳〵の評が出たが最後に一人が『でも女も我儘でないとは云はれますまい』と分別ありげに云つたので皆笑つて沈默つてしまつた。人がきいたら可笑しいとも云はう。まだ「いろは」かく樣な處世の經驗をかざりもなく話しあふ同級會の席上での事である。

▲深川の空氣▼

めづらしく雨のはれた夕、深川の町をあるく。あめふりあげくの街はすつかり泥濘になつて家々ののれんや、軒の灯、ドン、ドーンと寂しい樣な響をたてゝ電車のはしるのなどを見ながら、あてどもなく歩くには足駄のあしもとがあぶなかつた。

横丁から若い者が二人、股引がけに縞の半纏を羽織つて肩に手拭を引かけたのとしるし半纏のと連れだつて來た。やがて印半纏が露次に入つて了ふと、あとの縞のが高い足駄をつきかけながら、流行唄を歌つてゆく。『勝負附やあい、勝負附!』と古ぼけた提灯を振りながら中爺さんが威勢よく馳せてゆく。山王樣の山車がすたれて、お江戸名物の日本橋が架け替り、晴天十日の回向院の小屋掛が國技館といふいかめしい建物に造られた、今、昔ゆかしいはやぐら太鼓に勝負附、鈴の音けたゝましい號外の聲に早くも其日の勝負を知る世の中に、深川はなつかしいところである。



髪

夜雨選

くしまき

川越　中村みどり

青い空の いろと新綠の葉の色とが、ザーザーザーと、音して、たえず湧き溢れる、堀井のたまゝ水を眞青に見せる。淡紅の矢車草を二輪ほど折つてきて、花形の水をいれかへにきて、もうたまらないほど、夏々したその色が懷しく、マダムをもつて來て、髪を洗ひはじめた。人には見せじとちかつた、をとめの肌をいつかをく面もなく、はだ拔きにして、お茶のみの椀の白いのをふせたくらゐの　兩のお乳のもみもみするたび小さくふるふのを詩にはえある月波のカバーネスなら可愛いと いうて手もふせてみようけれど、意地惡の兄にみつかつたら棒でつゝかれるだらうとは い思ずる。はしめはにごりににごりした水がい つかにごらずなつて黒い長い髪の毛とミルクのやうな肌とが 濃い葉の色と一體にチラチラ動く。

なつかしい水の中の黒髪のたゞよいよ。

去りやらぬ思をしつゝぬれた髪をおさへて上る。

拭つても拭つても、あとからあとから、小さい玉の雫が下つて、一寸梳す間に下にしいておいたタオルをビッショリぬらす。水々しくくしめのあざやかな下げ髪に紅をさした頰――磯の女の優しい姿を思ひながらあか〱とてる、日の若葉を射して、美しくうつる、青い椽側にすわる。

垣根越しにおとなりの百日紅が眞晝の日にふさはしくつて、たまらなくいゝ。嫁いだ姉様がよく目のさめるような夏の日。

いつか髪を洗つては、まだよくかわかないシツトリしたのを黄のすげ櫛に、クル〱と巻いたくしまきの白い顔、黒い髪のあでやかさ、よく百日紅を折つては、唇にあてながらこの花死ぬほどすき。と、云ひ云ひしたことを思ひ出す。母となつた今もなほ、眞紅の其の花をめでつゝ去にし日を泣く人である。

くしまき――美しい淚っぽい姿の、をとめのころからしてゐた、くしまき。何とはなしに、なつかしい。

情想の涌く束ね髪だと思つてる、姉ならずとも、色のぬけるほど白い、人のぬれ羽のやうなかみを、くしまきにしてる姿はふるひつきたいやうに思ふわ。

いつか京の旅より、××の名妓のくしまきの發亂姿して、長い廊下の窓に月を見てゐたのがたまらなくよかつたと云ひ越した人もあつた。

養壽院山に鳴く初せみの聲きゝながらかわきすぎぬうちにと黄のくしとつてくしまきにした。

(入賞)

女優を欣求する君だけあつておもひも心も奔放である。月波のカバーネスつてどこから來た人か知らないが、あなたは若しや粂寺の君と間違ひやしませんか。チンコロがけの顔を寫眞にうつして下さるといふお約束はまだ御履行なさらないので姉さん貸かしの櫛巻ぶりかどうか保證するとがならぬ。(評)

伸び行く髪

京都　みどり

いつか月代は止めて兩頰へ長く垂らした總髪となりまして友達同志髪の丈くらべしては長きを誇り、母様に先きを切られる時等どんなに悲しかつた事でせう、少さい心にも髪は大切なものでした。

丁度夏の暑い〱日中を蟬取りに行つて歸りますと汗でビッショリ。首筋へかゝつてくる毛を鬱苦しさうに兩手で上へ〱とかき上てゐましたらお祖母様がちと中をすかしてあげようとて眞中だけを丸く取つて結つて下さいました。そも〱是が髪へ元結を掛けた最初で根元へ赤い切れをかけたのが何よりも嬉しく頭ゝ手をあてゝ見ては大事さうに暑いのも打忘れて飛び出し、お梅さん處へ見せに行きました。すると叔母さんは抓み細工の菊の花簪をさして下さいました。其時の嬉しさ今に忘れもいたしません。それから一年とたゝぬ間にと最早や前髪だけ垂らしたおさげとなり高等小學へ通ふ時分には眉際まで垂れてた前髪をもすつかり上げてしまひました。其時鏡で自分の顔を寫して悲しうございました。髪に包まれて風にも當らなかつた白い

額と日にやけた頬の色と見苦しく際立つてまだ調のはぬ生え際が一層おでこに見えますもの。人に違つた樣だと笑はれるので顔を見られるのが否で歩くにも自分の顔を見つめてゐはせぬかと氣をくばつて居りました。

少女の前髪をあげるのはむかし男子が十五歳で元服して前髪を剃つたのと同じではありますまいか。無邪氣な心にも極く罪のない羞耻の情を覺えました。それもしばらく漸々と娘盛りの派手な髪が目につく樣になりました。

私はお祖母樣にとつて玩具の活人形だつたのです。御宮仕への昔姫樣から頂いたとて秘藏していらした厚い金の根巻はやがて私が丸髷になる時にと樂しんでいらつしやいましたが、おさげが桃割となり桃割が島田と漸々伸びゆく髪の變遷と共に少女が胸にをどる血潮も移りゆきますものを。廂髪は其當時東京から歸られたばかりの依田先生によつて輸入されました。其ハイカラな新スタイルは好奇心のほとばしる若々しい先生の心を奪ひましたがそれも今では前世紀のものとなつて、マガレットに巾廣のリボンを蝶の樣に結んだ處女十八、花とかゞやく誇の時代を、私は早くも丸髷てふ重き責任に囚はれの身となりました、お祖母樣が心を込めた送り物の金の根巻は用ゆる時が來ましたけれ共。アヽおなつかしい御滿足の其笑顔は遂に見られませんでした。(入賞)

楚々。と、評はこれだけで澤山であらう、いかにもイヤミがない、女の人は新婚の當時は目が見えなくなつて、はた困らせの文を作つて來るので手にをへないが、長き少女の髪の歷史をつゝましやかに語りをほせたるは手柄である。(評)

髪の印象

長岡　秋月すゞ子

眞に小さい在郷町なので質素むしろばんからなんですけれど、六歳から七歳の學校へ行く時分は私は後の尖つた男髷許りでした。父樣に毎朝々々ぴんくした毛を色元結で結うて貰らひました。まあ綺麗だことゝちようく見た樣だとておだてゝくれましたし、それに金銀紙で製したびらくの下つた前簪をさして餘程得意に成つてました。其時分はお下げ髪等は見た事も有りません。二歳三歳のやつと結はれる如な毛の者が、鼠のしつぽのお下げに唐縮緬の赤い切なんかを結びつけて、それはすばらしく、喜んでた時代でした。ひようげ性の私は矢張學校へ行つてもひようけてました、そうして或日多くの者にちよんまげくとからかはれた、あまりひどくからかはれたので終日塞ぎ切つて、泣き面して歸へりました。家人は「何したや先生にしかられたな」と、私の顔をのぞきますので、むつと小しやくにさはつて泣きく「こんげのちよんまげなんかいやだ人がみんな馬鹿にするがんにお貞さ見てよに竹ふしがいゝ」と、じやみました。それから姉がお貞さんの樣に竹ふしに結うて呉れましたけれども、又、氣に喰はないで無理にこはした事もよく覺えてます。それから八歳位の時は周りをつめた小さいいちよう返へしに結うて貰ひました。九歳位から自分で三分位のくず引を立つて桃割れにしてました。高等二年即ち十二歳の時お頭に一杯おできが出來ましたのでたしか十月でしたやつと延びた大切の毛をむざく切られて仕まひました。學校へ行くのがいやでたまらないので、初めの中休んでました、それから一ヶ月許かりでなほりました。それから延びくして、高等三年の夏頃から、また少さいいちよう返しに結ぶ樣に成りました、十五歳の卒業する時分には、つめた束髪に、しかも質素な師範學生の眞似に氣取つてました、元より毛のあつかつたのが尙ほ更あつく成つて、今では高襟なルイザに結うてます。或時はローマに結ふ事も有ります。

日本髪にしやうかと思ふ事も有りますけれども、矢張若い者は巾廣のリボンか大輪の花簪を挿す樣な高襟まげがよい樣です。(入賞)

眞柄弘子(蒲原早薇　横山保子(雲井の雁)佐藤浪子、木村うた子と、越後からは隨分出てゐるが、この君は佐藤浪子さんと同じ町で小學校の時代もほゞ同じであつたらしい、五人共二つ三つつゞ前後はしてるだらうけれどめいくチヨチヨツペのような頭をしてゐたかと思ふと笑ひたくなつて來る三十振袖は知らないが、現在四十にも五十にもなつて皆潰し島田に結つてる國たからいづれ五人の奥さん達もばアさんになればさうするだらう。(評)

處女の終

大阪　はる子

さよなら、お静にいらつしやいませ、車夫さんよく氣をつけて。かんだかな聲に送られて俥に乘つた。仰げば萬星まき散した空の色も寒い彌生末のある夜である、髮を結つた故ばかりではない、寒いからとて、下ろさせた幌をすかして、青い、赤い、町の火がみえる。町よ！火よ！もうお別れなんだよ、さよなら！のび上つて見返つた、俥は町をはづれて、田舍道にかゝる、先きを行く伯母樣の丸髷がハツキリとわかる位の星の夜を、二臺の俥は音もなく走つて行く。午後から曇つて、どうかと思つたのがもちなほして山の端には紅色の雲もみえた。明るい電燈の下の鏡の前に座つて髮からお髮が出來、高髷ののつた時の氣持を、今一度くり返して味はうと思つたけど、只胸のみがせまるやうに覺えた。處女としてはじめての、そして終の高髷を結ぶには餘りに明るすぎた電燈の光よ。紅に染つた頰の色の、鏡にうつるさへ面伏だつた。五尺の黑髮を無造作にたらして、水色のリボンで結んだのは、筒袖に紫の袴の裾短かく、かゝとの高い靴をはいてラツケト抱いた幼時である初めて髮をふくらして桃色に結つて、若き嬉しさとはぢらひに赤くなつた頰をおさへて「お酒に醉つて」と紛らした桃の節句は、もう三年前となつた。その時殘月を合奏せた二人の友は、旣に人妻である、お揃に染めた藤紫の振袖は、模樣の白桃もそのまゝに奧に秘められてある。

百人の女の百人が行くべき道なれば、否みはしない、否みはしないけど、すてがたき處女の衣よ！二十年なれば未だ若い、今二年三年の命が許されぬのだらうか、實にはかなきは女！短かきは處女の命！！

衿ドに吹き入る風の寒さ、夜も更けたか天も星も高い、明朝はこの星の光の消えぬ中に汽車にのるのだ、墨繪のやうな山よ、野よ、吾が處女としての終のかげを何とみるか？金色ゆらぐ高髷のおもはゆさも汝の前には、眞直に顏を上げて心ゆくばかり名殘が惜しみたいやうな氣がする。

あゝ星よ！終のかげの上に輝くか。

この君は亡くなつた中山百合子の從妹である、處女の命を惜みつゝかへらぬ春を泣きつゝ、遠くなには津の人に嫁いだのは三月の頃であらう、今はとて故里の山に別るゝ時、とこをとめにてをはりし薄命の友をおもふ暇は無かつたのだらうか、去る者は日に日にうとし、故人闇に立ち君をのぞめり、忘れたりや新裝の人。（評）

髮のいろ〳〵

埼玉　加藤榮子

桃切りの四五歲の子は可愛らしい耳の所を赤いリボンで結へる。きゆうとつめたお下げは十二位までの少女。マガレツトに五吋のリボン、ふつくり取つた前髮は十七位までが止めにて、綠の髮をローマにして藤色紋羽二重の被布の後ろ姿はわるくないもの、たぼを心持つめた少女の桃割は床しく、半玉の桃割は粹なもの。文金の高島田の令孃は上品に見えつ、ぶしの島田は下品に見ゆるもの。此節流行の何形とかのまるまげは白牡丹へ結に行きぬと、隣の奧樣の話。洗ひ髮は艷なもの。芝居でやる昔の男の髮は種々な結び方してあれど今は男は皆散髮で、さなければ二つに分けてカスメチツクとやらの香鼻をつく。棟割長家のわび住ひの妻君は無造作の櫛巻あたら黑髮金茶色にかはつて、金色は西洋婦人。切下げのまだ四十路の坂二つ三つ越えし未亡人のうち若い後姿は、由ある人のと思へば哀れに淋しき心地しつ。

俳文ともいふべきもので非常に氣が利いてゐる、たゞ疑はしいのは寸鐵殺人的の名句あるかと思へば、しどろもどろ揃はぬ手ぶりのところも見える（今すべて手を入れたり）半分は古人の作ではないか知らん。（評）

黑い渦

冬の月

無造作に巻いた渦に暗い貧しい過去を辿り辿つた中心其處は私の一生を通じて最スウイートなはた瑞々しい純なハートの發生地であつたゆら〳〵と末廣に肩まで懸つた漆黑の髮、初夏の萬象が吐く新鮮の空氣を小さい胸一ぱいに吸つた私は雙の手に白い牡丹抱いた儘閼伽捧ぐる人の追々明くなつた色彩を見つゝ幼い心は芳烈な新綠の底にとけてしまつた夫は丁度三年の法要の日穩しい御賞美と伯母が小櫻つまみの花櫛をさして呉ながらハラ〳〵と優しい春雨の露にぬれたのを覺えて居る稚兒輪が御下げに變つて赤くなると危んだ人の編目も許した時身内の血管は一齊に呼吸し出した潤を持つた髮は手に餘る程溢るゝ心の精は迸つて毛の先にも波を起した

櫻散る頃校庭の草上に座つて小鳥の樣な目に鬱鬱した生の往來せる現世を覩きながら後ろに引いた黑翠い髪に可愛い露草が首出して居るのをみて心は歡喜に燃えたのも束の間莢豌豆の香のする頃ふとチブスを煩つて毎日〳〵恐怖と不安を以て解く櫛の一つ〳〵ズルリ〳〵と懷しい思出の通つた幾億の毛はみんな此時私の體を脱落してしまつた餘りの事に泪も出ない悲しい寂しい瞳をぢつと見はつて只ふるへて居た私にならば替つてやりたいと母は泣いて呉れたさらでだにつる草にしめられる一本の若木の一層自由のきかなくなつたのも「此時からであるやがて望まぬ箱に一ぱい之も己が生の一部と思へば其一筋一筋にも名殘が惜みたく餓狐の樣に拾つて集めて或日地獄の和讃を聞きながら竹の根方に埋めた土が盛上つてさはるとフツ〳〵する翌日も翌日もいつたり其上に手をやつて心行く許り泣いた夫から三年新しい髪は舊に倍したが共に生じた悲哀に去年から又めつきり細つた春になれば又生えると母は云ふけれどももうそんな柔しい娘じや御座いませんたつた一人の親にさへ離れた胸を抱いて行く子に飾の失せるは當然であらう秋！晩秋の暴風が悲しい凱歌をあげて天地に反抗する時夫は女の姿の最慘たる時である銀色を反射する月の輪が軌道を轉一轉絹をさく樣にきしる時艶を失つた髪は引かれてぬけてしまふのだスラ〳〵スラ〳〵胸に何の感もないこの渦の細りに細つて糸の樣になれば冬のいてふの樣な女のむくろが横にのだむつちりとまるみをもつた肉の些の事にも動搖する少女十六は髪も王者の樣にかゞやく時である。

「虞美人草」を下手に譯した樣でもある、何遍かよみかへさねばはつきりわからぬ、十六の年を未來にしてあるのでよけいこぐらかつてゐる（なぜなら四十や十五で戀する筈があるまいから）將來注意して見よう。
（評）

黑髪

さくら

心激しては切らうとしたことさへある吾がくろ髪の、いとほしき髪の香よ。

筒井筒ゐづゝにかけしまろかたけ、ふりわけ髪の頃より、いつくしみ育てゝ來た髪、誰が爲に梳き、誰が爲に解かむ。

とかば丈にもあるべく、と云つた昔の人は髪の毛が長かつたのであらう、正直私のは三四尺であらうが、それでも人は長いと羨む。

男にはつゆ觸らさぬわが髪を、處女の日の終りには、くろ髪まきて誰か寐ぬらむの歌も思ひ當る事があらう。

みだれるにつき、こはれるにつけ、櫛入れぬ日なきものを、頓て秋風寒く吹く日があつても一筋も落ちてくれるな、永久に、ながく、揃つてつやゝかなれ吾が黑髪よ。

一筋の毛のさきまでも通ふ血があると云ふから、一筋々々生命をつないでゐる黑髪の尊とさも處女の誇りであらう。

綠の雲かげ、髪梳く日のあつき光よ。

不自然な形を壞して、自然にかへつた髪は流るゝやうに肩に落ちる。

花櫛

髪にかざせる花櫛の
花の影さへ靜かなる
輕き小舟を朧波の江の
水にうかべて漂はむ

かとりん海に櫂とりし
ゑれんの君がおもざしは
露もわが身にそなへねど

小霧こめゆく月波根の
尾上を照らす夕月を
痛める胸に鑄つけて
長き思ひを宿さまし

山かげ落つる湖水の
浪間の月に棹さゝば
うきねの夢はつらくとも

夜雨

和歌

☆

傍にいと小さなる常夏は我等の戀をきゝつゝぞ咲く
大空は黄ざくら色の衣しきて來よとばかりに月昇る時
汗あはく肌をうるほす心よき麥の畑に匂ふ日の色
しやぼん玉一日にして百千年忘るゝ如く消ゆるかなしさ
路たがへよろぼひ來る亡骸か明き光の身にさゝぬわれ

深川　佐久間貞子

☆

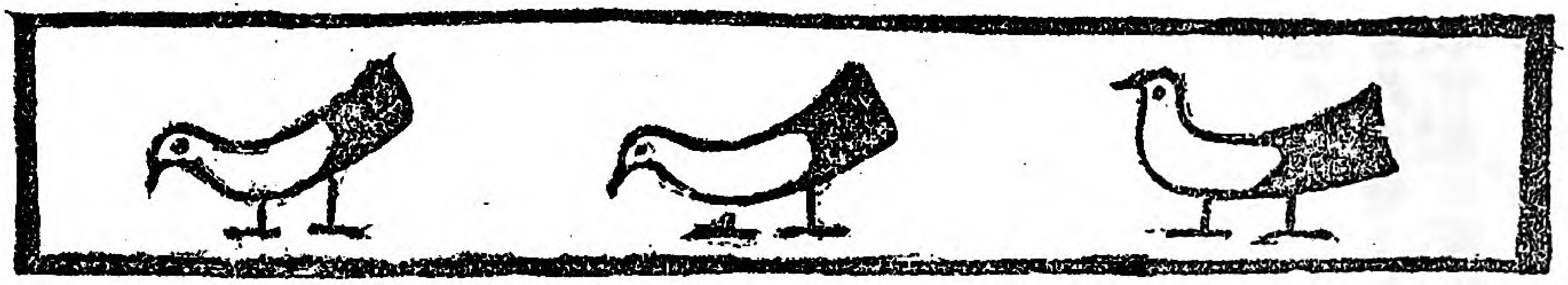
目に見ゆる物皆古き心地して我が住む家にあきはてしかな
死ぬ日さへ知らでうたひし若き日の心の色にひぼたんの咲く
泣きに來ぬあしの芽白き夕ぐれの沼のほとりの石の上にも
髪ちらし豐の少女は初夏の夕のいそに君をまつかな

豐後　吉良花守子

☆

中空の七つの星を二つ得て生れて來しか目のよき少女
紫の山をめぐりて青嵐加茂の宮司の袖に吹くかな
戀を得て生くるとも云ひ戀を得て死ぬるとも云ふいづれ眞ぞ

駿東　高尾



☆ 麹町 ふさ子

硝石の落ちてくだけて散る如きもろき心の女とおもへ

まどかけの白さと君がふん頬のうす紅と照り榮えのよき

葉の一つ花にさそはれ散りし夕世のつれなさをかこちけるかな

☆ 麻布 ひざくら

我胸の不斷の猛火しづめてよ若葉の梢吹きたわむ風

西東別れて生ひし枝なれば花も別れて咲くにやあるらむ

☆ 伏見 竹村槙子

清き血の清き廻りに少女子の肌の色の美しきかも

あなひろし我が天地はひろうしてはかり思へぬ大いさにあり

天地はたゞあか〱と活きみつるうまし少女の意のまゝに燃ゆ

☆ 東京 赤蜻蛉

花ぐしのすべりし音を君や來とうつゝにきゝし春の閨かな

なが雨の小やみだになき其うちに散りつくしたる栗の花哉

花大根銀閣寺よりのかへるさに蟹などひらふ夕日影かな

君と云ふ際なき空を仰ぎつゝ雲雀のごとく歌ふ我かな

忘れたる化粧具などをとり出だし君いまさぬが悲しかりける

此日頃君が好みしわが髮を結ひても見つゝ思ひつゞけぬ

尼になつた若い女の半生

齋川幸子

▲十四歲で人の嫁

僅か二十五歲で尼となつた高子さん——事實は小說よりも奇である。

高子さんは三歲の時兩親を失つて、十四まで叔父さんの世話になつて育つた。丁度十四歲の暮、緣あつて土地の舊家で醫師を業としてゐる富田某に嫁した。十四歲といへば未だ花ならば蕾といふ時であるが、先方では其癖も何もない子供をお嫁として貰つて家風に染ませやうと考へたのである。かくて、お嫁に行つてから十九歲迄は最も幸福に又最も面白く暮した。高子さんが西國三十三番の札所を通じて　紀伊大和の名所舊蹟や陸奥の恐山、陸前の金華山迄へも足を運ばせたのも此當時であつたが、其年から夫は肺病に罹つて、翌年廿歲の高子さんを後に遺して不歸の客となつた。これより舅姑を失つてゐた上、子供が無かつた爲め、高子さんは全く孤獨となつた。此時の高子さんの悲歎は殆んど筆紙の盡す所でなかつた。そこで終に或る知合の坊さんに賴んで尼とならうと決心したのであつたこれを聞いた里方や親類は非常に驚いた。十九や廿の女盛りを尼にして何うする。そんな考へを持つてゐるのを獨り身で置くなどは危險千萬だといふので、一も二もなく里方へ引取られた。

▲第二の結婚

里方へ引取られた後間もなく尼一件が不安の種となつてゐるから、無理やりに第二の結婚をさせられた。然し一ケ月も經たぬ中に歸つてしまつた。叔父や親類の人達は怒つても見、すかしても見たが、もう復緣の見込がなかつた。で今度は情から攻めて終に納得させて宮島家へ嫁せしめた。高子さんは納得して嫁入はしたもの〻、何うしても氣に食はぬ。嫁入つた其日から

去りたい心が先立つてゐた。従つて夫や姑に愛想が惡い。厭な顔ばかりしてゐる。けれども夫や姑は不思議に其愛想の惡い厭な顔ばかりしてゐる高子さんを可愛がつて、下へも置かず扱つて呉れる。暇のヒの字でも口へ出たら歸つてやらうと思つてゐる程夫を嫌つてゐても、こんなに扱はれると歸る節もない。兎角する内に身重くなつて廿一歳の秋、愛らしい女の子を産み落した。産み落した本人は兎も角、姑や夫の喜びは一通りでなかつた。子供さへ出來たらもう安心だといふ事は誰の目にも讀まれた。高子さん自身も子供が出來て其愛らしい顔を眺めるやうになつては、去ねと云はれても去ねなくなつて來たのである。



▲再び夫に別る

高子さんが愛らしい子供を抱いて之から一家面白く樂しく暮せるやうになつて來ると、又第二の不幸は身に降りかゝつて來たといふのは夫が或る事業に大失敗して俄かに負債が嵩んで來た結果、世に有勝のヤケを起して内を外への放埒三昧、酒と女に入浸つて高子さんに見向きもしないのみか、毛蟲のやうに厭ひ初めた終には彼の女の前も憚らず、女を我家へ引入れて樂しくフザける。けれど高子さんのタの子も口にせぬ、かうされては誰にしても腹が立つ、口惜しい。けれども初め夫を嫌ふたから嫌はれるのは當然だ、と

斯う想到して人知れず泣きながらも觀念の眼を閉ぢてゐた。
夫はかく女を愛するかと思ふと、やがては亂暴する折檻する。と高子さんは何時もその止め手であり又介抱人であつた。
其中に女に逃げられて了つた。そして間もなく夫は恐るべき肺病にかゝつて、高子さんが廿三歳の時、終に此世を去つて了つた。彼の女は曩に先夫を肺病で殺し、今又、現夫に同じ肺病で殆んど同じやうに半年程煩はれて死なれたのである。末長くと契つた夫は何れも肺病で死んで了つた。高子さんは到底男と偕老同穴を契る事の出來ぬ因緣を持つてゐるのである。泣いてももう追つ付かない。けれども泣かずにはゐられなかつた。

▲寂滅爲樂の雲のかげ

夫を失つて未來の希望を斷たれた高子さんは、自失の餘り現世其物を失つたのみならず、己れ自身をも捨てゝしまつた。元來最初嫁いだ家にゐた時、姑から深く佛敎思想を注ぎ込まれてゐたゝめ、其度は更に甚しく、「諸行無常の春の花は是生滅法の風に散る。生滅々爲の秋の月は寂滅爲樂の雲に隱るゝ。」の句は始終其念頭を離れなかつた。
常なれば彼の女の氣質として他人を賴るやうなことは、決してしないのであるが、漸う三歳の女の子を連れた上、種々の心配は嵩むし、その結果は時々病氣を引起して、床に就く事が絕えなかつたため、從つて他人の厄介にならねばならぬ。と云ふやうな次第で、宮島家十二軒の親類は、當時高子さんに取つては唯一の賴みの綱であつた。從つて何事も親類に計つて、事を定めると云ふやうな有樣であつた。親類も又親切に相談相手にもなつて吳れ、何彼れと世話をして吳れる。高子さんの爲には之がせめてもの幸福であつた。然しそれも夢の間で、更に大なる魔の矢は高子さんを的に滿を張つたのである。

▲凡夫のあさましさ

高子さんは廿三歳の女盛りである、それに後家であつた。
宮島家十三軒の親類の一人に、宮島某といふ人があつた。かねて胸に一物、常に親切を粧ふて何や彼やと世話をして吳れてゐたが、其年亡夫の墓碑建設の一

件に就て、親類に相談をする事があつた際、高子さんは終に彼れ某のために親切ごかしに逢つて、其奸策に乘つた。

「毒を喰はば皿まで」で、一度び不義の門を潜つた彼の女の心は亂れに亂れて、もう昨日の高子さんではなかつた。如何に魔に魅入られたとは云へ、變れば變る人心、聞くさへ淺間しい次第である。當時賞めものであつた高子さんは「人は見掛けによらぬもの」との言葉をその儘事實として取扱はるゝやうになつた。

果然高子さんは因果の種を宿した、驚いても悔んでももう追付かない。サア斯うなると二人の亡夫の姿が夢に出でゝ彼の女を責める。神經質になつてゐた高子さんの眼前には、晝間も恨めしさうな顏をした夫が現はれて、「悵恨」の涙を流しては掻消える。高子さんは悶へた、苦しんだ。

▲肉體の苦痛、精神の苛責

天の刑罰は嚴である。高子さんはヒステリーにかゝつた。のみならず神經衰弱――胃病――腰氣等を引起して何時も苦しんだ。心界の苦痛は更に甚しく、妙に彼の世が戀しくなつて來た。

さうかうしてゐる中に、高子さんは男の子を生んだが、最初產んだ子供は男の手に渡す筈であつたのを、何や彼やの都合で自分が世話せなければならなくなつた。彼の女の心の苦痛は殆んど其極に達し、もう死ぬより外道はないと思つた。

死――死の一字が頭の中を妙に掻きまぜるやうになつてからは、高子さんは矢も楯も堪らなくなつた。その上男とは手を切つてゐると云ふでなく、五月蠅くつき纒はれるので、追及のはげしいだけ、それだけ死を急ぐ心が焰のやうに燃え立つた。

然し死ぬると云つても、自分の身一つではない。五年も育てた女の子と、此度產れた嬰兒がある。サテどうして死んだらよいかと云ふ事が、當時の重要問題であつた。無論彼の女の性質としては死に耻を掻くのはいやである。死ぬのなら潔くキツパリ死んで、死に樣の惡い事はせぬつもりである。遂に高子さんは斯う考へた。

「死ぬのなら昔の武士のやうな死に方をしたい。よし我が身は一ト度び迷ひの淵に落ちて今の有樣に立ち至つたけれども、矢張り宮島家を名乘つてゐる限り、厭でも宮島家の墓地に葬られなければならぬ。と云つて

此罪汚れ多き身を夫の傍や、先祖の側に葬られて先祖や夫をまでも汚すのは忍びぬ。がそれかと云つて淵川に身を投げては直ぐに死骸を見出だされる。之程の恥はない。荒汐の汐の八重路に鮫の餌となつてもよい死骸さへ知られねば、此上の満足はない、がとても企て及ばぬ事。しかし此罪汚れを先祖や夫にお詫びをして其場でキッパリやらう……。」

かく決心は定つた。定まつたがそれからの方法と準備を要する。で又考へた。

「死ぬなら親子諸共――二人の子供を先に殺して、それから三人が這入る位な三尺穴を掘つて二人を其中に納めておいて、自分が其穴の中に立派に、あの四十七士が主君の墓前で潔くやつて退けたやうにやらう、死恥は何んな事でも掻かぬ。それに就いては二枚剃刀に如くはあるまい。もとより墓所には白布を張つて其中で果てるのだ。やるのならこれ丈けにやつてこそ、祖先や夫に幾分の申譯が立つのだ。」

から下準備を立てゝ用意を整へ、親類や里方や重立つた知人に書置迄して、さて二十五歳の春、人里離れた山腹の、松風凄く吹き荒ぶ下、未だ出ぬ月の闇を幸ひに決行する事にした。高子さんは流石に女丈夫であつた。

▲破れたる沖の舟

さて其日が來た。豫め準備は出來てゐたので、子供には御墓參りをすると云ひ聞かせて、夜に入るのを待つたが、夜に入ると、何時になく知合の人が或る用件で尋ねて來て、思ふやうに歸つて呉れぬ。彼の女はこの機を取外してはと焦慮しきやうに思つたけれども、致し方がない、夜更けても歸らないので、終に第二の時日を選ぶ事にして、其夜はとう〳〵中止した。

第二の時日――其夜も亦來客の爲めに思ひを遂げ得なかつた。

高子さんは第一、第二の時日を失敗に歸して、心は更に悶えた。「何故から死なれぬのだらう」と思ふともう時日を選ぶ暇もない、又墓所で死ぬなどゝ云ふ理想に憧憬れてゐる暇もない。嬰兒を脊負つたまゝ無意識になつて外へ出て、闇の小川の面を眺めつゝ、唯下へ下へと歩を運んだ。彼の女の無意識的意識は身を入れるに足る川の廣場へまで行かうとしてゐたのである。不圖前に燈火の光を見出した。と同時に龍王樣の御明りだなと思つた。何故死なれぬのか、龍王樣に見て貰はふと云ふ氣が、何所からともなく湧いて來た。身

はもう龍王樣の前に立つてゐた。

そしてそれとはなしに身の上を占つて貰ふと、

「あなたは今丁度沖合ひへ乘り出した船が、風もないのに帆柱が折れ艫舵はなし、どうする事も出來ぬと云ふ有樣であるが然し波のまにまに船は次第に陸に近づいて、何時かは陸へ上る事が出來る兎に角十一月まで待つてご覽なさい。何とか云ふ事になつて、結構さが見られる。今が大事ですから十分ご注意しなさい。」

と云はれた。

斯う云はれると、二度まで定めた事が他人の障碍によつて決行せられなかつたのも、何かの因緣に繫がれてゐるのではなからうか、兎に角十一月まで待つて見やうと、遂に死を思ひ止つた。

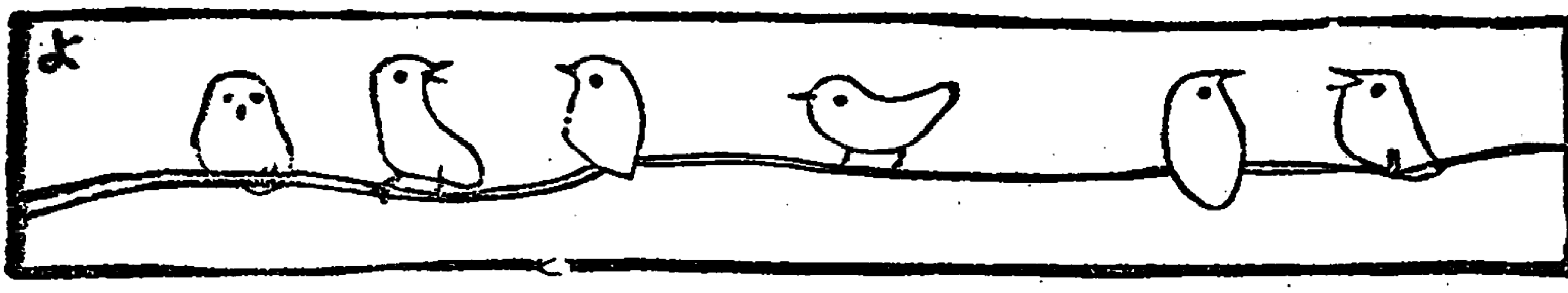


▲罪障消滅、佛門に歸依す

其翌晩、小松の生えた美しい小山の上に、月日二體が相前後して輝々、皎々とお昇りになつた夢を見た。高子さんは之に因つて身に吉凶何事か現はれ來るべきを豫期した

それから十一月の或る夜、美しい蓮の花の中に自分が這入つてゐたと思ふと、それは蓮ではなくて佛の手であつた、といふ夢を見た。

かくて二人の幼い子を置いて、佛門に歸依して尼となつたのは、落葉悲韻を傳へ、晩鴉哀に鳴く冬の初めの黃昏であつた。名を改めて妙蓮といふ。



南國の海邊

井淵英

南國の海邊にたちて思ふまゝ胸ふくよかに春の風吸ふ

樂しきもはた悲しきもなれ故に知りし都よいざやわかれむ

ニコライの塔の十字のまぶしくも光るを見れば心かなしき

まひるすぎ桃の花ちりまたちりて思出もなき春はさびしき

旅の宿なすこともなき春の暮茶などすゝれるこの淋しさよ

幼き日かりの別にさらばとて君にとられしての手なつかし

櫻さくあしたの馬場をあゆみつゝ悲しきことをふと思ひけり

麗かに日かげにほへり風ふけり何の思に泣かんこの日ぞ

春の日をそびらにうけておぼろげに若き日などを思ひ泣かるゝ

さもあらば君が仰にそむきても我ゆく道にゆかむとぞ思ふ

この心知るや知らずやゐまひつゝ嫁けよと強ゆる底に河あり

花みだれあらし亂れて心またみだれて落るゝ春の夕ぐれ

己をば導きもえずかにかくと人を数ふるこゝろはづかし

故しらぬ淋しき心そのまゝに初夏に入るあはき悲しみ

ゆく春のそらの青色うすにごる夕ぐれ時を何鳥かなく

釋迦佛に甘茶あびせて歸りくる卯月の朝のこゝろよさかな

不縹致に生れた嘆き

埋れ木

木綿の色のあせかけた袴に筒袖姿。重い日和下駄引つかけて、黒毛繻子ばりの洋傘に顔をかくして行く、それが私の通勤のスタイルなんです。

二十歳に間もない年で、嘗て一度も、リボンかざした事もなく、白粉つけた事もない私は、萬事はで好きな、ちき子さんと學校では机を並べて、平氣らしい顔してゐますよ。見る人は變り者と云つて笑ひませう。

つゝましやかな、人の事等に兎や角う言つたことのない、ちき子さんさへ見兼ねて、「お互に樂しい若い時代ぢやありませんか？今の中思ふまゝ華やかな風しなければ何時するの。あなたも今からおはあさんの樣な氣を出さないでいゝでせう」

色彩の映えるコバルトのパラソルをさした姿と、黒ずんだ、冬枯の草の樣な影とが並んで、學校の門を出たとき、度々こんなことを聞かされた。

言はれるまでもない、一生に一度の青春時、一刻千金の時代なんだ。今をおいて何時華やかな時代があらう。あゝ其の花の時代――花の時代――それをからしてみす〳〵山猿で過さなくてはならぬ。私だつて惜しうございますわ。生のある限り血のある限り悲しいのです。

女ですもの、若い血の燃ゆる女ですもの。人並にリボンもつけ度いし、美しくもなり度いと思ひますわ。

然し、私には外の若い女のする樣なそんなことは、どうしても出來ません。いくら背景を華やかにした處で、不似合ひな點が、裏から裏からと、墨をつけられて出る許りで、決して、よりよくはなりませんもの。

と言ふのは私の容貌――あゝそれを一々書くことは出來ません――皆樣どうぞ御想像なすつて下さい。

物心のついてからと云ふもの、實際私は、人の前で鏡を見ることすらようしなかつたのです。今はさうでもありませんが、子供の時喧嘩した折など「すみら御前」だの、「ちんがくしやみした樣だ」のつて、よく言はれてゐました。

さう言はれても、それを兩親に言ひ付ける勇氣はなく、たゞ一人部屋に入つて泣いてゐました。

こんな風なんですから、父は男だけにさうもありま

せんが、母の心配は一通りではありません。「髮をも少しどうせ」の「顏をどう」のと、やかましく言つてゐましたが、いくらしたつてだめ。もう近頃は何とも言つてくれません。

やかましく言はれてゐた時分は、母の言葉はより多く醜を思はせるので、苦痛にたへませんでしたが、今の樣に何ともかまつてくれないと、尙苦しく孤獨の感じがしみ〴〵と浮びます。さうして又一種の反駁心も起つてきます。

時によると、人が寢靜まつた後、そつと髮のくせなほして見たり、机の奧に秘めて置いた白粉――何時やらきまりの惡い思ひして、人つ氣のない薄暗い店の物陰からソツと買つて來た――を出してぬつて見る事がありますけど、どうしませう。しても甲斐はありませんもの。

癖直したり、油つけたりすれば、赤い軟にか過ぎる薄い髮の毛は、ベツタリ固まつて、ちつとも結へやあしません。薄つすりとのべて、クリームまで使つて見た白粉もだめ。灰色のぶち〴〵になつた樣の見惡さつたらない――かうしては、何度鏡を投げ出したか知れません。さうしては淚を新しくしてゐます。

あゝ私は女性なることを忘れ得ないのです。

むしろ女性なる事も、生なる事も忘れてしまつたら――永久ならずとも――私の胸はどんなにすくでせう

美をそふるリボンがあつたつて、何になりませう。白粉があつたつて、何としませう。

目ざむる色のパラソル、柔らかい衣。私の身につけるには、餘りに刺激が多過ぎます。

靑く濁つた溝の上へ、日光をいとひ、人の目をさけて、恐しげに、おく病らしく咲いたをどりこ草の樣にしめつぽい、背景が私には一番ふさはしいと思ひます。

私はどうしても、外に出るのはいやです。なるべく暗い冷たい室內から出ぬ樣につとめてゐます。明けても暮れても此處許りは、刺激がないからなんです。

男女の差別なく、何をか印象を與へたい、と云ふのが若い人達の望みなんでせう。然し女性の誇りと云ふ

ものを持たぬ私は、出ると印象を與へる處か、まるで一人ぼつちにされた樣な、悲しいやるせない思ひがして頭はいつも、うつむき勝ちに、淋しい處を淋しい處をと思つて、小さくなつて行くのが私の癖なんです。朝夕通勤する翠綠の外には蓮華草の紅と、名も知らぬ小花の黃より外、目を刺激するものもない田道を行くさへ、さうなのです。自分ながら、どうしてから卑屈になつてしまつたのだらうとあやしみます。

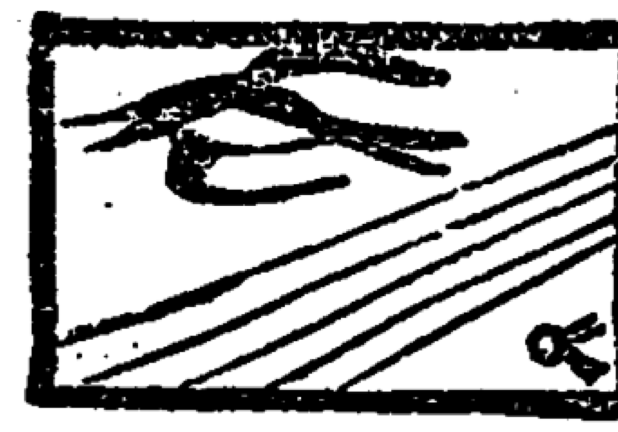
人みなの最も、おそれて居る誘惑なんか、そんな不安な事は夢に見度くともありません。醜女の幸福は之一つです。然し、男からでも、女からでも、こはらしいと、近づいてくれるものゝない身は、むしろ少女は少女らしく、誘惑に對する不安と言ふものを持つて見たい。とてんな無法な事も考へる事があります。

女は弱い。どうしても、強い異性の助けを借りなければならぬと言ふのは、百も知つて居ながらも、餘儀なく、獨身主義者にもならなければなりません。「心さへよければ」なんて言ふ人もありますが、何と言つても、女は美が生命なんですもの。そんな事を言ふのは醜女の負け惜みか、それをおだてた人達の言つたことですわ。あゝ美！美！美を女性の命と定め給ひし神樣よ。恨めしい。

何の慰藉も持たぬ私は、せめての慰みにもと、折々新刊雑誌を見ることがありましても、一頁二頁見る内には、若い華やかな誌上の人々のおもかげが浮んで、たまらなく氣がいら〳〵します。一人山奧に取り殘された樣な、悲しさも胸一ぱいになつて、無意義に、目許り誌上に走つて、何の事かちつとも分りません。

いぢけた身には、雑誌も慰めてくれません。

只つた一つ慰みと云ふのは、毎夜々々記す日記。之許りは、どんな事があつても、長々しく、思ふだけ、有つたけの事を時によると一夜かゝりで書くこともあります。文學書、是も好みますが、なるだけはしやいだ女性の舞臺をさけて、ぢみな暗いのを暗いのをと心がけて見てゐます。かうして私は、女性と云ふものから出來るだけ、遠ざからうとつとめます。



男子の手紙に迷ふ

紅緒美

世の中の事は何にも知らぬ私、況して男と云ふものは何んなものか解らぬ。只、男の爲に悲慘な際に遭つた話や、戀に誘惑されて失敗つた女の事を知つてゐるから、男とは變なもの用心すべきものと思つてゐた。併し私に一つの動搖がある、包まず告白します、それは十一月の或る日、次の手紙を受取つた。

富美子さん突飛なる事を申上げて如何に驚き遊ばす事かと此罪を神にわびて併はせて貴孃の御有情なる眞心に訴へて御愛察を仰ぐのでありますす

他でもありません妾はある場合に度々貴孃の御〇〇を拜した事のある者です貴孃も妾の拙容を見同せられた事はあると思ひます然すれど何たる事にや過ぎぬる頃より――の姿を夢み忘るゝ暇なく妾にして何と貴孃い近姿に間見ゆる事許せらるべき自ら制し自から叱せしが人間ほんぶの淺間しさに……

人間誰か愛なからん想思の情やなり孃よむなしく御憐みあらん事を御一紙跡ゝ待つ切に左樣なら（原文の儘）

私は其時一字一句注意してよまなかつたけども、

れは女の方ならば充分に生意氣な方、男かも知れぬ、男かも知れぬと思つたら空恐ろしい樣な氣がして、返事を止め樣と思つたけども、私に逢つたと書いてあると、萬一女の方だとすまぬ、解らない。どうすればよいだらうと、返事を書いたり、破つたりして居たが思ひきり一寸挨拶だけにして、末に何處で私を御覽になりましたと書いた、それは人違ひだと大變だからだけども、御返事下さいなんて書かなかつた。四日程はどうなつたか郵便と云ふ聲をきく度、いつになく胸をどらせたが其中に十二三日たつたので忘れて了つた。忘れた私の心はもう靜かであつた。が、又突然思ひ出されずには居れぬ樣になつた「過日は御怒りもてれなく血ある涙ある……なんど書き初めてある、血ある涙ある樣な字なんか一字も書かなかつた、私が家の前に立つて居た處を二度程見たとかいて、よけいな言葉がたくさんつかつてある。どうも男らしい、かうして女をだまさうとする男、女の衣を脫がせなければと云つて別に工夫もない、どうせ手紙なんて反古の書きやりだ誠のてもらないのは。……弱き子よ。私は其後一月程たつてからまた手紙をだして見たら、妾、妾とかいてある中に、唯一語小生と書いてあるのが目についた、

どうして見えなかつたか知ら、二度と讀みなほさなかつたかも知れぬ、たゞ苦笑するより仕樣がなかつた。

また手紙が來た、開封せずにと思つたが、見たい樣な氣もしたので見たら、

……古言に曰く鳥の將に死なんとするや其の鳴く聲や美くしと妾は孃に勇ましく懺悔して御情深き御同情を仰がんとする者に御座候、他ならず×子は妾の妹にして生は×子の兄にて御座候孃よ私兄弟は孃の如き立派なる

とて、まで讀んだ時は、頭がふらくとしてあやしく身體はふるへる、座つて居たでよかつたが、氣弱だつたら倒れたかも知れぬ。「孃よ、紅葉作の金色夜叉を御覽せしや、愛の爲に一生を誤るも、成功の旗



を立てるも、人の情の如何によるにあらずや、余が君を知るは○○にて御座候」なんて小説上にかいてある樣な手紙が來た。男だ、男だ、初めからどうもそうらしいと思つた。そしていまはしい初めから愛だの戀だのつて何處まで女をあやつらうとして居るのだらう、決して迷ふべきでない。何戀なんか戀とは假りの名だ、其中には或る欲があるだらう、戀なんか醒めれば苦い戀なんかする物じやない、詩の中にも、戀する勿れをとめ子よつてある

ましてこれなんか、人間の愛つてそんな安ぼけた物じやない、あんまり自惚がすぎる、女の價値を示さなく

ちや、花の樣に手折れば自分の物に自由になると思つて居るのか知ら、私に逢つた等とは噓かも知れぬ。戀の爲にある人が酷い目にあはれたのを知つて居る私は一時は倒れる樣に驚いて、顏の赤くなる長い手紙を讀む時、何だか字がしつかり目にはひらなんだ位、けども暫くすぎてからあゝはしたない、何が書いてあつても、私は、私は落ちついて居なくちやならぬと恥ぢた。あゝ私は知らず知らず交際したんだ、かうして知らず知らず戀に落ち入るじやないか、否、決して、私は決心を以て次の手紙を書いた。

御手紙拜見致し候、餘りの事に言葉も出でず驚き……殿御にて候へば御怒りとは存じ候へども、誠に御交際致しかね候故あしからずお思召下さるべく……

自分ながら變な云ひまはしのをかしな手紙だと思つたけども、こんな手紙生れて初めてだから其儘出す。其後は胸の中をひつかきまはされた樣に、靜かな海に俄かに白波高くなつた樣に、不安や、恐怖等いろ〳〵押しよせた。郵便配達が通る毎、あゝ家へこなければよいと思つたり、何でもよいが投りこんで行つて貰ひたい樣な、何だか靜止と奧に居られない樣な、あゝ冷靜冷靜で、向ふはだまさうとして居るのではないか、愚なる子よと自ら制して居た。其中に又手紙が來た。やつと封筒を見て居た、開け樣か、開けまいか、長い手紙らしい、どうした物か、此の前あれ程云つてやつたのに、折かへして又寄こすなんて酷い、私は封じめを人の手紙をこつそり讀む樣に、針でやう〳〵跡から〆てもよい樣に開けた。意味は昨日は上天氣にて友が二三人紅葉見に誘ひに來たけども、余の心として、そんな事はして居られないので止めた、午後郵便と云ふ聲は百雷の一時に落ちたかとも自分の形容に苦しむ、アゝ余の煩悶如何にすべき。そんな事を長たらしくかいて後、又、金色夜叉を引張りだして、藤村操まで書き立てゝ愛は神聖、愛は純潔ならざれば決して深きを得ずなどゝコムトの言葉まで並べて例の月並文句を書き終つて後、御寫眞を下さい、心を安める爲此儀百拜以つて熱望す、と五六尺細かい字で文はなか〳〵若い女を引きよせ樣と甘くかいてある、小説の中から引出してあるのかもしれぬ、讀み終つた時は冷やかの笑をした。

まあそれはいゝとして、きつぱり斷わつたにこんな手紙を出すなんて何うかして居るんぢやないか、いくら何だつて私は一度も逢つた事も、聞いた事もない方、

今は何をして居るのかも知らぬ人に戀だの失戀だのと言つて貰ふ筈はない、向ふから云ひだして、煩悶でも何でも勝手にするのだから、怒つたつて仕樣がない。誘惑に違ひない、こんな事云はれて別に嬉しくも、何ともない、餘り輕卒ぢやないかしら、男の威嚴が下つて了ふ、お氣の毒な事だ、餘程返事を止め樣としたがきつぱりとこれでお別れをねがひますと書いた。

十二月二日だつた、私の胸を打撃したのは。けれどどうして此の扉を開くものか、決して開かない、いくら何と云つても男女交際は好まぬ事である、初めから止め樣止め樣としてすきさへあればと思つて居たのに……。

其日だつた、文は例の如く長い手紙讀む中、幾度何故こんな手紙を讀まなければならないだらう、こんな手紙を何故胸とゞろかして持たなければならぬのか、なさけない。まだ見ぬ人のですもの、私は谷底の下へ落ちるんぢやないか、それなれば大變である、何とかしなければ。誰か私にかはつて、強く絶交致し候と書いて貰ひたいけども話すのも厭だ、態と落しておくのも、と考へながら讀む中に、バサリと小さい紙包が落ちた、不思議に思つてつと開いた、思はず顏をかくした、そつと後を振りかへつた。それは臺紙 はつてない寫眞が封入してあつたからで。

机の下へ手からすべつて落ちてんだのを、こちらの方からも一度そつと見た、あゝ此の人が眼鏡の人か、あんな事を書くのか、あゝ欲しくはない欲しはくない手紙さへ困つてるのに、寫眞を持つて居るのがはづかしい。

書きさうな人だ、それから幾度斷わつても自分ながら酷い事をと思つた事も書き送つた。

少し經つと結婚を申込んで來た。勿論直ぐ斷つて了つたけれども、一寸母樣にさう云つたら「血統さへ如何でも可ければいゝがね、けどもそんな事しては評判の純潔の家が濁つて了ふし、第一は親戚がいかぬ」と仰やつた。其後懲りずに二度も云つて來たけども斷つた。併し無情かも知れぬので蔭でお詫した。私に戀する人は憎くはない。なつかしいと思ふ時もある。

それから本人は今の仕事をもあかして來た、勤め先きをも書いて來た、繪はがきも呉れた。併し私は用心して一字一句も間違のないやうに返事をあげて、段々遠ざかつた、斯くて遂に路傍の人となるのであらう。私には何うしても男と云ふものが分らない。



更衣室

瑞野すゞ子

相州熱海、小園別莊内、内村曾代子樣參る。紅梅色の封筒を鮮かに流れゆく美しいお名お懷しい曾代子樣！と思ひつゝ書き了つて筆を投げる。

「私の腰帶どこへ行つたでせう？」

「どんなゝの？」

「薄紅色のですよ、先刻此所にあつたと思つたのに……あらつこんな所に迷ひ子になつてゐる！」

「あゝ其の白のお帶ようござんすこと、まあ羽二重かと思ひましたわ、絹ですの……。」

「エゝ木綿よ、皆樣、彼方へいらしつて頂だい、他人の更衣室へ無暗に侵入して、人權蹂躙に訴へますよ。」

「人權蹂躙の譯を願ひます。」

「私がそれを説明すべく試みるでありませう。」

「ホゝ……冗談ぢやない何んて五月蠅んでせう！」

「なんて滑稽なのでせう！」

「一寸、一寸須藤さん赤い縮緬の方を締めてお出で遊ばせよ、その博多ですとお年老してよ二十一位に……普通科の兄樣、けふは弟御さま……ね田岡さん？」

「噓よ、博多の方がお上品でいくら好いか知れないわよ。」

緋鹿子の
帶あげ高に
えりしろき
髱のながさよ
ほつれなき
鬢のまるさよ
あや銀杏……」

とでも云ひたいスタイルなら……ローマに緋鹿子、ボンネットに足駄も近代的でせうけれど。」

「荷風樣の『變遷』に興奮されたんぢやなくつて？」

唐紙一重隔てた隣室の樂屋は、今しも衣裳附の最中、これから三田劇場の檜舞臺へ！。

聞くともなく耳に入る雜言雜話、慶應の運動會も參りましたのね、今朝、食堂で、行子樣に、いらつしやらなくつて？と誘はれましたけれど、遂うく翅くる胸を抑へて瞑りました。

十四、十五、十六、指なきに堅くなつた中指の先を凝と見やる眼に知らず〳〵涙がにじむ。十七、十八……あゝもう折れない、五本の指を折り盡して暫く十九の指に惑ひました。これまで、お二人の消息は絶えず、晉代子さまから伺つてましたけれど、もう人見晉代子様は、内村晉代子様。黒髮に燃ゆる赤い手柄初々しい奥様ぶりも、一とせの半を過ぎましたの。お謡曲のお上手なハス様は、夕食後なぞよく御とう様とお得意の、羽衣や俊寛を遊ばすのですつて、舞もなか〳〵ですとか、能樂界に、斯界青年の錚錚たるものだなんて出ました時……さあ何時でしたか……晉代さまから御吹聽でございました。

大きなお茶と紙の問屋ですの。



簿記臺に腰かけて徒然のおん文もお認めあそばすし卓上電話でお友達や、お店内の方と歌舞伎へいらつしやるお召しの御相談を遊ばされる御身分でも、さうさうお生家へお出でなさる事も出來ませんでせう。

今は、波靜かなる熱海へおかあ様の御隨行で十日程の御逗留、め波、を波のうまき調べも鼓の音にかよふでせうのに……。

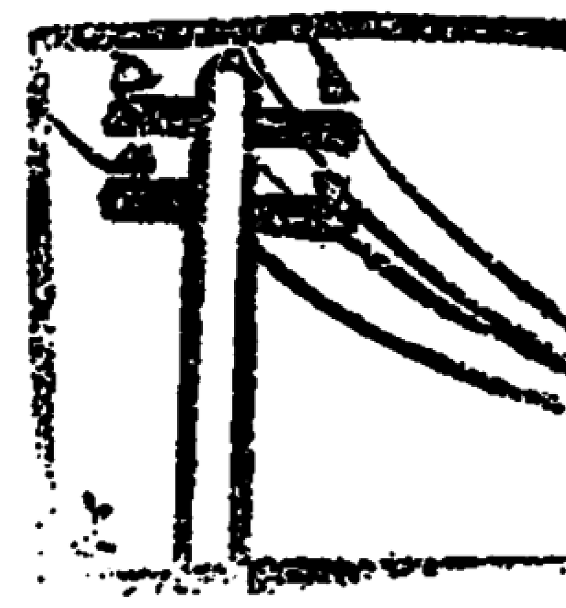
「行つて參ります、瑞野さん。」

松の葉を散らした唐紙は手掛けの所から音なく開かれて、見違へるまでに装ふた須藤さんは、しとやかに手をついて、

「お支度お出來遊ばして、では私、その邊までお供申しませう。」

衿を掻き合せて、帯留めを直しながら立ち上りまし

た、お曾代さまへの手紙を持つて。
六人は長い廊下を扉の外で。
「行つて參ります。」
「行つてらつしやい、お早くお歸りなさい。」
若い〇〇は褪せたやうな聲で、切つて放つやうに、命令だか、體裁だか、梯子段下り乍ら、
「浪さんぢやあるまいし。」
と、日本髪の行子樣はクス〳〵と笑ふ。
「すゞさん何故いらつしやらないの？」
五尺にあまる白い薄布を肩から胸から膝のあたりまで、纖細な田岡さんは眉を上げて仰有います。
「だつていつも千編一律、種子の異つた假裝舞踏でもあれば參りますわ、詰りませんもの。」
「でも……」
「まあいらしつて青い旗でもフレーつてお上げ遊ばせ選手の面々如何に意を強うすることでせう、ですけれど眼と眼が合つては電氣を發して頭痛を起しますから……行つてお出で遊ばせ、お氣をつけて。」
五人の君たちはいそ〳〵と洋傘たゝんで電車へ乘る初夏のまひる、牛込の高臺は綠にけむる。葉櫻を通してそよ吹く風は袂より肌へ生溫く泌む。ポストへ手紙を入れて素足の草履を耻らひつゝ、急いでいそいで歸りました。
倒れるやうに机にうつ伏せばせき上ぐる涙がホロホロと。あゝ母樣、燒かるゝ胸、苦しみ刺さるゝ心の痛手よ。
おふた方ともお達者でいらつしやいますか、すゞが居なくなりましてから、朝々のパンは誰がやくでせう夕べの粥は誰が煎るでせう。
おいたはしい母樣が……御酒に疲れた父樣の痩た面わがまざ〳〵と浮んで、ランプも暗い六疊の茶の間、火鉢によつて青白いかあさまの横顏……新しい涙は新しく湧く。
瓦斯にあかるい大通りの唐物屋や、小間物屋、呉服やなぞの窓飾りを母樣と一々立ち止まつて見て歩いた、四の日のお地藏樣の緣日には缺かさず參りました。今でもかあ樣はお獨りでいらつしやるでせう、きつと。歡樂に渦卷く美田山上の麓には、三越を見知らぬ淋しい二人が一枚の新聞に滿足してゐる。はゝ樣のおん身は忘れません、父さまだつて決してわすれませんわ御恩も……憎しみの……おん心も！



學生の都會

山百合

母様がお留守の一週間、疊數玄關まで入れて二十枚に足らぬ家ながら、主婦代り、大きな兄様の母様代りもあら何誰……素的なマダム振りさなんて有仰るのはこの頃は兄様とさへ云へばあやしまれるんですもの、失敬な、私と兄様、この蠻聲や眼元から齒ならび、がつしりしたスタイルまで、これ程似てるのがわからないでせうか。華奢だちな母様にはちつとも似てないで兄様が丸顔の恐ろしくお鼻の高い達磨様の樣な眉毛の横顔など見ると悲觀しちまふ。清子さんは武者繪のやうだつて云はれて、あきらめもしてる。

うちの兄様は今年法科を出るのです。今まで四年間一度も落第せずの延期なしでしたから、試驗期にやかましく我まゝ云はれる位は仕方がありませんけれど、それにしても五月に入つてからと云ふもの、お琴の袋にはちりがたまつたまゝ、英語のおさらひも許されず、ちつとも親子様と調子にのつて、あまり大きな聲で談笑してたら、雷様の落ちたやうにどなられた。お氣の毒でお友達に遊びにいらつしやいつて云ふ事も出來ません。

清は引ずつて歩くからつて臺所のスリッパさへ取り上げられて了ふし、御飯だつて試驗中は糊のやうなのを炊かせられるし、毎日圖書館へつめきる頃にはおべんたうのお世話ばかりもほんとに割のわるい役でした兄様は何故か母様よりも清々つて私にばかり何か有仰るのですもの。

けれどねえ、二時頃ふと眼が覺めてみるとまだ電燈があか〳〵と、さら〳〵とページくる音、走らすペンの響、私もう何だか泪がこぼれて了ひますのよ。エ、試驗前の一夜作りは日頃の不勉强を證明するものだつて？　それや酷よ、法科大學の制度がわるいのだわ。うちの兄様なんか凡人ですもの、大精力をもつてせねばオッつかない。やせました、神經が病的になるのも無

理はありません。
今朝は武樣がおより遊ばして二人でお出かけになつた、お靴のひもを結び直しながら武樣、
「成功を祈つて下さい」つてにつてり。
「エヽしつかりやつて頂戴ね。」
兄樣は無言、ひしやげた角帽の後姿。
マガレットに手ぬぐひかぶつた風つてないわ、緋のたすき十字にせつせとお掃除する。兄樣のお室にはうつかり足をふみ入れる事も出來ない、お火鉢などは火箸でゴス〳〵つきとほす樣な灰になつてるし、新聞だのマッチのからだの、引さいたノート、丸めた洋紙、敷島の吸ひがら、夏みかんの食べかけ。
そのくせ石膏の人形だの、一輪挿しだの、柱には紅葉の造り枝や、クリスマスカードや、ことに私の好きなのはスコットの水彩畫である。山紫に樹は青く、澄み渡るカトリン湖、かとりん海に櫂とりし、エレンの君がおもかげや……。
久しぶりで晴れたからいろ〳〵お洗たくする。シヤツだの襦袢だのぬれたのをつい抱へこんだまゝ竿をふいてたら淺黃襦子の帶がまつさをにくッついた。
右隣りの高山さんがインキを振り〳〵おかへりなさる、この方達は今日で試驗がおすみになるのださうな。
「おめでたう、高山さん。」と云つて上げたら、「清子さん人が惡いですな、僕アもうそんな事云はれると片つぱしからはり飛ばしてやりたい。」
眞紅なカーネーションが二十八咲いた。先日A樣のとこへ伺つて、お床の間にあつた二鉢の花をみんなむしつて了つたから、今度は何かいゝ花をもつて行つて上げやうと思つていろ〳〵フラワーランクユーチを調べてみたけれどどうも思はしいのがない。スヰートピー、心こまやかな快樂？パンジー——朝顏——河原撫子——みんな駄目ね。
「オイ、すぐ飯にしてくれ。」つて兄樣、投り出す樣にお靴をぬいで上つて來る。
午後から髮を洗ふ。青葉の風にかをるやぬれ髮。日盛りを三丁目まで買物に行つて來たら、くつぬぎに小ぎれいな靴が光つてゐる、はア小野さんだなと思ひながらお座敷へ行くと案の通り。
「いらつしやい。おめづらしいのね。」
「僕アもう清子さん他家の夫人かと思つてましたよ。」
「だつて貰手がないんですもの。」
玻璃皿にいちごを美しう盛つて出す、牛乳とお砂糖

私もそばでお相伴した。

小野さんはマーキュウリである、悲憤の涙をふるつて帽章をむしつた當年の面影今いづこ。たゞ一個瀟洒たる若紳士、うちの兄様なんかよりよつ程あかぬけて居る。

あすこのグラウンドには四つ葉のクローバアがたくさんあるとかきいたけれど、まさか取つて來て頂戴とたのまれもせず……「英語會にはお出になりませんでしたな」と云はれて、匙をふくんだまゝ

「でもあまり綺麗なお嬢さん方がいらつしやるさうですから私なんぞ」とやつてのけた。

兄様つてばワイフ問題について、

「イヤ、どうして僕なんか後がつかへて居るからね、まづ此方の先生のかたでもつけてから……」

笑ひ乍らヂロヽ私を御らんなさるにくらしさに、

「まあ、ていのいゝことを……ウソよ小野さん、來人がないのよ。」

「それやこんな小姑がゐるからさ。」

何處までお口のへらぬ兄様だらう、いくらでも云ひ返してやりたいけれど、お客様の前でけんくわも出來ぬからだまつて了ふ。

「それで清子さんのお目出度はいつですか。」

なんて小野さんまでお人のわるい。

「それがね、何しろ御本人御理想が高くつて……自分の御面相なんぞ棚へ上げて」

「ウソ、ウソ、ウソ、兄様、ひどいわ。」

たゞどうしても高等學校三年やつて來た人でなければつて云つたゞけで御座いますわ。洗濯屋が來た、兄様のワイシヤツと私のオレンジのじゆばんの袖を出してやる。夕飯のおかずはオムレツとそら豆のお汁、炭つぎそへて小さなお釜に御米をかける。小野さんは五時過ぎおかへりになつた。

とんぼの羽を切つてそつと制服の背中へ止らせて上げたら、「あ、君。」つて兄様つてば、つまんで取つてお上げになるのだもの。

これも日課の一つか兄様は夕方きつと電話で池田様とおはなしが始まる、おとなりの電話を借りて……。きいてると、

「大きい坊ちやんお在なすか。」

串談ぢやい、大きい坊ちやん、獨法三回の五尺五寸もある偉丈夫なのよ、乳母が呼ぶのをそのまゝに御友人間でニツクネーム代りにとほつて了たんですつて。

「モシ〳〵、あ、僕だ、君。今日はえらかつたよ、君だつて君。」

兄樣がやさしい聲でお話しなさる時には人なつゝこい調子でいらぬところにまで

「それで君、だからねえ君、困るんだよ君、いゝかい君。わかつたか君。」

自動電話だつたら料金で兄樣のお小使ひマイナスになつて了ふ。氣の引ける程の長話し。

御飯後散歩につて出かけてお了ひなさる、私ばかしつまらないわ、お隣りの百合子樣も湯上りに緋博多の帶美しく、お女中をつれて出ていらつしやる。夜店の植木が買ひに行きたい。あゝ母樣、早くかへつて頂戴な、さびしい、私。

こんな時高山さんへ行つてオルガンでもひきたいけれど……椽に立てば肩をおほひし黑髮や。

「あゝ大空に照る月の、かげに憧れて昔より、いくその人や逝りにけむ。あゝ海洋の底ふかく、沈める眞珠を探るべく、いくその舟や沈みけむ。花を浮べし川波に、映るをそれと掬べども、碎けて跡はなかりけり、道の光は淡くとも、無限を慕ふ人の子の胸にもやどれ空の月」

雨の音（散文詩）

輕い熱の引いたあと、疲れた心の上へ、しめ〳〵とさゝやく雨のあし音、強くなつたり、弱くなつたり、急いだり、立ち止つたり、つゆの雨の女のやうな感情的な心もち。

夜のしづけさ、雨のしめやかさ。

だるい心は、只、雨の音にすがつて、何か思つてゐる、とりとめもないこと、今の私から、かけはなれた遠いことを。

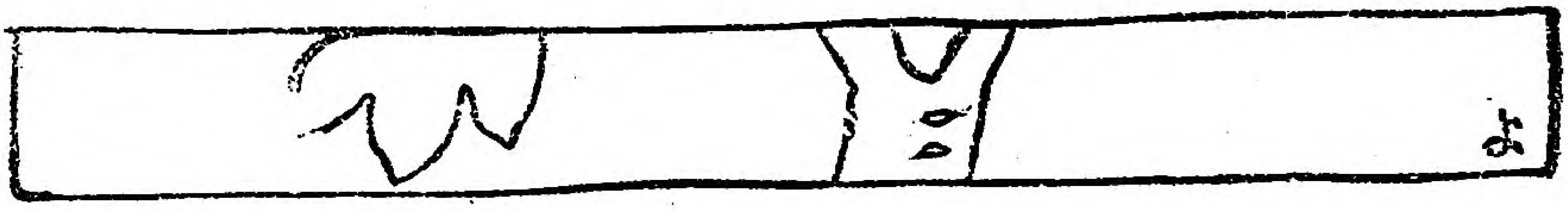
大きな雫の音、小さな雫の音、雨の音と、雫の音とは別々に聞える、雫の音だけかと思ふと、ほそ〴〵と雨も降つてゐる。

何故斯う疲れたらう、熱が來て、また熱が去つたからだ、疲れた時に、なげ出してゐる心のたわいもない夢のやうな働き。

それでも雨の音と、疲れた心とは、快く語り合つてゐる。

眠くもない、起きてゐたくもない、雨はいつまでも降つてゐてほしい、そのうちに私の心は何かの彈力にはねかへるであらう。

S　M



月見草

章子

戀人の貴き如く、
はて遠き月のへだたり。

夕されば、やはらかき、
星のうきいで、
雲やゝに動けり。

天ほのに明るみ來り、
地やゝに薄暮はおほふ。

其中に、黄なる花、唯二つ
今、眼覺めぬ、薄暮の下に、
さゝやきを靜にやめて、
天地の夢のせてあり。

赤き耀ひ、今
月は空に上らんとす。
聲もなく黒き鳥、
顫ひつゝ、沈默の
空かすめゆく。

憂愁の心みまもる、
力なきわが瞳、
黄なる月みぐさの
薄き花瓣を吸ふ。

疲れたる世は
闇に落ちゆく、
新しき花は
空しく漂ひてあり。

浴場



酔茗選

松の湯

本郷かね子

生れてから十三年育つた山の手の町の近くへ六年振り今日から亦住まふ事に成つた。

母様に抱かれて手遊のバケツに瀬戸物の鑑の子を入れて持つて行つた時分から、仲好しの千代ちやんと二人して、碌々洗ひもしないで、白粉ばかり矢鱈につけては歸つて來た頃迄の、永い間の想出の多いあゝ魚安の横丁の松の湯、ちと離れては居るが、久し振りであそこまで行つて見ようと思つて、春やには氣の毒だがすぐ傍のお湯屋の前を通り越して了つた。

夕暮の忙しげな町のあちこちには早や燈火が付き初めて、商店の商人は荷をといて居る。

覆ひ被ぶさるやうな低い軒の薄暗かつた呉服屋の店が、西洋造りになつて、キラ〲する程磨き立てた大きな硝子戸の中に、美しい人形が飾つてある。其の筋向ふの、店先きに、くずくきだの、奴元結だの、チンコロ掛などの入つた薄い箱の重ねて在つた、名高い小間物屋は、何時か土間をセメントで堅めた陳列建になつて恐ろしい程荒い歯の束髪櫛が眼に映る。

松の湯も變つて居た。スリ硝子の入口の戸を開けるとたんに、調子がはづれてピシヤアンと音を立てた。と「入らあつしやあい」といふ艶な聲、番臺の上のは「新造になつたら定めし」と其可愛らしさはあの頃から評判だつた此の家の一人娘のお喜美ちやんだ。何處やらに幼ない頃の面影は殘つて居るものゝ、てもまあ美しく成つた事。山の手とは云へ流石は渡世柄、今時には珍らしい緋鹿の子の結綿で、ほんとに野崎村のお染さんの樣だわ。天井の高い浴場には、大小幾箇かの花瓦斯輝く下に、各々鏡に向つて其の赤味をおびた美はしい肌を磨いて居る。赤銅のふちよりあふれ出づる許り滿したる湯ぶねにひたつて氣も心も暢び〲した時、ふと隅に入つて居る丸髷の人と顔見合せた「あらつ」「まあ――」「お貞ちやん――」「かねちやんでしたの……」

子オ買オ子買オや、芋蟲ころ〲の御煙草盆の友達が、今は紙屋の御内儀さんで小僧や番頭を十五六人も使つて居るとか、昨年嫁いだと云つたが御腹の邊が大きい樣だつた。「かねちやんあの人覺えてゝ、隨分變つたでしやう」と云はれるけれど思ひ出せない、「ほら横丁のハイカラさん、教師の娘の……居たでしやう……」分らない、分らない、まるで記憶に無いもの。

噂の主が湯ぶねに近づいて來た、小形な髷のあくまで意氣な人――、浴槽に入る一刹那！、あゝさうだつた、たしかにあの人だ。でも分らない筈だわ、ハイカラさんと云ふ仇名で通つて居た位の人が、此の意氣さですもの。然しどんなに風姿を變へても、月日が過ぎても、其の面影は消えぬ物だと泌み〲感じました。(入選)

評　變つた人は當年のハイカラさんのみならんや

三時頃

野の百合

這入らうか何うしやうと大分迷つたけれど、出て來た程のものと思ひきつて軒をくゞる。「入らつしやい」番臺の小意氣なお内儀さん、愛想よく笑顔を見せて、素早く足の先まで見る。

上り場からも流しからも、幾つもの目が集まつて來た、お風呂やへは餘り來つけないので、ほんとにきまりの惡いこと。

積み上げた籠の中から一つを取つて、羽織だけは解いたけれど、何うにもおもはゆくつて……一寸振りむいて見たら、まあ厭な、まだ皆が見つめて、中にはさゝやき合つてまで覗くやうにして居るんですもの……ほんとに思ひやりの無い、自分の覺えも有らうにと口惜しくもなつて來た。こちらからも見かへしてやり度いわと思つたけれど、意氣地はなく立つ湯氣に、消えも入り度い思して湯槽へすべり込んで仕舞つたあゝほつと息がつかれて……好い湯かげんの肌ざはりに、やつと氣も落付いて來た。まあ爽かなこと、これで一處に這入つてる人等が、こんなに荒波の岸邊を洗ふやうにさへして呉れなかつたら猶よいだらうのに。

あと足ではねかへして行くかと思へば、どぶりと桶をつつ込むし、私の右の二十歳あまりの

束髪の人、濃く塗つた白粉の頸すぢを、大事相にしめして居たのが、つつと上つた其拍子に側の二十四五な奥さんが抱いた二つばかりの赤さんの可愛いお口へがぶりと這入つて……アラーと私は思つたけれど、母様は幸ひに上り場の姿見に、形のよい髭を撫で上げてる、人に氣をとられてか些つとも御存知はない様子、可愛い赤ちやんお口びちや／＼してらつしやる。私つたら、赤さんに見惚れてこんなに上氣せてしまつた。隅の方へ小さく座つたけれど、まだ離れか見て居るやうな、何となく不安でしやうがない。

「マー奥さんで御座いますか些とも存じませんでして……其後は御無沙汰申上ました」私の前のお婆さん、知つた人を見つけて、板の間へべつたり、小笠原流にやり初めた。と思ふと「さー美いちやんさーお使ひなさいな！」なんて盛りきれさうなお湯桶を、三つもならべて、まるでお茶でもすゝめるやうにしてるおかみさんもある。

鏡面の肉體美に見入つて、醉ふたやうな青春の人もあれば、稍々褪せかけた花の色を惜しんで、白いものに憂き身をやつしてる美女もある。五つ位のお兒の厭がるのをすかし／＼洗はふとして居る母様、

「早くおし！」なぞと妹を叱りつけるお姉さんやさしく後へ廻つて「姑さまお脊を」といふ可愛いお嫁子もある。誰れも／＼美くしきが上にも美しかれと磨きそうて――。

マア私は人のことばつかり……まだ顔も洗はないで居るの……。

手早くミツワで濟しても一度這入る、少し熱かげんの我慢して居ると「ほんとにいゝお湯ですね！」と何處かのお婆さま話しかける。と釜場から

「男子一度志を立てゝ――鄕關を――出づ―」

番頭さんのとんきやうな聲で、詩吟が初まつた。おばあさんは微笑して私の顔を見る。わたしも堪えて居たところつひ誘はれてほゝ笑んだ、何んな志を抱いて居るかしらないけど、三助さんの口からではふさはないわ――と思つた。(入賞)

評　御本人は奥様か、娘か

男子恐縮

尾張　みどりば

宵の風呂屋と云ふものは騒しいものであります、殊に田舍の風呂てつたらそれは／＼きたないものです。まだ二三年前迄は、男風呂女風呂と名稱こそ區別がしてありましたが、仕切なぞも四分板の節穴だらけのものでした。けれ共田舍でも風紀上取締嚴重になりましたから、此頃では仕切なぞは固くしてありますが、夜などおそく行くと、隨分眼に餘る事もあります。なぜなれば私の土地は織布工場が多数ありまして、大方十時頃には終まひます、工場にある家もありますがまあ無い家が半分もありませう。又工女が皆土地の者ばかりですから、よく知合の者ばかりです、で女の入浴と云ふものは長いものですが、工女なぞは又別に長いものであります。又彼等に取つては終日の一大慰安であるからでせう。けれ共身體を洗ふと云ふのでもなし言葉なぞは男よりも惡いものです。そしてもし男湯の方で一口でも相手にならふものなら、そりや立つて居てもおられない様な事を言ふものです男がもしこんな事でも云ふと、吉原雀でも囀づる様に、よく男浴者と云ひ合ひをしてゐます。「ヤー別ぴんさんのお揃だな」と一口でも言はふものなら、女が揃つてゐると何がめづらしい、じろ／＼と眺めやがつて」なぞと男でも云ふ間敷言葉で然かも大聲で云ふのです。それで鏡の前へ行つては、裸體のまゝで白粉の相場のくるふ位迄厚く何んとも云様のない程塗つてはすまし込んで、それで行くかと思へば行きもせで男湯の方を覗く者もあります、私なぞも家の都合でおそく行くと工女達と一緒になります、で別に何共言ひはしませんけれ共、あつちでもこつちでもほそ／＼と内密話をしては私の顔を眺めますから、私なぞは、はづかしくつて身體も洗はず飛出して歸る事もよくあります。其他驚くことが澤山あります。

評　女が男湯を覗くといふだけでも驚くことは澤山です

湯の香

まつかせ

…ちりん…ちりん。「さあお孃様、めんめをあいてよう／＼御らん遊せ、いゝおもちやですことそんなお顔を遊ばさずに、今におぶに入れてさしあげますよ、さあ／＼お泣き遊さずに…」

まだろく／＼に視力もつかぬちい坊に松やはしきりとおもちやをふつてあやなしてる様子。私は

そこ／\に身體を洗つて「松やつれてきておくれ」。「さあ／\お母ちやまがおめしです、おすきなおぶに入りませうね」。白い一番のタオルに包まれて、ちい坊は生れて五十日の櫻色の顏。ぱつちり開いためんめから涙を一雫流して抱かれてきた。「おゝいゝ子、いゝ子」漸く二十年の母ちやまはおつかない手つきでうけとる、タオルをしめしてやつてぴつたり胸にくつつけてそうつと入れる。入浴のすきなちづ子は大きいめんめをぱち／\いぱせながら、ガラス窓からもれる明るい光をじつとみつめて居る。羽二重の樣なやはらかいそして美しい其肌はたん紅色をまして來る。

「さあでんでして洗ひませうね」兩手の自由に動くのを恐怖がるみどり兒は、また、をとめの樣な不安をもつてる此母ちやんのお乳のあたりにしつかりつかまつた。「おゝこはくない、こはくない」弱者に對する時の心のはりで、私はしつかり抱いて湯ぶねを出た。白いうき石鹸の泡をからだ中にぶく／\ぬられてちづ子はころころ肥つた兩足をかはるかはるうごかしては私の顏をみてる。

其二重まぶちの大きい目、ぱつちり肉づいた頰のあたり、肌あひから母ちやまにそつくりと人はいふ。

此赤いやはらかなうぶ毛がやがて丈なすみどりの髮となり此のもみぢの樣な指先が白く長くのび、瞳にうるみもつ十幾年かの後に、やはらかに、感じのする此ゆぶねにつかつて、さしもるゝ日の光に、何をうつとりもの思ふのであらう、此の兒は——。

たちのぼる湯氣の香と、みどり兒の乳香と…私はうつとり幼き昔のにしき繪をくりかへす心地になつた。

評　洗ふことを忘れて

湯のいろ／\

清國　やねのくさ

▲或る大きな旅館の浴場の衛生的設備の完全なにはうれしく心地よく思はず長湯した事。

▲新らしき湯桶の木の香をなつかしみ、ねむけのさした事。

▲ぬるくつて、寒くつて、全身鳥肌と成つたのが、きれいな湯をすかして、あからさまに見えた時の身ぶるひ。

▲浴湯で女の醉ぱらひが、あたりはゞからず、自分天下に大聲で話しするにくらしさに、顏も洗はないでとび上つた事。

▲泣き叫ぶ產兒を一人板の間にねかして、母親は姿見の前で手拭を腰に卷き、ゆう／\と化粧して居た新妻に腹が立つた事。

▲洋館の風呂に入り、知らずにドアをしめ切りて瓦斯の爲にとぢこめられ、人事不省と成つた事のくるしさ。

▲船中の浴室もきたいだが、あつ／\する時に機械の音のやかましく、お腹ににえこむやうで頭痛がするには閉口。

▲廣からず、せまからず、飾りはなくとも、鏡はなくとも、飾氣はなくとも、掃除の行屆いた天井のある、たゝき土の我生家の浴場が、一番なつかしい。

評　支那の風呂屋の溷れたるは奈何

鏡影

草の門

魂はぬけ去つたやうに、うつとりとして、光を見守つた。

湯げは上へ／\とあがつて瓦斯の光を包んでゐる。

ひよと孤立のすがたの蒼いおぼろのひかりは遠い遠い世の果てにあるやうに思つた。

あかず／\眺めてゐた私は湯槽に半身をひたしたまゝであつた。

友と會釋をかはして、ふと、おもてをあげたとき、わが半身は鏡の中に浮いてゐた。——胸はどよめいて——あたりの人をみかへしたまゝほゝゑんだ、なんとはなしに——。

たえず動かす友の指先を見守つた。肉ゆたかなる、ましろき乳、充血した若き頰、動くたび若い女の香は、こぼれちる。

大姿見の中に顯はれたるいくたりの女性、友は輕い微笑の眉をむけてわが咽喉の刀痕をとがめた。

いたましき刀痕よ。苦しき思ひよ。いまさらにわが幼き日の生存に惱みしあとの、あり／\と殘されて、顯はれてくる。わが思ひよ。

見られまいとして固くかき合せたわが衿を冷酷な人に囚へられて見顯された樣におびえた。

美も醜も、忌憚なくうつし去る大鏡よ。私ばかりじやない、世事百態、さま／\の女のかげをやどし去る。

かをり高き石鹼の香、白きをきそふ白粉の香、われをとらじと、香のみたかくたちまよふ。化粧のできた友はふりむいて、「どう」と尋ねた。眉はいまさらに、美しう飾られる。紅の唇。友にうながされて、薄くはいた、白粉は、夜目には白く目にたつやうに思つた。

評　刀痕が氣になる

お寺の湯

岐阜　葛の葉

禪宗の大本山たる妙心寺へ、櫻の花がらんまんと咲く頃・宗祖に大師號が下つたといふので日本國中からそれは〳〵色々の人がよつて參りました。

何しろ百八十人と云ふ諸國からの集りで・朝夕に勝手につめきりと云ふので、その入浴が仲仲をかしいぢやありませんか。今日は男の日、毎日朝今日は女の日と隔日に定められまして、毎日朝八時頃から晩の四五時頃迄、どん〳〵お湯が沸きゝり、その賑はしい事つたら大したもので御座いました。

女の日だといふのに入つてみますれば、まがふかたなき男の聲が湯氣に震へて聞えて來るぢやありませんか、そりやかしましい女の聲がお國訛りをさらけ出しあつてざわ〴〵がや〳〵いふにはいひますけれど、夢ならずやと私は身振ひ致しました。けれども下足預つて頂いた人にもすまぬ樣で、直ぐにきびすもかへし得なく・濛々たる中を湯船のあたりへまゐりました。

勿論てゝへ來る人達はお年寄が多いからとの

仕組でゝもありましたらうが、年若い處女の身たる私には實に堪へ切れませんでした。未來の大僧正たらんずる學生さんが、猿股一貫で七八人も居るのですもの、お婆さん湯をくみませうか、お貴婆肩もんで上げる、按摩さんそこのけの手つきで、いえもう私なら澤山ですつて逃げ出しました。

評　捉ふべきものがあつたらうに惜しいことだ

肉體美

百合香

湯道具を小さい手籠にまとめて、錢湯の客となつた。する〳〵と衣をぬぐ。たちこめたる湯の香、懐かしと思ふまもなく、またゝくまに全身を包む。

明日は端午の節句、淸く澄む浴槽に入り、浮きつ漂ふ菖蒲を、手ですいて幾度か其香をためした。別に何といふ譯なしに、かうするのが好きで、毎年のくせ。

東の窓うつ風、強くゆらるゝ木々の若葉。窓の向側の家の、眞鯉緋鯉は五月の風を孕んで、勢よく中空をおよぐ。

巧みに光線とつた、浴湯内は、自分の使ふ湯音のみあたりにひゞく、靜まりたる正午。

大鏡　前に座を占めた。肉體美、肉體美、切に願ふ私には懐かしく、美しい響ある名だけれど、此頃少しそげた肩のあたり、あゝ、私には遂に得られないのか、と思はずホロリとした。

よく寫眞に見る泰西の裸體美人、涼やかな星とも輝く瞳。豐かな肉附、ふくよかな乳房、白き肌、遺憾なく表はせる曲線美、備はれる肉體美、あれを衣に包むは惜しい。など、獨り思ひふけるうちに、裸體美に近き若人、通過した人骨のみと思はれる老人も打つれておひ〳〵にこむらしい。

新參の三助の流し心地もあるく。湯上りの化粧のあまりに似あはぬ、私は、申譯ばかりうすくはいて上つた。

大姿見に映る裸體の我姿。肩のあたりすうと撫でて見ると、なめらかな肌に溫い血汐は、忙しくめぐつて居る。おゝやは肌のぬくみ。此時「やは肌の熱き血汐にふれもせで、」ふと思ひ浮べてほゝ笑んだ。私の顔は上氣した樣、あかく榮えて居た。

我は處女よ、神の前に耻づることなき、無垢の此身。誰かは許すべき、秘めたる胸の鍵、あだし男には、指をふれさせまじ。年齢若く、思慮なく再び得られぬ處女の純潔と、自由とを、一夜にして捨て、今夫に捨られ樣として猶夢さめぬ友の上、うく〴〵あはれまれて。

荒い、納戸地矢がすり、銘仙の着心地もよく、キチンと結ぶクリームの帶、振りをこぼるゝ紅の花、淡く漂ふ御園の香、清楚たる浴後の我姿此時は若い我であつた。

評　淋しからずや道を說く君

湯屋は朝の間が快し、我家の湯殿は夜に入りて浴するが娛し、溫泉は曉なるべし、また夜更けてなるべし、旅の旅籠も日暮れぬばかりに入浴するが好き心地なり。（M）

初夏の人々

夢殿守

今日てそは何か書かうと思ひながら歸つて來た。十二日から梅雨だと言ふ、雨はじみ〲と降つては止み降つては止み、月始めから續いて居る。

四丁目の門の紙屋で原稿紙を買つて家へ歸つたのは五時に近かつた。机の前に先づ座つて御飯でも喰べてからに仕やうと、一寸本箱から一番綺麗な邪宗門を取つてハラ〱とページを繰つて見たが讀む氣がしないので、其まゝ閉ぢて了つた。廢園、夜の舞踏、春泥集と手あたり次第に取り出して、ハラ〱とページを繰つて見るが、どうしても讀む氣がしない、只横に成つて了ひたい樣な心地に成つて、頭ががん〲と騷ぐ。「○○さん、今日は割合にお早いお歸りでしたね」と叔母さんは、愛想を言つて、お膳を置いて行つた。忙しく御飯を了つて、机に向ふと何と無く頭が茫然と成つて了つた。纏まつた事が考へられない、筆を執つても書く事はなかつた。

何の爲に今日私はＨさんの方を斷つて迄も、忙しさうに歸つて來たんだらう、何の爲に私はあんなに急いで御飯を喰べたんだらう。と思へば思ふ程ぢつとしては居られない、何か書かうと氣を張れば張る程、感情は甘やかされて育つた子の棒の樣に、強情を張り通す如く、一寸の、ゆるぎもせずに固く成つて了つた。

やけに右手の障子を開けると外は室の内よりやゝ透明な夕暮近い空氣が、ひそかに流れて居て、そこに赤煉瓦の土塀が横はつて居る。—何んとも彼とも名狀しがたい心持ちに成つて、其まゝ其所に腰をかけて了つ

た。本箱の本の金文字も、もう見飽きたものばかり、其側に積んで有る雑誌も、何の爲に殘されて有るのか、何處からも今の心に何か言ひかけてくれる樣な物は無く、埃つぽい感じのみを與へるに過ぎなかつた。

机の上に少しまがつて置いて有る墨の、まがつて磨りへらされて有る硯箱、二三枚、ちらばつて居る原稿紙、其片隅に火の無い五分心のランプが置かれて有る……そこらが漸く薄暗く成つて來たのに、氣が付いて、せめてランプでも點けやうと、何か心のやり場を見つけた樣に、机の下からマッチを出してシュッ！と擦ると、弱い火がユラ〱と燃え上る其薄光に鼻から瞳のほとりをぼぼつと射さゝれながらそつとランプの心に移すと、急いでホヤを被せて了つた。夜らしい灯火は三疊の部屋に薄ぼんやりと光を流した。之でもうする事が無くなつたと思ふと、又ぼんやりと成つて來る塀の外の急がしい夕の人の足音を聞いて居るのが苦痛に成つて來たので、又障子を閉て了



つた。
ふと本箱の上の鏡が目に這入つた。鏡の面は拭つた樣に澄んで居た、そつとのぞくと自分の顏をいつ迄も引止める、とう〱其まゝ机の前に持つて來て、ランプの灯に近づいて、ぢつと其中をのぞき込んだ。……目のふちがやゝ凹んだのが殊に目にたつ、頰の色もよくない、恁うして顏を見つめて居ると、深く〱心が内に沈んで行く。……もう自分は二十二である、かうして毎日々々目のふちを凹ませてまで、あくせくと、何をして居るんだらう＝東京へ出さへすれば何がな出來る樣な氣がして、自分と言ふものをよくも知らずに理屈のみを追つて走つて來た大膽さ。一年有餘の都會生活に、自分ははたして何を得たんだらう。理屈は一年前も後の今も異はない。働きさへすれば喰べるだけの事は或は出來やう、けれど勉强したつて、もう昔の樣においそれと憶えて行く事の出來ない程、自分の頭は散漫に成つた。そして頭腦をからされてゆく複雜な一日〱のライフから得る其勞れ、之等のものと戰つて行くべく、餘り自分は弱い女で有つた。理屈にあてはまつて行くべく、餘り私は力の足らぬ女で有つた。此事實、あゝ此事實が、明かに胸に浮んだ時、顏は只蒼ざめて限りも知らず沈んでゆく。

山の彼方の空遠く
幸住むと人の言ふ
噫われ人と尋めゆきて
涙さしぐみ歸り來ぬ
山の彼方になほ遠く
幸住むと人の言ふ。

ぢつと片肱を机に持たせて、鏡の我れのあはれに見入つて居るうちに、其昔憶えたブッセーの詩が、しみじみと胸に湧き上つて來た。
K樣も結婚する、H樣も結婚する、私もする。……かう心が定つてから三人の往復は漸く繁く成つた。かうして一時大きく小さく、同じ頃に名を並べた三人が曲り形にも家庭に這入つて了つて、これで我々の時代は一形付くのだ。此度はK樣が出京して其後にどれだけの人が續いて、何時どういふ形で片付いて行くのだらうか……。二十二までの一人の生活、私はそれを後悔して嫁くのではない、山の彼方のなほ遠くに、或る幸もやと迷つて行くのである＝まあ此人は何時迄迷つて居るんでせう！と聞く人あらば、私は死ぬまで―と答へませう。あゝ思へば束の間でも心の安住の地は

無いものだらうか─猫一匹ふえてさへ一日の生活はやや複雑に成つて來る、まして家庭と言ふものには、今迄に絶えて知らざる羈絆が有らう、思ひ煩らひが湧いて來やう、知らず〳〵にはまつて行く罠に身動きの取れぬ樣に成つて、行き窮めた處に、自分てふもの丶眞の姿が現れやう。それはどんな眞率で、而してどんなにみぢめで有らうぞ─。一は終ひに一なり、一を九十九倍したものは、九十九なれど二を九十九倍ずれば百九十八と言ふ數に成る。獨身と夫婦とは全然基礎が異つて居る、獨身の涙、獨身の思ひ、之等の物を凡て葬つて基礎から異つた新らしい世界へ這入つて行くのが、結婚で有るらしい。たいて虫の生活と、蜻蛉の生活とは全然異ふ。あゝ新らしく、いま一度生まるべき世界、結婚よ、家庭よ、そこに私は倒れたら、それは我てふなく、凡てが粉と散つて跡も止めない、滅びの滅びで、今は最後の試驗臺に刻一刻と近づきつゝある此胸よ何故に恐怖に慄かざる、此心よ何故に一秒の時の針を聞きもらすや、あはれ最後の試驗臺、それは強烈な匂ひ、濃厚な色、凡て南歐の日の下に咲く花に、草木に飾られたるミューズの神の、御園ならではと描き望んで來た二十年の夢、跡なく消えた夢の後には、只此世に見る墓の影のみ、之が私の最後の戰ひの場所で有つたのだ。何んと言ふ平凡な自分で有つたらう。何故もつと〳〵……と迫つて來る執着……。然し自然の成り行きに僞てふ事はなからう、成る樣に成つて行く、運命は人の自由、しかく華やかな試驗臺も得れば得らこつゝ人間の自由を我物に捕ふべく、私は餘り力が足らなかつた、弱い女で有つたのだ。物恨まぬ我が恨みは、淋しき墓に落ちてゆく自由を使はふとして、却つて自由に使はれたる人は、其人の行く道が其人に最も正直な道で有つた。ポロ〳〵と淋しい涙が鏡の上にこぼれた。

　及びなき淋しさなりや凡人の
　一人なりけり此目さめどき。

手早く手帖に書き取つて、其まゝ床をしいて、ランプを吹き消すと、目を閉ぢて了つた。

強い輝き、六月の朝日が締た戸のすき間から、枕元に置かれて有る、三通のハガキを白く射て居た。

○○樣私はいよ〳〵昨夕上京りました、今日は○○先生の御宅に居ります、私は戰つて見ます、凡べてと＝K子

* * *

いま一通

ウーセタル樣には來る九日午後横濱へ御入港の由本日電報がまゐりましたから取り急ぎ御通知申上ます

* * *

一人は新らしく藝術に生きた爲、一人は神の道を述べ傳へん爲、白き薄き衣をかへして、山を越え、海を渡り、はる〲來る初夏の都＝强き六月の光線よ、誰が爲に輝き、誰が爲に濃き陰は作る、光に行き、陰に隱るゝ、人間に與へられたる苦しき賜、限りなき自由よ、我がかすれゆく小さき心よ—私はぢつと目を閉ぢた。

嗟嘆

靜かなるわが妹、君見れば想すゞろぐ。
朽葉色に晩秋の夢深き君が額に、
天人の瞳なす空氣の君がまなこに、
憧るゝわが胸は、苔古りし花苑の奧、
淡白き吹上の水のごと、空へ走りぬ。

その空は時雨月、淸らなる色に曇りて、
時節のきはみなき鬱憂は池に映らひ
落葉の薄黃なる憂悶を風の散らせば、
いざよひの池水に、いと冷き綾は亂れて、
なが〳〵し梔子の光さす入日たゆたふ

—マラルメ—

覺め際の淋しみ

夕やみ

記憶よ、追憶よ、お前許は我美しき不變の友である。自分は現在の出來事に深くよろこび、うれしがる事の出來ぬ質である。直感的に此頃の初夏の白雲を見てよりも、秋の野菊の哀れな頃、あの强い初夏の雲！若葉の匂！などゝ過去を追想してうつとりとする事が自分にとつてはより多く感じ、かつすきなのである。記憶追想といふ物がなかつたら、私は淋しさに生きて居られぬ位である。で、つまらぬと思ふ現在も、又來年の今頃にはなつかしい追想となつて自分を慰めるかも知れない。私は此頃の覺め際の淋しみといふ樣な心をかきとめておきたいと思ふ。

* * * *

私は此頃、メランコリーな、其くせ表面はよく語りはしやいでますけど……。何といつていゝか、淋しい樣な口惜しい樣な、つまらぬ樣な、なさけない氣もちになつてしかたがありません。あきたらない！あきたらない！充實しない。然し、是が當然來るべき第二の何とかともいひませうか、覺めゆく曉に夜半の美しい夢の香を追ふてとりすがつて、抑へ樣〳〵としてもます〳〵覺めてゆく。丁度そんなふうに私は此頃新婚の樂しい夢の頃をおもうて、うすれ〳〵ゆく今日の淋しさを、しみ〴〵味つてます。世間の人は子といふものが出來れば夫婦の情合はます〳〵深くなる……と申しますが、私にはさうは思へません、それはある繫累によつて離れがたい運命とはなるでせうけど、其愛といふものは、だん〳〵にうばゝれてゆくものと存じます。左と右とに其心は離れてもきづなをもつて外面からしつかりとつながれて身うごきもならないのでせうよ。現に其當時は毎朝の出勤にもキスをして涙ぐんで後み送つたものが握手となり、それが單に『行つてらつしやいまし』となり現在では、兒にかまけて見送りもせず、たまに獨りで、玄關迄出てもたゞ頭をさげたつきり……。然し世間一般の人の妻たる方は、それが當然

の事と氣にもかけないのでせうけど、何事にも思ひすぎる私には、ぢつと考へずには居れませんもの、人の母となつてまだ二ヶ月ともたちません

＊　＊　＊　＊

「此兒と私と僞らずにどちらが可愛いと思召す」と戯談の樣に申ますと「そりや此兒の方が可愛いさ」と、誰しも。自分だつてもさう思ふ。が、何となく私は淋しいおもしろくない感じがしました。もう夫にも離れるのだ……。「獨りで生れたから獨りでかへる」といふ事は何といふ眞なる言葉でせう。何物もなく獨で生れ出でたものが、初め母の胸に生き、眼を開いて戀人の胸に生き、良人に生き、さては子に生き、はじめ母の胸をさり、戀にさめ夫にはなれ、子にさられて遂に獨り逝くべき命でございました。

衆人、さうなのでせうけど、それは餘りに普通の事なので、他の人は考へ樣ともしないのでせうか。あゝ此兒、我身の骨をくだき、肉をそいで育てゝも此兒もやがて……と思ふとなさけない氣がします。そんな事悟らぬ、我々の祖母や、其母などは幸福な、そして何といふ貴い心なのでせう。

＊　＊　＊　＊

早く開いた花は早く散る、これはあたりまへの事なのです。早く戀を知り、早く人の妻となり若くして人の母となつた自分は、未だ廿年に充たず、美しいこまやかな夫婦の情合にも覺めてゆくのは當然かも知りませんけど、それでも鏡にうつる我おもかげのあまりに若々しいのをみては、まだ華やかな憧憬に執着が殘つてやみません。處女の夢を葬る事の餘りに早かつた！こんな悔が何彼につけ一人の母となつた現在でも胸をさわがせてなりません。兒に對する愛は一點の利己心もなく實に美しいものですけど、妻に對する夫の愛はそれは新婚の間は無我夢中の、彼我のない愛でせうけど、やがては妻といふものはある需用から、いろ〳〵の家政の事や兒のおもり、さては自己の慾望の犧牲たるにすぎないでせう。それで哀れなる妻は新婚當時や娘時代の樣に、髮にも姿にも目をかけて居られぬ。鏡

にうつる己が姿は日に〳〵衰へて來る、夫の愛は次第にうすれゆく樣に思はれる――此時の弱い女のこゝろはどんなでせう。いたづらに女王の冠でも頂いた樣に我儘、放縱な處女の頃を追想しては、如何ずる事も出來ず、現在を泣くより他はないのでせう。

《女の美しき衣をまとひ玉を欲りするをとがめずに下さい。せめては其身をかざつてやう〳〵に慰める人もあるでせうに―。哀れな者を滿足せしむる、さゝいの事をおみのがし遊せ。》

男はかゝる時、あだなる美しき花をながめて一夕の歡樂を得る事も出來ませう。女は如何しませう、然も覺めかゝれる現代の女には、たゞ今迄の人妻の樣に其樣な事にも何の不安もなく、盲目的に夫の胸に起き伏しする事は出來ないのです。絕對的に如何な場合にも夫をたよりなつかしみ、服從するといふ事は、とても現代の女には出來ない事と信じます。さらばとて逃れ出づべき道はどこにもありませぬ。

＊　＊　＊　＊

必ず來るべき事であつて、逃れる道はない―あゝ女といふものは一個の哀れなる犧牲にすぎませぬ。其犧牲に衆の人は滿足しつゝゆくのに(?)私ばかり、そてにうたがひを起し淋しさを感ずるのは、何といふ不幸な事でせう。私は永劫不變の何か或物を胸にをさめたいと思ひます、獨りゆくにはあまりに弱い我が性、矢張私は神樣の敎か、佛樣の法を信じて此世をゆきあの世にゆきたいとは存じますが、それずら疑惑の雲の多い此胸には信ずる事が出來ませぬ。戀にさめ、詩に覺め、あらゆるものに覺めはてゝ、あとには何が殘りませう。

《ふうぎやー、ふうぎやー。みい坊が泣く、抱きあげて乳房もふくませ乍ら、目のあたり、眉あのたり自分にそつくらな其無心の顏をみては、暫時あらゆる事を忘れはてました―。》

かうして〳〵知らぬ間に日がたつのでせうけど、さて一番の最後はどうなるのでせう……。

繪筆

ひなげし

四つの時に書いたといふ鬢も、髱も、前髪も、別々のお團子をつけた樣な西洋紙の畫が、まだ大切に父の文庫の底に納められてある、幼い日の名畫でした。私の目的は、すでに、その時から定められてあつた。

私は父が五十二の今日迄、一度も酒といふものを口にしなかつた、といふ事を母から聞いてゐる、母が美しく着飾つて、物見遊山に出かけた、といふ樣な事は父から聞いたためしもなかつた。

父も母もきはめて、眞面目な家庭を作つて來られたといふ事は子として心の奥から感謝せねばならないのです。「私達の快樂といへば、たゞ五人の子のうち誰か家名を上げる事と、この古い名家の血統を絶やさせぬといふ事だけ」とよく、少さい時から語られた、名家！私は實にこの一語にすべて不平の影を消してゐた。富んではゐないけれど、武士的な莊嚴な一種の家風を友の間にも誇としてゐました。

私はその中で、もつとも父母に滿足を與へるべくよい目的を選んだのです、五人の兄弟は各々その得意に任せて、各々にその目的を定めた。

めづらしい揃つたお子さん達だと、學校の父兄の間にもてはやされた、と母はよく嬉しさうに語るのです。けれどもそれは本當に私達には苦しいのです、殊に自分――あゝ私は私の目的上あまりに多くの望をかけられてゐやしないかと思ふ、目をつぶると、年老いたる二人の親が絶望の聲をはなつて、嘆いてる不吉な、不吉な未來があり〳〵と浮んで來る、私は自分の價値といふ樣な事を時々考へて見ます。

思ふて見ても下さい、私はまだ十八たらずの少女です、かよわい女です、かうして毎日ぐづ〳〵してるのを、父は不安らしく勉强せよといふ、母は如何にも望ない子、といふ樣な事を時々漏らす。この三月學校を卒業して以來、まだおたのみする師とてもなく、見るもの聞くものみな畫の今、ひそかに悶えてる、弱い子を、誰も、だれも知つて呉れないのでしようか。たゞ書いてさへ居れば腕は下らぬと、かつて私の先生は言れた、さうしても見ましたけれど、枝の一ふり書くのさへ、先生に御相談してた頃を思ふと、心細い、賴り

ない感に襲はれて、まつたく、早くどうかしなければならない、と思ひます。どうか早く、早くいゝ師の門に入つてとは、寢ても覺めても忘れられない苦しみ、母は申します、お前がこの方、といふ先生を選んだら人の紹介なんか待たず直接行つて熱心に願つて見よ、その熱心に感じてきつと弟子にして下さる。とあゝ母樣御尤です、私もそれはようく知つてますけれど、今の世の人ですもの、蚊に責められて、三日も四日も未知の先生の御門に立つてゐたら、人は氣狂といふかも知れない、藤樹の樣な先生、蕃山の樣な弟子も到底今の世は……金錢本位のけがらはしい世は……私は尚も悶え泣く。女學校を無事に卒業しました、といつて、人が來て、甲の庭から乙の庭へ植かへて呉れるのを、紅、お白粉美しう膝に手を束ねて待つてゐられる大方の乙女に私はあはれみの眼を送る。貴女方は何々夫人といふ名が、それ程有難いの、臺所の守がどれ程尊いの、私は何も生意氣に獨身説を稱へたり、女の本分を忘れたりする樣な阿婆摺れではないつもりだけれど、何百年來の因襲に甘んじてる世の女の方々に何か言はねば氣がすまない、自覺せる女とはどんなものだかも知らないけれど、私はこの言葉の、意味深長なのを知る。私は自ら自らの道を開かねばならないのです。

あゝ！けれども――再び思ふて見て下さい。光はたゞ一つですよ、それを求めて集まる人は果して幾萬人あるでしよう。森は遠い、光はまだ淡い、何百里、何千里、行けども、行けども、行けども。達し得る日！足の屈強な男子もゐます、年長けて、考深く、方法によつて進む、女もあります、强者！强者！數多の强者は一散に、森を目掛けて走つて行く。茅やいばらやのはてしも知れぬ道なき道を、道のあちこちには累々たる敗殘の骸が横たはつてる、上を飛び越え踏み越え阿修羅の樣に走つて行く――淺ましい姿、あの中に私も加はりました！しかしまだ十里をだに進み得ない、いばらの道にも踏み込めない、しかし早くも道に斃れ樣としてゐる、あゝ意氣地なし！馬鹿！白痴！展覽會の青竹の柵にぐつたり寄りかゝつて、人業でない程巧妙な先輩の作に同情の瞳をうるませる時、冷酷な世の人の批評を思ひ出して、實に人の上ではないと泣く、幸あるべくして幸なき身よ、私は自分の爲に泣かねばなるまい。

* * * * * * * * *



一人子の運命

よし子

御評拝見いたしました。私はたとへ怒をふくみませうとて、それをあから様に申上かねる運命にある事を深く嘆き又悲みます。

　詩人にてましますと聞しがゆゑに、御足の立ざる方と聞しがゆゑに、いたく幼き情を動して、み名を思ひてはよく泣ました、三年前の唯純なりしパッションも今はめちやくちやに、思ふ事多き處女となりました。親く師とおよびまをして、直にお手紙をいたゞく事もさし上る事も出來るやうになりましてから、君の御苦痛も、私の思つて居たやうな、そんなやさしいものではなかつた事も知りました。師は如何に冷笑あそばさうとて、私は冷ぬ涙を持て居ります。

　自分はすでに甚深なる歎きを見て居ると仰しやる師には、口實とよりほかに、氣まぐれとよりほかに、思ひ遊さぬでせうけれど、女の覺醒と自覺が氣まぐれである事は到底爭はれないと仰しやつたのが、あまりにくちをしいのですけど、それを今どうする事も出來ない運命にあぎとひせる苦痛を、現在の苦痛を嘲罵して下すつた復讎にかへて、お訴へ致すので御座います。

　私は一人子なるゆゑに、眞なる涙さへも叫びさへも多くは我まゝとして葬られて終ひますが、師もさう遊すお一人ではないでせうか。

　あなたも決して悲惨の文の作れぬ事を悲み玉ふな、順境の人は順境の文を作つて、多くの悲みにもがける女を見下しておやりなさいと、おはげまし下さいました頃から、一人子なる事を一種の誇のやうに思つて居た、私の美しいの優しいあこがれは全然ふみにじられて終ました、私はそれを惜とも悲いとも思ひませぬ。夢のやうな順境に、何時までやすらへる事を願ませうや。私は喜んで悶えます、鬪ひます、私のコーズをとほすためならば、血潮も肉もたきつくす事も、恐れは致しませぬが、唯一つ血潮の上に私は大きい重い束縛をあたへられて居ります。

　始祖より順々につたへられたる此ぬくき血潮を、縱

の世につたへなくてはならない任務を負はされて居ります、自分の血潮でありながら自分の肉で有ながらそれを自由にも思へばあやしき叫びをあげてずる〳〵と黒鐵のくさりが、精神を縛めかゝります。

それを苦しいと泣きながらも又ある時はスカーレットな血潮のぬくみに云はふやうなき崇高なる感じをしみ〴〵とあぢはゝぜられる事もありますが、私は眞に始祖の血脈にしばられて生れた事を其の束縛をゆづる者なき一人子の運命をのろひます。



お大事なお子お大切なお身とは少さい時からきゝなれて來た言葉ですけれどそれは私に云つたのではなくつて一人しかなき子の親に對して云はれたのですもの考へるのさい嫌ですのにそれを今もなほ人は、さゝやきます。さう云はれるのが父母には嬉いのでせうか、儚ないのでせうか私にはのろひの聲とより外に思へませぬ。

私はどうしても、此血潮も肉も始祖のにへに致さなければならぬ場合になりましたらあゝもしもさうなりましたら、私は　私の自覺を、の

ろふばかりに終る事が出來るでせうか。重い重い黑鐵のくさりは絶ず精神に卷かゝつて居ります。悲う御座ますけれども、私は血脈を思ふばかりに、我コーズは絶對ならりと斷言致す事が出來ません。血統をかへり見ないで、自己のコーズに走つたらば惡人との〻しられはしないでせうか、私は迷て居ますから、今は何とも申し上るてと出來ません、怒る事も全然不可能なので御座ます、私はたゞ小な努力に焦心をおさへて、良心の明確な判斷を待つて居ります。

先生は私が靜寂生活に憧憬する思想をうたぐつて居らつしやるのではないでせうか、一時的の好奇心であるとでも考へて居らつしやるのではないでせうか。

私が靜寂生活を熱望する根本の意義は、文學を愛する自己の感情をあくまで奔放ならしめたいためと、自己の徹底したライフの眞を、あぢはひたいゆゑよりほかにないので御座ます。ふれて見たならば、實世間と云ふもの〻空氣に私を笑しめる樣なものがあるでせうか、世界は何んだか空虚な活動のちまたとしか思はれてなりません。

私はある時、ある本で一人子は多く靜寂的生涯を送るものであると讀で震へました、それは悲しかつたのでも、淋しかつたのでもありません、私の性とあまりに一致して居る其言葉が嬉しかつたので御座ます。今まで私が生て來た道から、父母の慈愛を引て終たら、何んの色さいがあるでせう。私は決して父母の情愛にはうたがひを抱く事は出來ませぬけれど、覺された人の子の苦痛をいたはるものはないのでせうか、日一日と父母に離れて行く心を見守ながら、私はもつたいないとは思ひましてもどうする事も出來ません、浮やすき笑を浮べてすですす日も今は少くなりました。

そんな元氣のない顏して居ると今に病氣につかまるよと叔母さんは、おどかします、「なぜ」つて聞と、もつとしつかりしなくてはと、優しく言はれる時、私は涙を隱すことが出來ません。

我が人生を愛しむ信念のやうやく調ひましたゆゑにか、スケーアスな肉の力を悲むやうになりました。夜雨先生よ、どうぞ御心勞下さいますな、私は苦鬪にかられてやたらなる日をすごしては居りませぬ。愛する道を愛しつ〻熱涙ある日、光明ある日を靜に送つて居りますから。御身御大切に遊ばして下さいまし。

轉宅

小笠原ゆり子

母と娘は一郎の歸る迄はお茶をのむのも我まんして居る。二人がかうして安樂に座つて居る間は、息子が一人で役所で働いて居てくれるが爲だと、其に對してものんべりと茶など飮んで居ては相すまぬと云ふのが母の心である。娘は今に自分には大金をかけてもらはねばならぬ時が來る一生に一度の晴の場所、大きな鏡臺もほしい、縮緬の幾重かも造つてもらい度い、今の儉約もつまりは自分にかゝつてくる事だと云ふのが、娘のまめ〳〵しく働いて居る目的であつた。

三時半のボーが何處かで鳴り出すと、間も無く一郎は小さな包をかゝへて歸つてくる。

「お歸りなさい」

と兄の目から見ても一寸美しく見える程の妹が形許膝をついて出迎へる、茶の間に來るともうちやんと茶ぶ臺の上には茶道具が上つて居る。

「只今」と一郎は立つたまゝ云ふと「あゝ御苦勞樣」と母がやさしく答へる。三人は平和に茶ぶ臺のまはりに座る。

「アー甘い」

一郎は洋服のまゝどつかと座つて、さも甘さうに茶をすゝつた。

「兄さんそんなにおいしいの」



妹はどことなく疲勞の見える兄の顏を眺めながら可笑しさうにかう聞いた。

「うん役所ぢや、臭い番茶きり無いんだもの、如何しても俺にはのどが通せない、一日干ぼしさ」

「まア、ソウ」

妹はお察ししますよと云ふ風をする。

母親は一郎をいたはる樣に茶をついでやつたり、菓子ばちを出したりして靜かに煙草に火をつけたが、

「コレが今日は大分惡るい樣でね」

と首を前につき出してひくい聲でかう云ひながら、窓から向ふを指して見せた。

「エ又始めたんですか」

一郎は目を丸くして、ソッと伸上つて窓から見える直ぐ前の家を見た。小さな平家で、一月許り前に氣の少しふれた若い男が一人で越して來たのであつた。一郎が見るといつもの樣に雨戸も入口もビッシャリしめて有る。

「だつて未だ寢て居るじやありませんか」と云つた。

「でも最先までは隨分」

と妹は云ひかけて兄の顏を見たが、又氣の小さな兄の氣げんが變りはすまいかと案じられたので、一寸ためらつた。

「あばれたんだらう」兄は直ぐさう思つた、妹は默つてうなづいた。

「困るなー」

果して一郎の顔は不快らしく神經質な眉が動いた。
「夕なんか夜通しまんじりとも出來やしない、役所に行つたつて頭がボンヤリして弱つちまう」
と苦々しく云ひはなつたが、
「お母さん、これでも未だ此所に居たいと云ふのですか」
と一郎は母につゝかゝる樣に云つた。母親はボンヤリ煙草の煙のうづを卷いて行くのを眺めて居たが、一郎の語氣が鋭いので驚かされた。
「エ、私が此所に居たいなぞと、おまへ」
と、どぎまぎして申譯らしく云つたが、
「たゞね、好い所が見つからないのでね」
と氣しきばんだ一郎の顔を上目づかひにソッと見た。
「でも探せば無い事は無いでせう」
と一郎は未だ母をにらめて云つた。何處かへ越さう〱としきりに一郎は主張して居るけれど母は其度に「アー」「アー」と得心した樣に云つて見せながら、中々探してはくれなかつた、其がいま〱しくつてならなかつた。
一郎には向ふの若い氣狂を見るに耐へられないのだ、噂を聞くのもたまらなく嫌である。かうした無神經の女が傍について居たので、父の病氣も殊更惡くなつたのだと思ふと、一郎には母は父の敵の樣に思はれて來る、愚かな女を相手にした、あきたらない、いら〱した父の半生が傷ましく彼の目にうつゝて來る。



「兄さん」
　妹は兄のけはしい顔をハラ〳〵して見て居たが、平常着を出して來て、兄を呼びながら後に立つた。
「それでも別に人に亂暴を加へたわけではないのでせう」
と一郎は着物をきかへながら母に聞いた。
「あゝさうともさ、そんな事は無んだがね、何んでも昨夜と同じ樣な事許りどなつてるんだよ」
「きいてるとちやうど芝居の樣よ」
　妹は袖で口を押へて笑聲を隱した。
「オイコラ失敬な、僕を何と心得て居る、詐僞師だつてウコラ、何故勉强を妨害するか」
「馬鹿」
　妹は氣狂の假色を使つたが、兄にしかられて默つて終つた。
「切角御近所とも、おなじみになり、場所にもなれたと思ふと飛んだものが越して來たもんさ」
　母はため息と一所にかう云つたが、住なれた所を離れると云ふ事が、ひどく心を傷めさせられると云ふ風に見えた。
　一郎はゴロリと横になつたが、
「オイ俺が留守番をしてやるから家を探して來いよ」
「今、ですか」妹はきいた。
「當り前よ、此樣な所にぐづ〳〵して居られるものか」

「でもあたし一人じやあ」と一寸考へて居たが、
「お母さんも行つて下さいな、エお母さん好いでせう、エ」
母はどうも氣重さうであつた、默つて何か考へてる樣に見えた。
「では留守を賴むよ」
出掛に母は一郎にかう云つて二人は出て行つた。
「オヤマア、お宅樣で入らしやらなくなつちや、お淋しくなりますわ……それはまア」
と云ふ聲が三四軒先の家から聞えた、暫らく立止まつてクド〳〵話しをして居たが、やがて、
「左樣なら」「行つて入らつしやい」
と云ふ聲がしてやう〳〵二人は出て行つた。
一郎は靜かな家の中に橫になつて居たが、心持の全然違つた母や、妹と同棲して行かねばならぬと云ふ事は何より苦しい事である。何ぞと云ふと母の味方になる妹のそぶりも忌々しくなつて來る。心の通じない同志、これ程面白くない事が在らうか、一層自分一人が下宿生活にでも入れたらどんなに伸々するだらう。など、思つて居る內に、フト向ふの若い者の事が浮んで來た。
形と云ふ形、音と云ふ音……何んとも知れぬガヤ〳〵ワヤ〳〵した外界のものどもの凡てが、皆自分をあざけり憎んで迫害を加へ樣として居るのだ、一寸の隙もねらつては恐しい謀のある穴の底に、細いうるさい手を八方からつき出して自分をつき落さうとする、其等の敵に對して勇敢に防禦反抗を續けねばならぬ、かりにも苦しい弱々しい風などを見せたなら其が自分の最後になるのだ。あくまでも勇氣を示さなければならぬ。その夜と晝との間斷もなく現はれてくる騷々し

い色々な幻影におはれて休むと云ふ事のかなはぬみぢめな……其樣な氣持の人を考へて見た。何故あゝも苦しまねばならぬのだらう、何故神は彼の種の人間には特別の苦みを與へるのだらうとも思つた。そして自分は外の人よりは、より多く彼種の人間の心が了解され、其苦惱が一層明かに胸に響く樣にも思へた。

一郎は狂犬にかまれた人の病の發作する迄の間の長い潜伏期に對する恐怖、不安とした樣なそれと同じ樣な思に惱まされて居るのに氣がつくと何を考へたり仕事をしたりする事も馬鹿々々しい徒勞であると思つた。

「これ一郎、風邪を引くじやないかい、一郎」兩手がしばられて居る樣で窮屈で耐らない氣持がして、目を開いて見ると母親も妹も歸つて來て居た。

「ア、眠つたのかなあ」

一郎は枕にして居た方の手がしびれがきれて居るのを、揉みながらソロ〳〵起上つた。

「どうです好いのが有りましたか」とまぶさうに目をしばたゝいた。

「兄さん、好い所よ」「何處」

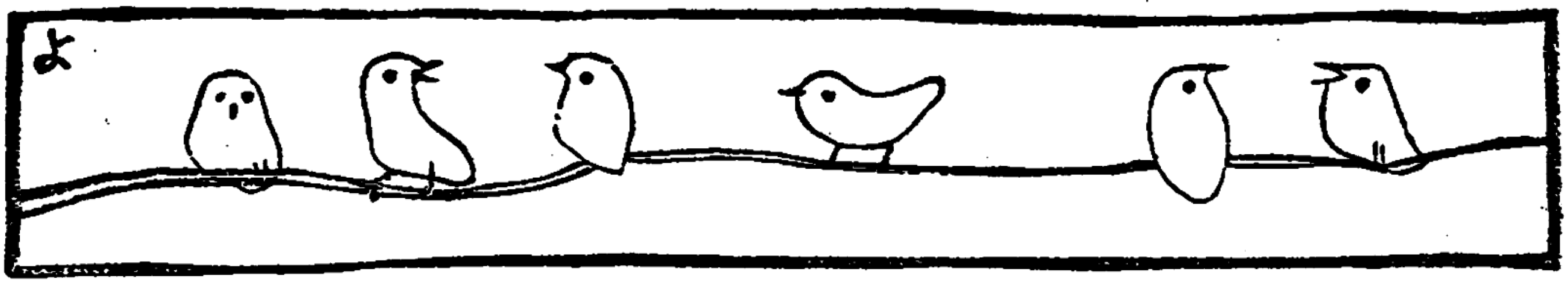
「道玄坂の右手の方でね、青々した林が一眺めで、それに室も皆明るいし、第一建物が新しいのネー、お母さん」

「家賃もあまり高くはなし、電車も近しさ、それに大家さんがまことに親切さうな方なんだよ」

母は存外の處が在つたので、今度は乘氣らしくなつて居る。

「できめて入らしつたのですね」

「アゝだらうと思つて月始めと云つて來たがね、今月と云つた處でもう二三日切りだから」
「さうですか」やうやく一郎は氣が晴れる樣に思つた。
向ひの男が此所に越して來た時は、母も一郎も苦學生かなんぞの樣に思つたので、男の手一つでは困る事も有るだらうと、世話好きの母親は何くれとなくいたはつてやつた。そんな事からして此家の者許りには懷かしさうにするが、外の者に對しては非常に用心深い目をむける。
それが今になつては、一郎や母はひどくそれが苦になつて氣味が惡るくなつて來た。そして今はかうしてソッと外に越して行つて終ふのだ、何んだか彼の男に對してすまない樣な氣がする。そして自分等が居なくなつた後は、ます〳〵彼は人間を疑ひ恐れて野獸の樣にすさんでゆくのであるまいか、何んだか今彼の男をすてゝゆくのは罪な樣な氣もする。こんな事が眠りからさめた許りのボンヤリした一郎の頭の中に浮んで來た。
「ア、起きましたよ」妹はソッと母に云つた、二人が見るとソロ〳〵入口の戸を開けて居る、起るといつも此一郎の窓の前に有る井戸に出て顏を洗ふのが常である。
「コレッ引込んで居ろ」一郎は窓に立つて見て居た妹を恐はい目をしてしかつた、三人はいそいで障子の蔭にかくれた。そして息を殺した。「今夜はどうしたつて入れぬ樣にしてやるから見て居ろ、畜生！　我輩はそんな事に目的をかへる樣なそんな男じやないぞ」
しきりにこんな事を云ひながら何か戸に打つける樣な音をさして居る。
「何か來て居た樣に見えるんだね」と母は極くひくい聲で云つた。
外では長い事アチコチをトン〳〵たゝいて居る音がした。



淋しい道

萬壽子

「おい國さん、女子供だと思つて餘り莫迦にして貰ふまいよ、物を食つて錢を拂ふのは、食はずに生て居られないのと同じだからね。私が居りやあ先分を貰はにやああげないのだけれど……又お前さんだつて私が居りやあ食やしまいさ、此奴あ御存じの薄野呂だもんだから男だからつて馬鹿にされる。私や、私や眞個に口惜いよ——まあ其麼事あいゝや、拂つておくんなさい、え、拂つてお呉れよう。御同様に弱い者だ、ねえ、少しは自分の身にも比較て見るがいゝ、汝が腹さへ肥りやあ口で言はれる畜生位は痛くも癢もなからうさ、然しねえ、人間の皮あ被つて居るうちは、恥つてえものを知るもんだつてえ事さ。」

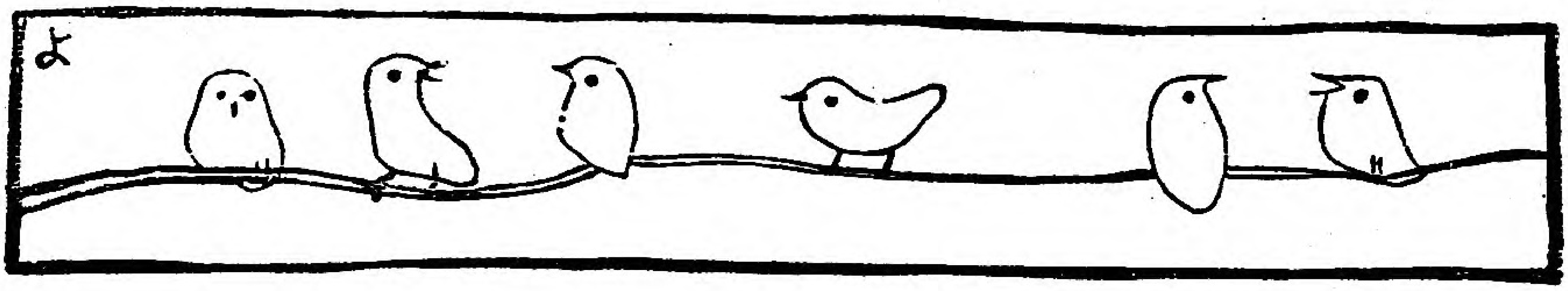
「こ、この女あ—……どうするか、今に見ろッ」國は赤銅色い顔に眼を白く光らしてお雪を屹と睨んだ。

お雪は茫と暮色の迫る川面へ落した眼をあげて、向ふ河岸を見た。灰色の煙を立てゝ走り行く國の姿が眼に入ると、溜つて居た涙がほろ〳〵と青白い頰を流れた。

「姉や、お前國さんと喧嘩して惡かねえのかい」

おづ〳〵と澁い眼を働かせて、弟の貞治は姉の顔を覗きこんだ。

「何を言つてやあがんでえ、皆な汝が莫迦だからだい——あゝ私はもうつく〴〵世の中が厭にな



つちやつた。――貞、今日はもう仕舞つてお墓へでもお參りに行かうか？」

貞は姉の險相に怖れて俯向た儘、手桶の水に浮いた小さな埃を無意味に見詰て居たが、姉の優しい言を聞くと嬉しさうに瞳を輝かして、

「あゝ行かうね」とそは〳〵其邊を片付始める。

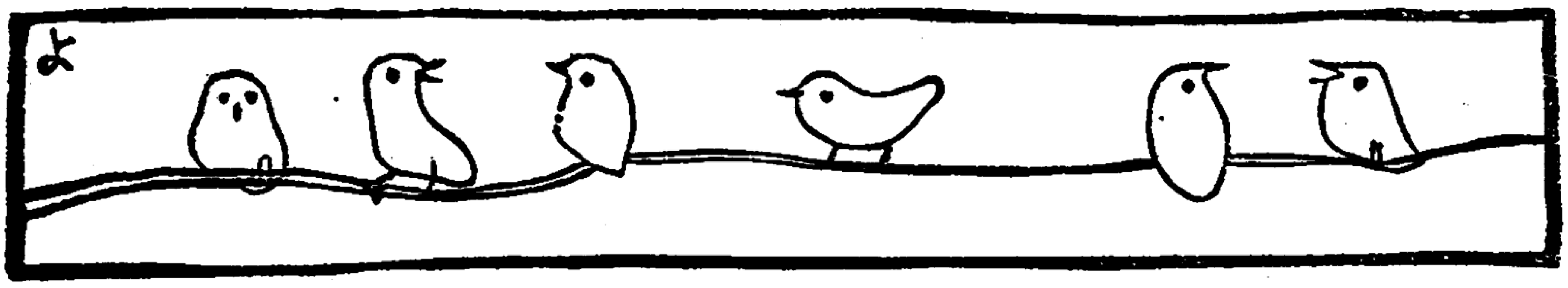
お雪はその樣を憐れげに見やつて淋しさうに涙ぐんだ。大福が五ッに團子が六七本殘つて居たのを兩人して食た。跡はまた明日賣るので、其儘荷物を一ト車にして、貞は薄皮な白い襟元に汗を浸潤ませながら、とぼ〳〵と引て行つた。その後からお雪は、こま〳〵した道具を風呂敷に包んで片手に持ち、片手に車を押ながら塵埃の中を歩いて行つた。

兩人が谷中の墓地へ行く道々、摺違ふ人々は皆妙な眼付をして此の兩人を見た。

不忍の池畔へ來た時、勝誇つた若い男女の涼みの幾組を見て、お雪は深い悲哀と、輕い妬とに眼を伏せた。

珍しさうに四方を見廻して居る美しい弟に氣が付くと、つと寄添てその柔い手を握つた。溫い若い血がお雪の手から胸へと傳つて行く、全身の血がふつ〳〵と湧て、お雪は顫へた。消えかけた若い氣が燃る。何日にないふつくりした柔かな少女らしい心持で、弟の手を強く握つて莞爾と首をかしげて、その綺麗な顏をのぞいた。

然しその想ひは人通りの少い墓地の近所へ來た時、既う醒て居た。二十八と云ふ電のやうな閃光が頭を過ぎた時、お雪は愕然として弟の手を放した。お祭の夜歸りに獨り暗い田圃道を通るそれよりもなほ深い淋しさを感じて、お雪は薄ら寒さうに、袖を合して胸を抱いた。



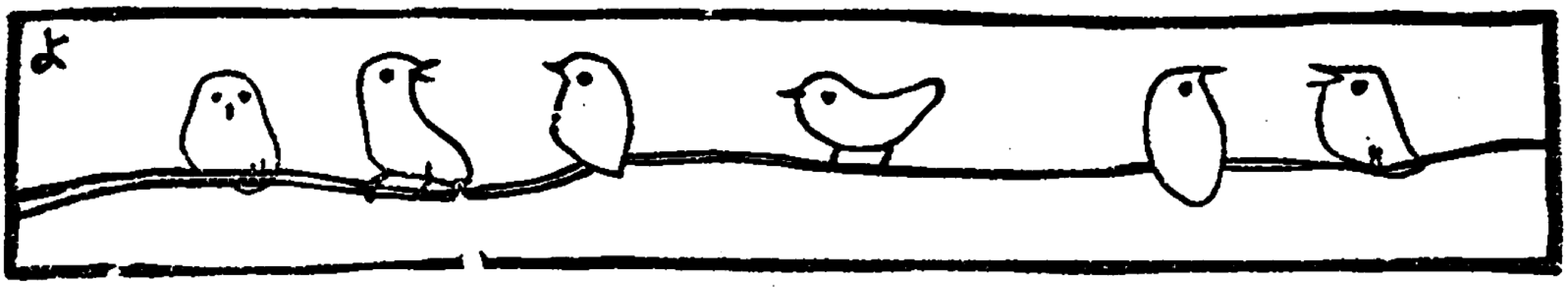
父の死から母の死、弟の白痴、それ等の爲にお雪は婚期を逸した。然し幼い愛らしい憐れな弟の爲に、決してそれを怨なかつた。種々な苦心も水の泡となつて今もなほ白痴の弟を見るお雪は今まで幾分殘つて居た、他へ嫁ぐと云ふ思ひを斷然すてた。一生弟と共に暮らさう、と決心してから女らしい優しい氣は何日とも知れず失せて、勝氣な、荒々しい、世に勝う、人に勝うと云ふ氣がむら〳〵と湧た。

四年前から神田のある裏長屋へ引移つた。朝から夕方へかけて○○河岸へ餅菓子や、ラムネなぞの家臺を出して賤しい荒つぽい小揚人足を對手に辛い涙を呑んだ。日増に言の調子を覺えて野卑な言も、毒口も平氣で言ふやうになつた。時折眼の前で「莫連女？」と罵られても、始め程悲しくは思はず、獨り冷い笑を白い頰に浮べて、時には或る誇りさへ感ずるやうになつた。三人四人家臺の前へ立つと、數をごまかす者、食逃をする者、借りといて倒す者などいろ〳〵あつた。お雪は外の客を弟に見張して、自分はよくその人等と爭つた。弱い者を蹂躪る、强者、憐れな人、可哀相だと、心に囁きながらお雪は爭ふ。勝ば我が冷き心を嘲笑つて淋しさを感じ、負れば女の弱さに泣く。お雪は人並より美しい顏と、美しい心とを持ちながら世間の嘲笑を自ら買つた。夜間は人仕事をして居る、更て世間の靜りかへる時、お雪は獨り空虛の胸を抱いては泣いた。

夜は涼しい谷中の墓地で、お雪は石塔に凭れてそれからそれと想ひつゞけた。

「姉や、まだ歸らねえの？」貞は氣味惡さうに四方を見廻した。

「お前先刻から幾度言ふの」お雪は忌々しさうにかう言つて潤だ眼に弟を瞥と見た。月を浴て凄い程美しい貞治の悄た弱々しい姿を見ると淋しい氣が足元から泌入つてほろ〳〵と涙が出る。



「だつて己、寂しいんだもの、あつ、又鐘がなるよ」貞はおそる〱姉の顔をのぞいた。

「姉や、國さんのお金貰へねえんで泣くの？――そんなら己、稼であげるから泣くのはおよしよね、お月様が笑はあ……」慰るやうに優しく言つて、姉の背に手をかけた。

「貞！」お雪の聲は恐しく顫へた。

「お前ね、あの、姉やと一所に死なゝいか？」

「え、死ぬ、死ぬ、嫌だあ、己死ぬの嫌だあ……」不安と恐怖の瞳を瞬つてじり〱と退歩る。

「あゝ、矢張り駄目だ?!、ふゝん、嘘、貞、戯談だよ」お雪は聲だけ笑つて立上つた。

「で、お前は死なずに何をするつもり！」

「己？、あの己ね、己ね」貞は白い顔を淡紅くして、にや〱しながら默り込で了つた。

「どうするの！」お雪は優しく訊ねたが、胸が騷いだ。

「あの己ね、今十八だから、後三ッか四ッ年取つたらあのう、いゝお嫁さん貰ふんだよ……」貞はかう言つて羞かしさうに姉の顔をちらと見たが、お雪のたゞならぬ色を見ると慌てゝ、

「そして姉やを大切にするんだ……」

お雪は顫へた。儚い、強い嫉妬と、底知れぬ深い淋しみと、いじらしさと、或る絶望とに體をかたくして俯向た。自分の心に潜で居たある力をぬかれて、お雪は弟の顔を見返すだけの勇氣がなかつた。

靜かに白い月を仰ぐと涙が光つて、横鬢の毛へころがつた。

蟲が足元で鳴き出した。

温泉宿

春子

わづかに、吹く風はあるけれども、眞晝に近い日光がぴか〳〵と照つて、少しの涼しさも覺えない。汗ばんだ顔は、ぬぐふ毎に、ほてりの爲にぴり〳〵する。車引の白いしやつは、しつとりと汗にぬれてしまつた。日に燒けて、馬鹿に黒い襟くびと、其前をゆく、祖母の鼠地の洋傘とが、眼について見える。

上り八丁の坂は、次第に急になつてゆく。繁みの中に白百合が大きく咲いて居るのが見える。

出つけない祖母とこの二人旅に、お町はなんとなしに不安をおぼえて居た。てびんから、あごにかけて、眞黒なひげをはやした、荒々しい顔の車引が、昔の話しにあるやうな、雲助の樣に思はれて、恐ろしいやうな氣がしてならなかつた。

上りつめると、足下に、深い谷のながれが見える、車はやがて山腹の道を、飛ぶやうにかけて下りる。

體が宙に浮いて、横に、たてに、ゆれる。みどりの幕がつきると、白いかべの舊式な家が見えた。お町の泊る宿は、つまあがりの道を、小半町も上つた、一番奥の宿であつた。

光線のあまりよく入らない帳場には、うすあをい顔の妻君らしい人が居た、幾つもの室のまへを、かるく挨拶をしながら、祖母樣の後からついて行つた。

案内された座しきは、三階の六疊の座敷であつた。只二人のお町には、丁度よい室で、床には誰れやらの軸がかゝつて居る、其前に鏡臺があつて、しんちゆうの大きな火鉢が、最中に光つて居た。

「きがきいた、なか〳〵いゝ座敷だわね全く豫想外だ」着物もきかへずに室の中を、ぐる〳〵あるきながら終に最中にちやんと座つて見た。

「いやな子だよ、そんな大きな聲をして」と祖母はわらひながら、やはり此室をほめて居た。

三階は不自由だから、二階にとりかへてもらはふと祖母がいふのを、お町は無理に、涼しくてよいからと此室に定めてしまつた。其くせ此室には、朝日が奥迄なげて、朝から馬鹿にあつくるしい。

お町は此宿の客となつたのは、五日前の午前であつた。朝から夕迄、妹や弟の世話でがしや〳〵とくらして居たお町には、只二人といふ、それさへ既にめづらしいのに、右も左も、知らぬ人許りの中に居るので

静かさを通り越して、物たりない心地がする。
　三階の座敷は四間きりなかつた。右の室には足が悪いとかで、すう〳〵足をひいて歩く、牧野といふ、二十八九の男が居た。右となりには、帽子のあとがくつきりと、白と黒とに、顔が二色になつて居るやうな、陸軍中尉が居た。右の端の室には、お町よりもずつと年下なおさげにいふたかあいゝらしい、雪ちやん、といふ子が、四十を越した御父様と二人で居る。
　二日、三日、と立つうちには、割合に女の少ない中に淋しいとも思はなくなつた。家をはなれて、自由な若い心が、一人で嬉しさうにさゝやいで居る。



　四人の中で、一番眼についたのは右隣りの客だつた。始めてきた日の午後だつた、庭にはやかましい程に蟬がないて居た。
「おい番頭……今流行の南極名産氷の天ぷらを持つてきてくれ……」……まぬけた様な番頭が、「何ですか、氷の天ぷら忘れるから紙に書いてくないな」……お町はをかしくてたまらなかつた、そして一人で笑つて居た。
「妙な人だわね、一體如何したの」とお町は女中をつ

かまいてきいた。
「もとは軍人様で戰爭で負傷をしたんだつて、見さいな手の指がないのすからな」仙臺なまりの女中の言をきいてから、妙に氣をつけて見るやうになつた。
戰爭がうんだひさんな歷史を指に語つて、十の指のうちに滿足なのは三本よりない、ずるりと押し切つたやうな右手が、いたましいより氣味がわるかつた。
ふきの葉をしぼつた大模樣の湯あがりに、さび鐵のちりめんの兵子帶をしめて、元氣なことは皆の及ばない江戶辯まじりのきびぐした言葉、色の淺黑い口のしまつた、竹をわつたやうな話し振りにはお町はいたく動かされた。
「可愛さうな人さ、奧樣も持てないんだもの」としきりに同情をしてる祖母樣に、「さうね、だけれど妻君なんか、…………」
いはふとしてはつとした、隣の人達が、百合の花をかついで廊下に見えたからだつた。
「馬鹿に暑いですな、家族同樣に、すつかり通しにしやうぢやありませんか」と牧野の發起で、昨日からふすまをすつかりあけて、風をいれてある。百合の花のきつい香が、如何にも山の溫泉宿らしい感じをあたへて居る。
「お先に入つて參りましたよ」お町はてすりに手拭をかけながら聲高に云つた。
繪うちはを顏にあてゝ、靜かに眠りに落ちやうとした祖母樣は、とろりと眠さうな眼をあけて「そんなら入つて來やうか！」と紅緒のざうりをずるぐひきながらお湯にいつた。
緋ちりめんの兵子帶をぐるぐまきつけながら、室のすみに寢そべつて、お町はいろんなことを思つて居た。中尉と癈兵、對しようがあまりかあいさうに思はれてならなかつた、けれどもどちらもおもしろい人だが蟲が好かないといふのか、中尉はあまり好きといふのではない、まだよく逢つて見ない故もあらうが。
「おや雪ちやん、知らなかつたわ、お入りなさいな」室の前に立つて居たお雪の姿を見て、體を半起しながらにつこと笑つた。
火鉢の火をかきおとしながら「いゝでせう一つ」と、黑ぬりのはしが動いて、雪ちやんの手には大きなカステラがはさまれた。
「皆なで話しませうか」とお町はふりかへつて「お隣のかたいらつしやいな、お茶が出ましたから」

「おやお茶菓子は如何」
「どうぞ御持參で願ひますよ」お町の高い笑聲と、雪ちやんの可愛らしい聲とが入り交つてゐた。
牧野と中尉とでいしをなげてお町の室に入つてきた
「御主人の留守に御ちそうになつちやすまないな！」
「なに……お湯はゆつくりですからね」お湯がちんちんと湧き出した。
「昨日は町ちやん素的だつたね、僕はおとなしい娘と許り思つたんだよ、そしたらあんなおてんばやるんだからなあ」「はゝゝ」と中尉は思ひ出したやうに笑つた。「海國の女だもの、ね町ちやん」「知らないわ、そんなこと」お町はわざと、初心らしくよそほふて廊下に出て、そして口笛を吹きながら向ふ山の方をむいて居た。「あれだからね、まるで變性男子さ」「あはゝゝ」二人はわけなく笑つて居る。
頭のはげかゝつた雪ちやんの御父樣と、お町の御祖母樣とがお湯からあがつてきた。
お町と雪子とは隣座敷で、昨日とつてきた山吹の莖から、白いしんをとつては、ほつ〳〵口でかみながらはきだして居た。
「君には奥樣は！」雪ちやんの御父樣が頭をつる〳〵なでながら中尉にきいて居る。
「今選定中なのですが、なか〳〵ありませんな、色がしろいと思ひや脊がひくかつたり、姿がいゝと思ひや顔が二の町だつたり」「帶にみじかしたすきにながしか」
「いや全くだよ、お金がなくても、二の町よりやはり女は美人に限りますね」「はゝゝゝ」お祖母樣は下のどこやらの祖母樣の室に遊びに行つた。
「僕には頭をさげても來るてがありませんや、元氣はさうでも、體が此通りですからね、思へば露助はにくい奴か」をかしな節に、お町迄隣室でわらひ出した。死ぬ程の命を不具者になつてながらへて居る男だものどれ程、生の苦痛を味はふて居るかもしれない、牧野の一言一句が、悲痛の言となつて、お町には聞える。
「もう十年の間待つて居やうと思ひますよ、實際罪ですからね！」
話しがしばしとだえたところへ隣室からお町が顔を出した。「牧野樣、弟樣いつくなの」「十八ですが、よいけんくわ相手が出來るわけですね」雪ちやんの御父樣相變らず笑つて居る。
「町ちやんにまけるやうな弟ぢやありませんよ」

「御挨拶だわね、今にまつていらしやい……」
お町は火のない火鉢の灰の中に、牧野々々と消してはかき、かいては消して居た。雪ちやんは側に、默つて雜誌をみて居る、その横顔が馬鹿に美しい。
　雪ちやんの御父樣と中尉とがお湯にいつた、後には牧野が一人、欄によつて外をながめて居た。お町は茶道具を洗ひながら、牧野の後姿をながめて居た。
「ねい、きたいな人だは、中尉さんてば」
「なぜそんなことをいふの！」
「だつて美人に限るなんていつたでせう」
「町ちやんだつて美男子が好きでせう、私だつて……町ちやん見たいな美人が好きだよ」
「たんとそんなことをおいひなさい！」お町はわざと怒つた樣に下をむいて居た。と見た床の鏡に、自分の顔がくつきりと映つた、牧野の後姿も映つて居た。

質

香の女

一

「あんな男に嫁つて置ては、世間に顔出しがならぬ」
といつて、生木を裂くやうな交情をお芳はたうとう取り歸へされた。
　お人好の新一——お芳の夫——も流石に面目なかつたと見えて、家を飛び出した。けれども、お芳と全く切れてしまふ程の勇氣はなかつた。新一は、
「自分さへ出世すれば、お芳はかへつて來る、己も男だ、一旗上げる」といふ希望と決心を以て、大阪へ出ていつた。お芳も「新さんさへ出世すれば」とそれ許り思つて親の目を盜んで、絶えず、文通して居た。
　所が前月の末だつた。新さんから、
「まだよい働き口がない。今月の宿料に困る、十圓だけ送つて呉れよ」といふ意味の手紙が來た。お芳は蒼くなつて顫へた。そして、金に困ると、人に手便り、自分は天井を見つめて何日でも寢て居る新さんの癖を思ひ泛べて、矢張り甲斐性なしだと思ふと、お芳は言ひ知れぬ淋しさを感じ、出世の出來ぬやうな氣がして妙にいらいらした。それでも捨てゝ置かれぬのがお芳の氣分なので、どうかして拵らへて送りたいものだとあせつたけれども、お芳に取つては中々の大金なので一寸できにくかつた。それで思ひ切つて仲よしのお友さんの所へ相談にいつた。其時お友さんは、工場から歸

つて、篝の澤山上る、カンテラを燦けた窓の上に置いて、其下で御飯をしやぶ〳〵食べて居た。

「あらお芳さんかい。私あ——今工場から歸つたばかりよ、まあおはいりな」と口の中でむしや〳〵言はしながらかういつた。お芳は「よう、御勢が出るわね」と言ひながら、汚れた上り口に腰をおろすと、お友は食べ終つて、忙しさうに長い煙管で、二三服して「まあお上りよ」と向きなほつた。お芳は、狭い土間をぢつと見つめながら、沈んだ聲で、「お友さん相談があつて來てよ」と言憎くさうにいふと、「まあ大變沈んで居るのね、そこじや話もなんじやから、こちらへお上りよ」といたはるやうにいつた。お芳は默つて、其傍に坐つた。



二人は暫く沈默を守つた。「お芳さん今晩は、眞個に沈んで居るよ、また例のお家騷動なの」と冗談らしく跡のつぎ易いやうに口を切つた。

「いえ、此頃はもう私が新さんのことはないから、お家騷動はないけれども、お友さん大變なことがおきたわ」と困つたらしくいふ。お友は吃驚したやうに、「大變て何事新さんがどうかなつたのではなくつて」とお友が驚くのでお芳は自分の言方がわるかつたと思つた

「大變つて、たいしたことはないの、實は手紙が來たのよ」

「え丶手紙つて？　來いとでもいつてよこしたの」と

稍安心したらしく、お友はいつた。

「なんの來いどころですか、下宿料に困るから、送金せよつて來たの、全く甲斐性なしだわね」とまたお芳は沈みこんだ。「それでは、まだ何所へも入つて居ないのね、新さんも大抵にして成功しなければ、お芳さんが可愛想よ」と同情をよせる。お芳は可愛想よと言はれたので、何がなしに涙ぐまれた。

「下宿料つていくら許り入るの」とお友は煙草を吸ひながらいつた。

「十圓よ」と小聲でいふと「それは大金だわね、そして送る考へなの」「どうかしたいと思ふけどね」とお芳はお友の心を計りかねて、かういつた。お友は思ひ出したやうに「送つてお上げよ。旅で金の無い位つらいものはないわよ、貴女ら、經驗がないけど」と一度、亡命して大阪にいつた時のことを思ひ出してかういつた。そして暗い下宿に新さんのころがつて居るのが見えるやうに思つた。「私だつて思ふけれども、十圓なんて……」とお芳は考へ込む。「それは一寸困るわね…………」と二人は沈默に落ちた。薄暗いカンテラに、あたりは恐ろしく陰氣に見えた。お友が「かうおしよ」と言つて見合はした眼には、現實の疲れがあり〳〵と讀める。「あの着物をお出しな、質に入れるといゝ」

「えゝ質？」とお芳はぞつとした。「仕方ないよ、さうおしな」とお友も氣の毒さうにいつた。

「だつてどうしてよいものやら私にはわからぬもの………」と困るのをお友は、まだ實生活の眞底に觸れないからだと憐むだ。「質の方は私が引き受けるよ、相當の品おだしな。新さんに貞女を立てるは今ですよ」といつてせきたてた。お芳は罪惡でゞも侵すやうな氣がして苦しかつた。けれどもとう〳〵今夜中に金を拵へることにした。

二

納屋續きの隱居部屋では、祖母さんが暗い行燈の下で苧をうむで居る所へ、お芳が歸つて來た。

「お芳かい、どこへ行とつた」としぼしぼした眼を見上げる。「角のお友さん方よ、今晩神樣參りに行つて來るわ」と新一の家から取つて歸つた荷物の置いてある次の間に入ると「信心じやのう、好い事じや、信心すると神樣が、好い緣を與へて下さるわい」と獨り言のやうに祖母さんはいふ、お芳の胸は張裂けるやうでわな〳〵とふるへた。單笥を明けて、當分いらぬ、晴衣を出した。そして一寸帶を〆めなほして、其大きな包

を抱いて出て行つた、お母屋の方では、母の高調子と下女や下男の若い聲とが、交り合つて聞えて來る。春の田舎の夜は平和である。

お友とお芳は、お友の母のかへりを待ちかねた、そこへ仕事先きで御馳走になつたといつてお友の母が歸つて來た。お友はお芳の話をして直ぐ質屋へ一緒にいつて貰ふことにした。お芳は

「伯母さんすまぬけれども……」といつて、母の仕度するのを待つて、三人は家を出た。

眞暗い中にも、ボーッとして春の夜は暖かな。町の入口のとある質屋の前に立つた、お芳は氣が遠くなる程苦しかつた。まづ母だけ入ることにした。陰氣臭い、レンヂ戸を開けると、そこは可成に明るかつた。

「ハア誰かと思へばお松婆さんか」

「…………」

「これで十圓ちとむづかしいな」

「…………」

「ふむ、六ケ月むつかしいな、けど、婆さんの顏に免じて、貸して上げやう、流しちやいけんぜ——」

といふ番頭の銅羅聲が、外へ手に取るやうに聞える。其度、お芳はわな〳〵とふるへた。間もなくお松は出て來た。「質札は家に預つて置きますよ。これ十圓」と手渡した。お芳はそれを帶の間にはさんだ。

三人は靜かな田舍道を、默つて歩いた。お松は時々お友の袖をひいたけれども、取り合はなかつた。

お友の家の前に歸ると、「まあ、寄つて遊んでおかへなんしよ」といつたけれども、お芳は其儘かへることにした。お松は、お芳の力ないとぼ〳〵とした足音の闇に消えるを待ちかねて、

「質使ひしてやりながら、使賃さへ呉れぬ——横着者だ」といひながら、ガターンと戸をしめた。

漁師の娘

小もゝ

お小夜の家は濱邊の小さい漁師町の眞中頃にある茅屋で軒の低い陰氣な家であつた。角には半鐘があるお小夜の父はこの町の親玉株であつた。

お小夜は今日も煤けた障子の側で裁縫をしてゐる。家の中は何となく陰氣で、お小夜は時々針を休めて脊伸びをしながら、氣怠想な太息をもらした。

滿汐が、ぢやぶり〱と床しい海苔の香のする午後であつた。流暢な「夢の世」節の樂器の音がする、それがだん〱お小夜の家の方に近寄つてくる、氣忽かつたお小夜の胸は、擽られる樣に搖めいた。

お小夜は障子をあけて半鐘の柱の際から、偸む樣に見た、樂器の音は手風琴であつた。見馴れぬ男が海軍服の樣な形で、袖だの襟のあたりを、ぴか〱する金線で飾つた服を着て、右の肩から左の腋下に、大きな鞄を下げて手風琴を鳴らして來た。

お小夜は何だらうと思つた、後ろから子供がぞろぞろ附いて來た。だん〱近づいて「今日は」と、にやり笑つてお小夜に挨拶した、そして鞄から紙片を出して渡した、お小夜はそれを受取るのが恥しかつた。男は輕く會釋して又風琴を鳴らして行つた。身體にしなを作つて行く所が上調子なお小夜には氣に入つた、面白い人……とつく〲お小夜は後姿を見送つた。

何だらうあの人は、かう思つて、今もらつた紙を見た、産前……産後……血の道……なんて平假名でかいてあつたからお小夜にはどうやらよめた。

あゝ藥屋だ、綺麗な服裝をして居るが何といふ藥屋だらうと、お小夜は急に聞いて見度い樣な氣がした。歸りにもこゝを通るだらうかと、斯う思つたが、其日は此所を通らなかつた、お小夜は何となく物足りぬ氣がした。

夕方から雨が降り出した、明日も其翌日も降りつゞいた。それがお小夜には何より辛かつた。汐風が生溫く雨を誘うて來ると、濕々した家の中に嫌な氣が漂ふて、頭から押しつけられる樣な氣がしてならなかつた。洗ひ張りの着物までが濕つて、針の通りが鈍いので、小言を云ひながら仕事をして居た。

お小夜は、此間の藥屋の事を思ひ出した、手風琴の「夢の世」節が耳に殘つて居る、口の中で眞似をして見たがうまく出來ないので、自分ながら吹き出した。何と云ふ唄だらう、あんな面白い唄を歌つて、世の中を渡り歩いたら、如何に面白いだらうと思つて、こんな濱邊に居るのが、素氣ない樣な氣がした。

お小夜は今年十八で、丸ぽちやな顏で、濱邊の女には似合ぬ程、色がくつきりとして、二重瞼の柔しい眼を細くして笑ふ時の口元は、確かに若い男を魅する力があつた。でも髮の毛が少し赤いのは何より惜かつた。半鐘の下のお小夜さんと云へば、此の町で知らぬ者はなかつた。

春雨が降り止んで、晴れやかな日であつた。
お小夜は緣先で、蛤をむいて居ると、此間の藥屋が來た、今度の節は未だ聞いた事のない「間が好いそんぐ」であつた。
お小夜は、待焦れた、何物かを捕いた樣に嬉しかつた、そして臆面もなく種々な事を聞いた。藥屋は二十四五の粋な男であつた。
妙にしなを作つて緣に腰を卸して、饒舌り出した、話が上手で、そして聲がよくて、一時間ばかり話して行つた。
種々な事を聞かされたお小夜は恍惚とした殊に東京の話しの凡が、耳新しかつた。都の女は幸福だなあ、と思ふと、濱に燻ぶつて居るのが、末悲しい樣な、又馬鹿氣た樣な氣がした、お小夜の狹い胸は、煮え返へる樣であつた。



其お小夜は藥屋が來る度に、泌々話し込むのを樂しんで居た。ある時などは——ねい貴女！私と一所に東京へ參りませう——、と斯う云つた。お小夜の慾目にはそれが揶揄れるなどゝは思はず親切な人……と、ほつと赤くなつた事もあつた。
櫻花も何時の間にか散つて、時鳥が青葉がくれに啼く時であつた。
お小夜は、一寸用達に出たまゝ家に歸らなかつた。兩親は少からず心配して、隣近所や親類と心當りを探したが遂に手懸がなかつた。
お小夜が居なくなつた夕方、洋傘をさげて、すたく

町の方へ急ぐお小夜の姿を見たといふものがあつた。
手風琴を鳴らして來る藥屋は、お小夜が居なくなつた時から、ぴつたりと來なくなつた。

——お小夜さんはあの藥屋と駆落をした。——

といふのは此漁師町の專らの評判であつた。
其噂を聞く度に、お小夜の母は、黄色い齒をむき出して口惜がつた。

此秋には、お小夜に婿を迎へ樣と樂しんで居た其一人娘が、無分別にも飛び出したので、夫婦は毎日お小夜の身の上を案じ暮らして居た。

人の噂も七十五日、今はお小夜の噂も薄らいで、秋風荒く柿の葉がガサリ〱散る秋の末になつた。只さへ秋は物悲しいのに、此頃は娘の生死も知れぬので、老寢物語りに聲をうるますことも度々あつた。

十一月の末、大變な濕氣で漁師は皆明日の出船を氣づかふ夕暮れ、お小夜はびしよぬれになつて、飄然り家に歸つて來た、兩親は夢かとばかり思つた。

其の夜お小夜は、きびしく折檻せられた。

此長い間どこを彷徨いて居た！　……苦しい思はしなかつたか？といふ母の問ひにも、おさあ！　てめえ誰に騙されやがつて、おつぱしつた……と、苛責られる爺の問ひにも、お小夜は少しも答へず、只俯首いて、しく〱泣いて居た。

呆れてお小夜の姿をつく〲見詰めた兩親は、不圖眼を見合はせて、不審の眉をひそめた。

袖で腹をかくして、ほつと息をするお小夜の肩の小ゆるぎは、實に慘めであつた。髪の毛は蓬けて、顔の肉のこけた有樣は、元の生々したお小夜の面影とは思はれなかつた。半鐘の下のお小夜さんで、持て囃された、お小夜の生涯は僅に此の十八年間であつた。

批評を求む

『新文章』全體に就いて、皆さんの批評を求めます、投稿する方は左の心得を——。

▲本號全體に就いて、或は一つの作に就いて、又は好きな作に就いて、或は和歌なら和歌だけ、小説なら小説だけと云ふ風にでも何うでも隨意です。
▲二十四字詰五十行乃至百行以内。
▲紙上の匿名は隨意。
▲原稿の端へ『新文章』批評と書き添へること。
▲投稿しめきりは本月三十日とす。
▲發表は九月號の紙上に於てす。
▲天賞（金二圓）地賞（金一圓）人賞（金五十錢）を物品にて呈贈す。



山

白羊選

胡蝶花咲く頃

山の女

久しく聞かなかつた梟の聲が今夜は二ヶ所でする。夕方あまり乾いてゐたので庭へ水を撒いた時、東京の伯母さんが大切にしては水をやりなさつた夕顔の花が目に浮んだ。山の裾に現在見た卯の花よりも白いやうな氣がした。それだけ身のまはりがぼんやりとして一刻一刻と夕暗に迫られてゐるのである。若葉をきんぽうげのやうにあざやかに、紫の藤をあづき色に見せた夕日が山の影を山へ山へと投げて沒してから、まだ間もないのに、青い山は見る間に無形の刷毛で黑塀のやうに塗られてしまつた。雲の無い空は山とのくぎりを明らかにしてゐながら、やつぱり同じ暗黑といふ運命に葬られるのであると思ひながら、仰むいて眠るやうな心地に開いてゐるとも思はれない視線の先を東から西へ虹の形にうつすと懐しい光が二つ、二つの星では無い一つの星と五日の月とである。まだほんとうは光つてゐないと言ひたいほどやさしい光である。家々の燈はこれからつきはじめる、自分の部屋もまだ暗いけれど、あの月が金の牙のやうにもの凄い光にならぬうちが少女の命であるやうな氣がして、廣くも無い庭をさまよふのが寒月のやうなすさんだ心を持つてゐる私にも、何よりの樂しい時である。、、、十年前にこの山の奥から移植したのだといふきやらの木をいつでもおもちやにする、しなやかな枝へいつでも綠色の油をぬつたやうな滑らかな葉が隙間なく着いてゐるので觸り心地がよいからである、夏の夕方螢を捕ると籠へ入れないでこの木へとまらせてやると螢草のやうな氣がする。そのくせ雲の夜などはこの木のあるために目の前に深林を望むやうな趣をそへる。花こそ綺麗に咲かないが一番好な植木としてこゝに居るうちは眺めるであらう。春夏秋冬。

それから今夜は花に咲きかけてゐる躑躅の株をもゆすぶつて見た、中からねむつてゐる小鳥でも飛び出しはすまいかと思つたが何でもなかつた。いたづら序に御所柿の枝へもつかまつて見た、枝が細かつたので少し引いたらぽつきり折てあぶなく石垣から落ちるところであつた、私が夜の世界はこれで限られてあるのだと思ひながらかどの大きな石の上へ立つて遠くを見るいつの間にか右の方の山腹に二つ左の方の道ばたに一つずつと下りて行つて河原の傍に一つ、四つ灯が空にひろがつた星のどれよりも少し大きく、お互に何か呼應してゐるやうにまたゝいてゐる。いつもならどことなしにちやんちやんからからと、灯が話しするやうな杼の音がするのだけれども、此頃は蠶のためにひつそりしたものである。忙がしい時に靜なのだから一寸をかしい。ふと一丈の足の下を何にか獸でも走つて通つたやうなうら淋しい風が裾の方から吹いてきたから、障子の内に入つてランプを點けて座つた。

今まで忘れてゐた胡蝶花が暗から生れ出たやうに机の上にあらはれた。小さい花が十許り黑塗の硯箱を枕にしてさつき置いたまゝ横はつてゐる。色も薄くつて紫陽花ほどの紫も赤みも無いけれど幽邃な所でとつたせいかほとゝぎすと深い關係がある花のやうに私は思ふ。厭味のない奥床しい花である。

苔に朽ちてしまふかと思ふ岩の下に、少したまつては石と草と朽葉と栗のいがとの間を流れる水に添ふて、幾丈もの杉木立が並んでゐるあたり、まるで唐草模様の織物を見るやうにこの花の咲いてゐたのがまだ目に殘つてゐる。

その中の細い道をかまはず登つて行つたら山でない明るい所へ出られはすまいかと思ひながら花の盡きる所で下りてしまつたのが殘り惜しい。(入賞)

肝腎の山がツレになつてるのが、少々約束と違ふが、見た儘に何げなく自然を書いて居ても、この人は何處かに自然其のものゝ脈搏が通うてゐる、パッシングは觀察を態と物々しく誇張した勸工場物の文章よりはズツと氣持がいゝ。(評)

深林地帶

本郷 平塚白百合

山は春であつた。ほの紅い櫻が雜木にまじつ

せ、香の日になでられながら身をゆすつて土をしたつて落ちる。蕊も二尺の美しい袖をかざした。鳥がなく。

しほれるのも忘れて私は名しらぬ草の紫や白や摘みためた。山から谷川は幾すぢも落ちてゐる。そこに來る度しほれさうな、なえた花に、さよならと云つて投げた。水は白い石を誘ひながら流れる。私たちの渡りやすいやうに先達は深い所へ石を置いてつてくれる。

暫くゆくと、もう地には草花の一つすら見當らなくなつた。緑靑色に二寸も厚い苔が露を含んで、踏む度に小判形のくぼみが數へられる。

これからが深林地帶ですよと先達が云つた。

際立つて木がかぶさつて、空はあるかなしに葉のすきからのぞいてゐる。

フーワリとベールの樣な柔かい露藻が枝から垂れてゐた。ゆくうちにどの木にも〳〵長く垂れて、進む程丈餘になびいてゐる。

深林に配してあるせいか目立たないけれど櫻の上からそつとかけたら美しいものだらうと思つた。

少しひらけた山腹に出ると、目の前にクルクルと白い渦がまいて來た。まはりはボーとぼやけて中心が白く非常な速力で渦をかく。それが白く濃くなりながら廣がる——。霞切のやうなキビ〳〵した鳥の音が右手の林ではしやいでゐる。

霧！かう思つたときは眼界總てに白い膜をはられつくした。先達が立ちどまつたと見えて同行の人も思はず歩みをとめた。

忽ちに霧はれてゆく——、白い渺茫とした霧の海に富士の山頂が浮かぶ。八ッ岳駒ケ岳、先達が指點の間ももどかしい程ニヨキ〳〵と山は現はれた。

程近い瑞垣の山麓は靑一色に紅をつゞる躑躅の叢、夕日に白銀を射かへす富士川の流！

金峰山腹に倚つて、私は今迄見た世界のあまり小さいのを悲しまずにゐられなかつた。

たゞれた赫日がふりかへり〳〵山に吸はれると私はもう山頂に、谷間のけがれない白雪をかんだ、汗はつきずきに流れる、けれどさすがに寒い。亂れる呼吸をとゝのへて私は默然と立つた。

緑藍色に遠くより近くへと暮れて來る黄昏の色の中に、山口のシルエットが横はつて、山氣は水のやうに爪先から全身にしみる。

先達は少し下つたはひ松林から枯枝を集めて來て火をたいた。銅色の赤い炎が焔のやうにさし出た大岩に照りかへされて、草もない山頂は赤く輝く。私は暮れ切つた山頂に茫漠と音もない廣大な天と地とを見た。（入賞）

スプライトフルな事を書くと、瀟洒といふか、淸楚といふか、さう云つた樣な氣分を持つた此人の筆が、如何にもシツトリと調和して見えるが、今度は豫期した程の事がなかつた、尤も女の山博士だけにみんなの中ではすぐれてゐるけれども。（評）

山葡萄

南海花子

なつかしい北海の山、父樣の御赴任に伴はれて、海暖かい故郷の地をあとに、遠く北に旅立つたのは私の十一の春であつた。

始めて見た土地の何事も、珍らしい物許りであつた、遠く彼處に森がしげつて、野には林檎畠がつゞいて居る、その間を縫つていさゝ川が流れて居た。

町といつても三千戸にたらぬ數であつたが、大きな白壁の倉がならんでゐた、こゝは鰊に名高いある漁地であるからだ。

五月の暖かい日、母樣も姉樣も弟もみなつれだつて北にそびえて居る小高い山に登つた。其麓にぴか〳〵光る石や土塊が澤山ころがつてゐて私達は金だとか、銀だとか爭ひ作ら弄んだが今から考へると銅だつたらうと思はれる。

山の上は平たくなつてゐて、嫁菜なんかが多かつた。ずつと前をみると廣い鏡の樣な海で汽船も何隻か着いて居るし、漁船も出てゐて、折にはぴーと妙にあとをひく笛の音がした。も一つ高い山にはいろんな木が生えて、大きいたけた蕨やぜんまい等もあつた。下の方に麻の木だとか、又何だか白い花が咲いて居たから「あれは何」と問ふたら、母樣が「じやが芋だよ」と敎へて下さつたつけ。

秋は、大きな木に巻きついて居る山葡萄をとつたり、木苺の實をたべたり、友がくるみの皮を唇につけるとあかくなると云ふので、山深くわけ入つて思はぬ所に、まつかな鬼灯をみつけた事もあつた。

あゝ事毎になつかしい香をもてる思ひ出よ！

二年の後、再び故郷に歸るべく函館の港を出

る夕ニコライの塔の山からごほん……ごほんとひゞく鐘の音、あゝ夕を送る其聲はしづまりかへつた、海面にさみしくひゞき渡つて、只もう悲しく心細く、戀ひこがれた故郷にこれから歸るといふ樂しみも、みんなわすれてしまつた、心の奥から涙が落ちた。

其時、母様はもう骨になつて、小さな箱にいれられて居た。

何となく淡い哀愁を感じさせる、筆に深い力はないが、輕いルギュブリアウスな調子があるせいだらう。(評)

鴻の峰

清國　やねのくさ

鴻の峰、なつかしい故郷の山！昔はこゝに大内氏の城もあつた。此ちつぽけな峯は我生家のしかも産聲を上げた座敷の障子を明けると眞面目であつて、いつも青々と樹木の茂つたこんもりした姿を見せて居た。此山の頂きの空が曇ると夏は必と夕立がして來る。中腹に窟があつて男學生が時に探險をする。お座敷から見ると、白い服が木がくれにチラ〳〵とよく見えた。アお姉様！また鴻の峯に學生が上つてよ、早く早くとお針してる姉をひつぱつて來ては、いつも〳〵音物の長い望遠鏡を戸棚からそつと出して、キヤツ〳〵云ひ乍ら眺めた事もあゝ幾度！そんなもので見るとお廻りさんにでも見つかつてご覽、罰金だよと、母はしかめ顔に半ば笑をまじへて制止するが、どうしてきかばこそ、大さわぎで二人は苦れを忘れてよろこんでいつまでも見て居た。しかし現在の如く海外にさすらひの身となつては夢にだに見ることの出來ない山景色、人といふ字を見てさへも堪へがたい悲が湧く。寂しい胸の中に時折鴻の峰を思ひ浮べては、山なき地にせめてもの山を作り山を置いて居るのである。

中學生が山登りするのを姉妹で望遠鏡で眺めて喜んでるとは、本場の米國婦人が三舍を避けさうなオテンビズムだ。それを笑つた位ですましてるお母様にも敬服した。(評)

滿願寺山

攝津　山口靜子

植物採收だから、先生と共に一行六人皆輕いいでたちで校門を出る。

午後一時頃の日光は察しなく、六人の頭を照りつけて、一番先に行く田鶴さんの巾廣のリボンが白く反射する。道を歩きながら先生が、此の邊はあまり珍らしいのはないがね、六甲あたりまで行くといゝのがあるよなんて、仰つしやる。行手は最明寺の瀧から滿願寺を目標に道は段々爪先上りに成つて、山の奥から涼しい冷たい風がすうつと來て熱した六つの頰をなでて行く。

山撫子が一輪名もなき雜草にまじつて居たのを、阪上さんが見つけて、折るのは可哀想だから根のまゝで提籃にしまふ。

夏菊や月見草、美しいの可愛いの、大分滿ちて來た。谷には絶えず水の音がする、瀧に近づいて來たのだ。美津さんが美しい聲で須磨の浦を歌ふ、とほつた聲が深山にひゞいて皆うつとりとなる。美津さんの得意の歌だ。

いつの間にか瀧まで來た。さほど大きくはないがやさしい瀧だ、どつどうど落ちては散る白いしぶき、いきなり皆草履をぬいで飛びこんだ先生も汗をぬぐつていらつしやる。

昔最明寺入道が諸國行脚の際に立寄つた瀧なんだつていふから、私は入道時頼の顏を種々に想像して見た。

暫く休んで、瀧の傍の急な細道を上ると又太陽がジリ〳〵とやきつく。汗がしと〳〵と流れる。皆な悪いかね、男生なんかこの阪を銃を肩に背嚢を背負つて四五度も驅けるんだ、やはり女は弱いね。と先生が仰やると、今まで無言でゐた、瀬野さんが、でも先生私は女だけれどこんな阪位、なんでもありませんわつて大變な勢

田鶴さんが驚いて居る。

阪を登りつめるとよく人が言ふ行基の足跡がある。こゝから行基が甲山めがけて飛んだのだと言ふ。岩に人の足あとが刻んである。阪上さんが私も一度六甲あたりまで飛んで見たいと言ふ、瓔様のくせに大變な事を言ふ人だ。

先生こんな所に居たら月の夜なんかいゝでしようね、ここで私がいふと、田鶴さんが靜かすぎて淋しいでしようと言ふ。靜さんこんな處でお暮しなさいなね、ほんとよ益々いゝ思想が浮んでよと、瀬野さんがいふ。いぢの悪い方ばかりでも、私は實際こんな處で自然と親しんでいつまでも暮してゐたいと心で思つた。

感興のフリュジネスなのが目につく、併し

濟願寺山から甲山へ飛ぶ位の勇氣があれば萬歲だゞーキニストが聞いたら歎ぶだらう。（評）

山の湯

幸子

一日目。朝五時頃に、母樣にゆり起されて目を覺ました。寢ぼけ顏して廐に出ると、町はまだ霧に包まれてゐた。筧から流れて來る冷たい水に顏を洗つた時、私は初めて目がハツキリしたやうな氣がした。後ろの竹林では頻りに時鳥が鳴いてゐた。

朝飯後、母樣と私は宿屋の女中に案內して貰つて町を見物した。

町の兩側の宿屋の二階の欄から、浴客が珍しげに私逹二人を見下ろしてゐた。肺病患者のやうな顏をした若い女もゐた。

午後二時頃、湯に這入つた。溢れる程いつぱいになつた湯の中へ身體を入れると、ザアと湯が溢れ出た。女湯には誰も這入つてゐなかつた。

二日目。一人で裏の山へ行つて白百合を五六本折つて來た。そして床の間へ活けた。

「母樣いゝ香りがしますネー」

「本當にのうー」母樣は何か小說らしいものを讀みながら答へた。

今までうつかりしてゐたが、硫黃の香が絕えず鼻をつく。

「家の中まで硫黃の香がいたしますね」と私が驚いた調子でいふ。

「これでも馴れると平氣でございますよ。然し金具の錆びるには困ります。」と女中はニコニコして話した。

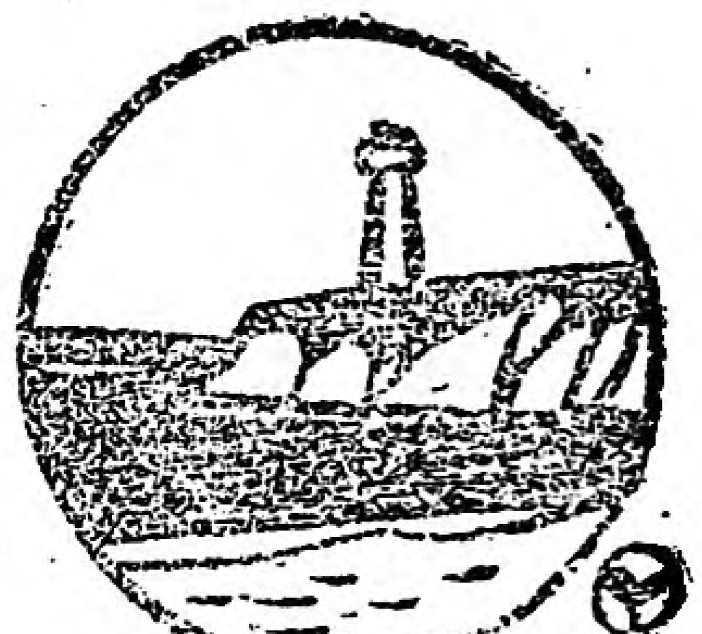
時々風が吹いて來て椽の欄にかけた手拭が下に落ちた。

單純な日記としては、相當に書けてある。

併し茶代の効能をひけらかして、宿屋で丁寧にしたとか、女中がニコ〳〵したとかいふやうな事を云つてるやうではマダ〳〵俗氣はなれがしない。（評）

山の言葉

○四合目は已に海拔五千八百尺、振鈴の聲は無音の谷を漂泊して、上になり、近くなり、下になり、遠くなりて、人は螺旋的に鈍歩し、霧は銀湍を噴いて霧地に直前す○爛々たる日は、白山ヶ嶽を跨いで西に傾き、不二は雲に倒生寫され、雲は不二を透影寫す。明白に輪廓と言はれ得るほどの物二條、不二を寢かしたるやうに、脚下の氷海にふはりと落つ。これを線と謂はむは、あまりに知に過ぐ、光と謂はむは、あまりにおぼろなり。たゞ水の如き刀痕音なく、乾面に生ずと言はゞ、或は可ならむ○自分は裾野が好きだ、三瓶や、大山のは知らねど、不二はもとより、淺間、八ヶ嶽、乘鞍、妙高の裾野は皆好きだ、裾野は魂の繪圖、心界の地圖、諸ろの色相の海圖、こゝに踏み入る間は、一世紀も、二十世紀もない、平等が他の平等と連つて只だ永刧あるのみだ○冬、中房の溫泉に入つてゐると猿が裏山傳ひに遊びに來る、揶揄ふと怒つて柴を投げつける、月の夜などは屋根の上でキャッ〳〵と戲けてゐる○群山は皆沈んで了ふ○彼等は雲の表に住む。（小島烏水氏の紀行文中より）



海

白羊選

石炭船

知多　榊原銀子

今、山の凹から出たと見るまに、太陽は五尺一丈と譯もなく昇る、そして恰度油繪で見る樣な薄雲の中をぬけて昇りきつて了ふと、あの眞赤な色も何時變るとなしに眞晝のに見る樣な白い色と變つてゐる。靜かな朝の海には、少しも大きな波がたゝない。淸い影はかすかな風にキラ〳〵と小さい波を、露にしめつた遠淺の砂に打寄せてゐる。三河の地一帶は朝もやに包まれて、松林と、松林よりもなほ薄く時々眼に入らぬ樣になる心とが幽かに眺められる。向ふの方の入江の渡船場では數町沖へ出た舟を、オーイオーイ、と呼留めてゐる。其の太い聲は靜かな海面をすべつて行く樣である。沖の方でも是に答へて、エッサ、エッサ、エッサの掛聲と、櫓をあやつる音がよく聞き取れる。沖に碇舶してゐた、石炭船が、不意に四邊の寂寞を破つて、汽笛をとどろかした。スコロクの廻轉される音が大きくがア〳〵と沖を騷がして、其の動搖が小さい波になつて岸をピチャ〳〵さした頃に、長い〳〵煙の尾を引いて船は出た。帆船は眞帆片帆を順風に走らして、あざやかな帆の取具合は見てゐる心地がよい、石炭船が見えぬ樣になつたら朝霧は晴れて三河の村々が手に取る樣にながめられる。千草は露を受けて草履の上迄ひや〳〵としめつて來る。遠い〳〵佐久の島や日間賀島が黑く水に浮いてゐる樣に見える、松林には名も知らぬ可愛しき小鳥が梢から梢へ啼き通つてゐる、農夫の濱田へ來る人と、道すがら行會ふても皆知合の人だから朝の挨拶も心地よく交される。島通の小汽船が大きな荷舟を二艘も引いて三河の方へ汽笛を鳴して走り去つた。

敢て眼光の犀利を稱する程でもないが、瑕瑾のない書振が一寸目を惹く、單純な報告に止まらないで、もつと深い所を見て書いたら、可かつたらうと思ふ。（評）

磯風

越後　小百合

さつき迄赤くなつて居た岬の鼻はもう暮れた薄寒い磯風がサワ〳〵と芝草をゆすり起して居る。

屠牛場の新らしい門に誰だか立つてる。人間の血ぢあない、どす黑い獸類の血がめぐつてるのだ。獸の斷末魔の斬るやうな叫びを、夢の音樂と聞く心に此暮れ行く海がさびしいかしら！

あつもう少しで足を洗はふとした。白い泡がチプ〳〵と音たてゝ靛のやうな沙の中に吸はれて行く。サラリ〳〵と磯姫の草履のかるい音がする。暗い水の上をギイギイと眠るやうな調子をとり乍らテンマが滑つて行く。あゝ寂しい。總ての物が暗い〳〵國に沈んで逝くのだもの、いくらあせつたつて何となららう。愿麼さびしい晩にあの暗い沖を過る船があるかしら……變な形の雲が頭の上を這つてゆく。黑い裳の海の神がむかうで招いてるのだ。底氣味の惡い海の夕暮。

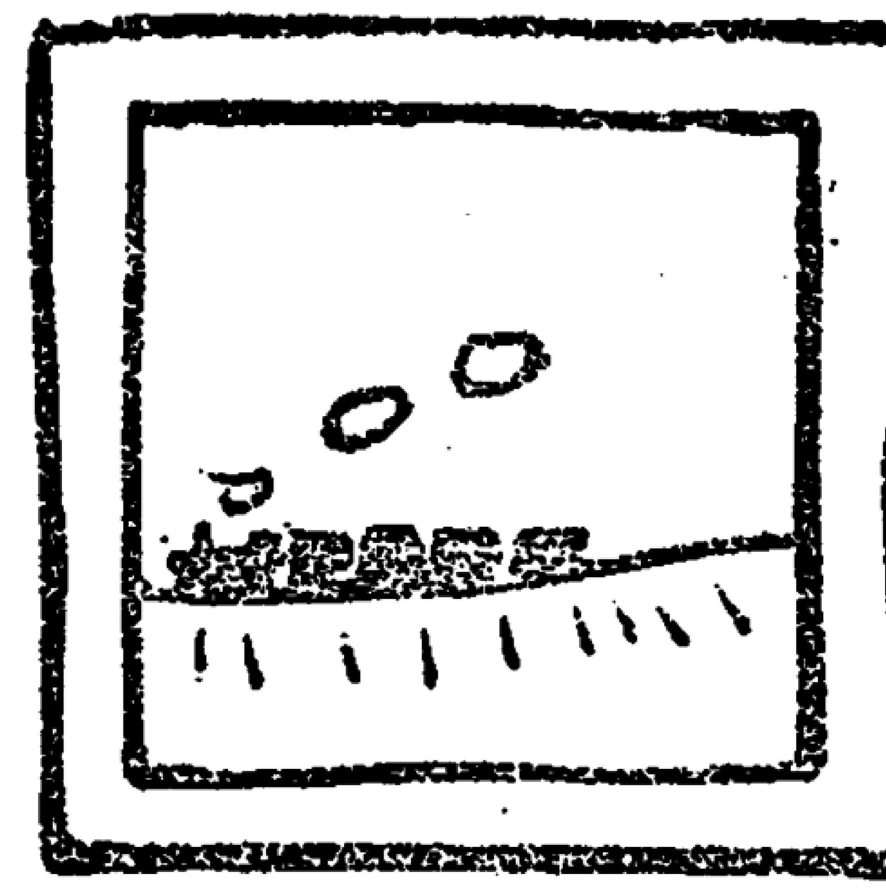
一編の散文詩である。快い滑るやうなミューヂカルな調子がいゝ。（評）

雨の磯邊

常陸　中島はな子

病み上りの人の足音のような力ない雨は細々としめやかに降りそゝいで、白い砂地に泌み込んで了ひます。私は渚近く足あとの少ともない所ばかり拾つて行きますと、誰も歩かないのに自分が前を越して、斯うして辿つて行くのが何となく嬉しく、ふさな誇りをおぼえました。間なく波が寄せて來て、ザブリ〳〵と心地よく私の足を洗つては、又もと來た道を引返して行きます。私はヂッと立つて遙にはてもない海の面を眺めて佇んで居ますと、斯うして唯居るのが餘りに空しいやうな氣がしてなりません。と耳もとで「今のお前には力が足りない、來るいつの世かを待てよ」と何者かゞ囁く樣な氣がしました。うつとりと私は夢の世に立ちました。後方で花さん花さんと呼ぶ聲がしますので、振り返つて見ると、雪江樣がうね〳〵と曲つた大松の彼方からかけていらつしやる。花さん貴女あんなに呼んでも聞えなかつて、と特有の笑くぼを寄せてニッコリなさる。二人は云ひ合はした樣に步き出しました。雪江さんは物思に沈んでいらしやる。私は始終海の方に目を放しません。

いろんな傳奇的事實が列べてあつたが、削つてこれだけにした。何等かの感想を現さうとしてるのだが、惜い事には筆がそれに伴はない。（評）



心の離散

筆子

嫂は加減が惡いと云つて起きないので、母が竈の下を焚き付けて、其處へ私は起きて來た。

曉方の風はさ霧に攪んで清涼な夏の大氣が沁々とする、下水の向ふは青々と草が延びて、ひよろ長い楓の梢からギラッとした、日光が見える。

濛と附木の硫黃臭い煙りが上ると、お釜の下はちよろ〳〵炎が立つ、枯枝や折の壞れを燃べては具合よく火勢を保つ母の背は大分屈まつて見えた。

「嫂樣は可けないんですか」かう云つて私は眠くつて仕方のない顏を暫く風に曝してゐたが、ふとそゝり立てられる樣な氣がして、急ぎ外廻りを掃き初めた。お釜の火を引く、掃除も濟む、狹い臺所は味噌汁の匂ひや暖い御飯の湯氣が籠つてむつとあつい。長火鉢の傍で母と私がお出ばなを呑んで居る處へ兄が茫然と出て來て「彼は何だか腹が痛むさうです」といふ。

「さうかね、それぢやまあゆつくり休むが可い」

母はそれつきり、精しい容體もお問ひなさらぬ、そして三人は默つて朝飯を喫した。

近頃齒がゆるんだと苦味さうに掻き込む母や、常住むつゝりとした私なぞは、屹度兄にも物足りないのだ。あんなに默つて被入るのは、大方若い力が一ぱいに漲ぎつた晴れやかな嫂さんを思ひ浮べてお出なさらう。思ふ事云ふてと愚痴に過ぎないけれど、曾つて兄は私に向つて、嫂に對するほどの柔しい言葉を掛けて下すつたらうか、さう思ふとすぐ私の眼は濡れて來る。急にとりつめた心になつて、殆んど無意識に箸を動かし

て居た。
「餘り運動が過ぎたのだよ、屹度疲れなのだあね」
「何那麼事はない、昨日はさう歩きやしません」
「さうでもあるまい、暑いのに飛鳥山まで歩きや隨分ぢやないか」
母と兄とは頻りと、こんな會話を繰り返して居ると思ふ間に兄は立上つて彼方の部屋へ行つた。何やら低い聲で嫂に言葉を掛けて被入る、勿論こゝ迄聞えはしないが、餘り過敏な私の神經は何となくそれが不安で堪らなかつた。確乎と袖を啣へたが頭が非常に感傷的になつて



……あゝ奈何しやう、忘れやう〳〵、思ひ切つてざぶざぶと水音荒く茶碗を洗ひ始めたもの〳〵、遂に幾度か前掛で眼を拭いた。
此日珍らしく兄は獨りで洋服に着替へた、而して出しなに「阿母さん、何だか夏蜜柑が喰ひたいと云つて居ますから買つて遣つて下さい」
母は何と答へたか恐ろしく格子をガラリとあけて、ふいと兄は出てお了ひなすつた。
「ひとッ、何をあたして居るのだらう朝つから」
いま〳〵しげに呟く母の様子が、又一つ胸に響ひて私は不愉快で苛々しなが

ら、
「嫂さんにお粥でも上ましやうか、ね阿母樣」と聲を掛けると、母は振向ひて、
「何だか、夏蜜柑が欲しいのだとさ」
「さう…私また暖まるのが可いと思つて、もうお鍋へ御飯を入れ了ひましたの」
「いゝわね、お粥を喰べるだらうから」
「それだつて、嫌なんだと惡いぢやありませんか」
澄まないと知りつゝ突かゝる樣な物云ひして、
「私、買つて來ましやう、さ……」
水迄入れたお鍋を持てあまして、わざと億劫さうな掛聲をしながら、掛竿の風呂敷を採らうとすると、
「何にお前が行かずとも可いよ、阿母さんが行くから本當にお腹が惡いと云ふのに、水ものなんか可いのかねえ」
獨語をなさりながら、母は低い水下駄を履いて出て被行るのを、私は何も云はずに凝と見詰めて居た。

＊　＊　＊　＊　＊

綺麗に皮を剝いて、枕もとへ持つて行つて上た。
少しづゝ雨戸を細目に明けた間から、眞晝の日が强烈に差込んでゐる、其あかるみに新らしい簞笥や鏡臺が著しく私の眼に付く。解け込むやうな白粉の香の中に紅友禪の搔卷、黃縞の蒲團、埋まるやうに嫂は仰向きになつて眠つて居る、少しく髮が亂れて輪廓の正しい浮出た白い顏を暫らく眺めて居た。
また淚が…不覺の淚が…。如何にも美しい血潮が通つて居さうな其御肌、羨む內にも反抗的の叫びが生じて、やゝ甲高い聲して、
「嫂さん、嫂さん」盆を突き付て、もう一つ呼んだ。
「は…」嫂は細目をあけたが吃驚したらしく、飛び起きたのを、すかさず、
「あの夏蜜柑取つて參りましたよ、好でざんすか此處へ置きますが」
「え有難う…後刻戴きますから…」
「お厭？ではまあ置いときますからね…あの重湯は如何？」
「何も欲しく御座いません…奈何も澄みません」
「さうですか」私の聲は冷たく走つた。
茶の間へ歸ると「奈何したね」と待つて居た體で母が被仰るので、「何に大して惡いといふのでは無いのでせう、お喰べなさらないわ」
「それぢや御勝手になさいましだ、ねえ」

「え」と私は意を得た樣に答へたが、もしや私も世間並の小姑の非を踏では居なからうか……。一々反省して居ては到底慰安の地を得る事が出來ないけれど、今少し私も柔しい言葉を掛ければ善かつた、あれでは餘り弱點を吐露しすぎた樣な……。

無言で私と母は縫物を取出した。遠くで底淀んだ重苦しい物賣の太皷が聞える、草も木も乾燥ぎ切つた、私の額際からは汗が浸染む。

悲愁の極刑にかゝつて人間故鄕を顧るとか、私は以前を憧憬した。わが悲哀は春暮れ、雛罌粟の赤い花片が頽れゆくやう……唯何事も無常關門を脱すべきではないけれど、逢ふ別れのはじめわが愛するものは、すべて離散して了ふではないか。

なつかしい日暮の里よ、舊き住宅は今頃螢とぶ植付頃の稻田の畦、大きな月が浮ぶ堀割の邊、何等の顧慮羞耻もなく人と袖を連ねて歩いた折は、私が過去美しい歷史の一節である。それも須臾にして有爲轉變、まだ赤いリボンを蝶々に結んだお下髪の少女は、忘れもせぬお盆の十四日、小さな硝子の燈籠さげて邸の母屋門――塀遠ざかり行く荷物のあとから、狹い家へ引移つた、冷たい壁に雨染のあと見た心の寂寥。それからだん〳〵私はこんな女になつて了つた。

女は奈何せ一生お母樣の手許には居られませんぞ、いつまで孩兒なんです、私と共に行きませんか、契つて貴女に幸福を與へます……人は幾度も〳〵進めた、けれど惑ふた。本當に惑つて了つた。爾等二人の主に使ふること能はず……されば恩愛と情實、いづれに服すべきかを知らなかつた。

軒行燈影暗き安宿の一間でも、母戀しいと感じた時はもう破綻であつた。わが愛するものは行つて、今に兄樣に嫁でゝ來てごらんなさい、貴女は慘澹なものだ、人は最後に這麼ことを云つて、別れ去りし海外萬里、お互に里程も心も隔たつて了つた。

あはれ妹の身は、兄の御機嫌、嫂との折合、大切に身をないものに働けばそれで可いではないかと、世間は云ふかも知れないが、彼人の最後の言葉が事實となつ

て、踏まねばならぬかと思ふと、人の情をむげに捨てた私には、身を切られるやうに愁らいのだ。吾尊き誇をも磨滅して了ふが口惜しい、それ故私はどうあつても現在に甘んずる事は出來ない、何でもいゝ何でも好いから、新らしい香がなつかしい。私を何卒この束縛から放して欲しい、人に聞えて彼自らが豫言の適中に依つて笑はれるのが愁い、否々それより一層憐まれるのが私は苦しい。突然ヒステリーの女のやうに母にあから樣に打あけた。そして「私は兄樣に遠ざけられて居ます、私なんか什麼なつても、野末の露になつても奈何したつて可いのでせう、皆に‥‥肉身からも見捨てられるかと思ふと、恐怖いわ、斯うして生きてゐるのが片時でも怖いのですね」

私は眞面目になる程母は、それはお前の邪推だよ。あゝどつち向いても厭な役廻りは母樣なのだ、と、いきなり縫物をさし置いて、俯眼になつてお眼鏡の曇をお拭きになるのを見ると、私はもう、自我何物も無く三歳の小兒のやうに其お膝に抱きついて、大泣きに聲をあげて泣きたくなつたのである。

私等がかうした心の悲劇をよも御存じはあるまい、すや〳〵と嫂は尙夢の中、兄はお勤め先の机に倚つてどんな理想を畫いて居らう‥‥。

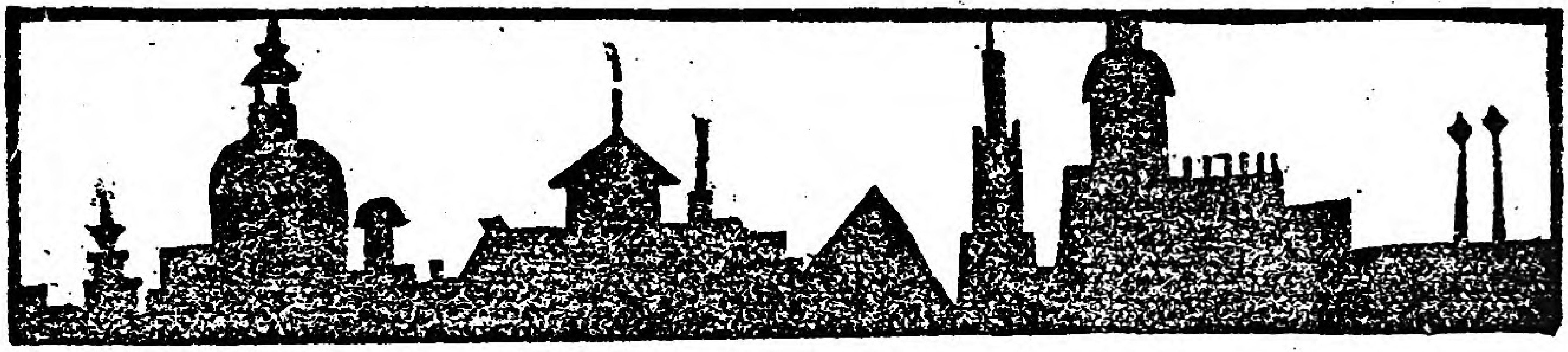
月見草の花が咲く時分、兄は急々とお歸りなすつた。が、夏外套の中へ何か蔭すやうにして、私と摺れ違つて嫂さんの許へ被入つた。

母は不快なお顏で、私を御らんになる、私は眼をあげて、同じ意味をお答へした。兄はやがて手ぶらでやつて被入て「暑いですね」と云つたまゝ煙草を召上る。それぎり妙に三人ながら白け渡つた。

何卒小姑根性と笑はずに云はせて欲しい。

* * *

翌朝全快した嫂は水々しい夏蜜柑を母の前に出して「昨晩買つて來て下さいました、お母樣召上りませんか」と仰有つたが、其夏蜜柑はまだ茶簞笥に乘つたまま幾日も〳〵埃を被ぶつて居る。



生の斷片

眠れる花

河岸の通りで子供がボール投げをしてゐる。私はそれを見て居た。彈力の強い充實したあの音がどんなにこゝろよく耳に響いたか、此心にも張り滿ちて溢れるまで、赤い血汐を盛つてみたい。

私は此心の覆へる程の驚きを知りたい。大きな聲でさけんでみたい。解決のつかぬ心を引き破つてしまひたくなつた。いくらはしやいで笑つてる時でも、ふと心の針の先のやうな鋭いものに觸れるとすぐに氣が滅入つてしまふ心の落ちゆくさきは寂寥なのだ。繕はれざる心の空虛よ。今迄此心にこぼれるほど漲つてゐたものは、いつのまに熟した木果の落つるやうにことごとく心の梢から落ちつくしたのだらう。

投げつけられたら彈き返すほどの強いちからが欲しい。弱い意志と脆い體と、私はよわ〳〵しい自己の姿を大勢の人の中から見出したとき、限りない失望を覺えた。私は心元なくて、此心に自己の心ひとつすら托されない。

本鄕の通りを俯いてゆく心弱い態度を。人は世馴れないからねえ、と云つた。病がちな身をたのんでなほ生活と鬪はなければならない私の決心は、多くの人の同情を惹いたものであつたらう。しかしいくぢがなかつたのだ私は。愍むといふ人に、平然と冷たい瞳を向けて見返してやりたかつたのだ、怖ぢ易い昨日の心を冷笑したかつたのだ。けれど、此今の自分をどうしやう。現在のわが態度を私はみづから嘲けつてやる。自分の復讐は之れより外にない。

（あるとき）

たゞなやみつかれました。太陽に照らされる夏の河原の石のやうに、燥きすさんだ白晝を送つて、夜のふところに疲れた晝の心を落す。そして沈みゆく月をまち乍ら暗い部屋にねむります

暗の底に澱む滓のやうに、感興は振ひ起してもふるひ起してもすぐ沈む。私の精力はほろんでしまつたのでせうか、この赤い血汐、肌を突き破つたら出ませうか、肉を裂いても若い熱い血汐が流してみたいやうです。

私の胸はなぜ皷のやうにとゞろかないのだらう。脈脈に流れるちしほをあらはに外に流してみたいのです燃ゆる、輝く世に入つてゆきたいのです。

けれど、天はとほい、わが踏むべき青き草の野はいづこにあるのでせう。（ある夜）

自分を繋げるものもなくて、心の孤獨を守るとならばそれもよろしい。繋がれた身と囚はれた心を持て何處に向つて奔らうとするのか、私は此ごろの自分がわからない。

或時深い〳〵憂鬱の底に沈んだ、慰安を宗敎に求めやうと思つた。そして塵だらけの聖書を取り出してよんでみた。白い石段をのぼつて會堂の中にも入つてみた。キリストの敎を説く人の言葉は尊いものであらう。しかしあの言葉にのみ熱を持つた祈禱が厭だ、僞善者の態度が厭なのだ。あの人達に果してあれほどの信仰が眞にあるものだらうか。

聖壇のほとりにもいとはしい空氣が流れてゐる、自分の前に曝露された信者の家庭の內部が、今迄あれほど暗からうとは思つてゐなかつた。私には信仰がない、それに宗敎なんて私には餘り重い大きい謎だ、私に解らうはずはない、此ごろは却つてお伽話などに興味を持つてよんでゐる。眼にも心にもいたくしみる此ごろの小説が厭になつた。（曇りし日の午後）

たれにも見せたことのない、自分もしらない眞の姿が見たかつた。けれど白晝の明るい室で重いよごれた冬のきものを脱ぐ時、魂はたえまなくふるへた。だゆたひながら、怖れ乍ら、上着のそでも長じゆばんの花もやうも、みんな疊の上にぬぎすてた時、ふと、鏡に映つたみにくい自分のすがた、何もおほはぬ素肌の胸、あわてゝ私は顏をかくした、けれど鏡には一層醜い姿がうつつて居やう。

私ははづかしさ悲しさに、纏ふ衣なき體を室のまん中にうづくめて、顏を兩手にうづめたまゝふるへた。

（あるまひる）

「私はもう空想が出來なくなりましたよ。」といふと、「否、あなたはまだ夢を見てる人なんだ、醒めたさめたと云ひ乍ら醉つてゐる。」と仙子さんが或時こんなことを云つた。

座ぶとんや茶器の散らばつた室の中央にすわつて、ぼんやりいま歸つた人を思つてゐた。

私は覺め切つた人となりたい。邦枝さんがいつか、灰色が人生なのだと云つた醒めた人の世に明るい光は永久にさゝぬのか、灰色のみちを一生苦しみ乍ら、行かねばならないのだらう。

夢みる人の世のみ美しいならば、永久に我に來れ、夢よ、十年の暗き日を行かんより、刹那の燃ゆる歡樂を希ふ。死は凡てをつぐなふことのできるものではないのであらうか。



私は今迄、自分はすくなくとも世の中を眞面目に見てゐる一人だと考へて來た。然し今は其眞面目も當にならない、私に人を冷笑する權利なんかあるものか、みづから自己にむちうたねばならない。もう私は自分を信ずることもできなくなつた

（語りつゝせしのちに）

水無月なかばの夜はおほく曇つてゐた。

せゝこましい店の並んだ露路口で、大勢人群りがしてゐた。〇〇亭と看板うつた前には、義太夫溫習會の白い紙がびらびらさがつて居た。一年まへにこの園が――三味線に

交つて太い肉聲が聞える。私はそこをすりぬけるやうにして通りへ出た。水菓子屋や小間物店などの夜の美しい色彩は、水色の瓦斯の光りに更に欺かれたやうな輝きを増す。

新しい鏡臺が柱のそばにあつた、部室の隅々は暗かつた。あかるいランプをはずにうけて帯のはでなKさんが座り、それと對つてHさんが居た。私は暗い鏡の前に、はぐれた心をたづねかねて柱によりかゝつてだつて二人の話をきいてゐた。

さびしかつた。

水に落した一滴の油のやうな性格を思つた。

一人別れて町をゆけど、心は終になぐさまなかつた。

私はたうていあの人達の中に入ることは出來ないのだ、私の世界は他の人と餘りにかけ離れてゐるもの。

輝く夜のまち、それもぬかるみ多い線路のぎら／＼石油の浮いた跡をふみ乍らながくあるいた。孤獨、孤獨と何者か頻りにさゝやく聲を悲しく聞きつゝ。

（上野を歩みて）

私は此心の底をぢつとみつめて居るに耐へられない

安らかなる夢とわかれて、新しき生涯に旅立ちし日のさかづきよ。理想をのぞみて歩みつゞけし日はながけれど、振りかへりみる過去の足跡は、あゝ。

はてしない長い旅を思ひやすらひを思ひ、路傍の石に腰かけて私は長い吐息をついた。わがみちは、わがゆくみちは。

青き野はい、繫がれた身はたゞ犬のやうに引つぱられるまゝ私はどこまで行くんだらう。

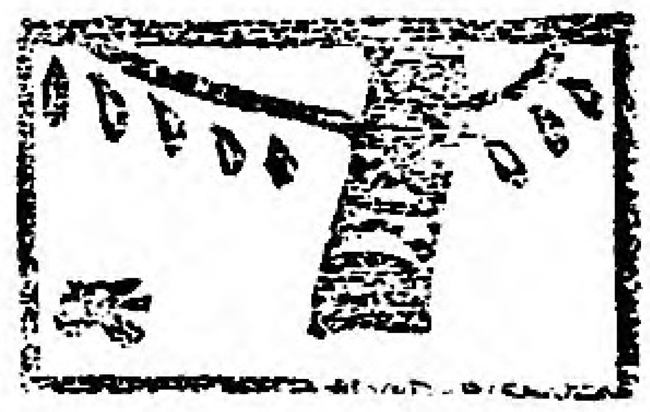
（灰色の雲重なる日）

記者より

▲題の變つたこと。『新文章』の諸作は本誌前號の廣告に出たのと題がだいぶん變つてゐます、讀者の不審を避ける爲め、變つた分を擧げますと「熱い息を休めたい」が「一呼吸」に、「シグナルの火」が「七色の虹」に、「寢への初め」が「寢息」に、「塵埃」が「淋しい道」に、「清子さんの日記」が「學生の都會」に、「針と庖丁を持つた女」が「落日のかなた」に、「郊外の夏」が「五月の水邊」に、「繪筆を執りて」が「繪筆」に變つたのです。それから執筆婦人の姓名は廣告通りです、未だあれ以外に増加してゐる方は本誌で御覽になる通りです、匿名と變名が多いものですから分らなくなつてゐるのもありますが、鬼に角間違ひはありません。

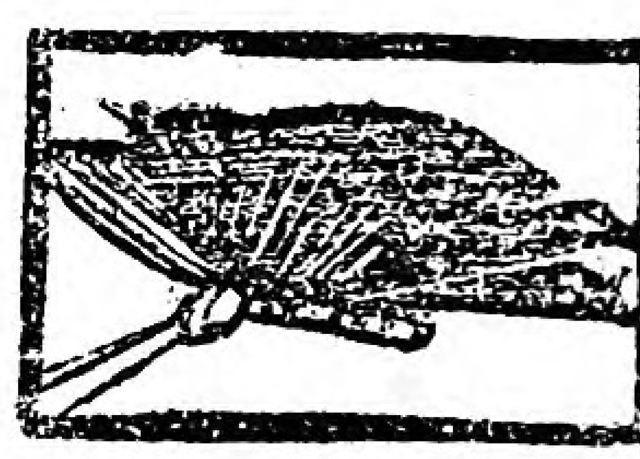
▲課題のこと。課題は發表してある通りですが、比較的傑作に乏しいやうです、山、髪、浴場などは宜い方でせうが、海は甚だ振はぬ。顔も豫期したほどではなかつた。劇場も然う振つた方ではない、何ういふものでせう。

▲不注意のこと。皆さんに向つて一つ御注意するのは原稿の文字です、字體の上手下手ではない下手でも正しくさへ書いてあればよろしいが、漢字のまちがひ、假名づかひの亂暴、ふりかなのなげやりの多いのには困ります、末技のやうですけれど、やはり然ういふ細かい處へも注意の達かぬ人は、上達も遲いやうです。



別れてゐる間

闇夜鳥



　昨日お別れしてから、五十分間の汽車の中が、可成り淋しう御座いました。Ｋ驛で下りた時には、まだ暮れきらぬ街に灯がついて、細い雨が降てました。私はもう少しでいゝから歸らずに、何處かへかくれて彷徨いた居たい樣な氣もしましたよ、何故でもありませんがね――そのくせ、いつもは何と思た事もない門口の瓦斯の灯迄が遠く俥の上から、なつかしいものに眺められました。家では母樣始め相變らずで、Ｔ坊Ｆ子盛にハシヤイでましたし、冷い眼のＴ子は相變らず冷い態度でした。恰度お店からＳ兄が歸てましたがね、少しの間に大變氣の利いた濱ッ子らしい姿になりました。けどやはり例のソッケない皮肉らしい風で、何を云ても、フヽンと云た眼付きをして見せるのがにくい樣でした。いつも乍ら底のしれぬ程冷い、怖い樣な、癪にさはる樣な、其くせ何處かなつゝこくもある樣な兄だと思ひました。小説家の白鳥と云ふ人もかう云た風ではないでせうか！ですが一面から云へば、Ｋ兄よりよいかもしれません、無論立場がちがひますがね……要するに我家だなあと思ふ位相變らずです。父上もまだ御旅行中ですし、目下の我家は可成り氣樂で放縱ですと云へばＫ兄に就てもお咄ししたい事があるのですよ……Ｓ兄を見るにつけつらく私達八人の兄弟姉妹が各自突飛に違た性格を持て、それが或程度迄烈しく自己を思ふ者が多い樣に思はれます……たしかに他所の兄弟とは異てゐるぢやありませんか。これから誰が何う云ふ者になつて行くか樂しみにも思ひますけど、私達は、どうも妹等に蹴落されて了ひさうですね……ですが那麼妹と比べて何うであらうと構ひません。自分は自分一人で、自分の行きたい道を歩いて、自分一人を自分で守てゐ樣と思ひます。一生懸命でね……Ｔ子等私と云ふ姉を何と見てゐてくれるのでせう？グウタラな放縱なナマケ者だと思てゐるのでせうか？私はあ

の、いやが上にも落ちついた、冷たい程の眼や態度を見ると……そしてあの強い嘲笑してゐる樣な樣子を見ると堪らなく憎くなります。それの烈しい時には、口惜しさがこみ上げて、泣き喋舌りに喋舌てやります。それでもT子はますく冷く落ちつくのですもの……殺してやりたくなります……私は此間も申した通り、此頃はもう誰れの事を何と思ふのも厭やになりました兄弟だつて友だつて那麼者が何になるものか……誰の事をも賴るまい、自分は當分一人きりとさう思てゐます……けど私は彼の樣に何にでも動じない強い女になりたくはありません……此儘の女でいゝから何でも自分の一生を通して、放縱に伸々して生活したいと思ひます。男でお金があつたら何んなにでも歡樂に醉へるでせうね。けど烈しい歡樂のあとの寂しみと云た味もしみぐ感じられませうけど。それは恰度私達が一日芝居の中の空氣に醉てゐて其芝居を出て眞面目な忙しい世間を歩く時の心……あゝ云た寂しみと似てゐるかもしれません。そんな事よりお咄せねばならぬ事がありましたつけ。それは女子文壇の誌友會の招待狀を戴いた事です……無論二人の宛名で……私は嬉しく思ひましたよ。出來る事ならあの文才の豐富な若い方々の樣子を垣間見る丈でもねえ……もう一日自家に私も泊てゐたら二人して出席して見る氣になつたかもしれませんがね、貴女一人では淋し過ぎるでせうし……あきらめませうよ。河井先生へは私から御禮を申上げておきませう。今日はこれでおしまひです。では御返事を待ちませう。（五月五日ゆう子より）

　早速のお手紙でありがたう、遂々又斯うして離れて了ひましたね、無論長い別れぢやでざいますまいが、それでも別れて了ふと淋しいやうなきがするぢやありませんか。私はあの歸りにたつた獨りで、私共の好きな××街を灯のつく頃迄歩きましたよ。矢張り雨が降てましたが、其れでも××街ばかりは相變らず賑やかで、粗末に建並だ商家の小店をてらす赤い灯も何となくなつかしい思を誘ひました。例の青い瓦斯の浮世繪の影にかくれて往來を窃とのぞいてる、黑い眼の白い顏の貴女が、アーシヤなど云た繪草紙店の女の兒が其夜も浮世繪の影にかくれて淋しさうに座てをりました！。いろくな事を思ひ乍ら雨降る街のかうしたよるをいつまでも歩いてゐたいと思ひました。私は貴女との外は誰と歩くより獨で好きな事を思ひ乍ら好きな街

を歩くのがうれしく思ひます。其晩でしたよ、池の端の自家へ中洲のMちやんがきてたのは。恰度下宿屋を開業したての、年雄さんがきてる、美術家の小林がきてる、其れ〴〵色の異た人たちですね、一番光てるのは矢張りMちやんですよ。何と云てもね、羨しうござんしたよ本統に。眩惑する程の濃い色彩の中へ自己を置いて、苦痛も悲哀も濃厚な色 強烈な香に消されて絶えるひまなく賑やかで酔てゐられる、美しい女の浮いた生涯をしたはしくも思ひます。少しの遺産を大切に握つて、田舎へ引込み小學校の訓導位で終りたいと云つてた年さんが、少しの間に單獨で下宿屋を經營する氣になつて野菜から切身の相場まで知る男になつたのですからね。若い人の胸はいつまでも同じ處にぢつとしては居られぬものでせう。胸の血が動き初めたら其のまゝに身體を動かしてゆけたら屹度淋しくはないんでせうと思ひますが何故私たちには其が出來ぬのでせう……いくら飽きても仕方がありません、思ふ許しで何うも出來ませんもの。身體がひどく弱いんですから、其に放縱な質ですし、克己心はなし、思ふこと、感じる事許し多くて何も出來ぬ性なんですから、何ぞ意味のあるらしいライフを見つけ出して進でゆくなんて、自己のためとは云へ、そんな立派な努力が出來る人間ぢやないんですね。八人の同胞の中でも私共みたいのは一人もありませんよ。理智の勝た冷たい頭のT子はどんな女になるでせう。精力の旺盛な、頭腦の明晳なF子は何う云ふ女になるでせう。すべてに於て我〱我より勝れてる渠等の未來は、兩親始め誰でも樂しく期待してる事でせう。其麽事は斯うした張のない女の胸に何の刺戟も與へやしませんが、たゞ飽きてきたのに動けないのが困ります。と申せば先日女子文壇の誌友會に案内を下さつたとか、私も意外な樣な嬉しさを感じました。ですが獨では餘り淋しすぎますし、貴女と二人なら默てぢいと座敷の隅に座てゐても淋しかありませんが、私獨りでは、其にいつも貧弱な頭腦で大膽な創作なんぞしてる事が他のお歴々に對しても面伏せのやうですし。其にあゝした文學的の會合には進だ思想新らしい空氣が流れて居ませうし美しい柔かい日ですが私は今其に刺戟されるのは怖いやうに思ひます。遠くから眺めてるのは好いけども、ふれたくありません。株式相場の符調にも耳を傾ける心になつてきた此頃、出來る事なら中洲の人の帳場格子の脇を手傳てもみたく思ふ此の頃、何うやら捉らへ處が出來てき

たらしい此の心地を又新らしい空氣にゆすぶられるのは怖はいと思ふのです……兎角河井先生には貴女からよろしくお禮を申上て下さい。あゝ本統に木挽町でも久松町でも好いんです、赤い毛氈の棧敷へ座つて、本釣や木の音に胸をどらして、音羽屋源之助のする、默阿彌式の世話ものにも充分の興味がもてるのですから、本統に此のまゝでいゝんです、何も考へたくありません、感じたくありません。古い人間でも淋しい人間よりはよござんすもの、たゞもつと賑やかでもつと色を濃くして、自己の線をクッキリ表はして暮したいなんぞと思ふのです。何にしろ淋しいのがつらいのですから、要するに酔生夢死を願ふ女になつて了たのですね。あゝ大變に長く書いてつかれて了ひました。母上始め皆に宜敷、H叔母にもね。（五月六日夜T子）

長い事手紙を書きませんでした……別にわけもないのですが、何となく書かなかつたのです……そして貴女も、いつになく、ぢつと沈默してお出でゞすが、そこに何か、私を忘れる程變た刺戟でもあるのですか？と那麽氣もしてゐますが、私の方では、餘り例の通り相變らな過ぎて困ります……。此頃は小説もよみたくなし、芝居も見ませんし、手紙をくれる人もなし、外を歩いても、胸を跳らせる樣な心配もなし……何だか全で眠た樣な、堪らなく張りのない日を送てゐます……。ですが今は好ましい時ですね、かうして一人でゐると猶泌み〲物が思はれますよ。去年の青葉の頃も二人は離れて暮らしましたつけね……。去年と云ふ年は私達には割合ひに印象が淡と思ひますが其癖去年の日記は繰るに快い軟い感じがします……あゝ此度貴女と逢ふ時には私等の好きな放縱な快活な夏の世界になつてゐるでせう……夜と云ふ事と共にさま〲な連想が湧きます。K兄の事も思はれます。美しい月夜の晩でしたね、貴女とK兄と私と三人で、水の樣な葉山の夜風に吹かれ乍ら、夜更る迄涼臺で語たぢやありませんか、彼時には何だかK兄の云ふ言葉が、さも現代の小説家でも云ひ相な、新らしい事の樣に思へて、自分達ちも興にのつて、云ひたい三昧な夢の樣な事を平氣で安心して語り合たのを覺えてゐます……K兄はあの頃盛に獨歩先生が好きでしたつけね。私達もですが……。而してK兄はます〲あゝ云た思想の傾向が烈しくなつた事を、私は今悲い樣な痛ましい氣がするのです……此間の手紙に書れた文字を私は何んなに悲し

く讀みましたが「御身等は女なれば、まだしも、生は如何にしても父の後を相續せねばならぬ、重き責任あ る……云々」と。而して、もし寧そ文士か坊主になつて了ひたい。自分には何と云ても、規律正しい勤人の生活には堪へられ相もない等と云てゐるのですもの……私はあの勤勉な實着な青年で通て來たKが何うしてかう變たかと思ひます……之も過渡時代に起る一種の産物かもしれません……つまりふれたとでも云ふのでせうか？何しろ、K兄をわけて信頼し給ふ母上を思ふと痛ましさに堪へません……昨夜はS兄が財布が空になつたとて一寸歸て來ましたが、何處迄太つ腹な、而して理智の勝た男でせう……寧そ株屋にでもなればよいと思ひました……此兄の方が男らしいと云へば云へるのですね……。さうして見ると私達は女でよかつたと思ひますよ……男を賴よる女で……。

獨歩先生の「操」と云ふ小説を思ひ出しました。あの中のお靜と云ふ女が私は何となく好きです……貴女は何う思ひますか？私は自分が體質も性格もしみぐ弱い女だと云ふ事を時々痛切に思ひます……あゝ今日は夏の風の吹く空の蒼い日ですが、私の腕はやつぱり痛みます……ではこれで失禮します。（五月廿八日朝ゆう子）

可成久振りのお便りを嬉しくよみ候。二人にしては二週間以上の沈默は、隨分珍しい事でしたね。私もわけもなく書かなかつただけです。何の刺戟もありあしません よ。ですけど、もう空の色、日の光、すつかり夏ですね。夜に美しい夏には思出の多い。私たちもまだ若いんですよ。私たちに嬉しかつたK兄の思想は、K兄に取ていたましい事だと思ひます。わけても七人の弟妹の頭に生れてゐた事がK兄のみならずM家全體の不幸ではないかと思います。或はS兄の方が世間並に成功する男かもしれませんよ。其につけても實に私共が女であつた事は自分でもホッとしますね、賴る者さへあれば生きてゆかれるんですから……ですが其麼顔は他に見せぬ事です、恥しいんですよ。何しろ虚弱で困つてます、此二三日前から又例の病で就床し例の室ですよ。欄にかゝつた簾が午後の風にあふられてパタンパタンと音をたてゝをります。此頃の風は軟かく胸に泌みます。貴女も相變らず腕の病お察し申上ます。序の時にセルを送て下さい。左樣なら。

（五月廿九日池の端の病床にてT子）



五月の水邊

長曾我部菊子

「泰西名著集」を持つて、裏の川岸に出た。

潮がさして、水が増して居る。下流から、水草の緑の濃いのが上つて來て、漂うて居た。ゆた〳〵と風も無いのに、水が此方に寄つて來る。

舟はいつもの通、四艘もやつて居た。河岸の杭の側へ板を渡して、通路にしてある。二つ目の舟には、舳の方に竈を置いてあつて、釜がかゝつて、火がとかとかと燃えてゐた。

其のやうな光景を前にして、私は、柳の若い樹の斜に幹を延ばして、水上に枝を腕の樣に張つてゐる陰に立つた。ツルゲネエフの「狼」の四ペーヂ目を開いて低い聲を出して讀んだ。

柳の木の外に、河岸には、榛の林がある。其枝毎から、黒い毛蟲が、絲を引いて垂れ下つて來て、ブランブランとしてゐる。青葉の色は濃く淡く重疊してびろうどの幕のやうに新緑の河畔を圍んでゐる。

河面は少し、油を流したやうに澄み切らぬ色をしてゐたけれども、對岸も、此方の岸も、木や草の輕快な形が、くつきりと映つてゐる。時々風が吹き流すと、水底の影も、河畔の現も、一時にざはざはと騷ぎたつ。其時、思はず、私は話したくなつた。誰にと定つた人ではなし、たゞもう、胸一ぱいの爽かさを披瀝して

「私は幸福な女であつたのですよ。」

とかう、くりかへして云つて見たかつた。

小波が寄せる。私が、よむ毎に、さも愉快さうに、調子を合せて、搖れて來る。

私は、興に任せて、一歩をおくり二歩をかへし、二歩をおくり一歩をかへして、面白く流讀した。

恍然と目を上げると、㊂と印のついたまだ新しい白帆の大船に、欸乃を濁みた聲でうたふ男が乘つて、私の目の前に現れて來た。男のそばには、女房が黄色いやつれた顏をして、頭もおどろな髪で、げつたりした

やうに、岸の方を見守つて居る。其船は徐々に、風を孕んで、穏に流れて上る。するとまた、あとから、ゆつくりと動いて、一つ一つの白帆が見えて來る。その後に一つ……また一つ……。

そして、舟から舟へは長く、幽に水脈を傳へた。しばらくの後、私は水邊を迂曲つて、更に高い岸に上つた。其處には、一面に滴りさうな新しいいきいきした緑の草が叢をして、夏なら蛇でもひそみさうに凸起してゐる其の樣な春草を折り敷いて、坐つて、なほも讀んだ。――長閑な心を打開いて讀みふけるのであつた。



プップップップップッと島村の精米所の、細くて長い煙突から、飛び出すやうに、煙の音がする。それがどうかすると、風の向で、榛の林にからまつてじめじめと泌むやうに、云ひやうもない煙突からの臭氣が鼻をつく。ちくちくと頭の痛む程の惡臭である。

歩いて廻ると、四丁程の距離もある酸曹會社は岸一くねりの前面に、水に臨んで、城の樣にも、大きい斷崖の樣にも見える。大工場を、遠くから見て胸に享ける感じと云ふものは、一種の壯快を含んではゐるが、同時に悲しい氣分も交る。それは、あの煉瓦の色の無氣味な、強い乾燥を覺えるやうな工場の中には、百にも近い勞働者が居る。――硫酸の側に青くなつて働いてゐる男、熔爐の前に、猛火をあつかうてゐる男、

肥料の山とうづ高い中に、黄色くまみれて、動いてゐる男女――。それらが、深い暗い人生問題を聯想せしめる。

思はず鬱々と、考へこんで、久しい間、ぢつとしてゐた。

青い草が、そよいで、川の水が、岸の下で、ベチャベチャと鳴つた。風が吹いて、ギイギイと舟の音がした。其の中に、日の光に畫かれた、地上の木や草のかげが、形を斜に、長く延ばした。水に落ちてゐる濃淡のかげも、水の色が、光線の爲に、うつらうてゆくとともに、何となし沈んでいつた。

「先生だあよ。お出でよう……淸ちやん。」

女の子供の群が、渡舟の出る處から、木立ごしに、私を、ちらと見付けて、せい一ぱいの聲を上げて、友達を誘うて來やうとするのである。

やがて、パタパタと腕白な足音がして、河岸をかけて、我れがちに、岸へ、馳せ上つて來た。

「せんせい。」

と甘つたれた柔い聲をかけて、色の白い遠慮のない笑を頰に充たした、子もあつた。

私の周圍を皆が取り卷いた。

いろいろと、まるきり、何の聯絡もない事を、それからそれへ、問ふともつかず、話すともつかずに、子供達は、かはるがはる劣らじときそふので、困つて了つた。それで、私はたうとう幽に聲を上げた。子供達は驚いたやうにぱつたりと止めて、ことさらにそつと目くばせをして、少しはなれた。

そのあたりの草を手で、もみかへしたり、いぢやいぢやといぢつて居た。一人が、白い菫の花を三輪だけ小さい手につまんで來て、私の膝の上にならべた。

また一人の子が、筆のやうな筍を二本持つて、あそこに出てたんですと云つて、渡した。

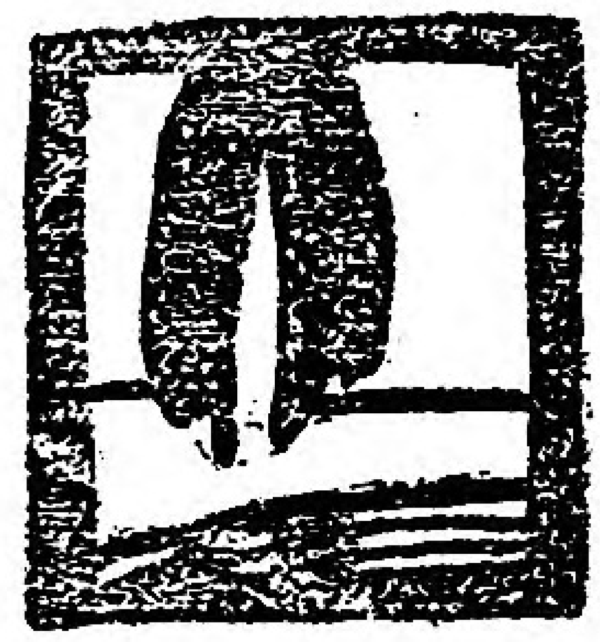
上流から、二人の學生が、小舟を泛べてゆつくりと流して來た、水邊の子供の群を見て、ふなべりを打つて、何か云つた。子供たちはよろこんで、呼んだ。

下流からは、ボートが上つて來る、これにも、三人の學生が乘つてゐる。

渡舟には、東京から、あそびに來た着飾つた男女があふれる程のつて居る。

こゝは、東京の北の郊外である。

姉の家



はゝき木

この家へ来ると何だか窮屈で仕方ない……と斯う口に出して云つたらうか、口に出しはしなかつたらうか、何だつて仕方ない、思ふには思つた事だし、實際窮屈なのだから。こんな事を思ひながら、秀さんは姉の張り物の手傳ひをしてゐたので、張板を日あたりの方へ向け立てかけてゐたが、一足踏むにも實際に窮屈だなあ、とまた思つた。

「秀さん——」と裏の方で姉の聲がした、「秀さんその張物がすんだらね、わるいけれどあの井戸側にあるバケツを持つて來てくれないか、秀さんはいそいでバケツを提げて行つてみると姉は小さい青菜を一つかみ持つて立つてゐる、「まア姉さん、よく〳〵、そんな處へ種蒔ができましたね、まアま呆れた、よくまきましたね」「ほんとに秀さん呆れたらう、秀さんなんか町の人なんてものは土のつの字も手にふれまい位に思つてゐたらう、なか〳〵そんなものかね、これはね私がまきましたよ、去年まではお姑さんがおまきなすつたけれどねもう今年ぢやなか〳〵あの通りだものだから……」ほんとにね、よく姉さんまいたのね、と云つた秀さんの頭の中では云ふに云はれぬ思がもつれてゐた。畫をかく畫をかくといふ義兄さん、仙人のやうな舅さん、それに年が年中床を離れた事のない病身のお姑さん、……と秀さんは情ないやうな、また感服したやうな、心持で、だまつて姉のする事を見てゐた。

姉はうしろ向になつて足をふんばつたまゝで、息ぐるしさうに、まだ貝割れから眞葉が二三葉出たばかりのを摘むでゐた、「それでもね秀さんうんてだけはどうしてもだめだつたの」とにッと笑つてまた摘む。「だから肥料が不足なかつたらうよ、ほんとに黒ずんだ艶のいゝのではないね、それにあのう、あの塀が邪魔をしてしつかり太陽がさしてこないのだからね、どうせだめよ」と露にびつしよりになつた土まみれの指先を心地わるさうに振りながら、あーあ腰が痛い、こんな風をしてゐるのだものを、と腰を手の甲でたゝきながら「これご覧こゝにはさゝげを蒔いてあるしね、かうし

たところには玉蜀黍がまいてあるよ、(そこにはヒゴを曲げて地にさしてんで目じるしをしてある)おや〳〵秀さん、もうこんなにでらん」と何やら黃ろく地をむぐり出たのを見つけて大よろこび、「そら、まアいやな秀さんね、そんなに步くと、あれおよしよ、そこらそんなに步くとみんな踏んづけて仕まふわね、ほんとに窮屈だらう、わけてもあゝした家から來てみれば……」と、笑つた姉さんの柔和さうな顏、なんてまあやさしいんだらう。「ばか〳〵しいほどやさしい姉さんだ」とも思つた。

「蒔く時はこんなに密んで生えるとは思はなかつたけれど、こんなになつて、まるで芝生のやうね、ひどいものぢやないか」「今夜はあつさりと、お汁の實にしてお舅さんに上げませう。あア好ちやんかね、まあ、おとなしいねエ、をばちやんにおんぶして戴くかね、そして表へいつて見てくるかねエ、うつく〳〵しといてね、ちよれがいゝわ、サッおつぱいあげるからねエ」もう摘む手はやめて赤ちやんのとぼ〳〵步いてくる緣の方へまはつて腰を下した、「たあおいで、よくねんねしてゐたねエ、いゝ子だつたねエ、どれ〳〵、まア、そのむづかしい顏は、大へんな顏だわね」と云ひ〳〵よでれた指先をうまく工風して襟をひろげた。

「これまあ、このばゞい手は、爪の中まで土がめりこんでよ、あゝばゞい〳〵。」秀さんは却つて土いぢりなんかした事はないね、おまへお菜にたかる蟲を知つてるかね、私は去年はじめてあれを知つたよ、そら青いやうな蟲よ、胸がわるくなるわ、あんなのを見ると。あ痛、痛!! ひどい事をする、あッ、こんな痛い事をして、何だね、母ちやんの乳はたんと出ないではないかこんな痛い事をして」と兒の黑い眼をぢつと見つめてゐた母親の目には泪がにじんでゐた。

秀さん、ちよつとそこら見せて來て頂戴、そのうちにはまた眠るだらうから、とむづかる兒をわたして置いて、姉はバケツをさげて井戸の方へいつた。秀さんはそれを見送つてまただんまり考へこんでしまつた。

夕ぐれの所在なさに秀さんはぶらりと姉の家の門を出て、どこともなく步いていつた。橫町を出ぬけて古い濠のところにたゞずんで、水に映る赤い灯、青い灯のかず〳〵を見てゐた。靜かなこの古城址、古めかしい濠ばたの光景に對してゐる心を味はひたいと思つて立つてゐた。街を往來する人聲、足音、車のひゞき

それらを耳にしてゐると自づと心も輕くなつたやう、自分もその群の中に立ちまじつて、浮々したやうな輕い足どりで歩いて見たいやうな氣がされた。と、重くるしい黒い塊のやうな自分の姿、姿ばかりぢやない、心までが全然この街中の人は何のか丶はりもない別個なもの丶やうに思はれてしみ〴〵「我れ」を味はふ事のできる自由な場合でありながらそれがまだ云ひやうなく淋しい氣がされた。

それもしばらくであつた。蒼く澱まつてゐるやうな奥底の見え透かないやうな自分の心裡を誇らしいやうな一種の力つよいはりきつた心で握つてゐるといつたやうな、安心ではないが『悲しむな、まだおまへの出るべきみちはかくされてあるから』と云はれた心持になつて、手を組んでぢつと星空をふり仰いだ。青草は柔らかにのびて、晝の間よりたかつて、遊んだ子供たちの足あともぎッしりのこつてゐるであらう。青ぐさい香りがみちてゐる。云ひやうもない心のもつれをどうするといふはつきりした事にもなし得ぬ秀さんは、姑息にも生家を出てもう五日、かうして姉の家に厄介になつてゐるけれど、自分はこれからどうしたらい丶のか、と思ふと目を開いてゐられない程、なやましくなげきの心となつてくるのであ



る。家を出てからの一切の事は、まだたれにも告げないが、いづれ近いうちに手紙にでもして、のこして置かう。たれかこの心のありのまゝを告げれば、それをきいてくれる人のあつてくれたら、こんなに私だつて姑息な仕義はしなかつたらうに。戀といふものを何と見てゐるんだらう、我れと他人と、我れと他人と、……あゝわからない、わからなくなるばかりだ。

秀さん、それや、私には實の妹だし、そしてまた私だつて、何もにくい事はないさ。けれどねエ、他人の中つてものは云ふに云はれぬ苦しい氣がねがあつてねエ辛いものよ。でいつそおまへその人と今すぐでなくてもいゝから、結婚するやうに話をきめておしまへ、さうすれば私も安心するし、またこのお姑さんたちにだつて、私の面目がたつから……と云つて、あゝとため息をもらした。あの姉さん、私はわるものだ、こんなところまで自分の苦勞をかつぎこんで、何でもない苦勞をさせて、ほんとにすまない事だ、どうしてみんなの云ふ事をきいて、すなほに一般の人たちのやうにできないのだらう。あゝいやだいやだ、何にもわからなくなつてきた。

あゝ私は今夜、だまつてこんなところへ出て來てゐたんだ、お姑さんへ對して姉さんはどんなにまた厭な思ひをしてゐるかしれまい、わるい事をした。と氣がついて歸らうとしてまたつまらない〳〵と思ふと、何だかわけもわからぬ泪がハラ〳〵と散つた。どうしても何ものにか固くしばられてゐるやうな悲しい氣分〳〵その夜も秀さんの胸を領したぎりで、がつかりとして仕まつた。

やがて姉の家へ歸つたけれど、秀さんは何もかも手につかなかつた。

自分は今散文を書かうとしてゐる、だが散文といふものは、必ず説明に陷り易いものだ。處が自分では時時説明の出來ない閃めく樣に起る心持がある、それが詩だと自分は思つてゐるのだが、その時は如何したものだらう……と言ふことを考へた。その時にふと散文詩と云ふ事を思ひ浮べた、だがこの散文詩と言ふものは、自分などの如きもの丶手には決して乘るものではないと思つた、たゞ閃めく感情を、詩を書くやうな高い調子で、文章も簡單に、出來る限りコンデンスして書いて見たらばと思つた、そして試みにやつて見やうと思つた。——水野葉舟氏「響」の序より——

黒き蝙蝠傘の世界

はやぶさ

整然とまへに砂利をしきつめ、花崗石の柱のきら〳〵とした鐵の門によつて、一歩衆人の足ふみ入れるのを許さない、幼年學校の高臺は、夢にみる國のやうに、奥深い油畫のやうに、何となく淡いあこがれの眼を吸ひます。樹立と白い洋館と、そのうしろにかゝれる蒼空とを背景にして、黒く短き影は歩む。

俯くと、ほか〳〵灰を踏むやうな路上は、白く眩しく熱を射かへすので、傘を低く頭の上におしつけるやうにして、黒地の布目からくすぶつた色に透いてみえる太陽の面を、ぢつとみつめて私は歩きました。

とき〴〵明るい色がちらと眼をさへぎつてゆく。往くところ巷の夏を彩るパラソルの群よ。朝顔のやうに鮮やかな涼しげなその色は、少女のみか、衰へゆく黒髪の上にも映え、艶失せたおもても晴れやかににほはせ、そしてかざす人ひとりひとりの身を包む、小さい色彩の天地を現じ出す。

人の世は花やかなれ、貧しきが、醜きが、私に幸福だつたのでございませう。こんな驕慢の心がせめて、大自然のまへにひざまづいて、まことの涙の味を知り得たのは……。

知らぬまに日が傘の縁をすべつて、熱いほど胸を照らしてゐるのに氣がついた時私は『あゝわが黒き洋傘の世界』と思つて強く柄をにぎりしめました。

短い影は立ちどまつて地に焦げつくやうに思はれました。

☆

まだ開きもあへぬ花に、早く萎むべき命なるを云つてきかすのは、つれない言葉でございませう、大器晩成を説かれて、自分の道にエンドはない。死は途中に待つてゐやう。輝く理想の

世が、永き命のみが意義あるのではないであらうに。と涙ぐまれたこともでざいました。「早く戀ひ早く衰へ早く死ぬ女の道」を私もふむのでせうか。いやだと思つても。

酔茗先生、私はじめて先生のお言葉の中から、あたたかい早熟といふ、言を見出しました……所詮哀なるべき命にはあれど。

☆

教室にて、我には神の自らを救ふ力を與へ給はざりしにや。若しわが知己のひとりだにもなき世なりせば我は自ら卑しむるあまり、心萎み命ちゞめゆくならむ。されど人あるが故に今は迷ふ。

今朝、電車の中にて轉ばんとして、わが腕をつかみし人の手の力強く痛かりしを思ふ。

あゝ自ら路上に身を投げ出して、すべてのものゝ手の打つがまゝ撫づるがまゝに委さば、委せて悔なからば、そこにわが安住の地を見出し得べきか。

其の夜家にかへりて。

今宵、私は生れてはじめてこのやうな深い心から、仰臥して眼をとぢ雙手を胸にくみたる姿を思ひ得た。而して、そは知己なる友の手によりて刻まれたるもわが終焉の像なれかし。「彼女の生涯はかうであつた」とせめてもの存在のかたみに。

けれど此のシンボルの内容は今わが唇から語たならば、きつと淺いものになつてしまふことをおそれます

無言のうちに語りあたふ日よ。

あゝ覺束ないことでございます。

☆

いつも、四人の汗と嘆息とが泌みこんでゐるやうに思つては踏む、柔かなる畑の土は耕されずなつてから日を經月を經今はかすかな柵のあとも消えやうとして居ます。

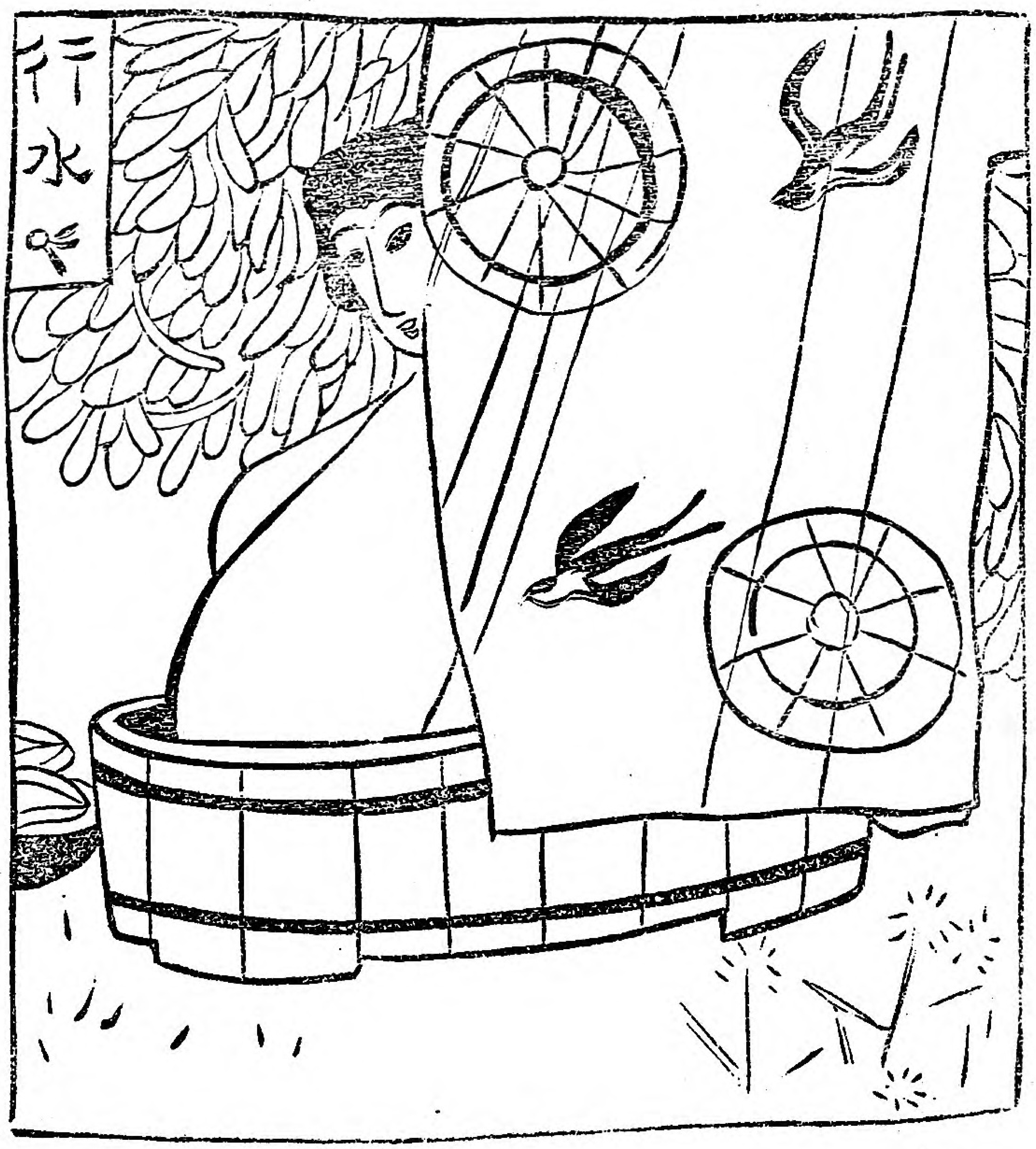
近よつてさゝやくことも許さなかつた柵の野茨は倒れて地に這ふもの、ひよろ／＼と我儘に丈のびたもの皆一樣にうす緑の芽のさきから香はしい雪をはいて、しづかな目覺めの姿に息してゐた。夏來たばかりの或る朝のこと、日の光が雲にくもつて、空氣はまだ曉のやうなしめやかな色を帶びて居ました。うす霧にぬれて生々と頭をあげた雜草の一葉／＼と、草履のゴムとの間に快い彈力があつて輕く音なく踏んでゆく。

調子にのつて辷るやうに行く時、ふと私は左手のお包みの中でコトコトとかすかに音するのを聞きつけま

した、耳をよせやうとすると又コトと云ふ。おゝ！と思つてそのまゝ頬にあてました。

黒地に紅薔薇をちらしたロシヤ更紗の風呂敷の中には、ねずみ色の代數の本の上で、水色と茶色の小さい眼が四つ、そつと瞬きしてゐるのです……。吾が子よ、その冷たい臘石の肌。

私はあゝ今まで人がお母樣つてからかふのをたゞ嬉しさうに笑つてきいてゐたけれど。『人形の母』と、それがもし年更けしをとめのためによばれるのであつたら、どんなに寂しい名であらう……。



原を過ぎると、重くるしく空氣草履の音ばかり身にそつて、可愛いゝ瞬きの音は消されてしまひました。私は夢破られたやうな空しい心を抱いて、多くの人にあつてそれをまぎらすべく、電車へ急いでゆきました。

☆

『わたくしの一番大切なもの』

から云ひながら私は、古い唐草蒔繪の髪臺を戸棚から持ち出してきて、人の前におきました。上に蒲團かけてねかせてあつた人形をひとり／＼すわらせて、「先生内の子見て下さいまし」と笑つて申しました。「こんな明るい人の居るところで見ちや駄目ですけれど、夜になつて、ひとりで机のまへにゐる時なんかにおいつ

と顔見合つて居りますとね、遠くから小さいたましひがひきつけてられてくるやうな氣がして、それがつと眼から眼に傳はるともう二人の間には、深い不思議な關係ができてしまひますの。ねえ先生、何故でございませう、自分にもわかりません。」打消すやうに先生は「そこがまあちやん、わからないでいゝんですよ」とおつしやいました。「性の矛盾でも何でもないと私は思ふ。お母さん、叱らないでやつて下さい。こんな時代はもう長くはないのだもの」「ほんとにこんなでも人並みのことができるやうになりませうかしら」とおつしやる母様のお顔はみずに、私は上の抽出をあけました。その中から定紋を彫つた銀の平打と、珊瑚を入れた珠數と象牙の撥とを見つけた時「まあまあちやんの？」と思はせるやうなものばつかり。一度島田に結はせて見臺のまへに座らせてみたいのねお母さん」と先生はからかふやうな目付をなさいました。が、まもなくその眼は常の底に鋭さのこもつた光にかへつて、深い下の抽出にぎつしりつまつてゐる手紙の上に注がれてありました。私はその中から藍色のインクで一面に花をちらしたやうなのを、ぬきとつて、あけてみました。「先生、先生はね、こんなことをおつしやいました。人の妻となつて、子を育てゝ、謂はゞ動物としてのみの人間で終るか。或は自己の天分を自覺して向上するか。二つに一つあるばかりでせうつて、どうだかわかりません私は……」

「しかし。それも決して矛盾ではないのです。

此間、まあちやんは今の境遇から生れるわが作物に多くをのぞんで下さるなとおつしやつたが、私は、その眠つたやうなといふ生活そのものが、あなたの詩であらうと思ふ。

まあちやん！天分は偶然のものであらうか。社會寄與に對して全然沒交渉と考へて然るべきものでせうか僕はあなたの畸形化をこそきらへ、可惜天分を草に委し去ることは如何にも殘念だとおもふ。否僕が殘念がる迄もなく、恐らく天は天意通りにあなたを拉し去るであらうと考へられる。詩即ちロマンチックをすてるといふ意味ならば、いゝですが、決して無理に筆をすてるとか、すてないとか定めるものではない。『寂ない時にねる』それでいゝぢやありませんか。」低い聲でひき入れるやうに先生はお話しつゞけになりました。「何故ですか。まあちやん。徒らに自らの心を惡み徒らに自ら失望するといふのは、あなたにも似合はぬ事だと

思ふ。恐らくそれらの現象は、或る未知の源因より導かれた結果であつて、貴女も御自身尚且其由來の解釋がつかないのでせう。そして自ら卑怯者にしてしまひ自ら寂しい心にきめてしまつていらつしやるのではないのですか。私の憂慮は實に此の點にあるのです。ああ、暗いお心が明るくなるやうに、而もまあちやんの天分はあく迄發展させるやうに。而もお家の境遇上にも順應するやうに。と私は思ふのですよ、ねえお母さん」此の時思はず私の目は母の方にむきましたが、胸より上にはゆかず直に鬢臺の方にそらしました。第一信と書いたものをぬき出してあけてみる。

地之穢者多生物、水之淸常無魚、故君子當存含垢納汚之量、不可持好潔獨行之操。苦節獨行者非恆久之操、家庭有個眞佛、日用有種眞道。

「あゝわかりました」しばらくして突然に云ふと「え、何が」先生の眼がちらと私の眉の上にひらめきました。「え」と鸚鵡返しに答へて「先生は、あなたの心と現實とを調和さすべき合鍵はわが手にあるとおつしやるのでせう」斯う胸の中で云つて私は默つて笑つて居りました。(云はない方がいゝやうに思はれましたから)三人は云ひあはしたやうに、鬢臺の人形の上に眼を落して沈默してしまひました。

誰の手によつても調和し得られぬ内心の大きな矛盾は、胸に叫べど聲なき故、人は知らなかつたでございませう。

☆

醉茗先生に。

私のノートの上には「杜翁の臨終の努力を忘るゝな」と書いてあります、息迫り舌もつれし、いまはのきはに、なほ一言を人類のために、のこさうとしたことを思ふ時、私は恥しさに泣かれます。書くのが苦しいために、刹那の靈のかゞやきも、感動も、みんな永久の「空」に葬つてしまふとは何といふいたましいことでございませう。「もの言ひ得る幸」を先生は敎へて下さいました。

「心水の如き時、わがために祝福するはしめやかなる悲しみなり。嵐の時、あゝ何ものもなし。
心亂れし日のみきて、たゞ沈默を思ふ。
ねがはくは我に悲しき疑ひをはらさしめ給へ。一つのもののため、にすべてを犧牲にする勇氣を得させたまへ。葬りしのぞみ又もえそめて初夏の風はやはらかき涙をさそふ。」



をとめらが袖ふる山のみづがきの久き時ゆ思ひき吾は



○　大阪　小畑はる子

歌かるた巧みなりとて女王など丶男は我をはやしたゝへぬ

許しませ今宵ぞ君が文やかん星おほき夜は物おもふによし

うち笑めば千人うち笑み憂ふればをとこ千人憂ふてふ君

○　茨城　田村波津子

此の幾夜しげくも夢に君を見てやゝなつかしう思はるる哉

毒だみのしろき花咲く畑道を蛇に恐れてはしり來にけり

○　上毛　小澤碩子

わが若さうつくしと言ふ人のたゞ一人なるは物足らぬかな

曠々と武藏夏野はくさしげり森にはもりの小鳥みななく

○　福島　春子

まばゆけき晝はとかくにものうくて靜けき夜を戀ひてありぬる

相見てし後のおもひは淋しくも白藤の散る夕暮れににし

○　土佐　はざくら

四國には山もありけり波よする海もありけりなやむ女も

紫の夢のくにより逐はれたる女はさびし何にたとへん

○　近江　鈴蘭

見ぬ人を胸に描きてさりげなくよそほひてあるこの日頃かな

わかやかに苺の花の咲きそめば初なつの風なつかしう吹く

○　神戸　足立春子

夕雲の薄くたゞよふ夏の野をあかずみつめて泪こぼしぬ

初夏のみどりのいろと我が思ふ人の心といづれあかるき

○　下谷　島翠の花

四人の青馬車すぎぬ雨のよべたゞ二すぢのわだちのこして

君見ざる其日はさみしさはあれど君を見し日は心をどりぬ

○　宮城　齋藤なよ子

峰に雲出れば我れはものぞ思ふ心に秘めし戀あるゆゑに

海暮れて山暮れて我れたゝずみぬ喜びの日も悲しみの日も

○　金澤　むらさき



古にありけむ人も吾如く妹に戀つゝ寝ねがてにけむ

ふるさとの砂の小路に黄色なる花の粉こぼれ夏となるむら

むらがりていちはつ草の咲けるより美くしかりき町ゆく少女

○　信濃　べに百合

おもむろに野は暮れて行くあはれにもすゝりなく子を静に抱きて

かへるなくかはたれ時は戸に倚りてしめじめと泣くならひとなりぬ

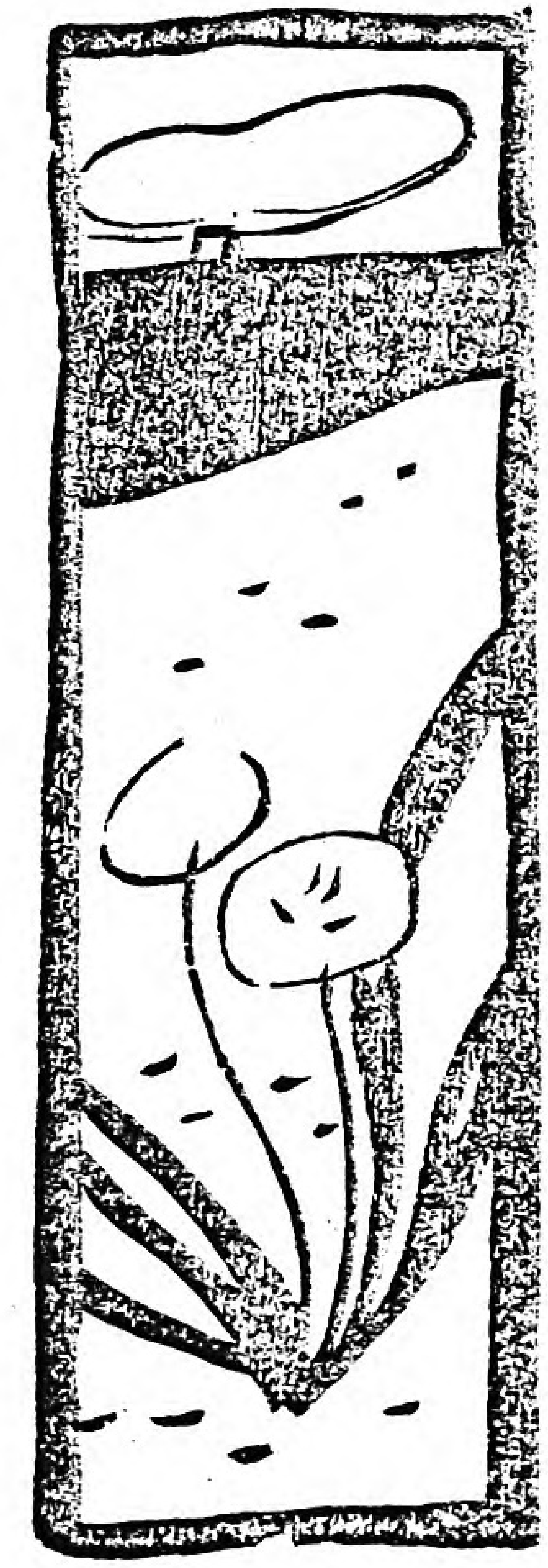
巻きて來し白ねりぎぬに紅の花一つ染めぬ二十年にして

○　深川　花野芳香

遠人をおもひて倚れる白楊のこずゑにあをき月は上りぬ

熟れし果の地に落つるよりいや寂し日毎さめ行く愛の思ひ出





蚩尤旗

蘇生法師

▲塚越停春樓氏を助けて「東京市史」を書いてをる人がある、川柳の名家坂井久良岐先生に「常陸へ行つて牛久の小川芋錢と大寶の横瀬夜雨とを訪ねる積りだ」と話したら「あんな百姓等に何が書ける」と言つたさうだ、そして「夜雨は女子文壇でお山の大將で威張つてる、つまらないよせ」と留めたといふ。美術家としての小川君の田舍に居る事がなぜ輕侮にあたひするか知らないが、言はれて見れば、自分だけは柄にも無き金剛杖を振つて、隨分同人の物議を起しもした。今日長塚節君に聞くと夏目漱石さんが私の健康を問ふたともいふ。自分では中央文壇の舊友とは沒交渉の人間になつた積りで、たゞ醉茗の爲に——正直をいへばいや〱半分——選評の筆を執つて來たのである、勿論一生懸命の仕事とはゆめにも思はず一夜で濟み〱したわづかの骨折だつた。が世間では物好にも心配してくれる人があるかと思うと眞面目に考へさせられる。

▲醉茗は今度畢世の大事業として君の自敍傳を書いて公にしたらいゝだらうと言つてくれた、「花守」「花守日記」「二十八宿」の三巻はとりもなほさず自分の片影にしてかつ自敍傳である、今さら改めて稿を起さずともとは思ふ。が之より後何に生きるといふ望みもなく自廉恥の外に棄てて無意味に送つても終焉は終焉である、不具者の苦痛、不具者の煩悶、欺かれてひとり生きたる「過去」のうらみと、呪はれて世に存がらふる、「明日」の悲みと、一切のわが力をつくしてわれと我が藝術の價を世に問はう。自分のせねばならぬ仕事はこの他には無い、絶望よりのがれて永遠のよろこびに入るの道はそこにひらけて來るのであらう、と自分はあまりに自棄に過ぎてゐた。

▲思ふよしありて中絶したる「お才の國」もやうやく時來りて事實を曖昧に、故らに曲げたる筆もたゞしうとりなほす時が來た。かつてはたかさしの野を行ける七たりの媛に托しておぼろかに染めし花の色は濃くあらはすべく廻り來れる時よ、「夜雨集」は自敍傳に先立つその第一聲のみ。

▲「顔」と「髪」とは課題としては女の方にふさはしきものであつた、醉茗の出した「劇場」は少ししか來ないと聞いたが、平塚白百合君などにはもつて來いの境地であらうに。「顔」の中に横濱の妙子君の書いた俳優の美しき印象といふのがある、劇場にはさらに大きい印象があらねばならぬ。「髪」には古河の矢口れい子が「煤煙」のヒロインが髪を頸に巻かしめて死なんとしたことをとらへながら感情が出てゐない、今めかしき初島田や前不動の後辨天を書いてゐては仕方が無い。鮫島(大浪)夫人の紹介でお知合になつたTは名家の出だけにお相手になつた宮様のおぐしや天長節の夜會に見た人の顔など書いて來たけれど只すら〱と延びてゐるだけで駄目だ。私が初めて日記を見た頃からひく〱と今はずつと段階が違つて來て、あの時分の三才は今の六號詰にあたる位だ。そして行きつまつた卒業組よりか、進んで止まぬ後進の方に將來がある。

▲「明暗」は三ケ島よし子君だけ毎月忘れずにくれるけれど、山田邦子は外へ(「創作」?)出すからとの斷りがあつた、太田きし子は歌どころで

はあるまいし、匕を投げようと思つてる所へ原田𨱑子が妹を送る歌十五首を書いて來た、春が來たら春らしく秋が來たら秋らしく人生の舞臺の上で自然の音樂に合せて踊りませうよ、もう血がほしければ赤い水を持つて來ます、涙のほしい時は露を拾つて來ます、法師さま世の中はそれでいゝのですから本當に面白いぢやありませんか、髮長き少女よりと書き添へてあつた。

▲二月堂の繪葉書に「奈良那夕戸士血陀宇我艮牟彌氐沙久皿」と題したのが白羊に宛てゝある人から來た、皿がラと讀むとは毋（ハヽ）と毋（ナカレ）が違ふように異つてるのか知らんと「略解」を引張出して調べたが無い、辭書にたづねても先生も知らず。「文庫」時代の友人で早稲田中學の國語を受持つてる吉川文學士が「雨月物語」の註解を作りかけて「堯冥日杲、百姓婦家」で參つてしまひ、知つてるかと聞くから知らないと言ふのは業腹で、そりや堯典か何かにある蓂莢といふてついたちから十五日迄葉が一つゝゝ出て十五日からは一つ宛落ちる草の事だらうと言つたが、氏は念の爲に漢文の先生に聞いたら堯の時代のよく治つた事だらうよくはわからぬとの挨拶だつた、堂々たる「先生」達すらお互さまに本は讀んでないのだ、早川花子が青鵐（あをじ）馬醉木（あしび）がよめず平塚白百合が木瓜（ぼけ）でつまづいたのも無理は無い、小川せん子が學校時代に何か質問すると先生きつと明日調べて來ると逃げるので心細くて溜らなかつたさうだ、木村綾乃子はまた學校で「こそあんめれ、べかんめれ」を使はせられ、間違つても口語體など作つたら何時だつて、戊を喰はされる、（それでも來年は優等で出て高師に入るといつてゐる隼と同じく年は十八である）文法なんかを氣にするようではいゝ文章の出來ないのは事實だ。さりとて宛字誤字全紙朱を入れねばならぬ樣なのも弱る、かな一つ違はないのは地方では櫻田文子（むらさき）島益江（山梔子）臼井道子（冷花）東京では河野加藤平塚鈴木町田の君たちである。長曾我部と小川はえとゑへとえを誤る位だらう。若杉はひどい、山田はもつと上だ。私はふうべ君金田代志子を發見してから、ナガツガブ、イツカ、チヨータの諸君はふうべ君の住める和泉の國私のをる常陸の國を何とよむだらうと心配してゐる。況んや大佛（オサラギ）釋迦無二佛（テクルベ）など。

▲釋迦といふ字で思ひ出した、隼はお釋迦さまのようだと眞佐子刀自が言つたためにそれが「代名詞」になつてゐるおしやかさまと呼ばれると、せうことなしに返事するさうだ。夕ほしに立ん棒の相手に擇ばれた章子は薙刀の名手である。下駄を踏割る事にかけては山田邦子が日本一だが。

▲夢の女が何とか名を考へてくれといふから、野守の妻としたら？と天晴お氣に召される積りがおこられてしまつた、大し〱尻をやつた。會の日に私の後にゐて「先生あの義太夫屋さんの足のうらを御覽なさい、黑いでせう、私寫生してよ、うしろの女」と紙きれへすばらしい繪を書いてそつと膝の上へのせてくれたつけ。多分これから後の女と名乘るのであらう。　（六月五日ひる、黑百合をうゑしめし日）

▲シルビヤでは嫁に行きたい女の有る家では、外から見えるやうに、窓へ人形を出して置く。日本の丸髷は、われ其奥さんなるを知る、マガレツツト、カブレツト、ルイザ、ヒサシに至つては不敏にして未亡人の頭か、女學生の髮か、一向わからない。窓へ人形を出すのだけは 其家の誰が嫁りたいのか分らぬから、一人一人頭へリボンを下げて、嫁に行きたい人は青いの、いやな人は黄いろの、どうでもいゝ人は桃色のと區別したらどうあらう。謹んで誌友諸君に御相談する。第一、來年の誌友會には奥樣連は制髮結用たる事無論である。ちと可愛相だけれど、平塚夫人、小川夫人をはじめとして、大河内外交官試補夫人（恒子）土屋子爵夫人（はま子）早川バンク夫人（花子）町田大佐夫人（靜江子）等、いやは仰しやらぬ筈である。



自ら警むる記

白木絲子

この頃の私の心は乾き切つて了つてゐる。何を見ても何をしても少しの刺激も與へられはしない。寂しい只何かしらず空虚な心持なのだ。一日々々と惰勢で引きずられてゆくやうな………。

詩だの歌だのに情緒のゆらぎを表はせるうちはまだい〻、若いのです。乾き切つた心には詩歌はない。歌や詩ではおつつかなくなつた。

嘗ての日「愛が薄れたと云ふ譯ではない、つまり愛に慣れたのだ」とやさしくいはれたとき、私の眼には涙があつた。愛に慣れたと云ふことは平凡になつたと云ふのと同じ意味ではないだらうか。平凡になりたくないと云つた自分も既う平凡に慣れた。そして夫れにも倦き初めた。けれど、けれど平凡の他に人生何物があらう。行當つた終點にはこれがあるばかりなのではないか。

苦かりし、樂しかりし追憶のいくつかを過去に殘して、萬人が萬人安んじて居るべきこの境につひに私もはひつたのである。賀すべきことか、歎くべきことか。

巾廣の丈長かけた髪を大きい丸髷にも結ひ慣れて、産といふ苦い經驗もした。今の私にはすつかりするべきことをして了つたやうな氣がする。

若い輝きを失つた心。平凡に倦じ初めた心。

私は自ら警めなければならぬ。

「もうお子持ですもの」と人は私を強て質實な風にならせやうとします。お母さんとなつたらば色彩の美しいものを裝ふては、いけないのでせうか？

何故でせう！　私は女です、そしてまだ若いのです。お産をしたからとて急にさう老いさせて了はないでもいゝではありませんか。

私はまだ親のやうな心持がしない、それほど成熟した感情を持たれないのです。

老いるのは自然です。親といふ心持の熟するまで私は、善良な友達としてわが子に對します。

子供の時分、年寄のぢみな着物を見るとは、お婆さんになるのは厭だ、年寄になんか成らないとつく〴〵思つたものでした。無理にはやく老いさせて下さいますな、私は悲しくなります。私だつて眞逆に自分に不調和なみつともなさを知るほどの常識は持つてをりますから。

美を好む處に女の生命はあるものと思つてゐますものを、母になつたからとて精神的生命を捨てる必要はないではありませんか。

、、、、

しつかり抱いた小さな身體を、非常な反撥力で、手の先から足の先まで烈しく顫はせて泣きたてゝゐる。紅く充血した眼からは、涙が一杯頰へ傳はつて。よくこんな小さな身體から出ると思ふやうな大きな聲、氣管も裂け相に泣く、泣く。

いくら賺しても〳〵默らない。抱いてゐる私の胸へ泣く子の火のやうな熱が通ふと、耳元が熱くなつて、頭がづき〳〵痛んで來る。

何故泣巳まないのかと思ふと、焦々とした氣持になつて、はては不思議な、親らしくない憤りが湧いて來た。ちよつと針でつゝいても身體中の血管から血が迸り出るやうに、子の神經も尖つて鋭くなつてゐる。私の神經も尖つた。胸がふるへる。

愛は憎みと變じた。投出して了ひたいやうに絶望の心持が起る。――

泣き勞れた子の聲はかすれて、やゝ勢が弱くなる時分には、ぢつと耐えて自分の心の狀態を見てゐた私も憎みから更に憐れみの心持に移る――泣く子と共に自分自身が憐れになる。哀しくなつて一緒に泣きたくなつてしまふ。

子供が泣くといふことそれが一番今の私には辛い。

貴女は今の男の眼が御自分を見てゐたと思つて被入るのですか。貴女は彼の男の視線が貴女の顔から抱いてゐらつしやる赤ちやんの顔へと走つて、それからついゝ、まらな相に他へ外れたのにお氣がつきませんでしたか？

前に彼の男が席を讓つてあげたのは、生存競爭に勝つた社會の一人としての貴女に、同情をし厚意を持つたばかりの表情にすぎません。

貴女よ御安心なさい、子を持つた女の美を、男は容易に弄ぶものではありませんから。

「お前は私をどう思つて見てゐる？」と男が訊いた。

「さうね」と女は云はふとしたが又默つてたゞ笑つた

「解らないかなあ、かうして一緒に居ても解らないのかなあ、いや解らないのが眞個なんだ」と男は慨歎に堪へぬらしく云つた。

「だつて解らないのが當然なんですわ、男と女と、ゆく道がちがつてゐるんですもの」と女は平氣でいつて又笑つた。

あゝ、幾千年の前から幾萬年の後までも、解されはしない、男と女と。

小さな瞳、それが親のどんな秘密でも知つてゐるのを、おし默つてヂッと見てゐる、といふやうに見える事がある。

朝晴の空をみるやうな澄んだ色の中に浮んだ小さな瞳、時々氣になることがある。

僅か二尺に足らぬ小なる肉塊、人形のやうなそれがつよい〱力を持つてゐることをおもふ。

たつた一人の子をもてあつかつて、この頃毎日のやう疲れた氣分の離れたことがない。ちよつとの暇にも惰眠を貪らうとする私の心、あの活々とした魂の姿は何處へいつてしまつたのだらう。

幾人もの子を平氣で產む女のことなど聞くと、意氣地なく心がふるへる。

疲勞、精神的墮落……何にも書けない、書けない。

「さうしてみると晶子さんは偉いね」といはれたとき「晶子さんは違ひますよ」と平氣で答へたが、寂しかつた。

清國　揚子江畔の新婚生活

屋根の草

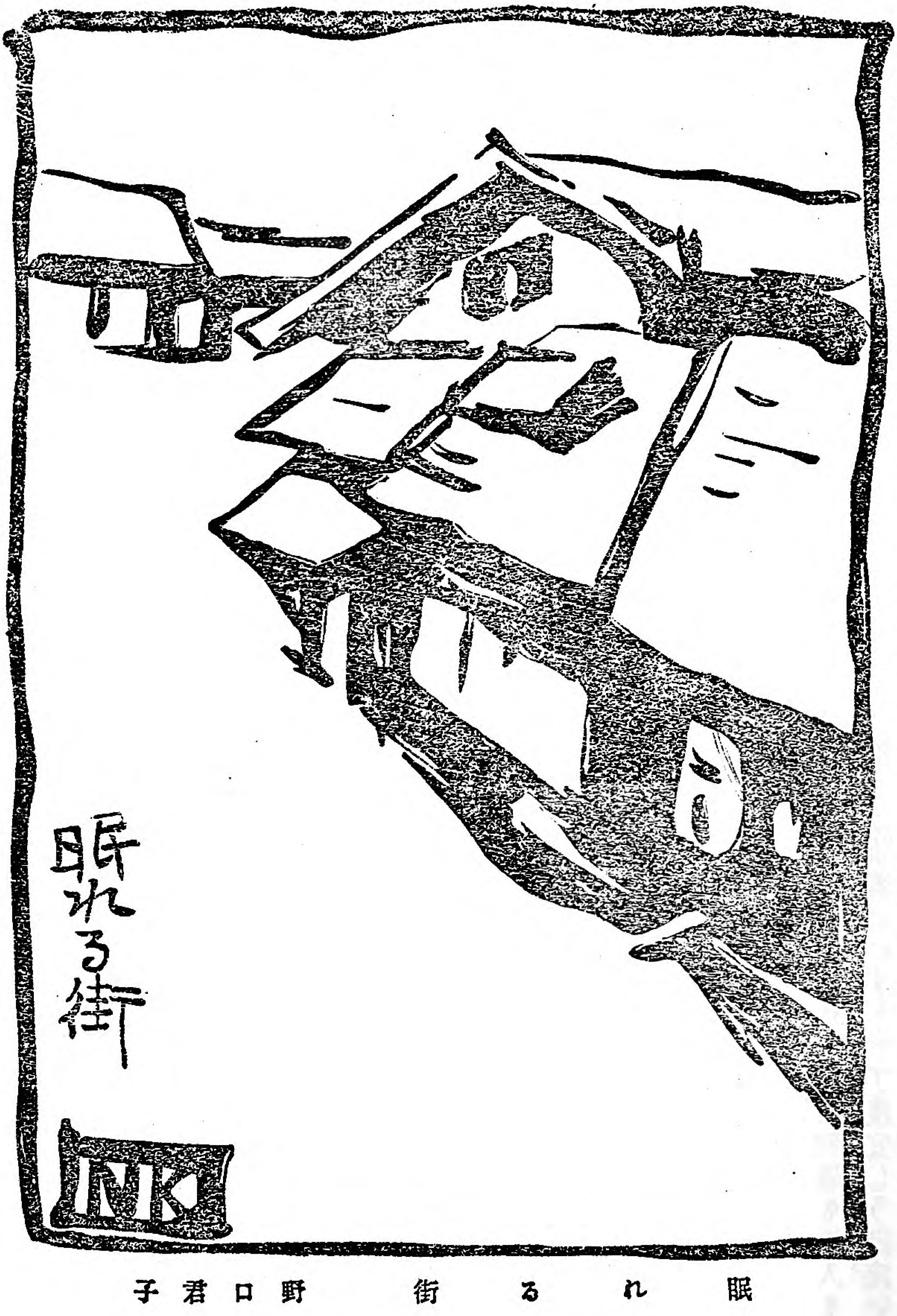
純潔無垢の處女が某と結婚をした。扨此結婚と云ふ物も、一定のタイプにはまつたもので、當日は云はずもあれ、翌日も、翌々日も、終日白粉だの、衣服だのとりかへては立ち變り入り變り來る客に、機械的に頭を下げて、じろ〳〵見守られる、まるで顔見せだ。でつい恥かしく頭は自とうなだれ勝であつた。それからヤレ紀念撮影だの、里歸りだの、イヤそれには髪も直さなくつてはと、優しい姑樣が仰せに鏡臺の前に座りはするものゝ嬉しいやら、きまり惡いやら、何やら氣がねも手傳つてあらゆる氣分のごつちやまぜですもの妻に成つたとも、奥樣に成つたとも、そんな考は爪の先程もなく、意識もあるかなきかの有樣のものであります。其うひ〳〵しさは二十一の私も十六七時代と何の變りもありやしません、と一寸こゝでうぬぼれが生れまして御免下さい。それから一二ヶ月といふものは、落ちついて雜誌をみる事も、何となら出來ず、これは例のごつちやまぜの氣分が、しからしめるので御座いませう。サアそれからです、私は夢にも見も知らぬ海外へさすらひの身、マア羨ましい、大きな蒸汽船に乗つて、洋館住ひでなんて友こそ羨みましたが、否御本尊の私も、顔にこそ出さね、これみよがしなブライド強き笑もいたしましたが、然し心の奥底には、少々あきたらない思ひもあつたものでした。外でもなく、同じ海外に出るとなら、私は〳〵此退歩きはまる支那の地に足を入れる事を滿足したでせうか、いかに私が新智識なき殊に語學の心得もなき者とは申せ、のろまな人間が「うぢ」のやう、のそ〳〵歩く清國は見ない乍らも空想で以て、もういやでたまらなかつたのでした。此上に自分はまだもおくれて行くのかと、僞りぢやありません、涙した事も御座いましたけど、さう〳〵人間が滿足に滿足の得られるものでもなく、思ひかへして住めば都のことわざを心にくり返しましたやうな次第で、珍らしくおだやかな航海は、密月をも兼ねた有樣で、こゝ漢口へは安着いたしました。歡迎された男女は、

いづれも滿面笑をたゝへて、紹介されつ、せられつ、唯々おもはづかしさに、其時の事はまぼろしとでも形容して置きませう。それから皆様は大酒宴を張つて下すつて、お盃もドシ〳〵私へ來る、けれど是は無調法ですものね、或若奥様など、なか〳〵冴えたもち方召上り方をなさるにははてな外國かなとも思ひました、若くとも打とけて被在るので私もうれしく、用捨なく食事を終へ、ものゝ三四時間もして客は去りました。殘つた良人と私、始めて長き旅路の夢醒めたやう、顏見合して安心の吐息を深ういたしました。「此家が內だよ」と云はれて今更の樣、再び室內をくまなく見廻しましたが、嬉しさに醉つてる心では、發する言葉もなく、全く意識もにぶつてマアきれいに飾つて御座います事といつたきり、外に何か云はうとしても出でず、きまり惡い思ひをしつゝ、カーテンからがくなど珍らしさうに眺めて居ました。

追々日が重なるにつれて、辨當賄も無趣味、且不經濟の處から、自炊の幕は開かれました。處が七輪の火のおこらない事と來たら、かんしやくもちの私は實に泣きました、そして自炊がいやでつまらなくつて、口にこそ出さね、心中面白いとも思ひませんでした。こんな風で火起しには良人も手傳ふといふ始末、而してこれもわづかな間で、漸く見事におこるやうになり、ではんもこげず、始めて趣味を感じたのが、ものゝ一ヶ月も立つた頃でしたらう。でもなか〳〵手廻しあしく今日も終日炊事場だつたかと笑はれ、つく〴〵これまで勝手の業をしなかつた事を悔いまして里へ早速通信した事も御座いました。それからはおかげ樣で他家も訪問されるし、ハンカチや足袋位は洗はれもされるし、日一日と面白みは生れて參りましたが、どうも他家を訪問しても、されても、處女時代とは話題一變つきなみな挨拶に愛敬はいゝとして知れたおせじもきかされつまらなくも馬鹿らしくも思ひましたが、これはこちらがあしく、これも馴るれば今までと何の差別もなく、却ておもしろい事もあります。或時は總領事の舍宅に參り、賢名な夫人より火がおこらない位で泣く涙は餘りにもやさしく、其涙位で通れる世だつたら何もいふ事はなく、實にみやすいものだと笑はれ、且諭され、實を云はうなら姑樣の側にも居ず、一足飛びに海外に出られたあなたは、本統の處をいふと幸ではなく、不幸と申上ますなどと初對面早々からこんな御説法、ふつゝか乍らも涙する程嬉しく有がたく感じました。猶

一日にわづか三十分でもいゝから心をこめて何でもかまはない、して見やうと思ふ事を一心に勉強せよ、習字でも、語學でも、裁縫でもと、筆でくゝめる如く、仰有るので、始めはおそれた支那も心強うて何となく希望も輝くのでございます。

扨マアケットの買物も始めは言語不通で閉口しましたが、此頃では買物も一寸した云ひつけ事も樂に出來だしたのでよろこんで居ります、何しろ支那人は不淸潔でかけねをいつて手くせのわるいには閉口を通過します、大概な家には日本下女は使はずに、支那人をボーイと呼んで下女同樣に使ひますが、金錢は元より木炭から醤油に至るま



眠れる街　野口君子

で、ちよい〳〵ぬずみして、平氣の平左、否知らぬ顔してるには腹が立ちます。一寸買物にやれば十錢ものなら三錢はぬかして歸るのですもの、でほんの水汲み、火おこし――これも側について居ないと炭をぬすまれます――金錢をもたせないでの走り使ひ、ふき掃除、などでそれは云ひつけ方ではなか〳〵うまくやつて呉ます、そしてぬすみ事もだん〳〵しなくなります、現に宅のボーイも、まめ〳〵しく〳〵して呉るので樂でございます。女は總べてアマ〳〵と呼びますが、洗濯や子守はかなりいたします、これも手くせがよくないのでやはり使ひ始めは困難でせう。本年中には水道も出來る筈ですが、何分この水が不便で、御承知の揚子江のあの赤土色を帶びた水ですね、あれを挑水苦力と云つて水運び人夫が一荷宛になつては家々の大水がめに入れるので、澄ますためにミヨウバンを少し入れますと、三四時間後には清水に成りますが、別にさはりもなく、がんらいが揚子江の水は至つて軟水とか、さうでせう洗濯物はよくおち、化粧にも妨げはありませんから、不幸中の幸で御座います。

揚子江の河岸は、實に好景色で赤土色の水もにくからず、鐵柵を廻らし、芝生にはときは木を植ゑつらね、惜しい哉、日本租界にはいまだアーク燈がありませんが、獨、佛、露、英など一筋の燈は遠望實にきれいでございます。廣き街路をへだてゝは、可なり立派な、これら租界の洋館がございますので、夜などピヤノの餘韻も長くたゞようて、ベンチが去り難うございます。或は南淸艦隊だの、小さい軍艦も時々入港し、沖合ひはるか漁船のともし火も點々に見えて、なか〳〵支那風ぜい乍ら、忘れがたき印象を與へるのです。この水は一見さしたる障碍もないやうですが、底になる程うづ卷ださうで、一たん落ち入るや、生命なきは勿論、死骸さへ再びうき上るといふ事はないさうです。淺間のけむりのと申ますが、揚子江も樂に往生は出來ますわとは命の安賣いたしましたが――物價はやすく殊に牛肉鷄肉玉子はみやすいもので、魚も安く生きたのが此頃はいたゞけます。貴魚と申して、例の揚子江にすむ魚で、あぶら強くおいしい魚です、マア食物には不自由なく、生活難の憂ひもなく、至極いゝとしても、かんじんの季候が實に不順で、すでに四月の中旬でした、九十七度にも上り、四五日立つと又羽織も綿入も入る始末、當節では肌着にかすりで丁度宜しう御座いますが、六七八は實に晝夜差別なくむし暑いのです。



私の心は破れてゐる

あけぼの

信じ易い悲しみやすい私の心は、あの事あつて以來疑ひの眼と固い心を持つようになつた。粉碎された女の心、いたましく破れた私の心は、すべては老いたる男女と年若い男等が構成した幻影だつた。

私共は神に飜弄されつゝあるか、運命の毒手に弄ばれつゝあるか——知らぬけれど、畢竟は世の人間が、純なるこゝろを顧てくれぬからでせう。

私は此世の中のすべて、あらゆる人間に反感をいだいて活きてゐる、いゝえ、いだかねばならぬ樣によぎなくされた。女だもの、他人にも自らにもやさしく活きたかつた、併しそれは、あの事あるまでの私の願であつて、今は大なる嘲笑の聲と、呪咀の齒切とをさせて狂ひ行かねばならぬ私の姿よ——。

戀なんて、結婚なんて、いたましいものだ、あれはあの強い燒け通るような酒を飮まされて、刹那の醉は狂的である。御覽なさい。醒めた後のあの怖しく悲痛に充ちた叫び聲を——それでも人生は呪はれずに、一歩々々足あとは斷崖に多かつた。男女のいづれかの異性は用捨もなくそのどん底に突き落して、平然として立ち去つては、再び眞情を他の異性に賣つてゐる、案外平氣な者が男にも女にもあつた。

私は癪に障つて仕樣がない。打殺してやりたい。

處女の誇を剝奪して平然たる人の面は厚い皮をかぶつてゐやう。凡を欺く僞善者である。社會はなぜ殘忍なる人々の行爲をゆるすのであらう。囚人を刑する法はあり乍ら、女の肉を喰ひつくした濟度すべからざる人間に、なぜ強い刑罰をあたへない——。

『自己を愛し』『自己を保護する』事のみを知つて、戀を語つた心にも愛を叫いた唇にも、尙自己の利慾を考へてゐる。若しも自己に重きをおかず、すべてなげうつて、美しく實現した人があつても、それは小説以外には認められぬ。小説にあるような薄情者の多い世

に、小說のやうなあの美しい情の人がなせないだらう。芝居なんだ！結婚も誓も狂言の一幕を見せられたにすぎないと思へば、あんまり價値がなさすぎる。

既往を夢に葬るをゆるさぬ、强い痛手を負はされた私の心は、生と誓と呪とを繫ぎつないで、人を策つ復讐の觀念は火と燃えて燒き拂ひたい、彼等性惡を！。

結婚！誓約！すべて痛ましいものである。たれ？かが勝手に拵へた一種の虛飾にすぎないのだ。私は痛ましい事を知つてゐる。私の前にひらかれた事件はこれ等が芝居をさせたのだ。

『今はもう本人の心が動きそめた！』。此頃私の耳元へ來て何者かゞ强く囁く。『死んで下さい、死んで下さいよ』斯く私は其度に叫んでは、あなたの生死の權は私が握つてゐるんです。さう思うては胸がはる——。

さう思うてもつひに遣瀨ない心は、過去に執着するあさましい姿を現はさうしては狂せんとするを、やうやく力强い聲に支へられて、固い心を持てゐれど——悶えて苦しんで犧牲に供しようと決心した身も、刹那まで惱んだ結婚がつひにわれとわが身を滅さうとは私は思ひ到らなかつた、私は馬鹿な女であつた。

誰しも吾子に美しい名を呼ばせたくはあるまいか。

彼人の親は無相談で彼人の妻を『離緣』したと云ふではないか。彼人は妻に誓をたてさせた、それは幾度もであつたらう。彼人は妻に迫つて指の肉を割かせたのだ、互に割いて迸り出る血汐は二人の名の下に濃く捺して更に二枚の寫眞にも同じく紅い血を印した事があつたのは、それは三年前の秋だつた。

彼の人は妻に誓ふ度に、六尺の男がいつも涙を流して誠實を現はした。冷靜な女の頭にも義の觀念はやうやく强かつたけれど永遠の誓もやがて虛僞に移つて了ふ人の習ひを歎いたとき、其れは物質的のものだ、機械とか理論とかは年や月と共に進步しますが、眞の情は何百年たつたとて、一定不變のものと私は信じます。斯う云うて說いて尙其眞を深からしめた、彼人の親、兄弟は、其妻の離婚を迫つたと云ふ、相當の敎育もある彼人は罪も落度もない妻を、まして血で誓うた、誓はせた女を、何の言葉をもつて離緣出來よう……。

其時彼人は三百里を隔てゝゐた。たとひ如何なる人だとてあの誓が平氣で破られやうか！幾夜の煩悶をけみしたのに違ひあるまい、測ることをもつて彼人は生涯の仕事としてゐるか知れぬけれど、孝、愛とを測る尺度は、未だ手にした事はあるまいが！

彼人の親は、子の名の汚れて行くのを思ふまいか、世に知れた人も知つた性悪であつたさうだけれど、弘い天地に再び同じタイプの人に出逢ふことがあらば、私は誰に何と叫哭していゝかわからぬ――。

誓うた血痕は今尚、生々しく鮮かな色に泌みてをれど、美しい血汐をむざ〱と反古にすべく、彼人の親は口を開いた。『子の妻を左右する權利は親その者には認められぬ』と云つた彼人の聲は強かつたけれど――人の血の通うてゐぬのか、彼人の親は、私の兩親を蹂躙し、私を犬猫の子、否、尚劣等視して取扱うた。されど人妻の名を負はされて沈默を守つた結果は、遂に心を破られて、生きうづめにされた。私はあまりに慘な記憶をもつた。悲慘なる人生よ！

社會を呪ひ人を咀ふが、私の後の半生の務ならば、汚れた人妻の名をなせ負はせたであらう！人生の強い誇に生くべきわが處女の身を、何故に手に手を下げて所望したのか、老たる人よ恥を知れ！もはや人とも思はぬ故、責めようとは思はねど――。

あの獸い怖しい叫聲を聞きましたか！

あの跫音がきこえませんか！

離婚！破約！それは第三者の遠く及ばぬ想像以上の悲慘事であつた。誓を立つる人のある限り、結婚する人のあるかぎり、離婚！破約！のこゑを聞ぬ事の出來ぬのを、私はひどく恨に思ふ。

誓約！結婚!!のある以上は、離婚、破約の文字は當然であると云ふか知らぬ、知らぬけれど、かゝる痛ましい境遇を平氣でつくつてゐる人々よ！私は殺人犯以上の罪狀と思ふ。社會は何故宥すのか。

男女の戀、戀なんて、あれは一時のなぐさめなのだ。道樂に過ぎないのだ。夫婦の情なんて、何の資格があるんだらう、虛僞のかたまりであるものを！肉慾の強い叫び聲である。處女の誇を奪うて平氣で刄をふるつてゐる。けれど彼等が寢覺には安穩な夢は結べなからう。暗い心は伴うであらう。

私の眼に見た怖しい人は、鬼であつた、人非人であつたのだ。

すべてが消滅されんとする時にも、押した血痕は尚不滅であつた。虛僞と侮辱がのこされてあつた。あれもこれも女を欺く手段の芝居にすぎなかつたらう。

眞情を尊ぶ誓を信じた私がわるかつた――今の世にもはや、何の善があらう！聖があらう、私の心は疑ひに充ちてゐる。

妻ハ守るべき貞操のある世に、男に操をもたす義務があるまいか——妻に許り、嫁にのみ古人は教へをさづけて、性の惡い老たる人には、なぜ道を說かぬであらう、教へをのこさぬであらう。われ等が活くる社會はどこまでも不公平だと思ふ。

男の習ふ學校には、なぜ眞情の重さを教へない。

あゝ痛ましき女の運命よ！

惡人をも、善人をも、天地は同じく守つてゐる。品性だの人格だのと口許り立派な、今の世の人を痛まねばならぬ。畢竟は利己主義なのだ。地位名聲に執着して尊き誓をも蹂躙せんとする人たちに、何の價値を認めよう。弱くとも、意地に立つわが破心を見よ！

いつたい人間に戀を語る資格がどこにある、神が翫弄的につくつた夢にすぎない。夫婦の情交！あれは肉の賤しい慾求なのだ。あこがれて泣くは馬鹿の骨頂である。血汐で誓うた、離れまじき仲でも、親の權で安易と消滅する今の世の夫婦に、何の眞情が流れてゐやう。一つの悲劇は社會が有して演じてゐる。

男が女を弄ぶ一瞬時の動作は、單に快を叫ぶ肉の慾求にすぎないのだ。

私の心は破れてゐる——。

異性に對する恐怖と苦痛は、もはや私の心から去つて、魂は憤恨と憎惡とがもつれ〳〵て強い叫びを發してゐる。處女が立つ斷崖に向けて——。

誓も戀も、虛僞のかたまりに色を掩ひ、聖をぬすみて一時の快を貪らんとする闇の中の慾求なのだ。男よ女よ、恥辱の光へ辿り出よ！

破れた私の心は復讐の二字に包まれて、板戸の節穴を洩るゝ光線の如き、かすかな感じを覺ゆる。

私は幼い頃、小說『孃一代』を讀むだ時の心持を覺えてゐる。子供心にも春人の男にあるまじき薄情を恨んだ其振舞の酷をひたすらに憎んだ。

イリイン孃が彼にあたへた復讐を、今も眼に見るようにおぼえてゐる。強い執念に報ゆる、痛ましい心の切めてもの慰であつたらう。ありうべき復讐であつたのだ。

尊き生涯を葬られて、長い病床に横たへし吾軀！『もはや本人の心が動きそめた』何ものかゞ私の耳に斯う叫いては、淺ましい骸形の一つが幻に浮ぶ。その度毎に『死んで下さい！死んで眞情を見せて下さい』強く叫んで、血も肉もかれつくした女の記憶は、尚鮮明であつた。

言ふに言はれぬ我生立のつらさ

草の門

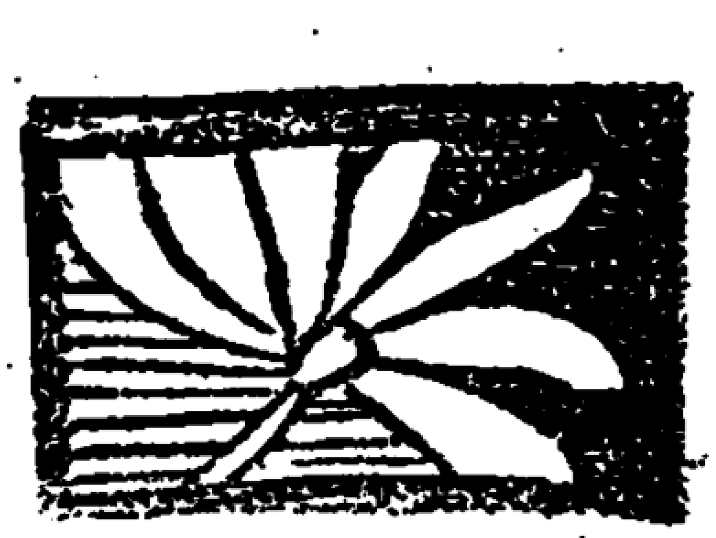


私には處女らしい感情を失なつてしまつたのであらう？　去つてしまつたのであらう？　それとも奪はれてしまつたのであらう？　多くの異性の中にたゞひとりまじつてゐてさへ、恥しさを感じなくなつてしまつた。

なぜであらう――とそんなことを繰返しくりかへしおもつて見る。

もの云ふ度に心持ち頬を染める女らしい姿は好きだ好きだけれど、自分も夫れに似ねやうと迄では思はぬ、装ふには餘りに心が若いたのであらう、醜くゝとも私は人が見たまゝの女で澤山だと思ふ。

われ人により、人生の表裏を見るに及んで、處女心は去つてしまつたのである。其の時から痛切に、最早人に訴へて憂き多きわが身の前途を――現在を批判して貰ふまい、――とまで思つた。



氷より冷たい決心はついたのである。なまじ人に頼つてわがいみじき覺悟を動かされたくないとも思つたあゝ、わが闇に覗かれた運命は生涯の傷手である。今は冷笑的にわが身を客觀し、冷笑を漏し嘲笑もして見る。わが感情は冷熱の極から極へと走つたのであらう。今は靜かに感情を隱して面白さうに笑ひさゞめくことのできる女となつた。

たゞひとり行手のみ考へて、青山へ辿りついた。

Ｓ先生、Ｙ先生の御二人さまの御姿を拜したとき、好機會だ――わが憂き身の前途の批判を乞ふに――二度この機會は有るまいとまで思つたけれど。あゝ。

わが激しく弄ばれし薄運の身は――現在、導かるゝ運命のまゝに服從せんと決心したのである。

されど、われみづから開拓して開きうる――充實した生活を少しでも味ふことができるのならと……思ひ

もした、決心したその心その覺悟もしらず〳〵ゆらぐ思ひがした。あゝ沁み〴〵。けれど、迸ばしる涙ををさめて決した思ひは――心の底よりもつれあつて湧いた。

私は意志を明らかにすることのできぬ程、若い女ではない――意志を述べられぬまで感情に囚らへらるゝ女でもないのだけれど、――過去の思ひは湧く――思ひは湧く――。

父がむかし愛を割いたる女の影――當時の母のおもかげ――そんなものが胸に浮んだ。自から父が過去の非をあげて、再びむかしの夢を語るに忍びなかつた。忍びなかつた。

いまわが身の批判を乞ふには是非とも關連するのである――われさへ心を欺むくか、現在に降伏すれば、すべて去つたむかしは包まれて行くことができると思ふのである。あゝわが脊丈のびし二十二年は夢である。夢である。いまの現在も夢でありたい。

＊　＊　＊　＊　＊

肌寒むく秋去り行く頃であつた。わが去り行く十九の齡を惜しんだ頃であつた。

「おとうさんの心得違ひだつたけれどもね――」と今は亡き祖母より初めてわが身のこし方を聞かされたのであつた。憂きも荒きも浮世の風に身は馴しと思つたをとめも、暗き心はえぐらるゝやうに思つた。

傷心の少女の胸は猶激しく搖れにゆれた。わが幼けなき記憶に殘されてる、繪卷物はきれ〴〵に描き出されるやうに思ひは浮ぶ。わが幻の人――父が愛妾、痛ましかりき母のすがた、――夢より夢をつなぐやうに思ひは止めどなくつゞく。當時十九の少女の胸には絕えず〳〵くりかへされたのであつた。

世しらぬ少女を襲ふまぼろしは餘りに殘酷だ――わが消えぬ恨はなにゝよつて報いやうぞ――。

おかあさま！　おかあさま。

お母様の思ひはまだ一度も伺はないけれど――生れたまゝ一度もお手元を離れぬ私にはよう解つてをりますもの。あゝ〇〇はわが家族にすることはできませぬできませぬ。よしわれに優しき人であらうとも――母には辛きおもひ出の形見よ！

母が彼れを見んと、富も幸も――すべて奪はれた、あかつきの夢よりなほ殘酷な影であらう。

子ゝ持たぬ若き姑に仕へ、放逸なる夫を守りし若かりし母のなげき――悶え――いまだわが瞳の奥に影と

なつて殘されてゐる。
迷ひし人に諫言は無益であつた。
皆手をつかねて母に同情の人は去つた。止むれど去り行くわが家族よ哭けどつどへぬわが家族よ。遂にわが家庭は寂寥の氣にみち／＼た。

われ脳を病むでと數十日、茫然として母もなく、天地もなく、全く無境の境に遊んだのであつた。

きのふに變る哀れなわが子を抱いて、母は袂をしぼつたと云ふ。

たゞひとり子にもまして愛でいつくしんだ、わが子の變り姿に父は自暴の思ひに走せつた。兆しであつた亂行はいま更につのつたのであつた。



（地）村長の妻　甲斐　伊東よし子

よし父が一事の戯れにせよ、わが百年の苦樂を共にすべき人は——當時その母と云ふもいまはしき父が外妾として、虎之門の邊りに住はせてあつたのである。

人は愚かなる子よ、とわれを指さし笑つたであらう

母は己が袖に秘め、胸に抱いて一年前のわが子を思ひ浮べ、泣きつ悶えつ、恥しきわが子を見せんため名ある醫師の門を叩いた。されど遂に母をして滿足せしむる醫師はなかつたと云ふ。

＊　＊　＊

わが生命、生きる命はなんの爲めだ。生きねばならぬ、と云ふはわが苦痛の叫びに過ぎぬけれど。

詩

生もの

港の女

A

鳥が啼く
後の丘の若葉にかくれて
赤い鳥？
青い鳥？
私の心をひきちぎるやうに
あゝいら〳〵する――堪へられない
明けはなした南の窓から
とろんとした海面に反射された
黄昏の薄光がさして
滑かに壁をはひ
なつかしい海の香がしづかに
私をめぐつて居るけれど

私の心許いらたゞしくなつて
湯あがりの暖い肌ははげしくふるふ
鳥が啼く――鳥が啼く
どんな鳥だらう
手に取つた眉刷毛は落ち
紅さし指を唇にあてつとはげしくふ
るつて居る
私の心も肉もひきちぎつてしまふの
だらう
後の丘で鳴いて居る
だん〴〵聲が鋭くなる――
赤い鳥？
青い鳥？

B

ホロリ――ホロリ
黒い梅雨の夕の濕地に
落ちて咽び入る柿の花――
一つ又一つ
暗がひそひそと濕た土藏をめぐつて
白い私の肌にも吸つかふとするとき

塀の影からのぞいて居た猫は走りよ
つて
狂ふ樣に柿の花をかぎはじめた
長い尾を地にたれて
キラッキラッと眼のおそろしさ
神經が痛くなる
胸の肉を透して鋭い眼光が
つき刺る樣だ
又塀の影から耳をふるはしつゝ
てちらを見て居る二つの瞳――
硝子の錐の樣な――神經がいたい

（入賞）

あなたは餘り感情が激しすぎるのだらうと思ふ、クワツと物に感激して了つて、靜にその感情を味ふ餘裕すらないのではなからうか、詩は素より感情から生れるものだけれど、生れて來た形を再現する時は、靜におちついた態度を持つてゐなければならぬ只激して仕舞つて、あゝ痛いとか、あゝ苦しいとか言ふだけでは藝術は出來ません、隨つて出來上つた作が自分ながらも表はさうと思つたことが、表はれてゐないで、よけいなことを澤山言つてあるやうに思ふでせう(評)
BよりAの方が好い

カンテラと花瓣と

越後　幸子

すべりゆく蛇の歩み、
青蠅のむらがり……。

カンテラの
油煙ににじむ春の夜、
水面に浮ぶ
金魚のさびしさ。

凋れゆく草市のかなしさ、
力ない葉は
青い水のしたゝり――
赤い花はこぼれ
茫漠たる群集の心へ……。

青い涙

靜かな泉のほとり
バターカップス
乳色の香は豐かにたゞよひ、
夜の鳥の青い羽毛は
おだやかな水面に彩を畫く。
岸邊に赤い花が散る。
霞を流れる黄色い蝶々の
青い涙がながれて、
冷たい冷たい、
花の唇へ――

『カンテラと花瓣と』は一寸よかつたが、何故今少し細かく心を働かさなかつたらう(評)

影

小ゑゝ

灰色のそら
泣きぬるゝ夕ぐれ、
くろずめる木立、朱の樓、白尖塔
一やうにしづめる
影の深きさびしみ。

白き鳥の一群
戲れたげに
空のひまより
尾をひいて
白き鳥の影と姿と
(見よしばらくは
圓となり、
半圓となり
螺旋となり
水の面に狂ふ。)

黒き風、くろき涙
浮べる印象
水の上の輪廓の
たゞよひ――不安――
われは恐れぬ

ものになりさうな根柢はある、未だ確に詩の心持を握つてゐない(評)

たんぽぽ

むらさき

あら又飛んだ汝風に
白くはだけたたんぽゝの
鷺鳥の毛より輕らかな
實が飛び立つた――いそ〳〵と
言葉の荒い海人が
船よりあげて口をまとも
こゝに乾されし青昆布
お前の傍に生立つた
黄色い花のたんぽゝは
夏の浦風吹くまゝに
海の面へ――左樣なら



顏

夜雨選

軟かい顏

よこはま　やみよ

Ｓ子さんと某座の立見をした。其時すしやの彌助と云ふ前髮のあとの青々した、色の眞白な昔の男が、しつかりした歩きぶりで出て來た、私は其立見の場から遠く遥かな舞臺に立て、踊てゐる其男の顏が、何處となく、美しい昔のさうした人にあり相に思へた。そして其顏を見てゐると、一種軟い樣な、快い刺戟を感じた。其時其役者が誰れであらうと、そんな事は何うでもよかつた。其幕が經てからも何だか、其舞臺に心が殘た。外へ出てから、私はもう一度繪看板を見た。そして何うかして其顏を、判然と印象さしておかうとつとめた。道々Ｓ子さんと咄し乍らも、其顏が消えて了ひ相でならなかつた。其夜は、書く事が澤山ある樣な氣で日記へ向た……だが何と書いてよいか全く解らなかつた。其くせ何故か、其顏と云ふよりそれを見た時のほうとうるんだ樣な、軟かい刺戟を忘れる事が出來なかつた。ぢいつと眼を瞑て思ひ出さうとすると、却て　囚ハな印象がこはれて了ひ相だ……時々夢の樣に心に浮き出る、それを逐ふとするとやつぱり駄目になつて了ふ……。あの軟い線で出來た、情味の豐かな彌助の顏……あのやうな顏を、あのやうな心持ちで、もう一度見たい。（入賞）

一歩をあやまたば千仭の谷に墮ちん、心せよ彼等の多くは河原者なり。（評）

暗きおもて

麻布　草の門

パラ〳〵とページはくられた。開かれて行く本を私はちよつとおさへて見せた。ちらと見て慌てゝ伏せてしまつた。

初心らしく薄く頰を色どつたまゝ横をむいてしまつた——無言である。

「いのちより深い愛はないでせう……」と私は小聲でいつた。苦笑せる人の横顏を覗くやうにして丹び獨言のやうにくりかへして言つて見た反抗もしえぬ男の心をあはれんで勝ち得たやうにうれしかつた。嘲笑の笑みは唇に上る。

左の頰にたゞひとつある大きなほころを珍らしさうにみもした。戀人として見ておくにも實際いゝ男だなあとそんなことも思つた。

それで自分の顏を見らるゝのがいやさにいつも人の顏より目を離さぬ——私の方で見てゐる間は決して相手は瞳をむけぬ。

おもながの輪廓の正しい鼻筋の通つた——男には惜しい顏だ。下をむくと少し愁ひ顏になるのがきずだ、けれど——大きい目をちらと伏せた、——耻らひの情の顯れた時は優しみがある。島田のかつらでも付させて——そして私のあの紫矢がすりの小袖を着せて、オレンジ色の丸帶でもしめさしたらどんなによく似合うであらう……とそんな餘裕のあることも思つて見た。

「エヽ、なぜさう僕の顏を見るのです……どうせみつともない男です——」と景氣なほしにやけに云ふ。

「ホヽヽヽ、あなたがあんまりいゝ男だからよ……」とまぜつかへして笑つてしまふ。

二三日たつて逢つた時だつた。一目見て彼れの怒をしることができた。恐怖、不安、それを隱さうとて力めて冷靜の態度をとつてゐた。

「兄さんに僕のことといつたのです……ね」と力入れて云ふ言葉は怒りに燃えて顫へてゐる。「いいえ、うそよ……」とせわしくいつた。とつさの場合は僞りの言葉もたやすく出る。一づに腹立つた人とわれ、二人は無言のまゝに睨み合ひのすがただつた。

「おこつて入らつやるの……」と覗くやうにして云つて見た。「それやあ腹も立つさ……だまつてゐて下さいとあれはどたのんでおいたのに——あんまりひどいやり方だから……」と云ふ。

無言のうちにいつとはなしに柔ゝ色は顯はれてきた。「それだつていはうといふまいと私の勝手ぢやありませんか……」「でもいはれてこまるからね……」としよげて云ふ。「言はれてわるいと知つてるのならよした方がいゝわ……」とやけにいつてのけた。

私をだいたんだとしみ〴〵おこつ男の顏を見るけれど、戀らしい感じも、恥しさも浮ばなくなつた。

兄には言はずもよかつたのだけれど、包まん

とせるものは、とすれば顔はるゝ運命をもつてゐる。わが獨身と云ふことを深く考へてゐる私が、二十二年の思ひも捨てゝみめ美しき男なれば心操をも捨てん。われより慕つたと解せらるゝを恐れたのである。

醜き愚かなる身の程をしらで、戀を思ふや。わが戀はいにしへの物であつた。孤獨はわが生涯の思ひである。いかなる運命に導かるゝも生涯淋しき孤獨の心の失せる時はないと思ふ。あゝ暗きはわが運命である。

この君の文はかつて支離滅裂手にをへないものであつた、が隠約の間に潜熱の光をみとめて介抱したかひがあつて、もう一二間は手放して歩かせられる。若杉はま子が私の手に縋つたのは十五の春であつた、書きかへてやらなければ活版屋が泣きさうな字であつた、それもこれも昔である、何時まで稜を投げず機から下りずに居られもしまいさあく御祝儀御祝儀。（評）

わがもの顔

府下　小夜しぐれ

顔！一と口に顔と云へば、誰だつて一つつつは持つてゐるもの。別に珍らしくはありませんけれど、さてその顔てふ世界に住ひするものの、居場所とそれの形とによつて、中にはずゐぶふき出さずにはゐられないのもありますねえどなたも顔は大事と見えて、お湯屋にゆくと一番よくわかります。我物顔にべたり、鏡の前を一人じめして、ぬつてにはがし、洗つてはぬりはるか後ろに下つて、鏡中をうかゞひ寄ると、どこから鼻の領分か、一寸見分けのつかないやうな面積のひろいお顔に、白いもので鼻すぢ通してそつくりかへつた、厚い唇に、眞紅の椿を思はせるやうな紅のさしかた。お氣の弱いゆう様が御らん遊ばしたらきつと氣絶あそばすわ。ホヽヽどなた？貴女は？」なんて。

これは少々おなまさんだ。（評）

顔

名古屋　毒だみ女

道行きずりに、ふと見交した細眉が、其儘、胸に刻まれて、いつまでも忘れられないと、云ふのがあるかと思ふと、四年五年を同級の毎日合する顔も、物のはづみに、空に消えて、明らかに想起し得ぬといふことのあるのは、私だけにかぎることかしら。

眼と鼻と口と耳と眉、皮膚の色彩、髪の多少、顔全體の輪廓、此等の物から成り立つ顔といふもの——美と醜との間に、果してどれだけの差があらう、成り立つ骨格、蔽へる皮膚の五りんの差、一分の違、調和不調和はきはどい處でわかれて居る、五分と違はぬこの差から、ある人は先天的、人から敬愛せらるゝ祝福を持つてるかと思ふと、ある人はこれと反對な運命に一割も二割もそんな世渡りをして、あへぎく暮して行く。美の醜のと云つたとて、顔の持主の當人は實は何の利害の關係もない筈である、それぞれ官能を正しく受けて呉れたら、眼も鼻も口も耳も立派な者と云へるだらうし、喜怒哀樂の表情をともかく表すことが出來たら顔の務は終つた筈である。美と醜とは周圍の他人の批判からである、何處までも、自己を本位として考へると醜婦と生れたのは、一寸も口惜しくないと云ひたくなるが——朝毎の鏡にうつる自分の影かゞみのかげやはり美しいのが嬉しい。美しくもない肉體を、紅や白粉に塗り立てゝと心の底からの嘲り聞きながらも、未だ刷毛をすて得ぬよわさを私は泣きたくなる。

最上の人は只存在するその事すでに有意義である、美人に生れたかつた、絶世の美人になりたかつた。存在することのみにて美の表現の最高として、諸人につまづき敬せしむる程の美婦になりたかつた。

せめては人の胸にのこる顔となりたい、すらすらと癖のない、若竹のやうな美しき顔でも只それきりなのが世にはあるが、さういふ部類には這入りたくない。

名をきけば眼のひらめき工合、口の動き工合、美しく特徴のある顔を、思ひ出させるほど人の胸に深く印象をのこす顔となりたい。

意氣軒昂（評）

生れて十日二十日乃至親いみのあく頃迄の顔は人間の顔らしくない、それより稍人間の顔らしくなりて、百日もたてば眼の働らき、唇の表情にも生物らしい意味が表はれて來る、男性女性の區別のはつきりと分つてくるのは未だそれより後の事である。二歳三歳より五六歳頃までの顔は一生の間で最も好い顔であらう（ＳＭ）

各地婦人風俗

徳島地方

田植に雇はれる女

私が生れた小松島は、勝浦川の平野であるから、此邊は水田が多いので、村の農家の婦人達（娘でもお内儀さんでも）は自分の家の田植がすむと、直ぐまた田植のしない隣村へ雇はれて行く。幾日も泊るのであるから、二三枚の着換へを負ふて、新しい編笠を持つて、箇々別々に行くのもあるが、中には二三人が一組になつて一軒の家で、二三日も植ゑる。一日の賃錢は年齡や何やかで多少の差はあるけれど、大凡三十錢内外が普通の樣である。そして其の家を植ゑてすむと、直ぐに次の家へ、又次の村へ、又其次の村へ、と順次に先へ〳〵田植ゑを逐うて、體の續く限り働いて金を儲けて歸るので、いづれ四五圓位にはなるのである。

それでひと年雇はれた家は、互に心安くなつて、雇ふ方では來年もあてにしてゐるから、又是非來て呉れといふ。どうぞ雇つて呉れと契約して歸る樣になるので、翌年の春は又樂しんで雇れて行くといふ風になる。雇ふ家でも後々の爲を思つて隨分厚遇するさうである。

煙草の栽培

それから私が今現住してゐる縣下の山分、西阿波の婦人の全體も、矢張農業ではあるけれど此のあたりは水田がないかはりに、煙草の栽培が盛なので、男子も女子も年中煙草の事にかゝつてゐる。秋の末から翌年の春へかけて、其の作つた煙草を町の專賣局へ納附する時には、大抵は男子が擔いで行くけれど、中には小ぎれいな着物を着た婦人が、隨分驚く程な大きな荷を一荷にして、遠い山道を擔いで行くのを見受ける。

又中には十四五以上の娘や、中年の婦人が、煙草の工場へ煙草の葉を卷くための工女に雇れて行くのもある、そんな婦人達は、一寸山村の人と思へぬ樣に小ざつぱりとした風采をしてゐる。そして毎日朝は暗い内から起きて、夕方は五時位の仕舞であるから、冬期などは全く夜からの勞働である、しかも私のゐる村などは、其の工場のある町へは、山を十餘町下りて吉野川の、渡しを渡て、尙暫く行くのであるから、毎日よく體が續く事だと感心してゐる。

腰帶一筋で外出

次に山村とか、海岸とか、すべて勞働する婦人が常に帶をして居らぬことは、よく話にも聞くけれど、私が今のところへ來て、第一に目についたのは、大方の婦人が毎日腰帶一つでゐることで、一寸近所へ用達に行く時でも、病氣の見舞に行くにでも、學校へ用がある時でも、そのまゝで平氣で來るのである。又或時は祭禮だとか、法事だとか、其他いろ〳〵なお客に招れて行くと、頭だけは麗しう丸髷に結つて、赤い手柄をかけて、きれいに化粧した花嫁さんが、矢張腰帶一つで、平氣でお給仕に出て來るのは驚いて仕舞つた。然しこれは近き將來に追々必ず改められるであらうと思ふ。

なつかしい巡禮姿

最も懷かしいのは、陽春三四月の頃、美しく粧ふてぞろ〳〵と旅に出て來る四國順拜ノ遍路姿の娘である。尤他府縣からも、四國遍路には來るけれども、大方は四國の内の人である。月なき夜の空の星を見る樣に、ハツキリとした久留米飛白か、立派な瀧縞か、大名すぢかの着物を着て、一尺程な前掛の樣な尻あてをして、美

しい色の湯巻を花吹く風にひら〳〵させて、紫の手覆ひをしたやさしい手首に小さい珠數をかけて、あとかさとか國名の頭文字を印した菅笠の内、あやめメリンスか、鬱金木綿かの手拭に包んだ白い顔の床しさ美しさ。或は身内の者の病氣平癒の御禮參りに、或ひは華やかな花の春の思ひ出にと、或は五人、十人、二十人、打連れ立つて、金剛杖片手に花美しい春の長い日を佛の御名を唱へながら、のどかに樂しげにあるいてゆく可憐な姿の懐しさ、丁度、風に誘れて散つた花が、どこまでも〳〵風に吹かれて行く樣である。(松並てま)

信濃

夏の美人

信州の女は夏が美しい。強い寒さを防ぐ爲に着た、曲線の描ない厚い着物を一枚づゝ脱いで、裾さばきの輕い、セルの單衣の頃から、周圍の自然美と相俟つて若い女の姿は際立つて美しく見えます。

長野の婦人は總て質素である。ぱつとした華やかさは何に於ても見る事が出來ません。まさかそれが善光寺と關係のある理由でも無いでせうけれど……。

眞夏の夕、派手な浴衣を涼しげに着た、只其處に若々しい姿の美しさを見ます。

服裝

同じ物でも東京あたりよりずつと質素です。歲した人は後の爲め〳〵とそれ許りを云つて年より質素な物を着せます。そしてそれが丁度好くなる頃には流行遅れになる。惡歴工合で年恰好にも時の流行にもしつくり合つた隙の無い、どいふ身粧ひは出來ない事になります。實際あまり見受けません。

東京、京、大阪、名古屋方面から、隨分毎日の樣に參詣團體が入り込みますけれど、皆黑繻子の狹い帶を締めた樣なお婆さん達許りですから何の影響も受けません。割合に官吏の多い故か際よりも品好くと粧ります。惡くすると野暮になりたがります。

女學校の生徒は無論木綿の着物に木綿の袴、袖も成るべく短かく、靴は許されません。毛繻子張りの黑い洋傘に、桐の日和下駄をがちやがちや履いて、彼の湯福神社の上の坂道をぞろぞろ登る姿は、決して美しいとは見えませんけれど、什處に浮薄な現代の風潮に染まない頼もしさが見えて、知らず嬉しさに微笑まれます。

私立の女學校はよく知りません。

髪

服裝につれて髪も、恰好の好い桃割れや粹な銀杏返しよりも束髪が多い。隨分古い型のを見受けます。

けれど此頃は大へん日本髪が多くなつて來ました。思ひがけない人が粹な銀杏返しになどあげて居ます。

島田は餘り結ひません。祝ひ事に招ばれる時位なもの、最も結婚前には少しの間あげます。

半襟の掛かつた粹な柄の着物を恰好よく着てふつくりした唐人髷や、濡羽色の島田髷になど結げて帳場へ坐つた美しい町娘の姿、東京の下町でよく見る斯うした懐しい姿はまだ見られません。

山國でも髪のつやは變りません。

體格

高原婦人の特性として、顔の輪廓は柔かい丸みを持つて居ますけれど、體軀の曲線は強い樣です。

それが爲に女らしいしなやかさを傷けて居ます。それに水が惡い故か、すつきりとした艶艶しさがありません。

お隣の越後は美人國ですのに、信州は什麼も自然美に蹴下されて居ます。最も木曾は美人系だと云ひますけれど……。

言語

長野と云はず北信の人は總て言葉が荒い。そして強いアクセントがあります。けれどそれもだん〳〵諸國の人が入り込むのと、教育の力によつて直つて來ました。松代の言葉だけは大へん優しみがあります。

よく信州の人の話をして居るのを蔭で聞くと喧嘩して居る樣だ、といふ事を聞きます。まさか女はそれ程でも無いでせうけれど……。

其口調でよく理屈を云ひます。

方言はさう際立つて耳に觸るものはありません、云つたを、せつたと好く云ひます。

性質

けれど心持ちは決して其麼荒い強いものではありません。如才なく人にとり入るといふ事はしませんけれど、よくつきあふと上滑りのしないしんみりしたところがあります。けれど一寸表面は冷たい樣に見えます。自分から馴れ〳〵しく解け合ふといふ事をしないで、つんと高く止まつて居るのが缺點です。

宗教

どうも是は善光寺の膝元ですから爭はれません。キリスト信者は極僅かです。教會の婦人會などは眞實に寂しい

ものです。

善光寺へはよく行きます。信仰の爲でなく只無意識に行くのです、さあつて云へばお堂へ行く！、誰も公園へ行くといふ者はありません。公園へ行くとしてもお堂へ寄ります。

遊藝

今はお琴の全盛時代、お茶も可成り盛んです。お花は師匠の好いのが無い樣です。三味線、踊は極僅かです。演藝趣味といつたら先づ零と云ひたい。義太夫をみつしり習かうとする女が幾人！ 深みのある舊劇より不如歸や女夫波が喜れるのです。常盤津や清元でさへ興味を持つて聞く女は少ない樣です。讀書力は確かにあります。よく雜誌や新刊物を讀みます。けれど其割合に文學思想は發達しません。

洗湯

これは長野の名物だから書き添へたい。其汚なさと設備の不完全なのとはとてもお話になりません。汚ないので名物なんです……。湯の汚ないのは水が惡いのと少ない爲です。設備の不完全なのは什麽したものか？ 湯氣で腐りかけた天井から、冷たい雫がポタリと脊中へ落ちる、氣持ちつたらありません。お化粧がしたくも流しに鏡の無い湯屋がいくらもあります。桶が少ないので金盥を御持參です。其不快を補ふ爲に、程近い所に小綺麗な遊山湯が澤山あります、安茂利の杏が咲いても、紀念公園の信濃櫻が咲いても、陽氣にお花見する女はありませんけれど、此一日湯にはたまたま出掛けます。それに温泉場へもよく行きます。矢張り澤山あるからでせう。（喜美子）

京都

▲もつと樣子しておあるき

京都の町娘は、下京上京通じて、一つも違つた點はありません。十五から廿二三迄の間が、最も美しいのです。小學校を出ると、すぐ幅の狹い帶を胸高くしめて、十七、八頃まで總じて赤色の勝つた衣裳をきて、遊藝の師匠などの許へ通ひます。未だ學校の習慣のとれぬ間は、毎日友達と組して通ふ後姿や前恰好を見くらべて、「まあ、あんた一人がようすもせんと、そつて歩いて　まるでガチャ馬の樣な」と母や姉が云ふのでだん〳〵しな〳〵と歩くやうになるのです。勿論、十四五、早きは九歳から音樂の稽古をして居ます。かうして十八位迄は裁縫を主としてやりますが、是からはお嫁人の仕度をせねばならぬので、細工物、茶、花を熱心に習ひます。そして春の花見、秋の紅葉見に自分〳〵懸命に工夫した衣裳をして、師匠と共に見物にゆくのです。卽ち此ときが最も氣の張り時で、一生の運命は稍もするとぢやない、十分の六分はきまるからです。

▲格子から覗いてゐる美人

髮の結ひ方も多くは日本髮で、桃割、高蝶々、高島田、低島田、蝶々（銀杏返）といふ順序です。髮結師も勿論流行る者を招いて、結ふ事にしますが、時には明治座や、歌舞伎座へ、おとしと云つて同じ流の髮結つた人が、大勢芝居見物に出かけて、時の流行を見に行くのです。かうした外は、餘り外出はしません。只毎日あの格子から覗き見して居るにすぎないのです。だから美しい女は無いのではなく、外に出ないのです。

▲西陣邊の現代風

京都は上京と下京とに別れて居りますが、細くいふと、中京と西陣とがあるのです。西陣といふのは、上京の内に入りますので、皆樣も御存じの如く、織物の產地として、名高い處で御座いますが、常に地方の人が入り込できますので、純粹の京都婦人は、全く僅かであります。殊に東の今出川邊は、町で東京の人が入り代り立ち代り來ますので、自然と現代的になつて、着物や帶の柄でも、派手なのを好むやうです。此處で特に目に立ちますのは、上下を問はず、町娘は大きい帶を流行りでもありませうが、務から下五寸計りのところから、お尻の邊まで丁寧に常に結んで居る事です。音樂はやはり、琴、三味線の類で御座います。

▲中京は純粹の京都風

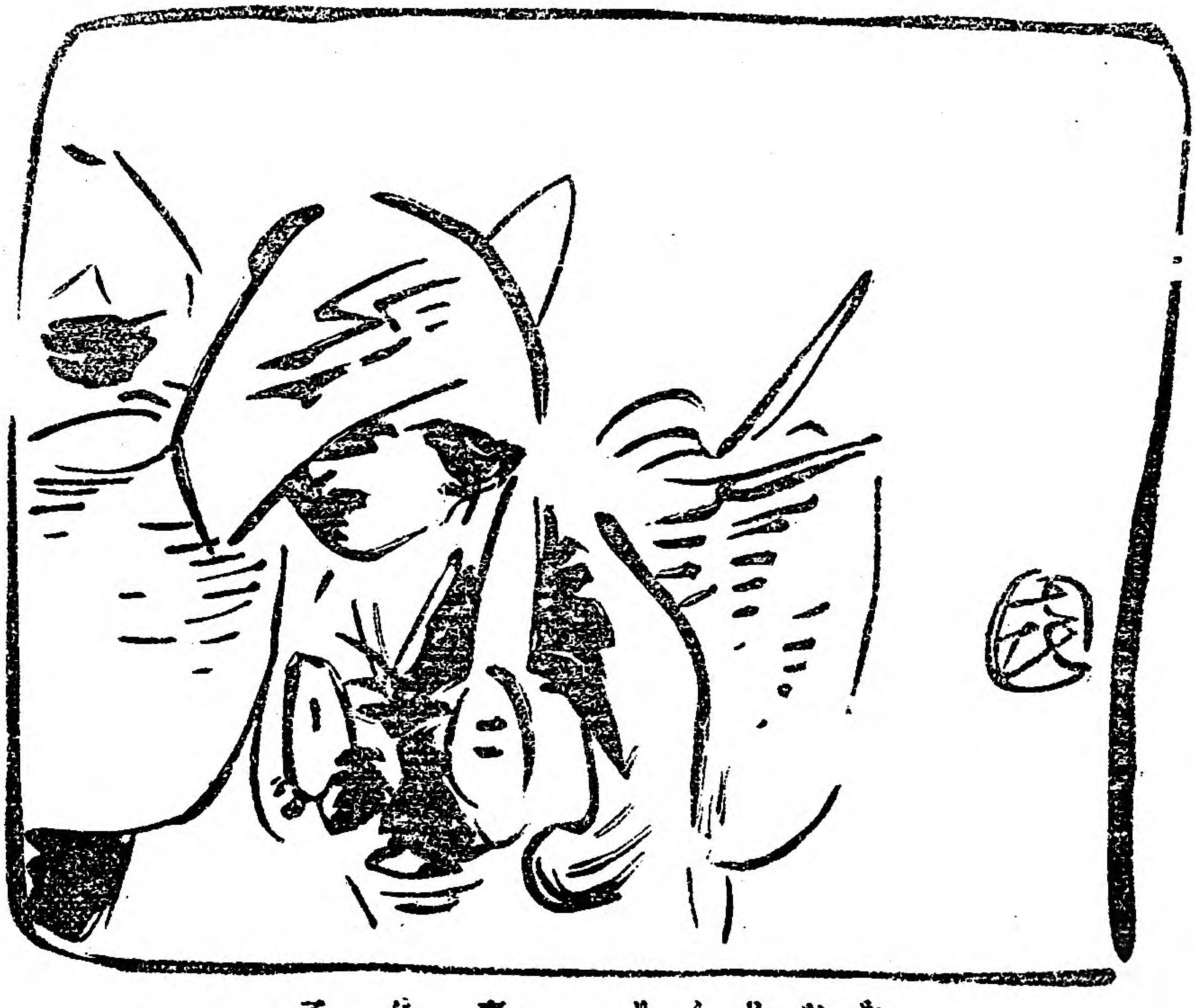
中京は、下京と上京との間にあつて、京都のうちでも極く保守的な處でございます。こゝ五六年迄は、昔の京都其儘で、中流社會の三代四代と續いた家柄の、絲屋とか、織物仲買とかの商賣で、大變舊僻な所でしたが、只今では、代議士等も出て、大分近代的になつてきましたがやはり昔の面影が殘つて居つて、子女をして女學校等へ通はすことを餘り好みは致しません。所謂深窓の奧深く閉籠つて、茶の湯、生花、音

曲を習つて、起居の優雅であるやうに養はれて居ります。服装等も大變高價な地味な物を用ひますが是にも昔の京都風が殘つて居つて例へば、長襦袢をするに、裾をちりめんにして、胴の處でフクリンとか、よくつて、ひつた鹿の子を用ひ、全體に十圓入る物なれば、八圓は見える處へ費して、見えぬ處は逃げておくのですね。

特に目に立ちますのは、生花や學の稽古に出かけるのに、長いお袖をふり乍ら、丁稚を後から供に連れて歩く事です。中京は總じて純京都言葉で御座います。

▲女學生の風俗

女學生は近頃大變にハイカラになつて、（いふと語弊があるかもしれぬが）私等の目からは見よくなりました。しかし道路を歩く中には、古代紫の袴を胸高く質素な利久下駄をはいて、包も胸にちやんとかゝへて、小またにつゝましく歩きます、是は地味な京都人が、見ても見にくからぬやうに、學校が養成するからです。けれど中には氣取つた、極ハイカツた校もあるやうですが、大體が先質素です、女學生の袖は、總じて一尺五寸ときまられてあります。（要司村韶子）



わかめうり　喜代子

陸前鹽釜

▲海に育つた女　此地は一部の町をのぞいた外は、主に漁師、船頭、揚屋、（魚揚げ場の事なり）と云ふやうな職業の者が大部分を占て居るのです。でこゝの女は、仙臺からくらべると、一層言葉もあらく、夏は襦袢一枚に腰巻と云つた樣ないでたちで、風姿は至つて粗野ですけれど性質はごく正直で、骨を惜まず働くことは感心なものです。夫が船頭で、妻が魚賣だとか、魚揚場へ行つて夫婦共かせぎなんて云ふのは珍らしくありません。都會の女なら、それ紅よ、おしろいよとさわぎ廻る年頃の娘でも、なりふりかまはず、父親と一所に船をあやつゝて、はせつりとか、かじかつりとかに出かけて行くのもあります。

▲仙臺が世界の都　かう云ふ風で小さい頃から働らかせると云ふ慣があるので、女等は尋常小學すら卒業して居ないものが多く、十七八にもなつて自分の名も滿足にかけぬものが珍らしくないのです。女學校等は勿論ありません

し、又中等教育を受けやうなんて云ふものも少ない。たまく〵あればいづれも仙臺へと出かけて參ります、一體此地では、嫁入り前に必ず一度仙臺へ奉公に出なければ肩身が狹い樣に心得て居る樣ですけれど、上京等と云ふ事は思つても見ず、むしろ恐れて居る樣です。これには原因があるのです。

▲東京を恐れる理由　東京から紡績工女を集めに來た者が、言葉たくみに若い女どもをつれて行つたところが、一年後に一人が大病で歸國して、なほ先方で同行の者等が悲慘な境遇に居ると云ふ事を物語つて、とうく〵死んだと、それが狹い土地へぱつとひろがり、正直一方なこの土地の娘等には、東京と云ふところは、餘程恐ろしい所の樣に頭にひゞいて居る樣です。たとへ女中奉公にでも行かうとは云ひません。他の地方の若い女の樣に、東京にあこがれぬいて居るなんて云ふことは、恐らくありますまい。其かはり、仙臺へは幾度行つたとか云つて、自慢にして居る位で、至つて世間の狹いものです。

▲火事とは何んなもの　十人が十人、かうと云ふわけでもありますまいが、宅に居る女中等十八にもなつて、火事とはどんなふうにもえる物かゝんて聞く樣なわけで、鹽釜には火事もなければ、どろぼうも居ないさうです。從つて生れるから潮風をあびて育つた樣な、世間見ずの女が多いのでせう。

▲美人なし　美と云ふ方から云つたら、先づ零でせう、潮風にあたるせいか、髮は赤くちゞれ、肌の荒い者が多く、美人は殆ど見掛けませんが、又土地のものも、決して美しいのをたつとばず、よく働く者をよろこぶさうです。

（野村きやう子）

岐阜

岐阜の名所は伊奈波の櫻
長良鵜飼に金華山

夏でも襦袢かさねてきつちり眞面目相にして居られないといふが岐阜婦人の癖、山の手やくろつぱしの櫨の神達には、うすこげの肌を惜しげもなくお湯巻一貫に前垂一筋といふ、頬ゝ振つた御いでたちで、お米もとげば御給仕もなさる、髮を美くしう結つて、えりからお顔へ白粉なんかぬりくつた姿は、さながらの一文人形。

官吏とか、給料とりなさるお家の方は、もう若いからつて、そんななりはなさらぬと思ふ、廣いおみ帶に白いぎやだつきの前垂なんか、女中さんでもやつてなさる、お孃さんたちはまた格別湯上りが美くしい。

商家の妻君たちは夏似留ふ柄物縞物、東京を見習つて一般に派手になつて來た。お髮は九髷が一等多い、娘さんたちにも桃割や島田がふえて來て、束髮の方もちよいく〵はある、手輕たからでもあらう。

女學生では黑の二本筋、縣立の袴裾が一等いいうけが白足袋にお襦袢の衿を重ねてそれぐ〵少しづゝはちがふけれど、によつたお袴の色合が水色や淡紅色の洋傘にはえて、こゝはお下げもあれば桃割もある、お靴うがつた孃さんもある。

續くのが富田女學校に佐々木女學校、訓盲院の女生徒さん方、入學して間のない方なんかは足どりをふかつかせて、岐阜の市中を眼みえる人につれて廻つて貰ひなさるが、とぼく〵となさるのがお氣の毒でならない。

夏はあまり足袋をはかせぬのが高等小學校や尋常小學の兒童、ちりにまみれてみともなく感ぜられる。

幼稚園の子たちときたら白鷺のむれおりた樣に、白前垂に赤いリボンおさげが多い、なぜか此頃子供の髮の毛が赤くなつて來た樣にみうけられる。

市外でも加納町や長良あたりは南と北のはしでこそあれ、市に接して居るから風俗に於ては岐阜の市内と少しも變らない。でも加納町は傘の產地といふだけに、紺のうはつぱりをきて、糊や澁まるけになつて、夫と並んで向ひあつて仕事してる樣は感心なものである。

（篠田とみ子）

盛岡

▲女の行商　黑木綿の筒袖に股引草鞋穿き、頭には紺絣の頭巾を深く冠つて、大きな籠をかつぎ、春は野菜もの、夏から秋にかけては果物と云ふやうに、雨が降つても、風が吹いても「蕨はようござんすかアー」「梨お買アせんすかアー」と悠長な聲をして市中を賣り歩くのが、女行商人です。

▲一日の利益　此女たちは多く市の場末に住んでゐて、毎朝早く三時頃から起き出で、一日

中の支度をするるのです。夫は土方に行くとか畑へ行くとか、子供は學校へ行くとか、畑の草取りに行くとかする。それから母親は肴市場や青物市場へ賣殘りを買出しに行く、而して一日無駄話を方々で、しやべりながら上手に商をしてゆくので、一日の利益は多くて五十錢、少くとも二三十錢にはなるのです。

●●●●●

▲追々現代風　一體盛岡地方は、婦人性質も京都風で、非常に柔順で女らしい、時代の變遷と共に此頃は多少現代式になつて、女學生間には、お下げもあり、リボンをかけたのもあり、先祖代々の着物などはすたれて行く方ですが、それでも女學校の運動會に孫のダンスを見て卒倒したり、英語の會話を聞いて目を廻したりしたお婆さんの居たことも、ツイ去年までのお話ぐさでした。（とわ子）

武藏狹山

お茶は狹山よ、狹山はお茶よ、と歌はれる我村は狹山茶の本場で農も盛んで養蠶も熱心に、行はれております。茶を摘むために、手甲脚絆も甲斐々々しく、野に行く娘、蠶の世話に忙しい妻もあります。只今は蠶で六月には糸を取り、或は麥刈に急がしく、それからは「私の姉御は生れはするが、するがよい所お富士が見える」など〻機唄が窓からもれて、やさしい機音のする家が過半になります。

一月になれば、昨年中の縫物を皆洗ひ張りして、其暇々に四人五人の小集で歌留多をたのしみ、あるひは、淑女會の讀書部より回り來る諸種の書物をよみては、たのしんで縫物にいそしんで居ります。三月の中旬に一回又淑女會と母の會の講話會に、郡役所よりも御足勞を願ひます。それがすめば、同じ彌生の末つかたには蠶影山の祭とて婦人許り一軒の廣い家で集つて、蠶の本年も結果宜しき樣にと、いのりを上げて祝ひます。四月は各字の祭典で、種々の餘興もありますが三人の女に一人づ〻は、監督がついてをります。まつりもすめば茶の初まる支度に掛つて、いそいそと働きます、大した野の仕事こそ致しませんが、當地の婦人は、一般よく稼いで、男に從順で、世にいふ女天下の樣な家は、御座いません。（加藤榮子）

本號所載　作家國別表

國	作家
東京	若杉はま子。野薔薇。白ふぢ。藻の花。三宅やす子。井淵英。珠野すゞ子。山百合。夢殿守。ひなげし。よし子。章子。小笠原ゆり子。佐藤萬壽子。加藤筆子。眠れる花。長曾我部菊子。はゝき木。はやぶさ。白木絲子。葉がくれ。草の門。古那無。かね子。平塚白百合。佐久間貞子。小もゝ。ふさ子。ひざくら。赤蜻蛉。
横濱	闇夜鳥（やみよ）。月草。
大阪	かげの人。
京都	竹村槇子。森下みどり。要司村福子。
武藏	中村みどり。山の女（山つばき）。加藤えい。
越後	齋川幸子。秋月すゞ子。
土佐	あけぼの。
豊後	吉良花守。
阿波	松並こま。
北海道	野の百合。
陸中	と　わ。
常陸	田村波津子。
駿河	秋月萩江（高尾）。
尾張	紅緒美。
美濃	篠田とみ。
不明	埋れ木。
神戸	港の女。
伊豫	香の女。
清國	屋根の草。
陸前	淋しき人。
信濃	前島優梨子。
岩代	木下はる子。
遠江	夕やみ。
三河	目のたま。
飛驒	とら子。

女の爲に呪ふべき時代

月のたま

默すべきか、默さゞるべきか――、私は乾いたペンと白い紙を前に置いて、殆んど旬日を躊躇に、過してしまひました。欺かざる自己！それを思つたからです。一旦筆を執りました以上は、私は私のすべてを表白しなくてはならぬと、思つたからです。世に處して足らぬ勝の私には、ともすれば恐怖といつたやうな、其樣道德上の觀念に左右せられて、つい自己を虛飾するやうな事がないとも限りません。併し皆樣、たゞ一人冷たく更けゆく夜を、机に向つてキッと唇をかんだ、青い顏を思つて見て下さい。その瞳の輝やかさ！、その張れる筋肉の鋭さ！、私は決して躊躇て居る場合ではありません、私は書かねばならぬと、心を決しました。

諸姉、私は本誌をお讀みになつて被居る、澤山のみなさま方とは違つて、極くせまい天地に住む女なのでございます。人妻！　なんといふ單純なさうして複雜な言葉でせう。せまい天地に住む女と、人妻、月のたまは悲しんで居ります。昇天の心地に、樂しく嬉しく暮して居られる人妻もありませう。

私は嘗て自分の價値といふやうな事を、考へて見た事がありませんでした。すべて自分がこれでよしと思ふところまで、自分の運命が持ち運ばれる事を、當然の事と思つて居ました。一旦心に不滿を感じた時、わが價値、わが現在を反省た時の、驚きと心細さとはどうでございませう。イゴイスチックな、自惚の強い女、しかも鳥さしのやうに、ネチ〳〵した舊道德に囚はれた女、それが俄かに頭から冷水でもぶつかけられたやうに、飛び上て狂ひだしたとしたら其の醜體はどうでせう。あゝ私は氣が昂つてきました。私は泣きたい、口惜しい、淋しい、逃れたい。

多數の愛、相對の愛と云ふ事が思はれます。さうし

て泌々其等二種の愛の價値が疑はれます。

私は先達て或人から、ノラの其の後を思へりや？といふ奇問寧ろ愚問に接しました。飜然として我を見た刹那が、彼れノラの全部ではありませんか、私はノラの前後は知らない。ノラはノラを天下に傑出させたノラそれのみ、あとで亦旦那さんの所へ歸らうと、どうしやうと、其れは既に自覺に伴ふた、何ものかでなくてはならぬ、と思ひます。



東京の花壇　淺草　ひなげし

文學とさへ云へば、二言目にはフ、ンと嘲笑はれて了ひます。箱の如き天地に住む人妻が、僅かに蒼空を仰ぐに、藝術を措いて何がありませう。私は早筆と紙に對する自分の能力を、云爲する程自惚ても居りません、少なくとも私は現在の日本の、藝術の達する程度位には、自分の現在の生活に意義を見出したい。だから私は何でもする。これで可いと自分で得心がゆけば、何んでもする。たゞ一歩、わが現在の境遇に、轉化を與へてくれ

る力はないものだらうか、あゝ無いものだらうか！――。私は、夫につかへよ、子を育てよと云はれて、へヘッと膝まづいて、さうして寧ろ欣々として是事として居る友人を見ると、泪がこぼれます。自分は何故這那性質に生れついたのでせう。

屈辱なるべきものよ、汝は人妻なり――、私は何のために白粉を塗り、紅を用うるのでせう。女のたしなみの爲めと、容易く答へえられた時代は、もう疾くに過ぎました。一人の愛を專用するため、這うきかれたら、小鳥のやうに自由で、其の上華やかき無邪氣な皆樣方は、どんなにお笑ひ遊ばす事か、私は耻かしい、耻かしいけれど事實私が人妻と呼ばれて、第一に強く心を震はせたものは何でせう。

藝者になりたい！

女優が羨しい！

嗤つて下さい。私も嘗ては理想と云ふものゝ實現を心竊かに期待してゐた事がありました。併しそれは對者を、かゝるものゝと假定した上でのことでした。既に對者がかゝるものでなかつたとしたら、私の理想も覆されざるを得ないわけではありませんか。自由！自由！、私は自由と云ふ自由の分量と性質とを、そつくり其の儘、何誰かに手渡して、いゝと頷いて戴きたい。一人、たゞ一人でいゝ。無いでせうか、あゝないでせうか――、私の解釋してゐる自由！

私は何故踏むべき道を踏んで、此處に到らなかつたでせう。思想の變遷の上にも、餘りに順路を缺いて居る。『青春の去りゆく時』と、斷崖の人はあゝした、少なくとも私よりは自由な、しかも經驗においても、若いはずな處女の時代に、あれだけの痛切な言語を發して被居る。草の門は『生命より深い愛はないでせう』と叫んで、『妻となり母となつても、悔なきだけの修養をせよ、その修養は處女時代のものである』と悟つて被居る。何等の定見も用意もなく、たゞその經驗の一つ／＼によつて、驚きまどふ愚かな女、悶へながらなほ、力を！力を！とよんで居る私の不甲斐なさ哀れさは、そも何に例へませう、力を他に求めていると云ふそれ自身が、既に我を蔑してゐる。一歩を進んで、何故私は私のすべてを進退する事が出來ないのでせう。

衰へゆくのは容姿ばかりではありません。可哀想に私の現在のどこに、情緒が直ちに詩であるといふやうな美しさがありませう、涙といへば人にも語れぬ、汚ない甲斐ない涙ばかり。偶然感興に任せて筆をとつて

も、と何時か汚ない詰らない感情に妨げられて、何物をもなすことができません。さうして漸次枯れてゆく思索の力、あゝ衰へてゆくのは容姿ばかりではない、容姿ばかりではない！

寧ろ狂へ！、私は絶えずさう思つて居ります。迷へる女の行くべき道は、死か狂か二つに一つをとる。自覺に惑ひて不安と自暴は伴はぬ。私はつひに迷へる女の群を脱ける事は、できないものでせうか。

『文字に毒されたる僕の妻』、『雑誌に毒されたる僕の妻』と這う絶えず家では嘆息され、又或新聞にはこれに似た説の連載されたのを見て、私はつくぐ思ひました。男は一體女を何と思つてゐるのでせう。まるで毀れものかなぞのやうに、あれにもさはるな、これにもさわるなと、其れでは何時の日にか女の向上する時がありませう。文字に毒され雑誌に毒され易い、其那女を作つた時代は、最早九分を過ぎ去つてゐるではありませんか、これから我等は自ら文字をつゞらねばならぬ。文字に教へられる時代はすぎ去つた。我等は確固たる基礎の下に、自らを開拓してゆかなくてはならぬ。

諸姉、みな様は自分のサルクルといふものを、考へたことがありますか、恐らくどの位の思ひに、胸を打たれる事でせう。まどへる女、迷へる女の數多くを、包含して現代に生くる私、矢張り迷へりと自らを疑つて、終らねばならぬでせうか。



夏の夕　　野の百合



機巻く家

山つばき

散る散ると見てゐる中はまだ美しい命が花にある。その美を捉へて悲しい惜しいと泣けば花はわが涙の中に生きて千年萎えないものとなるであらうに、涙少ない私の目には、泥に交り轍に埋まつた花が、往生しきれないたましひのやうにちらついていつも苦しい。苦しんでゐるうちに若葉が隙間なく開く、何れも小鳥が嘴をあけて思ひ思ひの聲を發するやうな感が起る。その聲をはじめは自然のよろこびだと思つた、次には自然が目を覺して美しかつた夢を語つてくれるのだと思つたが、今は周圍の新緑から起る冷笑の聲だと思ふ。

書かう、何か書けるだらうと思つて筆を把ると、ちつとも動かない。星の光がぴかぴかと飛んでゐるやうに見えても、消えるまでじつとして夜を明すと同じこと、この星のお仲間も少くは無いと思ふ、一行書いては消し、二行書いては塗り、白紙を眞黑にしたなどといふ文章を見ると、はらからの言葉のやうで嬉しい、だから天才のことを明星などとも言ひたくない。

書くことが無いのに書きたいと言ふのではない、默つて居ては苦しいから、言はうとすると思ふことが散らばつてしまふ。いつか小供が幾房か、花のついてゐる藤の枝を庭へはふつて置いたのを見た時、私の心もあんなふうに雜然としてゐるのだと思ひながら、下りて行つてとりあげて見たことがある。たくさんの花を緒にぬいてゐるあの綠色の花莖見たやうな糸が、いつかこの心をまとめて、引きたつてくれる時があるだらうと、何物をか賴みにしたのは間違であつた。

はじめから人のやうに整然として思ひをあらはしたい、立派な感を歌ひたい、美事な筆を走らせたいと思つてゐては、死ぬまで一點の血涙もとゞめる日は無いのである。血と言つても、病魔に吸ひ殘された冷たい血、涙と言つても文字だけだと知つてゐるものは嘲つたけれど、冷たくつても何でもかまはない。あやしい脉を打つて堪へられなくなつた時、筆の先から落して見たい紙をひろげることが出來れば、それに増すよろ

こびはない。落ちて朽ちて黒ずんだ山椿を篠へ通して喜ぶやうに人に惡感を起させはすまいかと思ふと、又悲しくなるけれども。ある人は私のことを、まるで夢を見てゐるのだ、その方が却て幸福かも知れないが、醒められるなら今のうちにさめてくれ生活に伴はない見かけばかり華やかな中味のがんどうの歌なんか、時代の要求する所でないと言うた。



生活　北海道　岩本とよ子

「夢」つて一體何を言うてゐるのだか、私には一寸わからなかつた、夢なら醒めるにきまつてゐる。戀も夢としてあるから十年の戀でも半年の戀でも、一度は醒めるに違ひない。けれど私は十年なら十年、半年なら半年、始から終まで醉ひつづけてゐられるものではないと思ふ。ある時は失戀者よりも寒い思をするだらう不幸にして戀に醉ふことの出來ない私は、醉ひたくつても藝術の夢などに醉ふて

とはむづかしいたとひ一瞬時でも酔ひたいと思つてむしろあこがれてゐた夢、その夢をかくされるやうな氣がして、呆れてその言葉を繰り返した。

時代におもねる先に、己れを尊重し、己れを尊重する前に、己れを知りたいと思ふ。

己れを知つてから後に止むを得なければ犧牲にすればよい。犧牲とは己れを、己れのために棄つる美しい名だと、はじめて氣がついたやうな心地がする。

若葉の緑一色に歸したのを不足にして、赤い下品な造り花を眺めたくはない。はかない心は儚ないまゝに悲慘な境遇は悲慘なまゝに、歌ふにきまつてゐるけれど、暗い心にもたまには電のやうなものがひらめく、人は私のこのいなづまを、一時間も二時間も、もつと長くつゞいてゐるものと思つたのかも知れない。それならもはやわれにかへることは出來ない、ほんたうの盲となつてしまふであらう。

「もともと發展の見込もない地に、泣きごとを繰り返してゐるよりは、些々たる關係に拘泥せず、斷然都近くに出で、自らはげまして、愉快にして有望なる生活を追求せずや……」

父の手紙はいつでもかうである。これを讀むと明日にも飛んで行きたいけれど、行けば身體の置き所に困らなければならない。もう都會にあこがれるなどといふ單純な心持で、東の空を眺めるのではない。

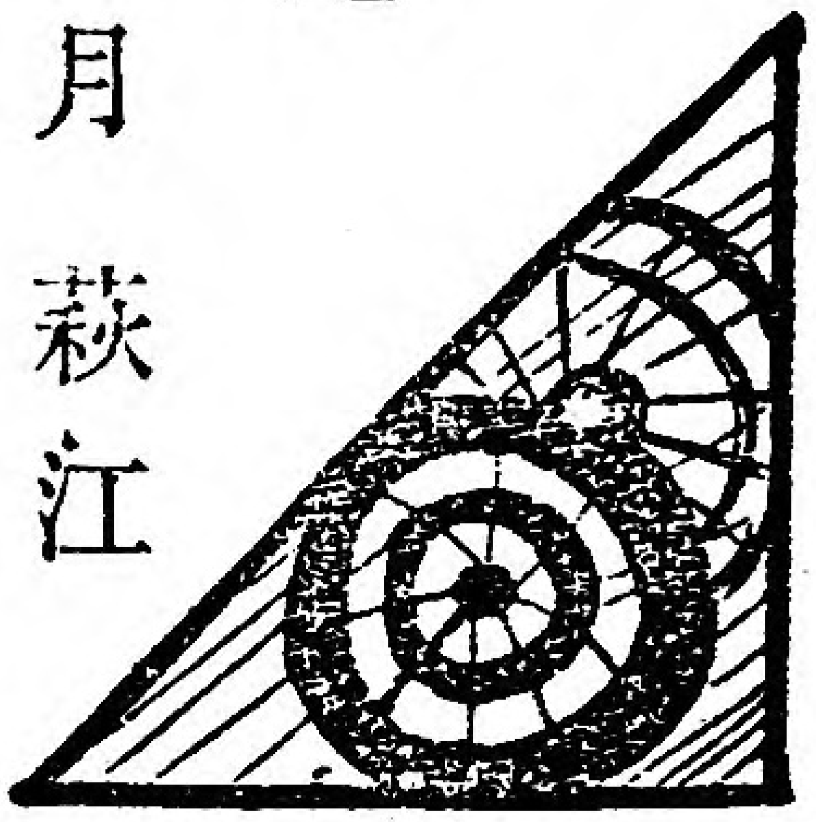
この家は暗い、後ろの方の木がかぶさつて、これからなほ暗くなる。前の方は桑は樹が茂つて、障子をみんなはづしても、すだれはいらない。六月が近づいても、鶯のこゑが一番、はゞをきかしてゐる、今日はさつき晴でもなければ、雨でもない。張物が乾かないから、氣を落ちつけて座つてゐるそばに、茶と紺と半分ませの絹糸が、柱から斜に二間の座敷へ引張つてある。

家の中で卷かれる機は、風にもあたらせぬやうにして、ゆたかなあたゝかい家庭に育てらるゝ少女のやうである。それでも一度は筬をくゞらなければならない運命を持つてゐる。



落日のかなた

秋月萩江



天鵞絨の樣なエメラルドグリーンの細長い細かい葉を着けた柳の下に立つて、ちつと富岳の彼方へ沈む夕陽を見つめる時、私は何時もあゝ一人で叫びます。

友にはぐれて沙漠を獨り行く夜の如き、又は千丈の斷崖に立つて紺青の底なき淵を眺めやる樣なやるせない淋しさはあるけれども、其淋しさは取りもなほさず私の快い感覺の一つなのであります。

あゝ何故に、何故に、涙の出る樣な其淋しさを一人味つて一人喜ぶのでせうか。一人生れた人間は、やがて又一人死んで行くのじやありませんか。

輝きを失つた日は、サタンの吐き出す炎の樣な色して、常暗の世に吸はれて行きます。肌に快い初夏の風は、あてどもなく見入つた私の面に吹いて、掻き上げた後れ毛を又亂します、さや〳〵とローマのリボンの絹ずれの音に、私は不圖二十年の過去といふ事を考へた。

暖い薄もやに包まれて、安らかに眠つて居た私が、夢の樣にぽーつと開いた瞳に、最初に映じたものは、木津川の夕照でした、淀の川波にうつゝた紫のふり袖は、其れは私が六歳の舞姿。

晨白鳥の樣な帆影をおふて我繪心は動いたけれど、夕べ金扇のひらめきに我詩心は騷いだけれど、あゝ神は書くべき手を與へて下さらないもの、歌ふべき聲をさづけて下さらないもの。

緋牡丹の一輪を抱いて、はぢらひの額をふせ、罪のおそれに、僅に葉越しの星影を仰いでさへも、魂のをのゝく處女となつても、あゝ誰も誰も、とめて下さらないもの、私は益々狂うて行きます。今も尚、書いてはさき、書いてはさいて流す涙、戀知らぬ處女の涙は清いもの、凝つて流れて彼の半圓の空に滿つる時、初めて我が望はかなふのでせうか。

女だからとて持たされた針を、私はこばまず持ちました、女だからとて握らされた包丁を、私は素直に握りました。其して兩の手をふさがれて、私はぢつと老い込む程、音無しい女でもなければ、兩の手に物をも

たされて、悶える程氣の小さい女でもありませぬ。最後のひらめきを殘して、日は全くかくれ入りました、ひし／＼と夕闇は寄せて來ます。鮮やかだつた柳の葉は、いつか薄暗色に化して、其一枚／＼が闇吹く風にをのゝいて、怪物のさゝやく樣です。

冬が終つたから春が來たのだ、夏が往つたから秋が來るのだ。と歡樂悲哀に狂する衆人を冷然と下に見て目を閉づる能はぬ凡婦――。あゝ私も矢張花は美しく見えますもの、叫ばして下さい、歌はして下さい、今逝かうとする春の思ひ出にせめてもと、或る夜ひそかに草のそよぎにも心を置いて、したゝめた沙原の文字を其たど／＼しい蜘蛛の糸の樣な糸屍を抑へて、一口に大それた女だと墮落呼はり、口惜しいやら、可笑しいやら、解放、解放と漸く世人の口に聞きながら、其行先を禁法すれば、結果は矢張同じ事じやありますまいか、上弦の月は淡い光を放つて、眞黑な森の上に現れました、夜の風は冷々と肌につめたい。きゆつと衿をかき合せて、病人の目の樣な薄黄に濁つた月の光を見上ると、何とも知れぬあつい涙がはら／＼と頰にかかりました。夏淺ければ虫も鳴かず、愁はしげな青葉の森の沈默に對して彳んで居るものは私より外に何もない、一人を喜ぶ私は何時もかうした夜をよつて、かうした森に向つて、かすかな一人言をもらすのは何よりの樂しみにして居ます。

思へば早いもの、夢の樣な幾春秋を重ねて私は大きくなりました、すく／＼と唯夢の樣に延びました。最早母のふところは私をかくすには小さ過ぎます。後から帶をさゝへてやるから一人立てと云ひます、立ちませう、歩きませう、平坦な道も、けはしい杣路も、一人立つて一人歩きませう。何物にも／＼手寄らないいさぎよい私の行動を唯後から見て居て下さい。

又してもかよわい足もとに、投げ出される障害物をさけながら、生のあらん限り歩きつゞける彼方、天國の樣なオーシスは永久に蜃氣樓であらうとも、私は口惜まない。星白い曉、小さくとも力のこもつた唇を嚙んで、明の曙光をキッと眺める時、あゝ其時、燦たる黄金の王冠の前にもひざまづかぬ私の誇りは、自らほほ笑となつて生々とした頰に上りませう。あゝ其ほゝ笑――永久に獨り立つべき舞臺に、強い／＼途づれとなるものは、唯其まゝ笑ばつかりです。

今一人旅立つ子は、美しいほゝ笑みを胸底深く秘めて、鳥歌ひ、花咲く、綠の林を望んで突進します。



世間の人

古那夢

今の世の中の人は女つていふものをまるで玩物にしてゐる。若き女の行く道を幾つもこしらへて置いて、迷ふな穴に落ちるなと叫んで居る。叫んで注意してくれるのは有難いけれども、女を取りまいて右からも左からも後前からも、こつちにこよ、そつちの道は惡魔の道であると呼んで居るではないか、若き心は迷はずに居られ樣か。

右の耳から再婚必ずしも惡いことではない、事情によつてはせねばならぬこともあると吹き込むで、左の耳から、あの女は再婚した、たとひどの樣な事情があらうと二夫に見えた女は不貞の女だと云ひきかす。

バタを乘せた舌の上に、また栗のキントンをつみ込むで「さあどつちが甘しいか味はつて見ろ」と云はれたとて分るものではない。

現代の女はこの點に於て不幸である。

過去の女は幸福である、未來の女も幸福であるに相違ない。一貫の主義を持つた社會にそだつ程幸福なものはあるまい。過去と未來とをつなぐ現代は試驗の時代であるから、世の犧牲となるのはうれしいけれどもおもちやにされて居ると思ふとつまらない、二度と生れぬ身體だもの。

つまらない仕事。神聖な職業!!!いかにも神聖さうな名に惚れ込むで私は去年の春から鞭を取つて居る、この敎壇の上が此頃ではつく〴〵いやになつた。數歩にしてつきる壇の上、頭のつかへさうな天井……そんなものをみると心細くて〳〵たまらなくなつて鞭もチヨークも投げ出して仕舞ひ度なる。

神聖な名、高尚な名にあこがれ?居た私の心が自分乍ら分らない。ぢみな沈むだ仕事はとても若いものに適しない、子供だつても血のかたまらない敎師に、勝手にされては氣の毒だ。

大空――はてしもない大空をいつはてるだらうはてるだらうと思ひながら飛むで居たい私には、とても小學校の敎員なんかむかない。

けさ學校に來る道々で私は泣いた、校長の御命令で結むで居るバンカラな束髮、長くはいた袴の裾、包みかゝへただらしのない姿が、店々の硝子にうつゝた時

涙がこぼれた。

癪に觸るもの。

近頃新聞や雜誌にある小説……雨後の筍の樣に生じる今の青年文士の筆の先にはから力がない、そして何だかかゆい處に手のとゞかないやうな感がする。

もう少し注意といふ點に注意してほしい。

そりやあどうせ青年といふからには青二才にはちがひないから文の巧拙は仕方がないとしてもあるべき筈でない樣な事柄だの矛盾した人情だのを書いてよろこんで居る、あんまり馬鹿げた話だ。それを歡迎する世間の氣も知れない、大方の新聞には毎朝人を馬鹿にした樣な笑を含むだ活字が乘つてゐる、そして人は第一にそれに目を通す。

觀劇感一口。

過去を慕ふ女には新派の演劇は好まない。

甘つたるい淺はかな仕組が、なんぼ自由の風に育つた今の女でもあゝいやなと云ふ感がする、よせばいゝのにと思ふ。

見なれた目には、大していやとも思はないかも知れないが、私にはみてゐられない。

椿姬なんぞも一幕殘して「最愛の妻」も見ないで歸つて仕舞つた、もつともすこし都合もあつたのだけれども、別だん殘り惜しいとも思はずに席を立つた。

演劇はやつぱり歌舞伎座に限る。

若い女の心としては、少し老せてゐるかも知らないけれどもさう思ふ。

人が國技館以前の青天井の相撲場を慕ふ樣に、私の足はとかく丸の内や本鄕の方に向かない。

若い女が觀劇を第一の樂にして居ることは或は事實であるかも知れない、私は決してそれを否定はせぬ。

我身の悲しみ。

最後に白状する、私は世にも悲しい一人娘である、兩親のみあつて兄弟なきしかもかよわき女である。

一人娘で幸福だと云はれたのはそれは幼い時、何の幸福があらうぞ。

五月雨でもしと〱ふる時、葉蘭をしたゝか打つ雫の音をきゝながら、母の傍で針うごかして居る折などあゝこの母に別れたならばとぢいつと母の横がほをながめた時、何とも云はれぬ寂しさはかなさを思つて、ひしとその袖にかぢり付度なる。

世にかなしきものははらからなき人である。

もう來年あたり養子を迎へねばとの父の言葉、あゝ

どうしたらよからう。養子……養子なんてどうせろくなものは來やしない、と言つてどうすることも出來ないし……いつか直子さんが養子迎へた翌日の手紙に養子を迎へる女ほどつまらないものはない、私はまだ一日もたゝぬ内に、私の喜劇の舞臺も昨日で幕がしまつて仕舞つたと思つてよ。今日から悲劇の舞臺に出るのよ。

お幸さんあなたも早晩御養子を御迎へになる運命なのね、お互に何かの因縁とあきらめませうね。といつてあつた、あゝまだ見ぬ未來だけれども氣になる。



私はまだ世間の觀察など出來ない未熟な若い女だけれど、世間のこと、自分のこと、混交になつて、苦しいことや、氣に入らぬことだらけだ。

をんな　青森縣　立花もと子

人並に眼が覺めて來ると周圍と自分との距離が遠くなつて來る。

仕方がない。悲しいけれど

雨が降る、いやだ、何うしても女は囚はれてゐる、氣を移す方法がない。

早く晴れてくれ、せめてはからりとした夏の空氣を吸ふて私の心を底から洗ひたい。

劇場

醉茗選

曾我

優梨子

午前十時開演！それがもう××町には不釣合であつた。

冷えきつた水蒸氣を一杯に含んだ灰色の雲が幾重にも〳〵覆ひ被さつた樣に低くたれた雪模樣の日、私は夜討曾我の筋書きを順序もなく思ひながら、空模樣など氣づかはうともしないでコートの裾から小刻みに出る足元を見詰めたまゝそは〳〵して××座へと急いだ。

踊ればベツタリと手につきさうなペンキの新しい、俄か繕ひの小さな小屋に、「尾上菊五郎一座」といふ字が大きく目立つ。低い屋根の繪看板がまぶしい程美しかつた。

何時もは格子戸の締つて居る向ふ側の中茶屋が、其日は景氣よく店を張つて、新しい印袢纒を着た若い衆が大勢居た。

「×等へ御案内！」「什麽ぞ此方へ」とお定りの言葉が高い調子で取りかはされると、メリンスの赤い前掛けした、やくざ芝居の下女見た樣な女が先に立つた。

舞臺の前にはずらりと電燈が點いて、横の窓ガラスからは眞晝の光線が白く流れ込で居た。夜の光りと晝の色とが溶け合つた、其中に浸つた私はぼうつとなつて、時！といふ感じが夢の樣に消え樣とした。晝？晝！と何處かでさゝやく。はつとして鈍つた感覺を呼さまさうとしたけれどいつかまたうと〳〵と夢の樣になつた。

古い舞臺に新らしい緞帳が長く垂れて居る。花道の新らしい白木が不調和に目立つ。「番附！番附は如何です」と太い力のある聲が狹い場内にぱつと大きく響く。何時もの××座には見られない紫の羽織、白い顏、大きなリボンが土間にも棧敷にも澤山散らばつて見えた。

三番叟を畫いた白い緞帳を長い間見つめて漸く倦怠を覺えた時、其中の氣持の好い囃しが聞えた。それがまた××座にはあまりに不調和な美しい音であつた。

狹い舞臺でだんまりが始まつた時、私は荚雀の着た白無垢の裾が汚れはしまいかと、それ許りを氣にしながら見て居た。

屋根もつこの定紋こそついて居るけれど、みすぼらしい工藤の假屋と、其前に表れた人物との間にあまり懸隔があつて、あゝ道具立が惡い舞臺が狹いと堪らなく氣になつて、中幕の所作事土蜘蛛の時などは自分の事の樣にはら〳〵して居た。けれどそれがいつとはなしに眼になれて忘れると、私は今××座で芝居を見て居るのだ、といふその心持ちも忘れた。そして五郎十郎の胸の中を思つては幾度か泣いた。

假屋の雨戸をそつと繰り明けて、二人の兄弟を工藤の寢室へと導く龜鶴の小さいぼんぼり持つたあでな姿！私は其美しい心根を思つて、美しいと思ひながら何時までも〳〵其後姿を見入つた。繪でよく見る討入の兄弟の姿！松明持つた甲斐々々しい其いで立ち、大きな染めぬいた蝶千鳥の模樣が何とも云へなく嬉しくて知らずからだがぞく〳〵つとした。

「あれ五郎丸が〳〵」と夢中になつて母の袖を引いてはつとした。

「音羽會」とした緋の緞帳がする〳〵と下りるがや〳〵と一時に騷がしくなつた。私は見初めた夢を無理に呼び睡まされたさな氣がして厭な氣持ちがした。

何かさぐる樣に邊りを見廻して××座と氣づいた時、不調和な芝居！と大きく叫ばなければ居られなかつた。皆の後からぞろ〳〵と外へ出ると十二三日の月が雪曇りにぼーつと出て、白いものがチラリ〳〵と降つて居た。

まだ宵の中の明るい街を歸る時、私は何時もより一層疲れと、斯うした時感じる寂しみとを強く覺えた。（入賞）

觀劇の氣分を出さうとしたのは宜しい（評）

歡樂

葉がくれ

朝風が心持ちのいゝ程に吹いて居た。柿色や淺黄の幟に書き流した勘定流の、市川〇〇だの尾上××だのが覗いたり隱れたりしてゐる。

木戸は下足番や出方でがや〳〵してゐた。

「お馴染は？」

「×吉」

「×きちイ――」

つてよく透る聲で呼ぶ。

「へイこちらへ」

音羽屋格子の着物に縞のタツ、ケはいた×吉について入る。とおどしつける様な正面の幕と小さく詰込んだ觀客が先づ目に入つた。

拍子木が鳴つた。

「〇〇さんへ」とした幕がだん〱縮められると華やかな舞臺が表はれて來る。同時に賑やかな三味線の音が起つた。

美しい女形。いなせなあにい。小氣味のいゝ見得。大向ふからは「××屋——」と聲がかゝる

幕がすうつとひかれた。息をつめ、眤と瞳を凝らして愁嘆場を見てゐた觀客は、幕がひかれるとがつかりした樣に息をついた。一時にがやがやし出す。

御園白粉の紅提灯に灯がついて、桃割にさした鬘の蝶の羽と、はこせこの飾と、花櫛の金の蕋と、金で織出した立矢の字の亂菊と、首にかけたゴールドチエンと、白い顔も、赤い唇も、泣いた睫も——みんな華やかに輝き出した。

幕切の〇〇屋の凄い捨臺詞があり〱と殘つてゐる耳へ、それを打消して幕合の太鼓がそゝのかす樣に傳はる。

賣店には揚羽の蝶や重扇が彩色をパツとさせて、可愛い雛妓をひきつける。翡翠を掛けた姐さんの銀杏返しにて、小さなはりま屋の短冊がピラ〱とゆれてゐた。

おしる粉屋にはのれんの奥に可愛い桃割や粋な潰しが大勢隱されてゐる。

いらだたしい樣な、何となくはしやがれる樣な、そゝられる樣な、うれしくつて泣きたい樣な——かうした常春の氣分が漂つてゐるこの空氣の中を、行ずりの白粉の香、香水の匂ひ、ふと見交した眼にも一々若い胸は躍る……

華やかな所作事が終つた。打出の太鼓がからだ中へ響かして鳴り出すと、みんな追ひ立られる樣に木戸へ行て行く。

歡樂に執着する心の遣瀨なさ　（入賞）

所謂現代に觸れたものだ、一種の衝動はある（評）

帝國座

平塚白百合

こんもりいけた盛花から肉色のバラの花片が眞白な食卓に音もなくほぐれた。

私はあわたゞしく立つた。何といふ事もなしに。

ギッシリ群集の立こんだ食堂の柱鏡はウッスラ曇つて、何處に立つてゐるか緋に燃えるやうな雛妓が白い右手を髪に上げてる。

物の香と色と音とは此處にも充滿して、かるいセロの音が熱した空氣の隙間に漂ふ。湯氣のこもつたやうな一室の暖かい空氣に、シガーの白い煙が輪にはなされたり、絹綠の亂れのやうに、重い中をもがき〱混和されやうとあせつてゐる。

私は勞れてしまつた。目許りでなく！かろく頭をふつた。美しい雲はたな引く。綾の袖、錦の帶。

濃厚な空氣をのがれてベランダに出ると、さすがに窓を通してくる風が湯上りの肌に迎へる程に心地よい。幕間を逍遙する群集は互にうつとりした瞳を上げながら行かつてゐる。そのまなざし！

私は窓にして夕やみに灯をかざした街を遠く望んだ。深い〱沈默のそこにひたつた灯の一つ〱は終焉の處女の瞳の樣ににぶつてゐる。

はなやかな人々はたえず動いて肩をすつてゆく——。やはらかな電氣のはぢらつた光りをあびて、さゞめきながら行く媚ある瞳の紅い唇した女が、香水の匂ひをまきながらすれ合ふ。

背廣の瀟洒な肩と、合濇のふくよかなスラリとした肩とは並んで幾組もゆく。

席についい見ると、白いかほが二階にもその上にも重なつて、一樣に舞臺の美しい幕に吸はれてゐる。

高い〇〇式の舞臺に引かれたカーテンは、光りと暗とのひだをとつて、しなやかに、あざやかにゆらぐ。ムツとこもつた場内のにぶい光線におられて胸、髪、指をいなづまのやうな輝がひらめく。

起るともないゆるやかな樂の音は、夢から幻にと高くなつて、人のこゝろを心うれしいハーモニーをなしてゐる。

梅幸の天女だね、きれい事はいゝものね、紅した女は、こけた羽織の衣紋を直しながら云つた。

フト靜まつた樂の音の間を、スル〱と靜かに錦帳は捲上げられた——。

少し舞臺が好すぎた、平素の技倆に比して劣ると思ふ、文字も散漫になりすぎて、纏つた印象がない。（評）

對話

横濱　金井きよ

「あらつ、何時お入りになつて?」「私……今、あなたは?」「これで二幕目よ、」「此度はどんなところでせう?」「さうねえ……今のが鍋島の三幕目ださうですから、——一寸此方へ來て御覽なさいな、番付がありますのよ……えゝつと此の次ですからつ、小森半左衞門の奥庭としてあります、きつとあのお婆さんに化けて居る猫が、正體を現はすところよ」「あゝもう、拍子木が二つ續いて鳴てよ、もつと前の方へゆきませんか」「…………」「見えなくつて」「えゝ、前の人が帽子を脱つて呉れるといゝんですけど」「云つて上げませうよ」「いゝえよござんすわ……あら聞こえたと見えて脱りましたよ」「氣がきいて居るわねえ」「まあ……いやな聲、あのお婆さんの聲つてつたらないわねえ、正體を現はさないうちから全るでもう猫の樣だわ、何んと云ふ役者か御存じ」「美壽之丞らしいことよ、……一寸、よく御覽なさい今に行燈の油を舐めるのよ」「あら可笑しい……小供騙しの樣だわ」「まあ、なんて薄氣味の惡い聲でせう、とう/\今の女中は食殺さつて了つたんですかしら……あら、あんな犬見たいな大きな猫が出て來てよ、おほゝ、ほいやだあの生々しい血、××××滑稽と凄愴とゴッヤマゼになつて、なんだか妙になつて來てよ」「死骸に猫が戯れてよ、あらつ、死人が猫のとほりに動くことよ」「まあ輕業師の樣ねえ、きつとあの上からトンボがへりして落ちるのよほうらねえ、隨分危險な役ぢやありませんか、よく人が云ひますけれど、死人の枕元へ刄物を置かないと、猫が屋根の上へ來て、死骸を踴らすつて眞實うでしようか」「どうですか……きつと眞實うかも知れませんよ、私もう氣持が惡くなつて、見て居るのが厭になつて來たわ」「もう少し待て居らつしやいな、今に面白くなつて來るのよ、もう後ろへ半左衞門が來て立て居るぢやありませんか、何んだか大活劇でも始まりさうになつて來たわ」「あら、醉拂つて居るのねえ何ぜあやまつて計り居るんでしよう、未だ猫つて云ふ事知らないでしようか」「いゝえ、もうちやんと分て居るんですけど、故意と知らぬ振して油斷させて居るのよ」「段々語氣が荒々しくなつて來てねえ、刀を取り上げてよ、まあ好い見得だこと、畫面の見得として何時までもとつて置きたいわ、あらもうお婆さんが猫になつて、口から火を吐いてよ、……熱かないでしようか」「其麽に熱くはないんでしようキツト、まああの色煙火の綺麗なこと」「臭い煙り……呼吸するが苦しいわ、毒でしように ねえ……幕の閉つたのも何にもチツトも分明りやあしませんわ、あなたもうずつとお歸り?」「え……餘り遲くなると家へ歸てお目玉よ全に厭になつて了ふわ、飛歩くのは今ですからねえ……」「眞實うねえ、では又此度……左やうなら。」

何うしても田舍芝居(評)

春雨や濡れて入りし

芝居小屋

本號の草畫と次の課題　夢二

○家計問題(岩本とよ子)鐵管に腰かけたのと青い眉を點々でかいた所に新しさがある。

○女の寫眞(野の百合)この種の女が人を見る樣子がよく描けてゐる。

○眠れる街(野口君子)強い光をうけた街の疲れ!犬さへも眠つてゐることがわかる。

○冷風(竹村槇子)白いパラソルが肩の上でくる/\と舞つてゐる、風に流れた袂の下を、紺の背廣の初燕、ひらりとぬけて五月の空へ。

○東京の花壇(ひなげし)女らしい親切な寫生が好い。

○若芽賣(富士きよ子)かうした地方特殊の風俗を紹介するのは好いことだ。

○花賣(花洋)理窟はなしにおもしろい。

○おもちやうり(名なし草)大の男がニコ/\しておもちやなぞ賣つてゐるのが好かつた。

次の增刊『娘時代』には左の課題を出すことにしよう。

一、諸君の姉、妹、或は母君の顏、或はその人々を最もよく表したる表情或は姿を寫生しておくる事。

二、この日頃諸君のなせる代表的の事柄、或は思へる事、強く感じたる事それ等を手紙や日記をかくつもりで繪でかく事。

年のあぢはひ

かげの人

私の未だ腰揚のある頃だつた。山の手の廣い路だつたが、家の影がはすかけに長くなつて日光の彩るなつかしい土の色もさめて行くころ遊び勞れた心にお母様お母様と思ひ作ら、もうお母様も歩いてるやうな嬉しさを抱いて、急いで内へ這入つて來た。

四月の末だつたかも知れない、やはらかい明るさが家中にみなぎつて柱も壁も冷たい物はひとつもない。いつものやうに母様と叫ぶと一緒にお部屋の襖開けると、其處にはお母さんが居た。お父さんも居た。然し見知らない若い女の人が坐つて居た。きまりがわるかつたが逃げ出しもせられず、そつと母さんのかげに隱れてその人を覗いて見た。誰か知つてる人を忘れたんぢやないかしらと考へたが、矢張り知らない人だつた。美しい人だ。ハンカチを握つたまんま、うつむいて居る事が多かつた。

お歸りなさるとすぐ、あの方どなた？ときくと母様は困つたらしく「よその方―（ひとり言のやうに）あれさへ下宿させて置かなかつたら」とかなしさうに仰有つた。父様は、默つて考へ込んでらしたが「とてもなあ」と呻るやうに仰有つて又考へてらつしやる。どうなさつたのかしら、私のことか？何にも叱られるやうな事しないわ、でも變な、こんな時誰か味方にほしい。誰が宜いだろ。田あちやんか俊さんか。兄さんはいぢめるから嫌ひさ。あ、さつきの女の方が宜い。「ね、母さん、あたしあんな姉さんがほしいわ」と言つたら、母様　駭いたふうに「え」といつたきりあちら向いてしまひなさつた。

今日見たいな詰らない日はありやしないと思ひ作ら床に入つた。母さんは、むづかしい顔してらつしやるし、こんな時はいつもの駄々をこねないでおとなしくねる。

恐い夢を見た、はつと目がさめると胸がどきどきしてならない。蒲團から乘り出して居るのだが、私がもぐつたら、もぐるために動いたら、何處かで見て居る

恐い夢の主が、私をいぢめに來やしないか。來たらどうしやう、母さんと呼びたいが。と氣を揉んで居ると、微かに話聲がする。兄さんの部屋の方にもきこえたり臺所の方にもきこえたり、重々しい父さんの聲と泣くやうな女の聲だ。母さんの聲？いや母さんはあんな聲ぢやない。もつとさはやかな好い聲だけど、でも母さんかしら、と恐る恐る顔あげて聲の方を見た。三つ並んだ床の二つは空で、隅つこにも恐いものは居ない。母さんが早く來て下さると宜いのにと思ひ乍ら、怒るやうな泣くやうな聲をきいて居ると、いつの間にかわからなくなつてしまつた。

二月ばかりするとその女の人は内の人となつた。

「ねえ姉さん。兄さんは私をいぢめますから姉さんは私の味方になつて下さい」といつたら「えゝ味方しますとも」と笑ひ乍ら仰有つた。

兄さんはちつともいぢめなくなつた。その代り可愛いがりもしなくなつた。母さんのお顔は時々くもる。「かよちやんばかりはねえ」と抱きしめられる時『私はきつと善い子にならう』と思つた。何となく大きな物でも負つたやうな氣持ちを抱いたのであつた。

その頃兄さんは未だ學校に行つて居た。

庭の梧桐の子供はだん〳〵のびて來た。我髪もおひおひのびて來た。

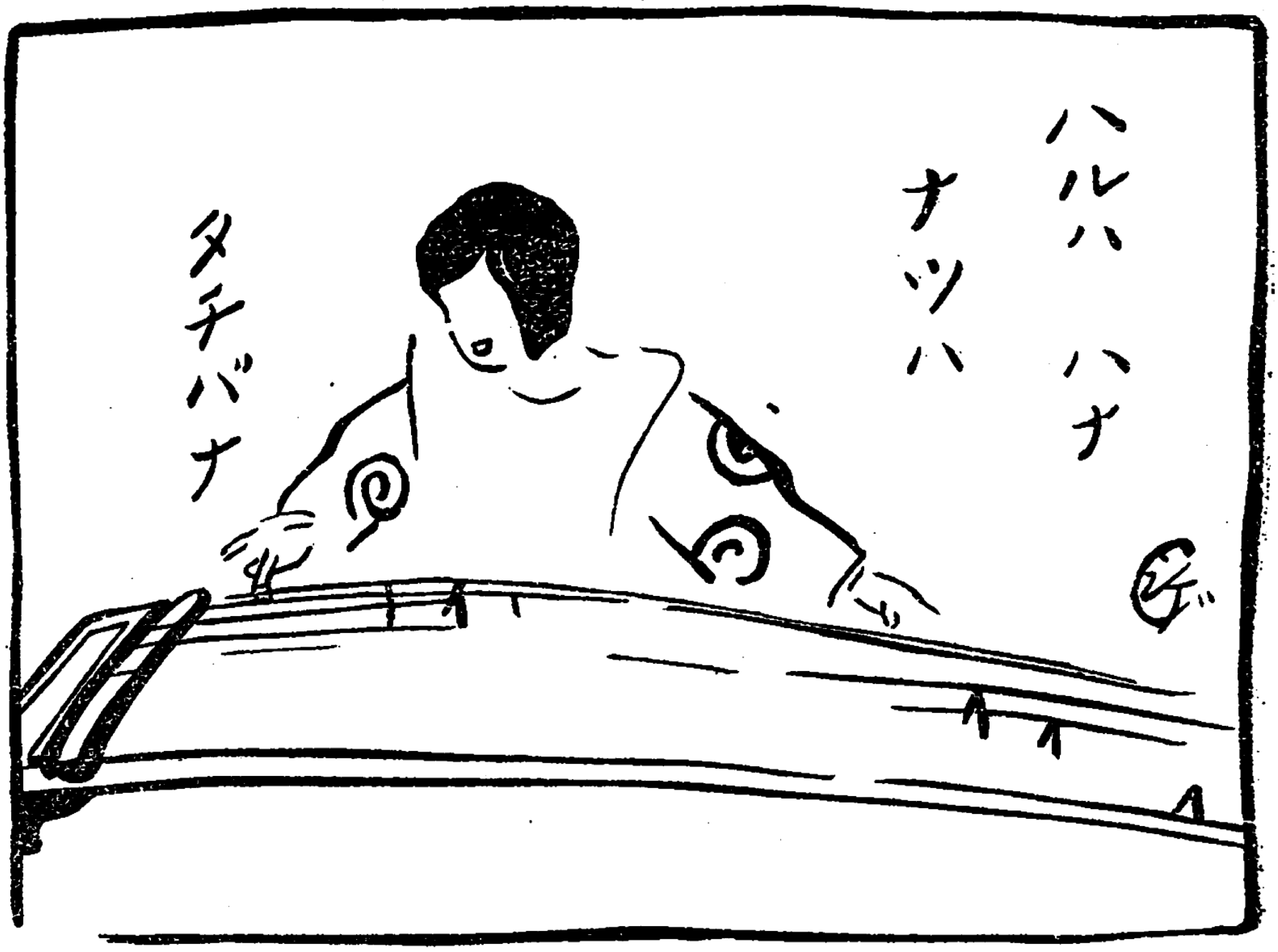
お里の自慢をきく度にうちの姉さんはいゝ方と思はれたのが、（かよちやんばかりはねえ。との暗示の意味のわかりかけた頃から）それが憎らしくきこえて來る。「内ではねえ」と言ひ出すたんび、憎らしい感情がすぐに涌いて、そら又お株がはじまつた。あんな事ほんとでなるものか、とけなし乍ら、些細な言葉の使ひ方までも記憶の外に洩らさなかつた。

「今日ねえ、かよちやんと歩いた時に、〇町の角でハイカラな書生に遇つたでせう。『何と好いコントラストだらう』と云つたわね、何遍も振りかへつて私ばかり見るんですもの、厭になつたわ」きいて居た私はだんだんうつむいて口も動かなくなつた。

より醜いといふ事が女にとつてどの位の弱點であらう。泣きたいほどくやしかつて。

おかあいさうなお嫁さん。といつたと姉さんはいふ。美しくて口さきの甘い姉さんは近所の人を味方にした父さんの着物は縫はないでも隣の人の手袋を編む。御

親切な方で、と賞められる。いゝえといへば、かよちやんは私の惡口いひますよ、と憎がられ、はい、といへば挨拶の術も知らないとさげしまれる。人を魅するの美もなく同情を買ふ術も知らない女は敗るゝ外道がないのですもの。
　惡口云はれても知らずあてこすりも身に泌まなかつた無邪氣な時代は去つた。さめた時には鬼千疋といはるゝ小姑だつた。否、千疋の鬼としてあしらはれて居たのだ。よいやうにあやつられて居た昔を口惜しがらずに居られるものか。されただけの返報はしなくちやならない、ひたすら復讐の刃を磨いで居たのであつた。



おけいこ　京都　小林しげ子

さむい夕方だつた。二人して御飯のあとをかたづけて洗ふ茶碗を重ねて臺所に置いて、明日の試驗を氣づかひ乍ら机の前に坐つた。臺所では姉さんが一人でがたがたと大きな音をさして居たが、「私はこの内へお三どんしに來たのぢやありませんよ。自分はお孃樣然と机にばかりかぢりついてさ」私もむつとしたから臺所に飛んで行つて「ぢやわたししますよ。内にはね女中が居ませんからね、内へ來たらお三どんもしなくちやなりませんの」とげ〳〵しく嫌味も云つてのけた。いつもいつも我慢してるけど思ひ

きつていつたあとは胸が透いたやうだ「あらかよちやん、私冗談に云つたのぢやありませんか。そんなにむきになつて怒らなくても宜いわ」と笑み乍ら尚も動かない。私はさつさと茶碗洗ひはじめた。ぐいと桶を引き寄せると澄みきつた水がだぶと搖れて、氷に觸るやうに冷い。あ解つた、姉さんのこぼす所以も水の冷いせいだ。と反つて骨を惜しむ人の芝居を笑はずには居られなかつた。私がだまつて洗ふと姉さんは默つて拭く。いやな時にはきつと私の洗ふ番になる。用が急に出來るとか、しないでもいゝ掃除するとか、何とかしてきつと私に洗はせる。甘いものだと思ふ。

同級生の友だちはうちへちよい／＼遊びに來る。おしまひには姉さんと親友になつてしまつた。姉さんも時々遊びに行くらしい。私はそれを知らなかつた。知らない理由はあとで知れた。「かよさん、あなたの姉さんひどい方ね。私あんな方ぢやないと思つてたわ」といふ。「どうして」ときくと「私全く道具に使はれちやつた。ほんとにひどい」と怒つて居る。「それはちよいと云へないけど―あのねあなたの母さんの事を鬼だと云つてよ。あなたの事を―（と言ひかけて急に變がへて）お湯に行くといつて買物に行つたり、食べに行つたりするつて」あまりの意外に返事も出なかつた。「え實は私も辛いのよ。こないだも『私やお三どんに來たのぢやない』なんて云ふんですもの。實際私も」私はだまつて居た不平を心ゆくまでこぼしぬいた。歸り道々ああ惡い事をした。私は妹ぢやないか、たとへ眞實の事でも妹として姉の惡口言ふなんて私がわるい。私がわるい。と悔い乍ら、だつて姉さんだつても―と自分の罪をおほふ口實を考へ乍ら、長くかゝつて內へ歸つた事もあつた。

青葉の匂ひ、空のうるみ。

兄さんの口が見付かると、姉さんは別居すると云ひ出した。母樣はまだ俸給も少ないし、もう暫くは。といつたのが氣にさはつたか姉さんはろくに口もきかなかつた。二三日後のお天氣のよい日、兄さんの出勤たあとで鳥渡出て來ますといつて正ちやん連れて姉さんは何處かへ出て行つた。

それきりお晝になつても晩になつても歸つて來ない夕方暑い暑いとこぼし乍ら兄さんが歸つて來て、姉さんが居ないときくや、目を圓くして飛び出した。床で

もどつておかうかと思つたのをよして、椽側で母樣と並んで蚊を追ひ追ひ、語り乍ら待つて居た。

その晩おそく一緒に歸つて來て、知己へ行つたといつて、兄さんは色々謝つた。姉さんはうなだれては居たけれど勝ち誇つた色が目の中に見えた。

翌朝はもういつもの姉さんだつた。無斷で家を出た人とは思はれない。仕事は澤山あるけどその日から暑い暑い日中にも休まず貸家を探して歩いた。

＊　＊　＊　＊　＊



花賣　　秋田縣　鈴木花洋

六年は長かつた。別居した後の二月三月は飛ぶやうに去つてしまふ。けれども姉さんは依然たる姉さんで私は矢張りもとの私だつた。近所からぼつ〱姉さんの惡口をきく。

散りこぼれるやうな秋の日ざし、木の葉と一緒に秋の色も散つて仕まふのを惜しんで野に遊んだ歸るさであつた。

母さんはあとに歩む。四つも早生れの正ちやんは道の石を拾つては投げ、拾つては私にぶつける。「正ちやんお止し」と私は睨めつけた。「何だいお多福」憎らしいから「何つ」と苛出つと姉さんが「かよちやんあまり叱らないで下さいよ。いじけるから」「だつて、こんな

わるさしちや不可ないわ。惡かないの」と言へば「だつてかよちやんもさ、先には能く私をいぢめたぢやありませんか、そんな子供くらゐ」いらくして居た時だつたからかつとして「うそ。姉さんこそ、私隨分いぢめられたわ」と憤りにふるふ唇できれぐに云つた「あんな事云つて、近所の人みんな知つてますよ「えー近所の人皆知つてますよ。呆れてまさあね」青い泪も涸れた草が伏しくづれた野の路を姉さんと兄さんは先に行く。心配さうな母さんと並んで私は無言で歸つて來た。

落ちた葉の跡から又芽が出た。

人に揉まれた中に得た廿歳といふ年は強い味がする私は今迄姉さんと敵視して居た。すこしの同情を寄せるどころか、姉さんの缺點を見出すたびに、ひそかに凱歌をあげて居た。何といふ淺はかな私であつたらう。みにくい小姑根性を抱いて負けまい、負けまいとつとめて居た。皮相な感情にとらはれて、深遠な人生の意味に思ひ及ばなかつたのだ。

それが私にとつて、どんな利益があつたか、どんな教訓があつたか。ぢつと手に握つたものを開いて見たら何が殘つて居た。あゝ耳朶がほてる。

小姑を意識しなかつた時代—小姑根性を持つて居た時代—を經てたち至つた今では、すべての時に於て眞の妹の心である。姉さんの利益にならぬまでも、せめて害ふまい。道德の上に立つて自覺した私のつとめの一部はぜひともつくさなければならない。

反抗の刃は投げられて、あたゝかゝつた眞心の握手は胸より胸まで通うたであらう。その眞心が解つたなら姉さんとて。との自信は燃え起きて、すべての利己的な考へを抑へてしまつた。

かくて持つ日々の生活は多くの教訓と、多くの快樂を持つた充實したものであつた。

姉さん、わたし此頃、やはらかい草原の上にやすらかにねて居るやうな氣がしますわ。

と言つたのに答へた姉さんのほゝ笑みは、春に萠え出る活々しい新芽よりかゞやいて見えました。

喜ぶべきことでせう、併しまた自ら憐むべき人間のはかなさを感じずには居られない、強いことも、吾儘なことも言つてゐられないやうになるのも、或る大きな力が抑制するからだ、無論それに服從してゆかねば生の存續はない。



消えぬ夢

淋しき人

風通しがいゝからと云ふので、午後からはなれに床を移された。夕陽がなゝめにまる窓をさして、障子に竹の影を寫して居る。今迄に目になれて居たヒヨロ松や、いさ葉の玉椿も此所からは少しも見えない、盛りを過ぎた藤の棚に、もつれて居るのが見える許り、一番目に近い楓のすがく\/しい青葉の色が、初夏を思はしめて、無上に氣持が好い。

「初夏よわが追憶の多きころ
　青葉のいろのなつかしきかな」

ふと思ふ――年は幾年かへだゝつたけれど、丁度今頃だつた。青葉と灯とを背景にした都會の人は、凡て美しかつた。青葉にかこまれたシルバーグリンの建物！紅紫蒸す許りの室の色彩!!! これも忘れ得ぬ思出である馬鹿く\/しいと心に嘲りながらも、やつぱり過ぎ去つた華やかな時代を、ふと思出す。烈しい戀の熱もさめ果てゝは、色も香もない枯木のやう、おそらく戀さめの女位淋しいものはなからうとつくぐ\/思ふ。

すーッと涼しい風が吹き込んで、枕許に雜誌を見て居る妹の香水のかをりがぷんとする。

妹よ、お前も十八、胸にひめもつ戀はないだらうか。自分の辿つて來た道は、追せたくない、淸い幸あるライフを送らせたい、かう思つて私はぢつと其横顔を見つめて居た。ふつくりした束髮、美しい豊かな頰、ああこれもやがておとろへて行くのではあるまいか、眞紅の口びるも色あせて、自分と同じ樣な運命に泣くのではあるまいか。「幸ちやん！」私は何の氣なしによんで見た、びつくりした樣に雜誌をふせて「何姉樣」と側へすりよる、實の妹ではないけれど、どうしても義理ある中とは思はれない。突然妹の手を握つて、ぢつと顏を見守つたら、どうしてかわけもなく淚が止度もなく流れる「あれ姉樣どうなさつて――!?」なほもすりよる妹の手、碎けよと許り握りしめて、なけるだけ泣いて見た。

かうして居被つたら、どんなにかおたい屈でせうと見舞に來た人は皆云つてくれる。他から見たらたいくつとも、おれつたからうとも見え樣、かうしてぐづぐづ暮して居るのも、長いこつたし、ぱつたり外へ出な

くなつたのは、裏の梨の花が颯と風の吹く度に、雪の樣に散つて居る頃だつた。八重にきいて見たらもう實が五厘銅貨位になつてると云ふ、花が咲いて散つて實がなる、やがて其實もたべられる樣になるのだけれどそれ迄に私のからだはどうなるのだか……今は散歩して見たいの、物がほしいのと云ふ觀念は殆どなくなつて終つた。かうして居てもさまでたいくつにも感じない、嫌とも思はない。むしろはたからとやかう世間話を聞かされるのがうるさい位なもの……只東京はなつかしい、母は戀しいけれど、母から歸れとのゆるしがないのだもの…。私は死ぬまでこゝは去れないのだ、否死んでも……。

楓の樹に蟻が上つたり、下りたりして居るのを見て居て、うと〳〵したものと見える、青葉のかげに浮き出した樣な二人の俤、聲をかけ樣としたけれど、どうしてもよぶ事が出來ない「千代さん！」はつと思へば母が枕許に居る、あゝそれも夢だつた。

尺八の音がゆるく夕暗にたゞよふてくる。（ある日）

疲れきつた頭腦に種々の事が何の纒りもなくチラチラと映つては、ふと消えて了ふ、それが物たりない氣がして何かもつと深く考へて見たいとあせるけれど、何うしてもとらまへ所がない。其くせ追想は果てしなく走馬燈の樣に廻轉して止まない、只心は苛々してくる。

私がこゝへ來たのは、木の葉が色づかうとして居る十月の初めだつた。夜汽車だから袷衣ではと氣づかつて母がコートを着せてくれたのが、丁度よかつた。十一時發の急行列車の案外に混雜したけれど、私等の室には六十近いむづかしい顏した老人と、地方人らしい夫婦連と夫と自分とそれだけだつた。

日比谷を出た車が、常盤華壇についたのは四時頃だつたやうに思ふ。禮服着た人がぞろりと並んで居たけれど、知つてる人の顏も、知らぬ人の顏も、殆ど見分けがつかなかつた、頭はぼうと熱して座に居るのに堪へられなくなり叔母に助けられて席からのがれ、らんかんに靠れて街頭をながめたのぼせた目に、電柱の電燈も、あらゆる電燈の光はぼやつとかすんで見えた。きしる電車の音や町のどよめきが、自分からはなれた別世界の樣な氣がした、燈火がパッと中空に照つて居るのが、妙に不思議の樣な氣がして、ぢつと見つめて居た外、何を考がへる餘地もなかつた。其夜のうちに

汽車の中にはこばれて終つた、それ迄私は夢中で居たのだ。窓から吹込む冷めたい風が、スーッと襟元にしみるのが、生き返る樣に心地よかつた。そして今迄熱して居た頭も、やゝ靜まつて來たと共に、一日のうちにこんな烈しい活動をさせられた事が、恐ろしくなつて、急に親の手からはなれて、遠方へ行く事や、此後一變する自分の境遇を考がへて、堪へがたい悲しみを感ぜずには居られなかつた。自分はもう人妻であると云ふ觀念を抱いた此日から、今迄いくらかあたゝかみのあつた精神は、まつたく死んでしまつた。華やかなるべき青春時代に、歡樂の夢に醉ふたのもつかのま、涙の中に葬つむてしまつた。それがなさけなくてならぬ。

夜は更けて乘合の人は皆ねむつて居る。ふと私はこはい物でも見るかの樣に、並んで腰かけてる夫を見た、夫は眠つて居なかつた。マチを摺つてシガーをくゆらしながら何か云つた樣だつたが、何だつたか覺えて居ない、只これが言葉を交へる最初であつた。ふと又思ひはあらぬ方に走つて、すべてが取りとめもなく混亂して終つた、今一度以前の幻影を描いて見樣と思つたけれど、それは駄目だつた。ホームに立つて居る大せいの人の顏が、滅茶苦茶に見える中に、母の顏だけがかつきりときは立つて見えた事や、××のステーションに着いた時、あたりの人にぢろ／＼見られて、自分は大罪でも犯してきたものゝ樣に小さくなつて××ホテルの樓上に登つた事などが、とび／＼にうかんで來て、とうていまとまりはつかなくなつた。そしてそれらは皆遠い／＼昔の樣に思はれて、わづか半年前と云ふ感じはどうしても起らない。

雨上りの空は、まだぬぐひ切れぬうるみをもつて、雲間から星がにぶい光を投げて居る。狹霧はあたりにさまようて、薄絹のやう、月光はそれにまじつて只ぼうと白く照して居る。あゝしつとりした夜の色!!! 柱に倚つて空をあふいだ私の心は、云ひつくせぬ深い淋しみにさそはれてゆく。あゝたえず私の心には、忘れがたい或るものゝまぼろしが描がゝれて居るのだ、過去の幻影を葬むり得ないで苦しむのは、おろかであると知りながら、夢見て居る自分はやつぱりおろかな女なのだ。かうした思ひを抱いて嫁いで來た私は、いまだに眞のほゝゑみをもつて、人に接する事が出來ない、あゝどうしても自分はかうした心の女なのだと思ふと堪らなく淋しくなつた。



いへばえにいはねば胸にさわがれて
心一つになげくころかな



○　秋田縣　鈴木露野

きり〳〵と帆あぐる音し夕ぐれの風なき海はしろく光れり

永劫に浮ばぬ玉の海の底にありとは知れどひろひかねつも

○　相模　中村貞子

若き日の戀も誇りも持たずしておとろへゆくを悲しと思ひぬ

戀せねど戀の歌よむきまぐれの哀れ蟲啼く秋はきにけり

○　岐阜　葛の葉

君に逢ひて心なでみぬ大風に荒れたる庭をつくろふごとく

月の頃海より波のわくごとく風おとたてゝ木の枝をふく

○　信濃　百瀬わか子

白牡丹大き宮居のあてびとを夜晝となくゆめに見るさま

今は早別れ難かるよき人を泣かせて見たる日もありしかな

○　熊本　河野千茂子

藥師堂青葉しげれば御佛は里のちご等の子を守りねます

夢に見し白き胡蝶は紫の花もろともにうづまかれけり

○　北海道　野の百合

天つ空もつきねとばかり燃え盛る山火にまどふ野駒のさけび

峰か雲かくも井の末か海ばらか見はてもつきぬ狩勝か原

音もなくほろゝと落ちてくだけにしこぶしの花の色のましろさ

○　神戸市　ほがら

蝙蝠とわがたましひとゆきあひて暗に默しぬ夢見るこゝろ

春去りぬ歡樂ののちの倦怠にたゞわけもなく涙ぐまるゝ

○　越後　幸子

死をおもひ生命をおもひわが涙さ蒼の海にはてなく遠し

夭死のそのなつかしさ浮び來れ春の夕の野のやはらかさ

○　本郷　鈴木さゆり

暫らくのつらさしのびて別れたる人の消息待ちてあるかな

何氣なく向ふかゞみにうつる顔戀ざめ頃のさびしさをしる

姉は十九妹は十五四ッちがひ思ひおもひの悲しさいだく

○　加賀　勝崎きく子

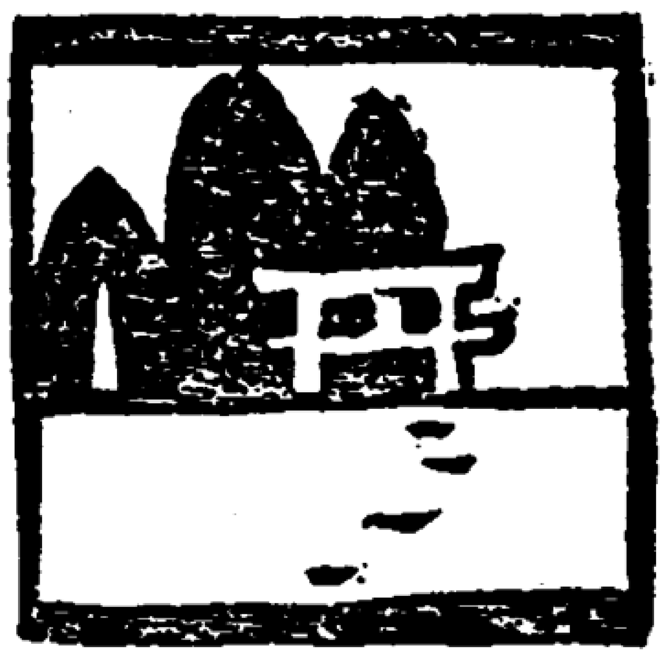
捨てられし悲しさよりも直ならぬ髪の結へぬが悲しかりけり

我いとふをとこの文のかへしには金鳳華など封じて送れ

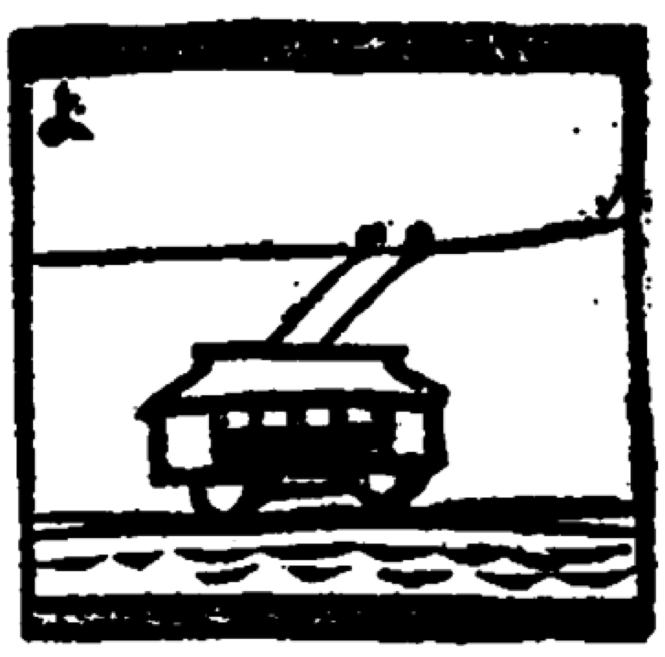
○　金澤　山梔子

我がこゝろうつろとならんかの山やかの海越えて行くと思へば

春の宵ともし灯もなき室にゐてさびしき歌を想ふてありぬ



きみにより思ひならひぬ世の中の
人はこれをや戀といふらむ



父と娘が　別れの涙

月草

まあ夢でせうか、現でせうか、始終獨りで、お酒にばかり浸つていらしつた父様が、かりそめにポンと押した實印の跡が祟つて斯んなにも成らうとは。

忘れもしない恰度四月三日の事でした。朝から雨はしとしとと降り注いで、泥海の道を人々は面白さうに傘かゝげて西を指して行きます、日本橋の開通式で門毎に弔られた赤い鬼灯提灯、藤棚、さては櫻の造花等が美しく雨に濡れて、呑氣な見物人を迎へ顔にゆらめくので御座いました。あたりはみんな動搖いて、我先に一番渡りの勝を得やうと微笑んで居るのに、まあ吾家は!?!

幾棹か並べられた簞笥から、調度から、今の今迄ローマの我姿をうつしては微笑んだあの大きな姿見から大切な生命とも賴むべき本箱迄、べつたりと封印を押されて了ひました。呆氣に取られた私達を快さうに尻目にかけ乍ら執達吏は引上て行きました。

まあ明日から何を着、何を讀み何をしませう。況して御氣の毒なは父様、今迄幾流かの博士たちの間に伍して、血液説の爭ひに批難の聲高い其中に、事實が證明して漸く世間から認められ初めた今、此大きな建物を捨てゝ、單身大和地方に去らうと云ふ、其御心の中は如何でせう。あゝ父様、御無念で被在いませう、反對者の嘲笑ふ聲は眼を閉ざしても耳をふさいでも高鳴つて居りますに。

「桃代、許して呉れ、花盛りのお前に迄這麼苦勞はさしたくなかつた、みんな俺の不注意からだ、恨んで呉るな」彼の嚴格な父様が涙をほろ〱と飜しては、私の手をしつかと御握りなさいました、私は張裂る樣な胸を抱いて其御顔を見上げました。

「勿體ない、父様、私は兎に角此先どう成さる御積り?」と伺ひますと憮然として鬚をお撫でなすつた。

「何を云つたつて皆愚痴だ、畢竟運命と云ふものは極つた者で、弱い人間の手で如何しやうもないのだ。けれど俺の事は心配するな、何處に行つたからつて一旗擧げて見せるさ、其よりかお前の身體だ。一先づ叔母さんの所に行け、殊に女の身だ、學問許りに凝つて人

に嫌はれるな、仕事は何をしてもいゝ、たゞ潔く高く身を置いて呉れ」といつにない二人きり、此時許りはしみ〴〵と話しました。

いつ迄云つたつて際限がない、「もう行くぞ」と父樣名殘惜しげに室の中を見廻したが、もう立つて小さな皮行李に手を掛けてゐらつしやる。

「では父樣、御氣をつけ遊ばして」と洋傘を渡せば、

「まあ當分逢はれないな、後を賴むぞ」と車の上。倉を整理して居た叔父樣が、

「益夫、先方に着いたら直住所を知らせろよ、必ず短氣は起すな」と仰ると、「ハヽヽ」とわざとらしく御笑ひなすつて、



冷風　竹村槇子

「兄樣そんな心配は御無用です、何の之でも男一匹でさあね」やゝ梶棒が上つた。

「では父樣」人目の繁き場合泣くまいと務めてもせき上げる胸の波一日も離れた事はなかつた親子が之がいつ迄の別れかと思へば堪まらず倒れやうとして傍の從妹の肩にすがつた、「泣くな」と一言輪のきしり勢よく走つて行く車夫の足の早さ。後姿の見えなくなる迄見送つて私は家の中にかけ込んで、散らばつた道具の中に身を置いて柳行李の上に突伏したきり、心ゆくまで泣きました。

ひし〳〵と寄せて來る寂寥、其處に泣いて居る小さな弱い女の影、今迄の華やかさに比べて餘りの變化に驚かずには居られませんでした。

「およし遊ばせよ、そりやもう御察し申しますけれども今貴方が確然なさらなくちやいけませんわ」と從妹の夏子は云つて呉れますけれども此亂れた胸の苦しさを如何しませう。

『世の戰ひに破れて都を西に落ちて行く敗殘の父と戀に破れた殘骸の娘と。』

やがて私は涙を拂つて庭に出ました。

此病院を建てた時、紀念に植ゑた銀杏の木は、三十何年の榮えを誇りがに、屋根を被ふ許りに、はびこつた枝から匂やかな新芽を吹め初めました。私の小さな花畑には、近頃やつと蕾をもちかゝつた美人草、サイネリヤ、スヰートピーの類が混雜になつて、私の前に居るぢやありませんか。私はもう堪らなくなつて一番好きな櫻草の一輪をちぎつて、心ゆくばかり其香を吸ひました、此花畑にも別れなくちやならないのか、とぼんやり見守る時、遙に響く煙火の音、人のどよめき屹度今、日本橋の渡初めが初まつたのでせう。あゝ生れ故鄕の日本橋の其美しさも見ずに別れて、漂泊の末は如何なつて行く運命なんでせう。

どうしても〳〵此家許りは離れたくない、兩の乳房をしつかと押へたまゝ、私はいつまでも〳〵立ちつくしました。斯うして私が悲んで居る間に、父樣は寂しい一人旅の汽車の窓から、永年住なれた都をふり返つて何を考へて被在る事でせう。

手にした櫻草を思はず地にすべり落して、ポンと輕く肩をたゝかれて、ハッとふりかへると、其れは私の生れた前から家に居て忠義をつくして呉れたお島婆やでした。

「お召がぬれるぢやござひませんか」と疲れ切つた樣な手で傘をかざして呉れながら、

「御孃樣もう御泣き遊ばしますな、その悲しさうなお顏をみる度婆やはもう消えて了ひたくなりますもの、どうぞ〳〵貴女樣、今迄とは違つていくら御親戚でも何かに付けて御不自由ではござんせうけれども我慢して決して短氣な事は遊ばしますな」眞心込めた老婆の心は胸にひし〳〵と浸み渡りました。

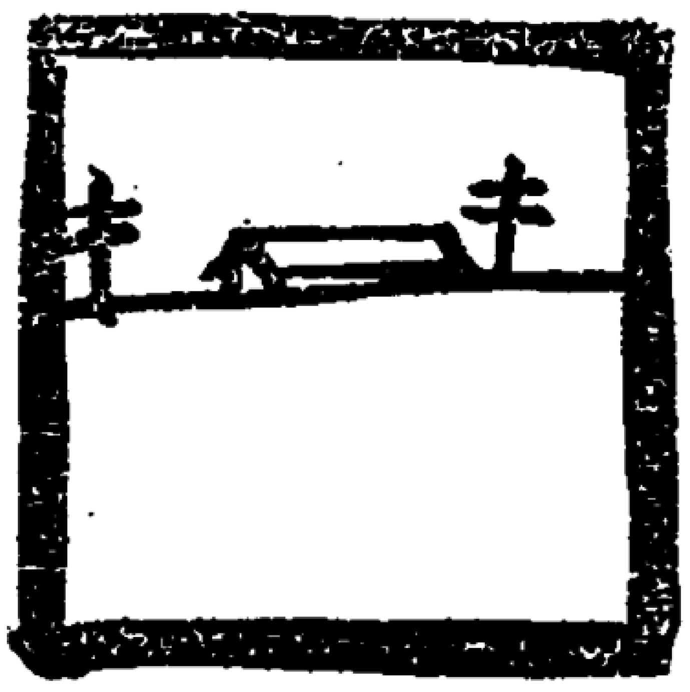
「あゝもう心配おしでない、お前こそ身體を大切にして」

老の眼からも大粒な涙がハラ〳〵と滾るのでした。

山出しの下女を一人前の女にした母の感化力

むら子

何を申しても未だ二十年の淺い月日、殊に田舍者の世事には至つて疎い私、これといつて皆樣の御參考になる樣な經驗談もありませんが、たゞ家にゐて感じたことのまゝといふよりも、我家の下女に



ついて申上げませう。

▲私が生れてから二人目

現在の下女で、私が生れてから二人目ださうですが家族の多いことには近邊で第一に指を屈する私の家、殊に田舍のことで事業は小さうでございますが、製絲業だもんですから繭の買入時などは目が廻る程忙しいのに、よくゐてくれると思ふ位でございます。以前のは私の生れた年から、十四歳の春まで居ましたけれど彼も不幸にして天にも地にもたつた一人の父親を亡くしたので、仕方なく暇をやりましたが、歸る時などは私の母を眞實親の樣に慕つてゐたもんですから、別れるのがつらいと泣いたのでございました。只今では早二人の母となつてゐますが、時たま夫婦喧嘩でもいたしますと、「私家へ行つてしまふ」といふので夫が「まだ何處に家を持つてゐる」つていふと「町へ行く」と私の家をまるで里の樣に思つてゐると申してゐます。

▲親身の親兄弟でも思ふ樣にはならぬ

近所の方々が、お家が一番によく下女が長くゐますからお幸福ですが、私どもへは碌な人間がこないので暇をやるやら逃だすやら、一年と續くのは稀で困つてしまふと仰います。

實際 私の地方では奉公にでる位の家は、大抵家計が困難なもんですから、尋常科も全部卒業してゐる者は、十人のうち二人位しかありません。現今は義務年限内はきびしくいはれますので、今後の人間はそんなこともありますまいけれど。それに中流以下の若い女は、大方他國へ絲取に行きますが、年の暮にはお金の

あるにまかせて、めかしこんで歸つて來るもんですから、それが羨しいんでせう、なんだ下女奉公なんて、つまらぬと、我身の强弱、父母の言葉もきかばこそ、われも〳〵と出かけてしまふので、めつきり人がなくなつて碌でないものさへもたくさんにはありません。

けれどたゞ奉公人にのみ罪をきさせて、とやかういふのはあまり慘酷ではないかと思ひます。たとへ血をわけた親兄弟でも十人十色で、其容貌、其氣質は異つてゐて何をしても一も二も自分の思ふ樣にはなりませんもの、まして他人の奉公人に於てをやでございます。

あれもだめこれも氣に入らんと、選んでばかりゐる日には使ふ者がありません。我家の風儀に適する樣に仕込むにはなか〳〵六ケ敷ございますが、そこは主婦たる人の手腕次第、心次第だと思ひます。

▲驚きの目を見はる

現在の下女はこの田舍よりまだずつと〳〵山奥の者ですが、七年前に初めてきた時は實に驚かざるを得ませんでした。だつて燈火といやカンテラか蠟燭の光のほか、ランプなんて、彼岸に町のお寺に參詣にきた時宿つて初めて見たといふ位で、無論掃除の仕方などは知りませんでした。部屋のお掃除などさせ樣と思つてもはたきの使用法もしらなければ、はたきつてどんなものか其形さへしらないんでございました。それでよく敎へまして、させてみましても、障子のさんをやたらにどん〳〵と打つばかりで、ちりなど少しもはらひませんし、はくつたつてたゞ箒を强く、ぐい〳〵動かすばかりで、塵なんか一寸もとれないといふ按排。こんな工合ですから無論作法など辨へてゐるやうはずがありません。其居動をみては、小さな妹までが變な顏をして、おどろきのめを見はつてゐるんですもの、これには流石の父も閉口しまして、とんだ者を雇つたと後悔したのでした。

▲主婦の感化力

母はかへつてこんな何もしらないもののはうが、家風に合ふやうに仕込むにはよいかも知れないと、種々と苦心しまして、何事も優しくして敎へ導いたもんですから、自然と感化せられて、一年後には全く以前の俤がなくなつてしまひました。母も骨折つた效があると大變によろこんだのでした。ホヽヽお笑ひ下さいますな、自分の母ながら云ふにいはれない其腕前には

私も感心してしまひました。でも不思議な樣ですもの――。

で私は自分の母によつて、主婦の感化力の如何によつて左右せられることの大なる事をつく〴〵感じました。

▲中庸をとつて親切に敎へ導く

あまりすることなすことが氣に入らないからとて、ガミ〳〵叱り飛ばしてばかりゐますと、反抗心が起きて從はないやうになると思ひます。白痴な者はいざしらず、普通の人間であつたなら、眞心こめて無學な召使をも敎へ導いたなら、其德に感じてよく仕へる樣になると思ひます。

あまり長くゐると我儘になると仰る方もございませうけれど、そこは我儘にならぬ樣、さりとて、窮屈な思をさせぬ樣、中庸をとつてうまく使用へば、べつに障りはなからうと思ひます。

▲物事に隔をしない

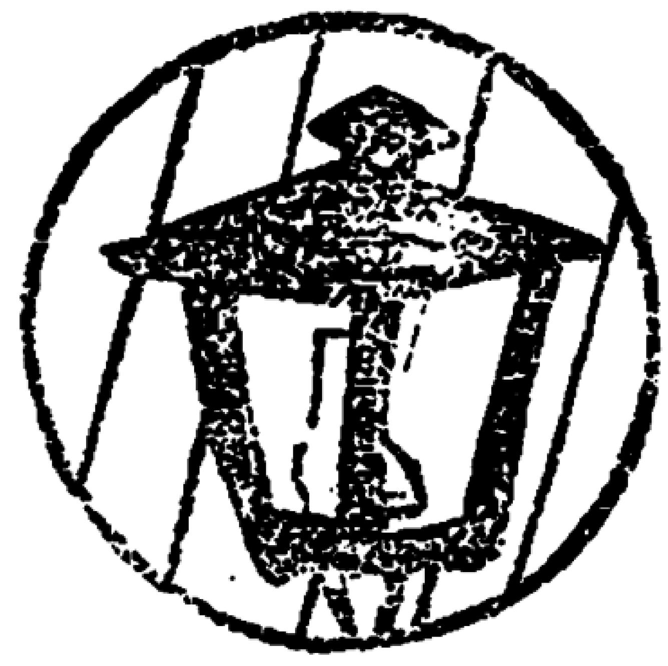
家では決して物事にわけ隔はいたしません、子供等にも優しくするやうにいつてあります。それで食物なども皆同じものですし、何か珍しい物がある時などは少くとも皆平等に分配して戴きます。又其働きぶりによつては、給金以外に賞與として春ならば帶地、夏ならば浴衣地とかいふやうに、其季節によつて與へますが、大變によろこんで一生懸命に働きます。

▲双方共に都合がよい

給料ですか、先年に初めは二十五圓位ですがだんだんと上げて行きます。三十五圓位から四十圓位まで。

夏は職業上忙しくてとても出來ませんが、冬は出來得る限り女普通のことを敎へる樣にしてあります。

長く續きますと、主人側の方でも、勝手のよくわかる者ですから、一々説明しなくとも都合よく行きます。一寸とした話が、當地のやうな田舍のことですと、今何々をほしいんだが、畑へ行つて來てくれといひますと、すぐ畑へいつて持つて來ます。一度敎へておいたけれど、もし畑を間違へて他人樣の物をとつて來はしまいかなど丶、氣使はなくともすみますし、また奉公する當人とても、渡り行く家毎に異つた家風につらい思ひをするよりは、おなじ奉公する位なら、ゐなれた家の方が、どれほど氣樂なか知れないと思ひます。



俳句

○(天)　越後　幸子

女瀧男瀧落ち合ふ岸の若葉かな
七浦を施米に廻る暑さかな
羅漢寺の羅漢〻睡る眞夏哉

○(地)　伏見　竹村槇子

小如露を落せし夏の眞晝哉
夕晴るゝ川の邊りやつばなの穗
撫子や砂原廣き出水跡

○(人)　茨城　田村波津子

紫蘇の葉に朝露消えし暑さかな
毒だみの咲く桑畑や蟬生る
朝顔の白きがうれし朝月夜

佳作

○　京都　名無し草

袷着て易を見に行く女かな
袷着てこの日毛蟲にさゝれけり
一里塚草の中より百合の花
林檎むく手の涼しさよ橋の上

○　福井市　山崎柏子

ねんごろに育てまゐらす蠶かな
頭あげて桑待ち顔の蠶かな

○　知多　榊原銀子

崖に咲く野百合の莖の長々と
夏の月青麥の根に蟲の啼く

○　長岡市　星野みよ子

帶解けば汐干の沙のこぼれけり
逢はぬ戀柳結んで歸りけり

○　深川　小もゝ

短夜は大雨ながらあけにけり
花桐に明るき山の西日哉

○　神戸市　金田紫園

きぬぶさの枕主あり青すだれ
招かれて月に手傳ふ料理かな

○　廣島縣　後藤壽美枝

短夜の枕に夢もなかりけり

濱風に兒の凧あぐる砂地かな　信濃　下枝よし子
初夏の庭に水打つはだし哉　宮城縣　齋藤那代子
文机や庭の若葉に風薫る　後丹　荒川たい子
徑の中に壁ありて湧く清水哉　下關市　横山文子
よき馬に乘て越えけり夏の山　下關市　野口君子
薄みどり山を背負ひて草刈りぬ　美濃　葛の葉
紫の傘浮びけり桑の海　上毛　小澤碩子
女達足の白さや汐干狩　石川縣　梅子
夕立の人をさわがす夜市かな　飛驒國　むら子
摘草を咬へて走る小犬哉　秋田縣　鈴木露野
梅雨晴れて庭新しく覺えけり　秋田縣　曉家ハナ子
水をうつ人美しき住居かな　茨城　浮舟女
寂靜まる家の低さや鳴く蛙　東京　島翠の花
化粧間の鏡にうつる櫻哉　秋田縣　伊藤トキ子
鷹の巣に雲の去來や神の杉　秋田縣　鈴木ハナ子
大掃除すみし夕べや夏近し　備後　高田りよ子
帆を張て舳に立つ水夫や春の風　新舞鶴　菅幸子
水底に日傘の影や蓮の花　長崎市　永井力子
十丈の瀑布のすそや飛ぶ螢　名古屋　夏のやほたる
またゝく間夕日うすれぬ春の海　[illegible]　矢名
五月雨の晴間につきぬ君の文　府下　大浪せい子
遊びよぶ庭づたひ籬垣間みし　芝區　田中まん子
ゆくも野路歸るも野路よきりぎりす　ゆふづき
螢狩危うく水に落ちんとす　土佐　山中春子
冬籠り掃除のとゞく書齋かな　宮城縣　齋藤萩子

美くしき灯ともるや湖の南　島根縣　富士喜代子
青嵐吹き渡る哉にほの湖　福井　北明星
寢たる子の枕に近き蚊遣哉　本郷　城本道子
新嫁も裳裾からげて田植かな　美作　瑠璃
大御所は騎射に興湧く端午かな　姫路　磯菜
新綠の森に女の冥想す　金澤　柳の香
オレンジの花咲く頃や風淸し　岡山市　房之
梅の實のほろりと落つる書間哉　宇都宮　きく子
琴の音のやむやてまりの人のかげ　備前　佐久間綠子
燕に飛行器つくるたくみ哉　丹波　隅田禮子
夜渡しはせぬ掟なり時鳥　本郷　鈴木さゆり
舟さして歸る法師や夏の月　伏見　阪芳子
短夜のお通夜にあけてしまひけり　横濱市　金井きよ
水こへば瓜ひやしある山家かな　岡山　土屋綾子
夕立の山から山へ走る音　長崎市　めあや
手ひたせば蛇泳ぐ清水かな　ゆふかげ
麥かりや蜘蛛の糸にやなむ霧の朝　熊本　河野千茂子
雲間より相輝ける二星かな　信濃　百瀬若子
灌水の後や雫すゼラニアム　府下　向井香淸
七夕の心になりて眠りけり　東京　うた子
コスモスの苗折られけり夏の雹　武藏　吉村きみ
雷鳴の嫌ひな人と語り居ぬ　大阪　まつ子
橋落ちて河骨の花皆咲けり　越後　山姫
現代の婦人や富士に登山しぬ　澁谷　白き花
睡蓮の眼覺めし花や夢の花　牛込　はや子



散文

影

港の女

四つ目をそつと出て、日は我が足に榮えて見える眞紅な草履の緒を見つめつゝ、トントンと、五つ六つ石段を下りて汀の砂の上に立つたとき我が息を聞いて何ともいへぬ心安さを覺えた。

何といふうれしい夕だらう。弧形をした砂地には我が姿一つを見出すのみとは――。

澄みきつた大空には、血にまみれた黃金の樣な月が、くつきりと姿を見せて居る。眞黑い灘頭の丘から少しはなれて――。あの刺激の强い色と、たゞ一つ自分の姿を現はして居るのとがほんたうに好きだ。たまらなく好きだ。

何心なく振りかへると、砂の上には黑い影、それは私の影だつた。私は誇りを失つた樣な心地がした。

何故こんな影がつくのだらう。ふりはらつてやりたい。私は思ふまゝ走つた、足にまかせて砂の上を。

まだつきまとつて居る。うるさい。何處まで行けばきえるのかしら。

月は次第に孤立して來るのに、私には影がそふ。

波がさつと砂をあらつても、その跡に私の影が殘る。

あゝ――あゝ誰か來て消してくれないか。

この影の消える迄と、走りに走つてもう堪へられなくなつて、倒れた處は冷たい床の上だつた。

けれども柔かい床だつた。

ふつと氣がつくと夢の樣に咲いた月見草の花をたふして倒れて居た。私の暖い肌は靜かにふるへて居た。

お、月見草よと口づけたとき、花瓣はおそろしさうにふるへた。

凋くんだ花はかすかな吐息をもらして、星の咋を伺ふ樣に見えた。

花の息にまぎれぬ我が息は、ひとり空氣をふるわせて居る。

どうしてか、我が影は見えなかつた。私は今ほんたうに一人だ。誰が來て私の影をけしてくれたんだらう。

「まあさん――」、また聲あげて「まあさん」と我が存在を確かめる樣に呼んだとき、物にまぎれず我が聲は我が胸にひゞいた。（入賞）

銀線のやうな白い、細い、そして輝きのある美しい文章　（評）

村まつり

府下　わか紫

坂の一町程手前から、花と提灯とが路の兩側を飾つてゐた。

坂下の神樂堂は、急ごしらへの掘立小屋、囃子をする人のからだと同じやうに、荒繩で結へたのがゆさくくとうごく……。

一人を負ふて一人の手をとつて、この下に立つた私は、今更らしく軒提灯を見かへりながら、人と人との間をぬけてあゆみました。

提灯には梅鉢の紋が、赤と薄墨で右左にかいてあつて、××天神といふ文字を眞むきに見せてゐるものだから、片側の家々は赤ばかり片側はうす墨ばかり、坂の盡くるところまでつゞいてゐる。

坂の中腹を右に折れるところに、金魚屋が店を出してゐた、やしろはこゝの奥にある。

五月も末の廿五日、丁度午後の二時といふ頃はひなので、日は容赦なく私のあたまを照りつける。四日ばかり過ぎた唐人髷の髮のほつれが、うつとうしく顏にかゝつてくるのを撫で上げ乍らも、袂を捕へた弟にひかれて、ちつとも休まなかつた。たゞおんぶをしてゐる手は、痛さを越してしびれてゐる。

土に塊まつた石段を登りつめると、すつくり立つた境内の木立、その

悶に人いきれは滿ちて、祭！といふ感じが私の腦をおそうてくる。

神前の鰐口がカラ〱と鳴つた。やしろの前には、夜に入つてもよほさるべき芝居の舞臺が横なりに、丁度人が寢ころんだやうな形に建てられてゐる。唐紙に苗田を脊景、それと並んだ花道の雨戸には、「奉納、何圓、何某樣」と書いた紙が、行來よくはられてある、二圓一圓が一番多い。私はこのわきに、一萬圓〇〇家と、ずつけりかいてやりたいなあと思うた。

ワツシヨイ〱と子供連が、赤い萬燈を先に立てゝ練つてくる、樽御輿だ。揃ひの浴衣に、太皷や笛をつけた黄色い襷をかけて、さも勇ましげにもんでゆく。赤い向ふ鉢巻のいなせな若い衆が澁うちはをもつてとんで行つた、みんなはだしだ。

おもちやを筆頭に、本屋もある飴屋もある、鹽をかけるのかと思つたら、まるで石灰をとかした水のやうなものをかけるんですよつて、誰かゞ驚いて話したその豆やもゐる。繪葉書のやうなものを、福引でひかせる店もあるし、紅や白や黄や、檜の葉の上につながつてゐるはゝづきやもあつた。

いつぞや九段に出て居たといふ改良劒舞、その見世物がこゝにも來てゐた。

紫の廣袖に桃色メリンスの緣をとつて、帶も同じ桃色のを、ぐる〱と腰に卷きつけた廂髮の女は、公衆の方をむいて歌をうたふ。――と、緞帳がくる〱とまき上つた。内では二人の武士が、うた聲に合せてチヤン〱と切り結んでゐる、赤穗義士討入と木戶番の爺はよばふ。

この見世物の裏へまはつて見下すと、水田一反はたやすく私の眸に入る、さゞめきを逃れし深綠の美くしさよ……。

拜殿に人はもう並んでゐた、欄干につかまつて立つてゐる人の群れも幾重かの垣を作つてゐる、カラ〱と鰐口の鈴がたえず鳴る、錮さうな重い響だ。

七重の神衣を着た樂人は、つゝまにやかに笙を吹く、絹をさくやうな――血を吐くやうな――（さう、もつと新らしい言葉で云ひたい）――もの哀れに身に泌むひゞき！、そのひゞき……。

あはれ哀音の行方よ。けたゝましい樂隊の囃子にまじつて、寂しい音はどこまで傳はりゆく……何處まで……。神官はやをら立つた、そしてしづ〱と拜殿を出た。色あせたと見たのは我が目のあやまりで、青みの勝つた玉蟲甲斐絹の衣が、日にきら〱と輝くのであつた。

白衣の禰宜が三人、あとから靜やかに步を運んだ。

列は人むらをわけて、木立を縫うて彼方へゆく、子供の幾人かは珍らしさうについて行つた。

玩具屋の店の主は、今竹輪鐵でお辨當をたべてゐる。私はこの店でおもちやを三つ買ふた。

只、詳しいと云ふだけ（評）

初　夏

宮城縣　馥　子

逝く春を惜んでちる花の下に涙を流した私も、日毎に濃くなつて來る綠葉やあつさりとした卯の花に心をそゝり立てられ日頃の涙痕何處へやら、また昔の儘の天下太平、若草淸々しい夏の野でテニスでもして遊び度くなつた。昨日愁雲にとざされしかんばせ、今日悅びに晴る、あゝ定めなきは若人の心なる哉。

淋しさを初夏風に拂はせてたのしき耳に聞くほとゝぎす朝な夕なの心地よさ、如露さげて樣々の草花の中に立つ時は心さながら玉玲瓏、一點の慾もなく邪氣もない。

あゝ初夏はよい期、夕まぐれ一人北上の長堤を川風に面なぶらせ乍らすゞろ步みする時の心地は寂たる萬象に同化されて、自らこゝろ靜寂になつてくる。近きは黑く遠くは藍色なる山々や、黑波、銀波の漂ふ川面、靜より靜りたる空氣、あゝ初夏の夕べを嫌ひな人はあるまい。

身につくるは洗ひ洒しの筒袖、時代物なる絲織の帶を兵兒的にキリヽと結んだ我が姿は、人が見たならば何の艶なる所もないまるで男の樣な女と思ふだらうけれど、私のこゝろは偉大なる自然の風致にチヤームされて服裝も何も不關焉、月が皎々として對岸の森の上に來た。

不圖川上の方からオールの音がした何んだらう、誰れだらうと思ふてる内に眼に入つたは屋形の樣な舟と人。丁度私の前の邊にきた時漕ぐ手

を止めた。主は若い男子らしい、腕を組んで月を眺めて居る、やがて何やらん現代的に云へば振い付き度い様な好い聲で詩吟をした、さながら畫を見る樣。

舟は徐々と流れて突出した山のかげに隱れた。心持か未だ誦して居るやう。

時鳥が空天に波をうたせ乍ら高く鳴く、懷しい聲だ。あゝ初夏よ、何時遇ふても清々しく、云ひ知らぬブライドを覺ゆるは汝だ、汝に遇ふてからも大分時日を經過したから最う近く別れねばなるまい。別るれば再び我が二十二の汝に遇ふ事は出來ぬけれども惜しまない。年毎に樂しい印象を殘すからだ。

あゝ初夏よとこしへに幸を齎せよ。

初夏の氣分は捉へてゐる（評）

暮れ行く思ひ

冷　子

塗立つたペンキと煤燈の埃臭い中から逃げる樣にして出てきた私は、無意識に家まで歸つてゐた。

狹霧の樣な細い雨が音もなく降つてゐる夕だつた。疲れ切つた身體を窓際の机まで運んだ。室は暗い。あの灰白く煙つた雨の中を、色の洋傘を翠して走せた姿が浮ぶ――あゝ私は何の望あつて急いで家に歸つたのであらうか？人の住家は――

毎日同じ色をした同じ道を、汚い川に沿ふて行く後姿は奈何に哀れな者だらうか。あゝけれど誰も何とも思つて下さるな。自ら求めてかゝる苦境にあるのだから、一旦捨てた故鄕におめおめ歸れるものですか。あらゆる苦戰惡鬪して、自分で自分の道を見付け出すのだ、其間に倒れるだらう、倒れても好い、私は私の心の欲する儘に行くのだから捨てゝ置いて下さい。

眞劍に死物狂に叫ぶ私の聲は、かすれて細く絕えむとしてゐる。あゝ反應なき世界よ。

束縛！束縛を憎む、自由を憧憬して、僅にも慰安を求めんと廰め出た私は、また知人の腕に舞と捕はれて終つた。哀れ放縱にのみ生きんと欲する私は禍なる哉。

逃れ出樣と焦り狂ふ身は血みどろになつてゐる。放縱とは言へ何も墮落仕樣と言ふのぢやない、同情より脫して、强く一人で立ち度いのだ。そして泌々と放浪の旅に歎き、味ひ度いのだ。また心の向く儘に歌ひもしたいのだ、雖然あわたゞしい圭角の多い此家にあつては到底不可能な事である。實際泣き出したくなる。然し泌々と泣く暇さへない、泣くべくして泣き得ない程苦しい事はありますまい。

机の上に額を伏せて凝と思ふてゐると、心は茫と詩の樣に過去の幻が浮ぶ、美しい幻影！　それやこれやと追ひ行くうちゝ、また家を出た其時が浮ぶ。母樣の瞳に映る、痛ましい。

嗚呼五月十一日は、私にとつて永久の紀念日となつたのだ。何時でも沸騰點まで騰つてゐた私の心は、あの動機によつて殆ど狂せん許りになつた。二百里外の荒風吹き捲く此地に來樣と決心したのだ、何も言はないでたゞ行く、行かして下さい。と大變な意氣込みで申し出た時、おろおろと我手に縋つて止めた母。

思へば私は不孝な子なのだ。けれど漸く父が許し、また母も心よく送つては吳れた、けれど心を思へば、心を、門に並んでいらした寂しさうな姿、あゝ母樣許して。と心に手を合して拜んだ。親に背き人に背きて立てる私はどうして樂に一生暮せるものか。また樂に暮さうとも思つてゐない。

自ら好んで苦しみ、好んで惱む私はまアどうした人間なんでせう。遣瀨ない寂寥はまた身を襲うてくる。焦々してきた。あゝ此麽時彷徨してゐたあの故鄕の暗い森が戀しい。

「人中行きて淚わすれよ」。とあてどなく夜の街を彷徨して見度いけれど、今は夜、況して女の一人步きは許されない、家に囚はれた者だもの。あゝ嫌だ！

立つて障子を明けた。遙遠く山下町の西洋館より、洩れくる幾つかの灯影は、惱みつゝ光つてゐる。

あゝかうして私の春も逝つて終ふのだ。

時代に瞞れたといふだけで個性がない（評）

悶え

百合香

嘗て從姉が教會へゆくと云つた時、「神より出た、古く貴い家門の血統を受けた身でありながら、異敎につくとは」と、一時の感情にかられて絕交をと泣叫んだ私だつたのに………。今は教會を嫌ひキリストを厭ひつゝも、前には聞くをさへ、快く思はなかつた其讃美歌を好んで歌ひ、それによつて、幾分かの慰安を得ようとする。

思へば私は變つた。多少片意地にもなつたらうか?。

夕がたきく聯隊の、昔に變らぬラッパの音は最も古い記憶をよび起させ、懷かしくも恐しい思がする。



おもちや　賞　京都　無名草

月光を浴びて、鬼ごつこ、影ふみに打興じた無心の少女、十年後の今は………。喜んだ、昔ながらの、其月を仰いでひとり泣かうとは。せめて私が、今此乙女十八何といふ美しい響懷かしい名であらうか。年であつたらば悶もせぬに……。

此頃は自分の前途について、種々に思ひまどひ、我ながらも驚く程いろ／＼に心が變る。

獨立獨行の人とならうかとも、母と呼ばれて平和に暮したいと考へたり、人を魅するだけの容色をもちたかつたとか、短くとも華やかな、羨まれる程の生活をして、世を送りたいなど、虚榮心の強さうなことも思つて見る。

あゝ何者かによつて、光を認め慰安を得たい。

いらだつ胸を沈め樣と、月に憧憬れて庭におりた。陰曆十四日の月は清く照らし、草も木も夜の沈默を守り、あたりそよ

との音もなき靜か夜。初夏の夜氣は肌心地よく、木々の上葉もゆらがせぬ、微風は後れ毛を弄る。

折しも何處よりともなく送り來る銀笛の音。床しき調べの主や誰。たが家の若人か?。みやびにも懷かしき心地する笛のこゑ。月を仰ぎ、恍惚ときゝとれた私の胸はずが〱しく晴れて居た。

かゝる夜、隈なき光をあびながら、妙な爪音又は薩摩琵琶の歌聲きゝながら、懷かしい人のお膝にすがり、手を握られて、苦しみもなく、靜かにはゝゑんで逝けたならば……、此上の滿足はないけれど……。あゝ淋しい、今の私には懷かしむ人もなくて、……。夢見心地に過ぎ來た春の道おもふた時門邊を歌ふてゆく薩摩琵琶のふしをきいた。胸の高まり押へつゝ、靜かに聲を慕ふて門を出た。おひ〱うすれゆく歌の聲、黑い人影は消えてゆく、もしもあれが、私の………であつたならば、と思ふと悲しさに思はず一聲した。あゝ私はんとうに心の內、包まず語る從姉が今此處に居て互に手をとつて泣けたらばどんなにか嬉しいに。

あなたも何か悶えてゐるやうですが、靜に自己の人格を養つて行くのが宜いでせう。いら〱するのはいけません、いら〱するだけで無意味に日を過すのは更にいけません、此の意義ある世界に生れて（評）

彼の君

N　女

如何に梅雨だからとて、よくもこんなに每日〱降れたもんだ!降つては晴れ、晴れては降り　着て居る着物までがベト〱で、氣持が惡るくつて仕樣がない、こんな日には、誰一人として訪ねて來てくれる者はなし、レターと云つたら、おまけに一通も來ない。

あきて〱とても机になんか向つて居られやしない「あゝ陰氣な梅雨だ、淋しい日だ」私は思はず口走つた、Uさんもあんまりな人、いつも日曜つて云ふと何一つ復習もしないで遊びに來て下さるくせに。レターぐらゐは、よこして下さつてもよささうなもの。

私はUさんを恨んだ、而し云ひ知れぬ戀しさは波打つ胸にわなゝいてはては、彼の君の過ぎにしレターを幾度となく繰り返し〱し見た!。

文の終りにはいつも（花より何より戀しきN子樣）と認めて下さる、私はそれを拜する度に、故知らぬ悲しさがせまつてきて、つひに、彼の君のつれなき文の筆の跡戀しい人の筆の跡を見わかぬまでに汚してしまつたことなどは幾度あつたらう。U樣とてもまだ〱嚴しい校則を守つて行く身!私も同樣、今一年も嚴しい〱ライフを送つて行かなねばらないまゝならぬ體なんですもの、たとひ野の末山の奧なりとも彼の君と共に住みなば、唐の虎伏す野邊も懷しいわ。

いつしか春も過ぎのとに川邊の螢は愛のよろこびを舞ふ。妾と彼の君との戀は熱火の樣だ。

あゝラブ〱!どうしてか此の言葉は、私の胸をはなれない、戀る心慕ふ心は彼の君よりも一層深く索かれた私のハートには年中春のやうな溫い溫い戀風は吹きめぐつて居るのだ。

ふと圓形の窓より東の空をのぞけば、煙の樣な梅雨は尙シト〱と降つて居て、黃色い透る樣な梅の實が淋しくはた哀れにポタリ〱と落ちる。

はるかに見える黑いエントツが目についた。あゝなぜあんなドス黑い色なんだらう。私は見るのもいやだ!見ないやうにしてもすぐに目に入る。

云ひ知れぬ悲しさは涙となつてあふれた、あゝUさん……Uさん……どうしても彼の君が懷しいのだ……。戀しいのだ……。

戀愛も斯う露骨に白狀されてしまふと價値がない、さても困つたお環さまかな（評）

土曜より日曜へ

靜岡縣　柳町ミヱ

土曜の夜の嬉しさは、ピアノの鍵に觸れた白い指の樣に波打つて怨しく躍る。

蒼黃ばんだ月光が、石竹色のカーテンから窓にすべつて、床の毛氈に

投げ入れた花薔薇のほの匂ふ閨の靜けさ。白いシーツも紅い小枕も歡樂のさゝやかな投節を唄ふて、白粉と油との香に包まれた若やかな私の肉體をそゝる。廢腐髮の千々に亂れては安からぬ胸の戰ぎよ。

土曜の夜の嬉しさは、ギオロンの絃を擦る強い弓の樣に波打つて烈しく躍る。

桃色の封筒に包まれた鵞ペンの走り書き、コバルトの文字のあざやかさ。今一度繰返してニツコリ！　まあ小枝子（妹の名）のエンゼリツクな艷姿の艷なる嫉ましさ。ツーモロー！サンデー！私は遂に眠れぬ。

＊　　＊　　＊　　＊

「美惠子、まだ、お目覺でないかえ」

母さんのお聲、驚いて退けた衾の紅裏に、五月の强烈な朝の光と、芳烈な若葉の風との縺るゝすがすがしさ。何んとなく希望に滿ちた明け方よ。

肉付の好い體には生氣ある血汐がから〳〵と廻つて居る。お化粧も濟んだ。

一椀のチヨコレートに、興奮した神經は快い感傷を覺えて、萬物悉く歡喜の色に醉つて見えた。

朝の食卓に對してもおつちり箸が執れなかつた。

滑かな廊下を辷る樣にして行くと、露にぬれた初夏の花が玻璃戶を透して强く目を射た。

「美惠、美惠、お前の疎忽かしやにも困るのね、お父さんのスレツパと履き違へてさ。」

お母さんの、稍急なお聲。

「えつ」

と驚いて覗ると

「まあ、どうしやう、お父さんのお上靴を私が……」

いつにない私の不覺、自分ながら可笑くも、恥しくもあつた。疎忽をお侘して後、お部屋に這入て、何々集、何々の歌、何々文集と云つた樣な、氣のきいた本の脊皮の金文字を揃へる。

机や、床をも取片付けた。あたりのものが氣になつてならぬ。讀さしのボルクマンをとつて讀み續けたが、妙に感じが昂つて來たので、其のムードを短歌にして見たくなつて樣々に考へた。考へても考へても餘々詩の形式に盛れない。

手筥からレース絲を出して詩集入を編んで見た。

昨宵の封書をまた出して裏と表とを一寸見て帶の間に挾んだ。

肌觸りのいゝネルの着物の蒸す樣な暖さに體中薄く汗ばんで氣持がわるい。乳の邊へ手を觸れて見ると動悸が烈しく打つて、乳頭までずきずきして居る。落着のない頭を擧げて楣間に揭げてある額に目を移した油繪の女の甘へた樣な、恨んだ樣な瞳と私の瞳と合つた時、私は顏を反向けて外の面に目を放つた。

水の樣に澄んだ初夏の眞晝はサンデーといつた暢やかな情調が漂つてゐる。黃ばんだ麥畑の畷路を吹いて行く稚見の草笛のメロヂーは死ぬ程懷しく胸に響いて來る。其野末に黑ずんだ靑葉の森が見える。其の森の中の渡を越して、其森を潛つて、此畷をいそ〳〵として來られる私の待人ももう見えさうなものだ。明るい畷には空車を曳いて行く人、馱馬に乘つて來る人の外は目には入らなかつた。

「姉ちやん、岡村の兄ちやんがいらしつてよ。」

「まあ、小枝子の仰山な聲！」

私は夢の樣に玄關に立つて、帽子と手提とをいち早く手にしたが、眞紅な花を束ねて提げていらしつた貞雄さんの、お姿はなぜか目に入らなかつた。

「おや、貞さん、おいでなすつたの。」

いつか母さんも見えてお世辭を云つていらつしやる。ミルクとオレンジとを持つて婆やは私の部屋に急いだ。日曜の晝の樂しさは、土曜の夜のうれしさにも增して、靑春の歡樂は快活なマーチに合せて、足踏しながら私の周圍を駈け廻つた。我に歸つて座に着いた。窓に生ひ繁つた靑葉若葉のゆらぎと、正午の熾烈な日の光の旋律とは、ミルクのコツプを上げた私共二人の若い生命を一層美しく彩どつた。

おもしろさうだ（評）

悲しき日

龍山　朧夜女

未だ世間を解せぬ田舎娘は、朝夕に聞く友の侮辱の言葉を免れんため一つには戀しき父に逢はんが爲めにはる〴〵渡鮮を思ひ立つたは、雪にえにしのいと遠ァ南の果の山里にも、木枯訪づれて里の子等も、破れし衣つくろひて、春を待つなる年の暮れ、姉さん行つちや僕淋しいな、すがり付く幼き弟も、之が一生の別れだよ、と悲しみ給ふ祖母君の御聲も泣きこそ遊ばさぬけれども慈愛の瞳に、露さへ宿らせ、旅の注意は云はずもがな、行く末ずゑの事までおち無くこま〳〵さとし給ふ母君の深き御情けも、半ば空耳に、住み慣れし故郷の山川を後に、只一人、音に名高かゝりし玄海の波しづかに父が許に着いた。幾度か、星移り箱消えて早過去の思出となつて仕舞つた。

事情の爲め自ら求めた業乍ら、何の變化も無い單調な今の仕事がつく〴〵いやになつて堪へられない。女子にはふさはしき業、神聖な業と自らも人も云ふけれども其割合に世間にはみとめられず、壓迫ははげしく氣の小さい私には、とても〳〵堪へられ無い、と云つて他に職業は浮山有るけども、無學の私には、とても出來さうにも無く、いたづらに尊き月日を荒むばかり。あゝ此末どう成るんだらう。どうせ成る樣にしか成らぬ事だ。けれども成り行きにまかせて居る樣なおとなしい娘でも無く又成り行きをおめ〳〵と待つ位なら、何にも、破れ袴引かけて、辨當さげてて〳〵て〳〵役所通ひなんかしないのだ。先程も退局の折り後から來た若者二三名が、モシモシ式部だのノッポー君早く継がんかとか居眠りするなら六尺棒とか果は聞くに堪へ無い惡口を吐く、あゝ世が世ならば、と心にも無い父母が恨めしいやら、情けないやら口惜いやらで足も地はようふまず、夢中に歸つて机につゝぷしたまゝ人目もはぢず聲立てゝ泣いた。限り無く受ける壓迫侮辱、氣弱い私は胸がはりさけさうだ、此度こそ父樣に御話して辭職して仕まひ度い、今まで一度も不平をもらした事も無いのに、とつぜん云つたら驚きなさるかしら、あゝ云ひますまい。今年の正月、鏡の如き氷にすべつて淺からぬきずを頭に受けて、出血おびたゞしかつた其以來、日に日にやせ給ふ御姿を目のあたりみれば、どうして〳〵云はれませう私の口から、あ・やつぱり私は弱い女なのだ。侮辱の言葉はあび乍ら重い足は引きずりつゝも、不幸なる運命に服從して、いつまでも〳〵出勤せねば成ら無いのだらうか、私は今日何故か限り無し悲しい。

まあ御しんぼうなさい（評）

公園の一夜

みさは

私は、フト家を飛び出した。何の目的あつて、家を飛び出したのだらう？悲しい家に……父母も姉妹もなき――自分の家であり乍ら、他人の家も同然な悲しい家。

公園のアークライトが、紫の光を噴水に投げて、月はすみ渡つた美くしい夜であつた。

淺草寺の仁王門をくゞると、右手の向ふに――幾多の人々を集めて、救世軍の靑年傳道師が、貴き神の道の罪よ愛よ汚れよと、種々雜多の口實に世人を神の道に救はんとしてゐる。

私は、其れを聞かんが爲に日曜の夕を半道もある淺草寺の門をくゞつたのであつた。

今迄の汚れた罪を、神の御前に謝罪して……淸き世の善者と成らうと絶なく讃美歌を唱ふて後、しきりと口の中で、神に祈りを唱へて……そして傳道師は、自分々々の方面へ足を向けた。讃美歌に、耳傾むけてゐた人達も、散り〳〵バラ〳〵になつてやがて黑き人影は、彼なたの杜此なたの杜へと。夢の如くに浮き出ては、又、夢の如くに消え失せてゆく――

嗚呼！我が戀ふる、美くしき、夜の寂寞よ、希は永劫に此の世界に居りたい……秀麗に滿ちし夜の光景よ。永久に私は斯うやつて、月を眺めて居たい。

公園の木の間を通り拔けて、茂みにもれる月光を、幽に顏面にあび乍ら、スタ〳〵と池の方へ、私は走つて行つた。キネオラマや大勝館のイルミネーションはさながら、美くしい虹の花でも散らした樣に――其かげを池の小波の上に落してゐた時、私はうつとりとして、華やかな人生の夢を繰り返し〳〵辿つた。先へ歩まうともせず、暫らく其處に佇んで冥想の中に或る美くしいものを胸に描いだ。こんな時にも懷中のウオツ

チは絶えずローマ字を辿つて、早や九時は、とうに過ごしてゐた。あゝもう九時！は過ぎて……處女の身の只獨！こんな處に佇んで居たならば怪しまれるには、違ひなからうと。

仕方なく重い〳〵足をもたげてブラリ〳〵と彷徨うてみた。フト後を振り返りし刹那！黒き人影の、見えつ隱れつに、私の影を追うて來る樣に淋しい月影は池の端に漂うてゐる。

まだ文章も書きなれない、あたまも出來てゐない、危險なる處女時代の夢をみてゐる人だ（評）

雨

京都　芳子

昨夜からの雨はまだやまない。廣い道も、ながくつゞく家の屋根も、しん〳〵と繁る××境内の大木も見渡す限りのもの、皆美しく雨にぬらされて居る。障子開けると室の中までぬれさうな。こんな日は、何をする氣にもなれない、障子閉めきつて机にもたれ、雨の音を聞きながら、一人靜に空想にふけり度い。

夢のやうな希望を抱いてほゝ笑んだ昔は、短いものであつたけれども新しい過去の惱みを忘れんため、強いて思ひかへす古き日の、華やかなりし心は、寂しい今日の日のせめてもの慰めである。

いつまでも〳〵憧れて居たいとは云はないけれども、せめて二十までは、苦しい現實の世界に生き度くないと願つたのに、早くより身の束縛を受けた私は、心の自由までもゆるされなくなつてしまつた。あまりに若くて重き任務を負はされた身には、事々に失敗か多かつた。若き心に限りなき惱みを與へて、不甲斐なき女よ、と罵つた人を、今更恨みはしないけれども、一度受けた胸の傷手は、永久に癒える事が出來ない。

忘れ度い、思ひ出し度くないと焦るけれども、こんな日は、わけもなくあの當時が思ひ出されて、たまらなく物淋しい。

年の頭に十の字のつくのも、最早や今年限り。二十となると何だか俄に年とつたやうな氣がする。と云つたら、其の答だ、女二十は婆のうちといふ事があるのだものと云はれたのを思ひ出して泣き度いやうな氣がする。華やかなるべき年を、思ひ惱んで暮した身は、せめて今年だけは美しい印象でも止めて置き度い。と願ふけれども、一度冷め果てた淋しい心はどうしても以前の暖い心にはかへられない。眞の心が淋しければ夢のやうな樂しみに、一時ほゝ笑んだとて醒めて見れば矢張り淋しいものを。

陰欝な人、と評された頃が、私には樂しい時代であつた。星と輝く未來を夢見て居たのも、あの頃であつた。儚なき一時の空想なればとて、次第〳〵に醒めたなら、かくまで深き傷手に惱まなかつたであらうに。

早く醒める者は幸福なり。と人はいふけれども。

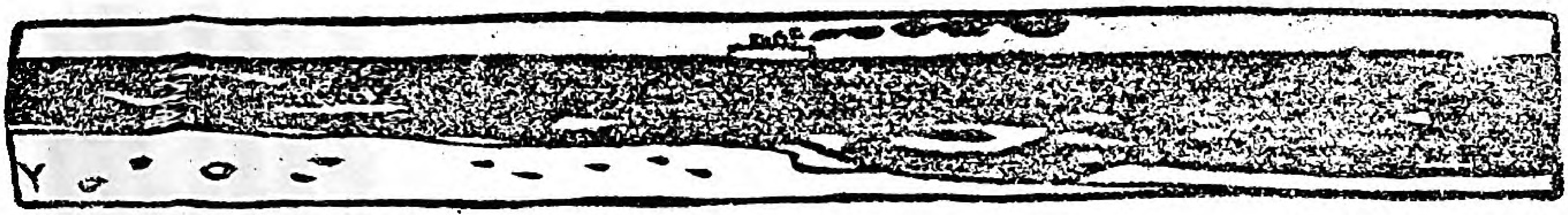
今年の春、久し振りに、お目にかゝつた△△樣が、都會生活の定めしお心も華やかに、美しくおなり遊ばした事と思つて居たのに、おふけ遊ばしましたのねえ、わづか三年の間に、五つ六つも年とつたやうに見えましてよ。とやつれ果てた私の姿を見上げ見下して、しみ〴〵と、おつしやつた。實際私を十九に見る人は一人もない、以前の私を知らない人は、皆二十二三位だといふ。

きつと〳〵、いろ〳〵苦勞がおありになつたんでせう、おうちあけ下さつても、よろしいじやありませんか、いくら過ぎた事でも、聞かなくては何だか氣になつてなりませんわ。と淋しく笑んで何も語らぬ私の顔を見つめて、幾度も〳〵おつしやつた△△さんに、何も皆うちあけやうかとも思つたけれども、あさましき心よ。と心の奥のあるものが叫ぶやうに思はれて又しては口を噤んでしまつた。

涙にいろどられし、過去三年間の悲しい思ひ出は、長かりし一夜の夢として、すでに思ひ捨てたものである、再び思ひかへして、古き惱みに友を泣かす必要もない。と思ひなほして、遂に語らなかつた。

いつまでも〳〵、過去を追ふ事はゆるされません、現在に生きなくてはならぬ身ですもの、醒めます。行く先き長き身を、いたづらには過しません、必ず必ず。とかたく誓つて△△さんともほゝ笑んで別れたのだけれども、心は矢張り淋しい。

眞面目ではあるが、少し締めくゝりがない（評）



○　西島しをり

かべに掛く夢二の畫より旦は暮るゝ藥の瓶のうら寂しさよ

○　下關市　野口君子

さわやかに青空うたひ鳥はゆく君わが胸に歌ふ日の如

るりゐ

○

ハラ〱と散る花びらをまさぐりて我にものいふ君をおもひぬ

○　麻布　藤村ゆき子

月の夜や開き充ちたる白百合のたましひ拔けぬ風にゆられて

○　陸前　浮草子

價なき過去を思へどふり返りふり返り泣く弱き心よ

○　宮城縣　沼倉冬子

雲雀舞ひ時鳥なく山ばたに男女の桑つみの聲

○　信濃　下枝よし子

信濃路の父母に別れて白浪のよする渚に姉問ふて行く

○　姫路　磯菜

さすらひを此の靜寂の野に立てば故郷の空に白雲流る

○　瑠璃子

宵の雨上りて夢の町皆よたゞ月影に白う輝く

○　大分縣　小屋津優子

夜も更けぬ書にも倦みぬ徒然に壁を匍ふなる蟲など見つむ

○　金澤　柳の香

夕月の影も涼しき池の面の汀に匂ふ白百合の花

○　岡山市　房之

はなたれし鳥こそうれし一日をはてなき空をわがものにして

○　伯耆　ふみ子

女をば花折る如く大方の美し男は折らんとすらむ

○　白鳥ゐい子

はづかしく肥りゆくかな葉櫻の深き息にも似る息をつき

○　本郷　城本みち子

人こひし小さき窓に誰か來ておとなふらしき春の雨かな

○　福井縣　山﨑栢子

うすれゆく入日の丘の松の木の幹に倚りつゝ遠くをおもふ

○　朝鮮　朧夜女

人形を片手に抱きて幼子の紅き夕日に首かしげけり

○　大阪市　小泉貞子

戀と云ふ其文字さへも知らざりし幼けなき日を訝りて見ぬ

六月の野はよし花の頃すぎて青葉の木かげ仰ぎ見るよし

○　新舞鶴　菅幸子

あめの日は君と別れし磯の檬涙の中に見えてかなしき

○　長崎市　永井圭子

美しき花の傾く窓際に夢くり返へすわが涙かな

○　兵庫縣　錸の谷隆枝

うちがなしいなみかねてはひきゆかれひきゆかれつゝ若き女は

○　常陸　古島花子

なんとなく夢の世にある心地して君と語ればけしの花ちる

○　本郷　松野

おびえつゝ心をぢつゝをのゝきつ『戀』の屋形をそとかいま見て

○　高知縣　あや子

針山に亂れさしたるはりのごと我胸くるし身じろぎも得ず

○　徳島縣　蔦紅

あつき言ひと言書きしたまゆらをさびしき心迫り來しかな

○　宮城縣　長谷川紫葉子

撫子の花咲く時は夏の日の暑き日思ふならひとなりぬ

○　府下　大浪せい子

清らかに波おさまりし磯濱に美くし貝をあさる少女子

○　失名

もの云はず君と別れし其日よりひそかに胸に殘りける戀

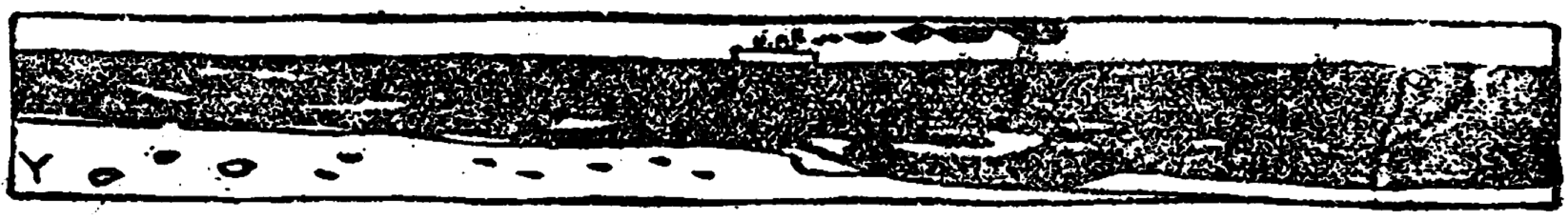
○　宮城　なでしこ

年末だ若きその日の追懷を木隱れて言ふ眞夏となりぬ

○　ゆふづき

戀知らぬ少女の中に交り居てさめたる我の淋しさ思ふ

○　名古屋　登貴靜子



旅の日に京の町にて見し人の帯にも似たる春の曙

○ 大分縣 小屋かね子

雨しげし百合の蕾に降る夕吾歌なりぬ心のうちに

○ 島根縣 富士喜代子

沈丁花やゝその樹のさめし頃君も吾身も悲しうなりぬ

○ 福井 北明星

船は今ゆら〳〵ゆれて港口旅の心地の動き初めぬ

○ 小樽 紅子

四五臺の荷馬車ならびて運びこし植木の上に夏の風ふく

○ 本郷 見ぬ世の人

日をいとひ紅ばらもちて美しき二人ならびぬ池のほとりに

○ 岩代 桑原ぜん子

なつかしむ君も去りゆきわれひとり寂しみに泣く日の多からん

○ 紫葉女

山の湯は眞晝といへどもの靜か化粧するまも鳥の聲聞く

○ 福岡 田中ゆたか

思はるゝ身にもあらぬを思はるゝ心地に居りて三月やせにき

○ 尾張 榊原銀子

初夏の山に遊べばなつかしやかげに咲きゐる山百合の花

○ 但馬 丘阪靜子

よりどころあらぬ淋しさただ人のなつかしきかなねむの花散る

○ 丹後 荒井たい子

若き日はさみだれ空の灰色に暗くさびしく暮しけるかな

○ 愛知縣 佐分華影

赤き花白き花など我が胸の扉の前に捧ぐる人よ

○ 和泉 金田やどり木

忍ひ出でさて泣くところ月淸き芝生の上か暗き林か

○ 飛騨國 むら子

ま白くも咲きそろひたる白つゝじ淸き少女の心とや見む

○ 秋田縣 出羽歌子

春の日をことなきまゝに花ならべ圖案などしてくらしけるかな

○ 茨城 浮舟女

紅の火燃ゆる如き草苺など好むらん冷たき君の

○ 越後 千鳥

月かげにわかれし夕しのばれて土橋のほとりなつかしきかな

○ 備前 佐久間緑子

高殿に一人居殘る心地して夢とすぎゆく二十二の春

○ 茨城 今泉磯千鳥

棧橋に朝雨けぶる悲しさよわが君のせし船うすれゆく

○ 芝區 東野歌子

いと高き觀音堂のきざはしも君と登るに何怖るべき

○ 靜岡縣 壽賀子

思ふ事あらぬ此の日のわびしさようつろなる胸いだきつゝあり

○ 岡山市 土屋綾子

薄暮や野にさまよひて名も知らぬ草花摘みぬ想はれぬ子は

○ 廣島 後藤壽美枝

紅の襷あやどり五月女は白きかひなに早苗抱くかな

○ 三樹ゆふ影

幼き日胸かゞりたる絹糸の古きおもひで花にふる雨

○ 長岡市 秋月鈴子

梅の實をきそうてひろふ里の子に思ひでおほき初夏の朝

○ 神戸市 川口登茂

悲しさに泣く日のおほくなりにけり男心のたのまれぬかな

○ 神奈川 しうん子

たそがれや夕日さすなる山道の大木のかげを白馬あゆむ

○ 信濃 酒井治子

夏川に小魚漁どる少女子の白き素足にからむ水草

○ 攝津 佐野たみ子

人想ふ心のひまにベコニアの小さき花を摘みて見るかな

○ 東京 結城白花

海の上波はる〳〵と行く船を眺めてあれば心の遠き

草色の室より

竹久夢路

昨日とばかり思つてゐた青葉もいつかはや黒ずみ、柔かな赤味を帯びた若葉ももう硬ばつてしまつて歯をあてると苦い汁が舌に痛い。

繪をかくといふ事は、自分には性慾の満足とおなじに考へられる。白色の粗い目の紙――或は布へ柔かく接觸するパステルの快さは、例へば女の肌を包むネルのキモノのやるせないうれしさを思はせる。描かれた繪の線にも色にも描いた人の吐息と脈搏が感ぜられなければならぬ筈だ。

送られた繪を卓上にならべて見たが、一として作者の呼吸を思はせるやうなのはない。表紙や繪は別として草畫の方はおもしろいのが集るだらうと期待してゐただけにいさゝか失望した。文章をかくにはまづ文字を知らねばならぬ、次に熟語を知らねばならぬ、次に形容詞を知らなければならぬ。その他種々の法則をも知つてゐなければならぬ。けれど草畫はすべての感傷を線で表はせば好い。『千蔭用筆』に墨をたつぷりふくませて、詩の氣分で黒髪を、小唄の心で肩のまろ味をすらりと描いてのければ好いではないか。どうか三十一文字をかく心持で、日記を誌す注意と、手紙を認むる親しみと、髪を結ふ心で畫いて貰ひたい。

送られた多くの繪の中で、女性の手になつたと思はれるのはひなげし氏の作品だけであらう他はみな化け損ねた名ばかりの女としか思へぬ『表紙』から先づ撰ぶ。

○新生涯（岩本とよ子）　尼様が蚊遣火をしてゐる圖である、その來る本が一般的のものである限り、此種の物語を内容とした圖案の表紙は不必要だとおもふ。色のうちにセピアとアイボリーブラックが使つてあるのが不愉快におもはれた。

○夕（K E生）　人物を畫かないで落ちゆく太陽ばかり畫いたら好い表紙が得られたらうとおもはれる。

○門（田中まん子）　色彩に非常に敏感な神經をもつた人を想像出來る。

○百合の香（伊藤富美）　眼の非常に大きい女が赤い帯をして立つてゐる繪。スコツチ洋服の匂をかぐ新しさがある。

○濱（磯部政子）　構圖は申分ないが色彩と筆觸が昔日本で流行つた某々畫伯の水彩畫の筆法なのでイヤだ。

○春日野（齋藤みよ子）　コムポヂシヨンも色調も秀れて好い、古曲的な春日野の感じがよく出てゐる表紙として色の強さもあるが惜しいことには筆觸がいぢけてゐる、もつと放膽にやつてほしいひ。

○夏の庭（ひなげし）　これはまた色彩は非常にクラシカルでありながら筆觸が強いので氣持が好い、婦人雜誌の表紙としては實に好個の作品であつた。

『口　繪』

○新開の町（伊藥とみ）　生々しい色を使ひながら、どこか暗い北國の冬をおもはせるやうな灰緑色が潜んでゐるのが好かつた。

○夏の子供（立花とも子）　南國の夏を思はせる強い色が好い。

○北行の人々（K、Y生）　朝鮮のステーションの感じがよく出てゐた。

○寢（ひなげし）　椿の落ち布いた籔かげに、袂を抱いて眉をひそめた少女の繪、うす紅の襟裏にもたよやかなる腰もとにも日本のムスメさんの可愛ゆさは遺憾なく描かれてゐる、すべてを通じて自分はこの繪を好むけれど寸法が大きいので發表出來ないのを殘念におもふ。

○もるゝ光（岩本とよ子）　セピア色が静かな情調をみだすけれども、しんみりとして好い。

○二人（田中まん子）　姉妹とも見える二人がすこし愁たげに話してゐる繪、なつかしみの多い作。

●●

○草畫の批評と課題は一六〇頁にあり

▲本號所載 作物選拔の結果

一等

○一呼吸　若杉はま子

二等

○七色の虹　望月野薔薇

三等

○生の斷片　眠れる花
○別れてゐる間　闇夜鳥
○黒き蝙蝠傘の世界　はやぶさ

四等

○覺め際の淋しみ　夕やみ
○心の離散　筆子
○解けし謎　白ふぢ
○私の心は破れてゐる　あけぼの
○年のあぢはひ　かげの人
○女の爲に呪ふべき時代　月たま
○不縹致に生れた嘆き　埋れ木
○一人子の運命　よしの子
○言ふに言はれぬ生立のつらさ　草門
○更衣室　珠野すゞ子

五等

○尼になつた若い女の半生　齋川幸子

○男子の手紙に迷ふ　紅緒美
○機巻く家　山つばき
○消えぬ夢　淋しき人
○繪筆　ひなげし
○落日のかなた　秋月萩江
○揚子江畔の新婚生活　屋根の草
○父と娘が別れの涙　月尊
○世間の人　古那無
○母の感化力　むら子

小説

△轉宅（一等）　小笠原ゆり子
△淋しい道（二等）　佐藤萬壽子
△温泉宿（三等）　木下春子

課題

▲蝴蝶花咲く頃（一等）　山の女
▲くしまき（二等）　中村みどり
▲嘗我（二等）　優梨子
▲歡樂（三等）　葉がくれ
▲深林地帶（二等）　平松白百合
▲松の湯（二等）　かね子
▲伸びゆく髪（三等）　森下みどり
▲三時頃（三等）　野の百合
▲軟かい顔（三等）　やみよ

詩

△月見草（一等）　章子
△生もの（三等）　港の女

和歌

○一等　佐久間貞子
○二等　吉良花守子
○三等　高尾

俳句

○一等　幸子
○二等　竹村槇子
○三等　田村波津子

散文

繪畫

▲影（三等）　港の女

▼表紙　ひなげし
▼口繪　田中まん子
▲草畫　伊東よし子

外に各地婦人風俗の執筆者、及び三宅やす子、藻の花、山田夢殿守、山百合、長曾我部菊子、はゝき木、白木絲子等の諸君の作物は、特殊の寄稿なれば此中に加へず。各作者の住所地名、其他本號編輯に關する二三の記事は餘白に在り、就いて一讀あれ。

次の増刊『娘時代』原稿募集は廣告欄にあり、見よ！

雜報

梅雨の後

△梅雨が晴れて俄に炎熱の烈しい土用が來た今年の梅雨期には雨も降り、大風も吹いた、併し梅雨期の狀態としては好い方であつた。

△文學博士建部遯吾氏は、劇評家として有名な森眞如さんと結婚した。

△婦人畫家榊原蕉園女史は、年方門下の秀才池田輝方と結婚する、これには深い一條の戀物語があるさうだ。

△官立學校の夏期休暇が少くなつた、夏期休暇も餘り多いのは考へものであらう。

△英皇帝の戴冠式が無事に濟んだ、此式は一面に於て世界的の近代無比の晴やかな式であつた

新刊

○都會スケッチ　竹久夢二氏を初めとして、心持の新しい青年畫家の所謂草畫を集めたもので東京の色調がおもしろく眼に映つて來る此の如く眞面目な出發點から振ひ起きやうとする無名の人々のあるのは、スケッチの爲に欣ばしいことだ（定價金五十錢、洛陽堂出版）

○落暉　著者長司春潮君は極めて若い青年であるが、此度文學より離れて實社會に活動する紀念に自作の和歌三百首を集めて一冊としたものが此『落暉』である、岡本一平氏の挿畫は好い初めの歌を引く「これのみは人に劣らずわれ早くかなしき家に生ひ立ちしかな」（名古屋川瀬書店出版）

○女子文壇定期號投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること▲小說と、詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類每に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る、長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◉投稿は每月十五日到着を以て〆切る

○女子文壇投稿各種懸賞賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し二頁以內の短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す。

▼女子文壇定價早見表

每月一日發刊、年四回增刊

冊數	定價前金	郵税	合計
一冊（一月分）	拾五錢	壹錢五厘	拾六錢五厘
三冊（三月分）	四十三錢五厘	四錢五厘	四拾八錢
六冊（半年分）	八拾四錢	九錢	九拾參錢
十二冊（壹年分）	一圓五十六錢	拾八錢	壹圓七十四錢

定期及增刊號とも	定價前金	郵税	合計
增刊一冊	貳拾錢	壹錢五厘	貳拾一錢五厘
半年分（八冊）	一圓二十二錢	拾貳錢	壹圓三十四錢
壹年分（十六冊）	二圓二十八錢	貳拾四錢	貳圓五拾二錢

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず右誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと。用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます。郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增のこと。（收入印紙謝絕）。最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

申込期限　發行前月十五日

壹等	一頁參拾圓
貳等	一頁貳拾五圓
參等	一頁貳拾參圓
（半頁廿四字三十二行）	半頁十三圓
（活字五號字二十四字詰）	一行四拾錢

取扱所　博報堂。電報通信社。弘報堂。文明廣告社

明治四十四年七月十日印刷納本

△定價金二十錢▽

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
電話　京橋六〇七番
振替貯金口座壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、其外全國書店

明治四十年七月十日印刷納本

女子文壇

（新文章）

第七年第九號
（七月十日發行）

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

本號に限り　定價金貳拾錢　郵稅壹錢五厘